
エレノアTV！

apapmk

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エレノアTV！

【Nコード】

N4514M

【作者名】

a p a p m k

【あらすじ】

エレノアは現実よりテレビが好きなテレビっ子だった。恋人のリュックとアパートでだらだら暮らしている。ある日、部屋で監視カメラを見つける。するとテレビの神さまミーカがテレビの中から話しかけてきた。エレノアがテレビを見るように、ミーカもテレビ界からエレノアを見ていたのだった。

エレノア主演の番組を見なくなったミーカは、現実をテレビ番組化するのだが……。

1話 「きみを監視している」(前書き)

アクセスありがとうございます。かなり長い作品ですが、楽しんでいただけたと思います。

出版準備中のため、そのうち削除します。

おじちゃんになりました。このまま掲載をつづけます。

1話 「きみを監視している」

エレノアはテレビを見ている。床にじかに敷いたマットレスと布団のあいだでモゾモゾしながら、部屋どころか寢床からも一步も動かず、四角い箱の中で泣いたり笑ったり怒ったりさせられるなにかが起きるのを熱心に待ち構えていた。

いつ何時も目を離すわけにはいかない。たとえば壁の時計を見上げたとき、布団に鼻をこすりつけたとき、徹夜の疲れであくびをしたとき、とにかくエレノアがテレビ以外に興味を示したときに限って、ぜったい必ず決まってなにか大事なことが起こるのだ。そしてぜったい必ず決まって画面に目を引き戻される。

探偵はいきなり犯人の目星をつけて車を急発進させ、エキサイティングな音楽が流れ出す。ふたりは友情をだいなしにする決定的なひとことを言い、男女はキスし、兵器工場は大爆発した。クイズ王は前人未到の全問正解を狙い、犬はワンと言い猫はニャーと言った。CMでさえエレノアを飽きさせることはなかった。一分三十秒のあいだにトイレへ行こうとすると、刺激的でカラフルなキャンディのコマーシャルとかが流れて、結局行きそびれて番組が終わるまで我慢するはめになるのだった。エレノアはずっと、自分がテレビを好きで見えていると思っていたが、最近ではテレビが自分のことを見ていて、好きでいてくれて、よく理解してくれているような気がしていた。

お気に入りの局は『ヴィッスル』だった。外国のドラマやシットコム、視聴者参加のデートクイズなど、気になる番組をたくさん持っている。『ヴィッスル』のドラマはすべて欠かさず見ていた。シットコムはもつと好きだった。観客のあの笑い声がないと、はじまらない。登場人物がとぼけたことを言ったり大失敗したりすると、こつちが笑う前に観客の笑い声とか手を叩く音とかでいっぱいになって、とくにおもしろくないジョークでも、これは笑わなければと

いつしよになつて笑うのだった。

中でも『31』の主人公、若奥さまで未亡人のリン・タウンゼンドは、できることならなつてしまいたい人物のひとりだった。子供がふたりいるとはとても思えない可愛さで、とくに驚いたときの顔がよかった。ぽかーんと口を開けて、まるで八歳の女の子だ。エレノアもすっかり顔まねが癖になつて、驚いたときはいつも同じ顔になる。驚くことがなくても、しょっちゅう驚いた顔をしてみせていた。

だけどリンとエレノアはなにひとつ似ていない。年齢はエレノアのほうが七歳と九ヶ月若いし、髪の毛もリンはつやつやの濃いブロンドで、エレノアはプラスチックの人形から生えているようなぱさぱさのネコっ毛だった。目の色はリンが茶色、エレノアは緑色だ。

似ていないのは、それだけじゃない。エレノアは常々思っていた。現実の世界でも、なにか言うたびに観客の笑い声が起こればいいのに。悲しい顔をすればため息が聞こえてくれればいいのに。

ためにエレノアは、テレビの前で口をへの字に曲げて思い切り悲しい顔をしてみた。

だれもなにも言ってくれない。よけい顔が悲しくなった。

布団を巻きつけながら体を起こした。布団と体のあいだに鼻をつこんで、一晩じゅう自分の体温であつたためた空気を嗅いだ。安心する。さあ、テレビを見よう。テレビは楽しい。テレビは最高。できることなら、テレビの中に入つてしまいたい。

『ヴィッスル』は今日も朝から絶好調で、大いに楽しませてくれていた。が、現地時間の十時四十六分、いきなりいい気分をだいなしにされた。エレノアの最低最悪のお天気キャスターであるミーカが突然テレビの画面にあらわれたのだ。『ヴィッスル』の天気予報は番組表に載つておらず、時間帯も不定期で、しかも放送の長さもまちまちだった。どうやらミーカの気分次第らしい。おなじみの「お天気といえは」から発展させるトークがノツてくると天気予報

そっちのけで二十分以上もしやべりたおすし、かと思えばめんどくさそうにひとことふたこと天気を告げて五秒で終わるときもある。

エレノアはこの男が恐ろしかった。業界に詳しいわけではないけれど、少なくとも出演者の気分で時間が伸びたり縮んだりする番組など、あるわけがない。しかもときには、ほかの番組やCMの途中にいきなり割り込んでくる。『31』で、お隣に住む売れない若手小説家レイノーがリンとふたりきりで冷凍食品を食べる場面、妙にロマンチックな展開になり、エレノアは眼球以外の機能を停止させていた。キッチンでテーブルに向かい合い、互いに顔を近づけた瞬間、唐突に天気予報がはじまったのだ。勝手にクリフハンガーにされてしまい、このときばかりはさすがに局へ苦情の電話を入れた（その後起こった内容を教えてもらい、「DVDを買ってください」と言われた）。

嫌いになったのははるか昔のことだったが、このときからは憎むようになっていた。まともなのは予報の中身だけだ。つまり、当たったり当たらなかったりする。

「こんばんは！ また、ぼくだよ。ミーカの天気予報だ。えっ？ 今は午前中なのにどうして『こんばんは』なのかって？ じつはこの番組は録画放送で、一ヶ月も前に撮りためておいたものを少しずつ流してるんだ。だから予報が当たらないのかもね！ はは！」

エレノアの顔が陰しくなった。

「今日のフィヨルズルナカズル市は」お天気ボードにシールを叩きつける。「雪だ。大陸じゅうが大雪。みんな雪には慣れっこだと思うけど、今日の雪はハンパじゃない。今日の雪に比べたら、いつもの雪なんて雪じゃない。あれはただの」

手を布団から出し、床にさまよわせた。レースのカーテン越しに外を見る。雪どころか久しぶりに黄色い日光がきらきら輝いている。食べ残しが入った冷凍食品のトレイや脱ぎ散らかした下着をかきわけて、リモコンを探した。

消してやる。

「さて、お天気といえば、雨の降るメカニズムを知ってるかい？　ぼくはもちろん、専門家だから知ってるよ。いいかい、こういうことなんだ。大気中に含まれる水蒸気は、低温になると凝結して雲になる。そして雲の中の雨粒が大きくなると、雲の上に一戸建てを構えている雨の神さまが家じゅうの窓が結露するわ天井から雨漏りするわでとても悲しい気分になる。そしてその神さまが流した涙が地上に落下し、雨となるんだ。今日は冴えてるな。もう一丁いつてみようか」

エレノアは眉間に深いしわをこしらえながら、床に手を這わせつづけた。ちなみにリモコンがどこかへ行ったのなら本体のスイッチを押せばいいじゃないかという意見もあったのだが、そんなことをすればストレスでどうにかなってしまうような気がするのだった。

洗濯物の下で、なにかに触れた。コードだ。電源コード。天井に目をやりながらしばらく指先で感触を確かめていた。こんなところにコードがあっただろうか。あるわけがない。コード類はすべて束ねて部屋の隅に這わせてある。

ひっぱってみる。マルチタップのひとつが動いた。

今度は反対側にたどった。テレビのほうに向かっている。エレノアはお尻歩きで前へ進んだ。テレビがどんどん近づいてきて、お天気キャスターも同様にどんどんアップになった。

「電球ジョークだ。質問　一個の電球を取り替えるのに何人の女優とスチュワーデスとウェイトレスと看護婦が必要か？　答えはゼロ。そんな人たちは存在しない。わかるよね、この意味」

どうやらミーカは舌好調のようだ。

「ここでテレビの前のきみにお知らせだ。つまりぼくが言いたいの、テレビは見るだけじゃないってこと。ときとしてテレビもきみのことを見たいし、ぼくら出演者もきみのことが気になるんだ。観察したいと思ってるんだ。そう、そのコードだよ、エレノア」

テレビから自分の名前が出てきたので、エレノアは文字どおり飛

び上がった。耳から背骨が飛び出すかと思った。エレノアはミーカの顔を凝視した。ミーカもまっすぐこちらを見ている。まっすぐ見ているのはつまりカメラを見ているわけで、いつもと変わらないはずなのだがいまはたしかにカメラではなくエレノアを見ていた。そんな気がした。

ミーカはしゃべるのをやめ、エレノアの手元をのぞきこむように見た。あんまりアップなので、画面から頭と肩が飛び出してきそうだった。

「コードをたどつて。そうそう、どんどん近づいてる」

終点はテレビ台の中だった。まるい穴が開いていて、その奥に消えている。ミーカは下を指差した。

「台の左側の扉を開けてみて」

コードを離し、ゆっくりと取っ手に手をかけた。

「そうそう、きみに特ダネ情報だ。毎週欠かさず見ている『31』だけど、きみのお気に入りのリン・タウンゼンドはじつはぼくの奥さんなんだ」

「えっ」と思わず声を上げた。「うそ？」

「ほんとともほんと。ひとつはつきりさせたいんだけど、リンを演じてる女優と結婚してるんじゃないくて、あのリン・タウンゼンドと結婚してるんだ。こっちは本物だしあっちはキャラクターだけど、不可能じゃない。テレビのパワーは偉大だし、ぼくは　まあいいや。また話が逸れた。とにかく収納扉を開けてみて」

毒ガスが漏れ出してくるかもしれないので、ゆっくりと隙間ひとつぶん開けた。なにも出てこない。それから全開にしたとき正面にいとショットガンの銃弾レーザー光線が飛び出してくるかもしれないのでわきによけた。そしてお待ちかね、扉を全開した。

なにも起こらない。扉越しにのぞきこむ。見覚えのない金属の箱が入っていた。大きさは手のひらくらいで、メタリックで長方形で、カメラのレンズがついていた。

「監視カメラだ」ミーカはにっこり笑った。「ぼくが取りつけたん

だ」

エレノアはカメラを手に取って、呆然と見つめた。子供のころ「テレビばかり見てるとバカになるぞ」と親によく言われていたが、やっとその意味がわかったような気がした。

「どうやって」

「テレビ界からテレビ的にきみの家へ行って、監視カメラを備えて、台に穴を開けて、プラグをソケットに差し込んだんだ」

「いつから」

「こつちの時間でいうと、半クール前ってところかな」

エレノアはいまもつとも発したい質問を発した。「なぜ？」

するとカメラが引いて、ミーカの全身を映した。白一色のなにもない空間へ、スタッフが車輪つきの台をごろごろ押してミーカの前に持ってきた。

「ぼくに不可能はない。なぜならば僕は神さまだから。テレビの神さまね。できないことなんてない。ぼくはいつなんどきでもジョークが瞬時によどみなく頭に浮かぶし、しゃべりも絶対にかまないし、好きな時間に好きなだけテレビに出られるし、おまけにお天気もたまに当てることができる。さて」

もったいぶるように言って、腕まくりをし、台の上からトランプの箱をつまみあげた。中を開けて、カードを取り出す。ふたつに割ってシャッフルする。ディーラー顔負けの流れるような動作だったが、監視カメラとなんの関係があるのかまったくわからなかった。

カードを伏せた状態で扇状に開いた。すぐさまカメラが手元に寄る。

「一枚引いて」

「引けるわけない」

「どうして？」

「そっちはテレビだから。テレビに映ってるものをつかめるわけないでしょ」

「それは誤った考えだ。子供のころ親に徹底的に叩き込まれた常識

だ。『おまえにはそんなことできるはずがない。あとで苦勞するんだからやめておけ』ってよく言われるんだけど、大人になるとそんなことはないと思う。なにことも、やってみなければ結果はわからないってね。テレビは好き？」

エレノアはうなずいた。

「そう、それがきみを選んだ理由だ。きみは選ばれたんだ」

「選ばれた？」

「そのとおり。なぜかという、きみはフィヨルズルナカズル市でいちばんのテレビっ子だから。全大陸的に見てもかなりいい線いってる。ただのテレビ好きじゃない。常人ではたどり着けない一線をはるかに越えてる。そのおかげで、きみは自分でも気づいていない大きな力を持つことができたんだ。ある目的のためにきみを選び、監視していた」

「どんな目的？」

「それはこのカードに書いてある」普段から芝居がかってはいるのだが、さらに大げさな調子でつづけた。「きみの運命、使命、未来なんでもいいけど、そんな感じのその他もろもろがわかりやすく大きな文字で簡潔に書いてあるんだ。気になるだろ？ さあ、好きなを一枚引いて」

ミーカの言ったことには心当たりがあった。小さいころのことはよく覚えていなかったのだが、いつもだれかに見張られているような気がしていたのだ。親兄弟親戚には単なる妄想だと言われ、精神科に連れていかされた。頭のお医者さんは単なる妄想でしようと言い、強力な睡眠薬を処方してくれた。言われたとおり睡眠薬を飲むと、親兄弟親戚が常に自分を見張り、陰でひそひそ悪口を言っているような気がしてきた。親兄弟親戚にそのことを話すと、単なる妄想だと言われてべつの精神科に連れていかされた。

そしていまに至る。あれは妄想ではなかったのだ。エレノアはそれみたことかと親類縁者全員と市内すべての精神科医に言っただけで、たくなつたが、もしかしたらこれ自体が妄想かもしれないと思い直

した。それをたしかめるすべはひとつしかない。

エレノアは画面に手を伸ばした。テレビに映るカードの一枚を選び、指先をテレビの中に入れようとした。

爪の先がブラウン管にこつりと当たった。

「ははは、ひっかかった」ミーカはトランプを放り投げて、喜劇役者のように大げさに笑い転げた。「テレビに映ってるものをつかめるわけないだろ」

カードが画面の上から下へ、ひらひらと揺れては落ちる。エレノアはこの男の後頭部をバールのようなもので強打したいと思った。車庫入れのふりをしてバックでじわじわと轢き殺すのも悪くないと思ったが、それは無理な話だった。相手はテレビの中にいるのだし、そのためにはまず車の免許を取らなければならない。

そういうわけなので、エレノアは奇声を上げてテレビを突き飛ばすことにした。

プラスチックの擦れるがりっという音がして、テレビが台の上から半分はみだした。ミーカはまだ笑い転げている。もう一度。テレビはついにバランスを失い、画面が天井を向いたかと思うと台の向こう側に消えた。ブラウン管の重さで、プラスチックがばきっという音を立てた。笑い声はまだつづいている。

リュックは男で、どこその俳優に似ているというわけではないがそれなりに男前で、髪が黒くて、同い年だった。といってもテレビのキャラクターの話ではなく、このアパートにいつしよに住んでいる恋人のことだ。いつも笑顔で、まじめにいつさい関心がなかった。働くことすら関心がなかった。ひょっとしたら自分のことも関心がないのではと思わせるふしもあったのだが、それでもエレノアはリュックを愛していた。二十四時間ぶつつづけてテレビを見てもなにも言わないからだ。

先ほどテレビをぶつ飛ばしたエレノアは、しばらく呆然とし、荒い息をついていた。洗面所のドアが開いたので、さっと顔を向けた。

「　　どうかした？」リュックがドアのすきまから顔をのぞかせた。

「ミーカが　」

「ミーカってだれ？」

「お天気キャスター。わたしに話しかけてきた」

「その人が来てるの？」リュックは玄関を見て、それから中央のリビング区画を見た。当然ながらだれもない。

「ちがうってば。テレビの中から話しかけてきたの！」エレノアは思わず叫び、それから自分がどれだけ頭のおかしなことを言っているのかに気づいた。「聞こえないの？　　いまわたしのことをバカにして笑って　」

あらためて耳に神経を集中させる。テレビはとくにだれに対してもバカにしたり笑ったりしてはいなかった。

リュックはどう言っているかわからないといった様子で頭をかきながら出てきた。上は白いシャツを着ていたが、下はパンツ一丁だった。ドアの端っこが枯木を模したおしゃれなコートハンガーにぶつかり、てっぺんにひっかかっていた帽子がぼとりと落ちた。

「なにも聞こえないな。笑い声なんて　」尻を向けてコートハンガーの前にかがみ、帽子を拾った。「というか、スキージャンプの中継みたいに聞こえる」

リュックの言うとおりだった。いつのまにかスピーカーからは、控えめな歓声と間の抜けたホーンの音がうつすらと流れ出ていた。実況のアナウンサー（たぶんロウスだ。もしロウスなら、選手の情報延々ひとりごちのようにつぶやくはずだ）が、選手の情報を延々ひとりごちのようにつぶやいている。スキーの板が雪をすべるような音がし、次いで勢いよく踏み切ってジャンプするような音と、V字体型が風を切るような特徴的な音が聞こえた。

「いまはね。でもさっきまでミーカが　」

リュックは裸足でフローリングをひたひたと歩き、テレビの前にかがみこんだ。死体を調べる刑事のように、顔を上げてエレノアを見た。「テレビを突き飛ばしたの？」

なんとか証明しようと、エレノアは掛け布団を背中に乗せたままテレビのほうにずるずる這っていった。テレビを立たせ、地方局も合わせて三十一のチャンネルをひとつずつ切り替えてみる。

「どこかにいるはずよ。あいつが」

ミーカはどこにもいなかった。思えば、本体の切り替えボタンでチャンネルを変えるのはじめてだ。なんととはなしにテレビを撫でる。側面の黒いプラスチックが大きく裂けていた。申しわけない気持ちでいっぱいになった。エレノアは顔を上げてリュックを見、鼻をすすった。そして知らぬまにリン・タウンゼンドの顔真似になっているのに気づき、不謹慎だと思い自分の顔に戻ろうと努力した。

「ごめん。悪いんだけど、なんの話かさっぱりわからない」

エレノアは掛け布団をわきにのけ、立ち上がった。のろのろと寝床に戻り、部屋の隅っこにあるマルチタップを持ち上げた。プラグを抜いてコードをたどり、テレビ台のラックからメタリックで長方形の箱を取り出した。そして、どれだけメタリックで長方形であるかを相方にわからせようと目の前でぶらぶらさせた。

しばらく眺めてから、リュックは言った。「なんの箱？」

「カメラよ。監視カメラ。わたし、テレビのキャラクターに監視されてるみたい」

エレノアは起こったことをこと細かに説明した。どんなセリフでなにを言われ、そもそもミーカとはだれか、なぜお天気キャスターをしているのかといった背景までも語ったのだが、聞いてるんだか聞いていないんだかわからない。返ってきたのは「ふうん」だけだった。

「こういうときって、業者が警察に電話するんだっけ？」

「頭がおかしいと思ってるんでしょ」

「うーん」リュックは考え込むようになってから、答えた。「いや」

「信じてくれるの？」

「もちろん。　　というか、ぼくも前からそんな気がしてたんだ

よね」

「ほんと？」

「いや。言ってみただけ」

「なんだ」エレノアはがつくりした。

「まじめな話、ぼくもこのところヘンテコを実感してるよ」

「あなたのヘンテコって？」

「それは」「リュックは壁掛け時計を見やった。「おっと時間がもうそろそろ行かなきゃ。じゃ」

エレノアは急いで床にうつ伏せて腕を伸ばし、なんとか足首を捕まえることに成功した。

「どこに行くの？ こんなときに」

「就職面接に出かけるの」

思わず足首から手を離れた。

「就職？」

「そうだよ」

「そうだよ？」

「なんで繰り返すの？」

「べつに。驚いたときはそうするでしょ」

エレノアは目玉をぐるりとまわした。

「まあいいや。ところでネクタイの結びかたって知ってる？」

と言うリュックは「いまはじめて気づいたのだが」「見慣れない黒くてつやつやした紐のようなものを首にかけていた。ついでに見慣れないパリッとしたワイシャツを着ている。あらためて眺めてみると、上半分はまるでまじめに見えた。ズボンはけば、立派な

立派な「あれみたいになるじゃないか。」

「ビジネススマン？」エレノアは自分自身の問いかけに答えてから、かぶりを振った。「ネクタイなんてしたことない」

「ぼくもだよ。とにかく、就職するって決めたんだ。いつまでもお気楽じゃまずいと思って。いろいろ調べたよ。面接の心得その一 スーツとネクタイで望むこと。そうすれば、どんなバカでも受け

させてもらえるんだってさ。ばくがバカって意味じゃないよ。

いや、バカなのかも。面接に落ちたらバカってことなのかな。わかんないや。ネクタイの結びかたも調べたんだけど、なかなかうまくいかない。見て」

リュックは立ち上がって、胸の前でネクタイをこねくりまわす。あつちをまわしてこつちをとおし下にひっぱったのだが、どういうわけかもとの状態に戻ってしまった。なんとか成功したけど下手すぎておもしろくないマジックを見ているようだった。あと少し練習すれば首抜けができるようになるかもしれない。

これがシットコムの一場で、ここがスタジオだったら、観客は大爆笑まちがいなしなのに。エレノアはなぜかさみしい気持ちになった。ほかに笑ってくれる人がいないので、エレノアは手を叩いて爆笑してみせた。リュックは恥ずかしそうに頭をかいた。

「少なくとも、スーツはまともに着られるみたい。ネクタイは受付の女の子にでも聞くよ」

ふたたびおケツを向けて、床に散らばるゴミを器用に避けながら走って洗面所に消えた。ばたんとドアが閉まる。

エレノアはドアの向こうに呼びかけた。「どうしてなの？」

「お金を稼ぐためだよ！」

「ふうん」と言って、これはどういうことなのかを考えようとした。ふいにミーカのべしゃりとむかむかする笑顔が蘇った。

「監視カメラについて考えようよ。いっしょに」

「あとでね。まずはお金を稼ぐ。お金がなきゃ、なににもできないらしいから」

「お金はあるでしょ」

「ないよ」

「なくなっただから、働こうと思ったの？」

「いや、お金はずっとなかった。働いてないんだから、当然といえは当然だよ。ははは」

力のない笑い声がじよじよに消えて、それっきりなんの反応もな

くなくなった。

汚れた床にずっと手をついていたので、手のひらがざらざらして砂っぽい。床暖房のおかげで埃までほかほかだ。手を払って目を落とすと、テレビがあった。相変わらず瀕死の重傷だったが、目を閉じてはいなかった。エレノアはため息をついて、ごめんなさいとつぶやいた。

なんとなくチャンネルを切り替えた。まだ動くようだ。

やることがないのでテレビを見ることにした。

チャンネルを『K4』に切り替えた。『名探（犬）ワンだふる・ツイッピー』がはじまっていた。エレノアは壁掛け時計を見上げた。十一時三分。思わず顔をしかめた。欠かさず見ていたドラマなのに、オープニングを見逃してしまった。

『名探（犬）ワンだふる・ツイッピー』は、タイトルどおり犬が主人公の三十分ドラマだった。ツイッピーというひとりごとの多い犬と飼い主のストレー一家が毎週なんらかの事件に巻き込まれる、といった具合に話が進み、その度にツイッピーがカメラの前でひとりごとを言う。「大変だ！　どうやらマリリンの彼氏はとんでもない大うそつきだぞ。なんとかしないと　」とか、「ママさん（デボラ・ストレー夫人）が足を捻挫して動けなくなっちゃった。ようし、ぼくが代わりに叔父さんの家へ誕生日プレゼントを届けるとしよう！　」そしてツイッピーは警官を呼びにいたり荷車つきの自転車にまたがったりして問題を解決するのだった。

ありがちなワンちゃんものだったが、開始当時には大きな話題を集めた。それは内容が優れていたというよりも、第三話で突然ツイッピーがべつの犬になったためだった。はじめは愛らしいダルメシアンだったのに、まったくなんの前ふりもなく三毛のビーグル犬に差し替えられた。相変わらずひとりごととは言いつし、ストレー一家も自分のペットが犬種さえ変わったというのに一向に気にしようとしないので、しまいにはこの件についてさんざん批判していた視聴者も、「これでいいのだ」と納得することにした。「今のツイッピ

「のほうがいい。いや、そもそも昔からこうだったのだ。まったくぜんぜん、なんにも変わっていない」

ドラマ批評雑誌『ドラマまるかぶり』によれば、初代ツイッピーはどうしようもない駄犬で、できることといえばだれを垂らすことだけ、名探犬でもなければワンダフルでもなかった。そしてひとりごとまったくつぶやけなかったので、あとで人間の俳優がアテレコをしていたということだった。

「どう？ 決まってる？」

すっかりドラマに没頭していたエレノアは、びくつとして顔を上げた。ストレー一家が懸賞で海外旅行を当てたけど券が四枚しかないのでツイッピーを連れていけないじゃないか、どうしようと家族が悩む場面だった。

リュックはびしつと折り目のついたスラックスに背広を着て、黒いビジネスバッグを持ち、やっぱりネクタイはしていなかった。まるでつつこんだポケットから先っぽがはみ出ている。

「どう？」ともう一度聞いてきた。

頭がぼうつとしている。リュックがまるで別人のようになっていることも、ミーカのこと、監視カメラのこと。そろそろはじまる番組のお約束「ツイッピーのどアップ」を見ることが頭になかった。

「別人みたい」エレノアの目は画面に引き寄せられた。「かわいい」「二年前にきみと出会って、ここに引越してきて、いっしょに暮らしてきた」リュックはあちこち動きまわりながら話しつつけた。

「お金がないまま、二年間。そのことについて考えたことはある？」

「ない」

「さっき、ぼくもヘンテコを実感してるって言ったよね」

エレノアはうなずいた。

「最近、おかしいんじゃないかって思うようになった。つまりどうしてぼくらはなんにもしてないのに暮らしていけるんだろっ、ってね」

そう言つて、どれだけ上にゴミを乗せられるのかの限界に挑戦していると思えないリビングテーブルにそろそろと近づいた。それだけで端っこにある空き缶とか二段重ねにしたポテチの袋とかが次々と床に落ちていく。リュックはパーティーゲームの『ぐらぐらタワー』の要領で、下敷きになった財布を引き出そうとした。

リュックには内緒だったが、エレノアはこのテーブルでただけ上にゴミを乗せられるのかの限界に挑戦していた。おもしろいからだ。

結局、空き缶十数個とお菓子袋四枚と電気と水道の請求書を落としてから、ようやく財布を救出した。

「しばらく空っぽだ。気にもしてなかった」

「そんなところにあつたんだしね」

リュックはいつになく真剣な口調で言った。「食事はどうしてる？」

「どうつて、冷蔵庫から」

「まじめに」

「知らない。あなたが買つてくるんでしょ？」

「そうだったかなあ」

リュックはかなり不安なことを口走った。エレノアは思わず顔を上げる。

「あなたが買つてないなら、だれが冷蔵庫に入れてるの」

「それが、よく覚えてないんだ」

財布を開けて、キャッシュカードやらバスの回数券やらをひとつずつ取り出して、不思議そうに眺める。他人の財布をあらためてみるみたいだった。

「腹が減つて冷蔵庫をのぞいて、すっからかんだったりするだろ。とうぜん、買いに出かけようとするよね。おかしいことのひとつがこれだ。ぼくは毎度毎度、お金を持たずに買い物に出かけているんだ」

「買い物に出かけなきゃいいんじゃない？」

「いや、それはおかしいよ。出かきなきゃ、そもそも買い物ができないじゃないか」

「あなたの言ってることのほうがよっぽどおかしい」

「で、スーパーに入って、ぼくは『買い物』をするんだ。カートを押して、必要なものをどんどん放り込む。必要ないけど手に取ったものもどんどん放り込む。いままで買ったことがないという理由だけで、ぜったいに使わない香辛料とかも、何種類も放り込む。そのとき、ぼくはとり憑かれてるんだ」

間を置いた。

「で、これ以上カートに入らない、って状況になって、ひとまずわれにかえるみたいなんだ。お次はレジで会計するだろ。レジ係が三人がかりでバーコードを読み取って、最後にひとりがこう言う。『

クラームのお買い上げになります』」

「ねえ、急ぐならはやく行っただほうがいいよ」番組は進む。どうやらツイッピーはペットホテルに預けられることになったようだ。「わたしはだいじょうぶ。これ、見てるから」

「で、気づくと家に帰っていて、紙袋を抱えて冷蔵庫の前に立っているんだ」

「ふうん」ちらつと見やる。たしかにこれはヘンテコな話だ。「ヘンテコね」

「どうしてだろうね？」

「わからない。テレビの人に話しかけられる理由もわからないくらいだし」

「たしかに」

「けど、おかげで一日じゅうテレビを見ていられる」

リュックはわかったのかわからないのかよくわからないような感じでうなずいた。「まあ、いいか」と言って、テレビをのぞきこんだ。

「あのドラマか。犬のやつ」

「そう。『名探（犬）ワンだふる・ツイッピー』」

「ぼくもたまに見るよ。最近はずいぶん探偵してないみたいけど」
「ドラマってそういうもののなの」

「とにかく、面接は受けてみるよ。二、三時間で戻るけど、なにかあつたら電話して。じゃ」

リユックはバッグを抱えて出ていった。

と思つたら戻ってきた。

「そっちのヘンテコはだいじょうぶ？」

「なにが？」

「監視カメラのこと」

「ああ」エレノアは思い出してまばたきした。「忘れてた」

リユックは出ていった。ここにいるのは自分とテレビとツイッピ
ーだけ。監視カメラは抜いたし、ミーカもいなくなった。しばらく
のところは問題ないだろう。

テレビに目を戻すとちょうどツイッピーのどアップだった。エレ
ノアは興奮した。その愛らしさはキスだけではとうてい表現できず、
黒っぽい口とかヒゲとかそのあたりを舐めまわすだけでは足りず、
突き出たおうちそのものをまるかぶりすることによってようやく伝え切れ
るほどだった。

「ああ！　ぼくもみんなと旅行に行きたい。だけどチケットが
ないと飛行機にも乗れない。ぼくも家族の一員なのにな。ぼくらは
五人家族なんだぞ！　そうだ、そのことを主催者側に訴えるん
だ。ラジオ局のDJトニーに掛け合ってみよう！」

途中リユックと会話していたせいで、DJトニーがだれなのかわ
からない。なぜDJトニーが解決策となるのかもわからなかった。
エレノアはイライラした。ひとくさりしゃべり終えたツイッピーは、
ペットホテルから脱走し、大通りを駆けた。都合のいいことに車は
一台も通っていない。

ラジオ局に到着したはいいが、自動ドアが開かない。身長が足り
ないのだ。困った様子でその場でぐるぐる回転していると、パンツ

スーツ姿のすらつとしたやさしそうなおねえさんがおりがかった。
「まあ、かわいいワンちゃん」

ツイッピーはひと声吠えた。おねえさんはそれだけで理解したように、抱きかかえて自動ドアをとり抜けた。顔を肩にもたれさせて幸せそうな顔をしているのは、たぶんオスだからだ。

「ああ、幸せだよー」

ツイッピーはご丁寧にも頭上にハートマークを浮かべながらひとりごとをつぶやいた。

「捨て犬かな。でも毛並みもつやつやでよくお手入れされてるみたいだし、きつと迷子になったのね。あたしのオフィスに来る？」

もちろん、と言わんばかりに吠えた。エントランスを横切りながら、おねえさんはきはきとした調子でしゃべりつつける。

「よかった。そしたらなにか食べるものをあげるね。あたしのオフイスは食べ物でいっぱい。ビーフジャーキーに犬用ビスケット、小腹が空いたとき用のカップスープとか、鉛筆とか消しゴムとか、定規にカッター、文鎮にマウスに、もちろんコンピュータもね。あなた、表計算は得意？ 手伝ってほしい仕事があるの」

このおねえさんはなんだかわけのわからないことを言い出した。エレノアは思わず巻き戻しして聞き直そうとしたが、ビデオじゃないことに気づいた。

いきなりものすごい勢いで走り出した。エレベーター乗り場をつきつて、隅っこの非常口の防火扉を開けて中に消えた。カメラも突然のことに泡を食ったようで、急いであとを追いかけた。

テレビがだしぬけに火花を散らした。エレノアは反射的に顔を背け、腕を上げてかばった。しゅーっというガス漏れのような音がつづいている。チラ見してみると、スピーカーから白い煙が圧倒的な勢いで天井を突いていた。ブラウン管は青白い稲妻が光ってバチバチ音を立てているし、音声表示の緑色のメーターは気がふれたように上がったり下がったりしているし、チャンネルは酔っ払いのように（もしくは酔っ払いにリモコンを渡してしまったときのよう）

ぐるぐる切り替わったりしている。

テレビが壊れるとこうなるのか。

チャンネルのがちゃがちゃがどんどん加速する画面を見ているうちに、気持ちが悪くなってきた。これは神の御業だ　神の怒りに触れたのだ。エレノアはぽかんと口を開けてあとじさった。神の怒りはまるで安っぽいSFドラマの特撮のようだ。

「やあ、こんにちは！　またまた、ぼくだよ！」

聞き覚えのある声。

「そう、ミーカだ。お天気キャスター。ところでお天気といえば

」

煙のせいで画面どこか向こう側すら見えないし、ミーカの声は噴き出す音にかき消される。「　お天気といえば　おい、もういいよ。いいんだって。煙はいいんだ　おい、そこのおまえ！　いますぐ煙をとめろ！」

煙がとまった。稲光もチャンネルのがちゃがちゃもやみ、静かになった。

「ありがとう」ミーカは怒りを押し殺したような声で、ゆっくりとつづけた。「怒鳴ったりしてすまん。ここのこといろいろあつてね。神経が参ってるんだ。きみらを信頼していないわけじゃない。煙自体はよかつたんだ。ただ、量がね。でもこれぞ、プロの仕事だと思うよ。なんてすばらしい！　とりあえず、ちょっと休憩しようか。　そう。ごくろうさん」

「まだ出てきた　」

「ぼくも会えてうれしいよ、エレノア。さあ、こっちに来て。チャンネルをもとに戻しておいた。ツイッピーのどアップが待ってるよ」エレノアは首を伸ばして画面をのぞきこんだ。たしかにツイッピーのどアップだった。ただしがくがく震えている。エレノアを見る瞳は涙目で、黒い波が揺らめいていた。そしてよそゆきじゃない妙に太い地声でささやいた。

「　助けて」

カメラがゆっくりと引いて、スーツのおねえさんの背中を映した。つづいて背景。さつき駆け込んだ非常階段だ。ファミリー向けにしているライティングが暗すぎる。壁の非常灯が赤く、不気味に周囲を照らし出す。

おねえさんが振り向いて、笑みを浮かべた。

「彼女の設定をサイコパスに変えてみたんだ」ミーカがさざりと言った。「犬が大好きなんだけど、ランチではあまり食べないらしいよ」

ライトで顔半分を赤く染めたおねえさんは、ありえない角度で首を捻じ曲げ、大きく口を開けてツイッピーの喉もとにセマッタ。

エレノアはテレビにしがみついた。「逃げて！」

カメラがぐらりと傾き、あさつての方向を映し出す。影が暴れ、妙に太い地声でツイッピーが泣き叫び、なにかを残酷に貪り食っているような効果音がかぶさった。低予算を逆手に取った演出だ。

効果音がやんで、代わりに不気味なチェロが鳴り出した。おねえさんはいまや顔半分どころか顔全体を赤く染めていた。そしてにっこり笑ってひとこと。

「おいしかった！ お味も『ワンだふる』ね」

エレノアは卒倒しそうになった。「ひどい ツイッピーを殺した どうして」

突然、明るいお天気スタジオに切り替わった。ミーカが右側からひょうきん顔をのぞかせる。

「バカだなあ、殺してなんかいないよ。ぼくがそんな残酷なことをすると思う？ 落ち着いて、これはテレビなんだよ。ただの演技なんだ」

「ほんと？」目を拭う。

「だけど、番組は終了だね。なんたつて主役が食われてしまったんだから。これがほんとの『主役を食う演技』。まあ、もともと第三シーズンで終了の予定だったし」

「あなた、何者なの？」

「言つたら、ぼくは神さまだ。テレビの神さま。そしてこれがぼくの聖書。きみも持つてるだろ」

ミーカは手にした冊子を持ち上げ、笑顔で表紙を見せた。テレビガイドだ。おおげさにひとつうなずき、ガイドをめくる。

「今週号の聖書によると　おっと、そういえば今日は十七時から『31』が放送されるんだった。シーズン最終話だから、きつと盛り上がるよ。ほら、特集記事に人物の相関図が載ってる」

「あなたは、どう　どうするつもりなの」

「どうもしないよ。ただ、カメラをもとどりにセットし直してもらおうかと思つて。きみは一日じゅう家にこもってるから、それがないと監視できないんだよ」

「もし断つたら？」

と言うと、ミーカは口をすばめてすつとんきょうとしかいいようのない顔をした。

「いいね、そのセリフ。誘拐犯と交渉する主人公の母親みたい。『わたしの息子を返して！』ってね。ほんとにテレビが好きなんだね。現実ではそんなセリフははけないよね。　待てよ、これは現実か

いや、現実じゃないのかな。ぼくはテレビの神さまだし、きみはテレビに話しかけてるわけで　また話が逸れた。なんの話だったわけ？」

「もし断つたら」

「そうそう。もし断つたら、きみは大切なものを失うことになる」「リュック？」

「またまたご冗談を。『31』のエピソードのひとつだよ。それがまるまる見れなくなるんだ。そして次回以降、話の筋がつかめなくなる。『どうしてリンはこいつと仲良くなったんだらう』とか『そもそもこいつはだれなんだ』といったはめになる」

「DVD買うからいいもん」

「それまでこの屈辱に耐えられるかな？　みなは知っているのに自分は知らない。それにDVDの発売はないと思うよ。視聴率がかん

ばしくないみたいだからね」

エレノアはうなだれた。こんなにもしろいのにDVDが出ないなんて。ミーカのけらけら笑う声が聞こえた。カメラを手にのろのろと寝床に這い戻る。プラグをマルチタップに差し込み、テレビ台に乗せた。

赤いランプが点灯した。レンズがこちらをじっと見ている。

「ごくろうさん。よく映ってるよ」

「これでいいでしょ？ だからお願い、『31』はちゃんと見せて」

「もちろんだ。神さまは約束は守る 基本的にはね。だけど」

「だけど？」

「テレビが寿命みたい」

画面をのぞきこむと、ノイズのちらちらがひどくなっている。ミーカの色が反転し、横に引き裂かれた。ミーカは慌てた様子で右に左に顔を向け、スタッフから機動隊用の防弾ヘルメットを受け取った。ヘルメットをかぶると、エレノアに向かってぞんざいに手を振った。

「それじゃまた」

ぷつん、という音を立てて、テレビが目を閉じた。

すでにへたりこんでいたエレノアは、さらに深くへたりこんだ。なにか支えになるものがほしくて無意識に床に手を這わせる。するとおなじみの四角くてプラスチックできていてゴムのボタンがやたらとついているものに触れた。

リモコンだ。ずっと探していた。いまさら出てくるなんて。

テレビに向かってスイッチを押す。なんの反応もない。目の端に監視カメラが映った。無言でひたすらこちらを見つづける。こちらは向こうが見れないのに、向こうはこちらを見つづけているのだ。エレノアはぞくつとした。それから死んだテレビに目をやって、もう一度ぞくつとした。

「テレビを買わないと」

気づくとツイッピーばりにひとりごとをつぶやいていた。壁の時

計を見て、エレノアは目をまるくした。ひとりごとがひとり叫びになった。

「あと六時間で『31』がはじまっちゃう！」立ち上がってパジャマを脱ぎ出す。「もうどうだっていい！監視されててもいい！だけど　　だけど、『31』を見逃すなんてありえない！」

2話 リュックの就職面接

受付嬢は首をかしげ、ちよっぴり笑みを浮かべている。イスに腰かけ、顎を上げ、黒ぶちメガネの奥からリュックを見上げていた。

「まず、首にかけてね」

「かけた。ここまではできるんだ」

「太いほうを長めに。　　そうそう。そして交差させて。細いほうを下にして」

「よし。次は？」

「太いほうをぐるっと巻きつける」

「細いのじゃダメなの？」

「ダメ。太くないとダメなの」

「太いほうを　　ぐるっと巻きつける」

とリュックは言ったが、口だけだった。ネクタイは嫌がるようにもつれるばかりで、どうしようもない。あきらめて手を離すと、ネクタイはほっとしたように垂れ下がり、もとのかたちに戻った。

「言い訳するつもりはないけど、これって遺伝だと思うんだよね。」

子供のころもなかなか靴ひもが結べなくてさ　　」

受付嬢は机に突っ伏して頭を抱えていた。

デスクの電話が鳴った。

「もっとお相手していたいんだけど、仕事しなきゃ。ご用がなければこれで　　」

「ご用はあるよ」

「あっそう。今度はなにを結んでみせてくれるの？」

受付嬢は受話器に手を伸ばした。もう一方の手で金ぴかのペンをつまんで、リュックに「ダメダメ」と振ってみせる。「はい、フォームですが。　　ええ、そうです」

「面接に来ただけで　　」

メガネの奥の緑色の瞳がはつきりとこっちを見据えた。リュック

は黙ることにした。

「はい？ いえ、ちがいます」

やることがないし、ネクタイを結べていないので立ち去るわけにもいかない。手を前に組んで、あらためて見まわしてみる。

会社のオフィスはビルの四階にあった。ふかふかのカーペットが通路一面に敷かれていて、暑いくらいに暖房が効いている。思わず喉もとに指をねじこんでネクタイをゆるめたくなるほどだ、と言いたいところだったが、いまのリュックにその資格はなかった。受付のデスクのわきに仕事場へつうじるドアがあつて、ワイシャツ姿の従業員がそれなりの頻度で出入りしたりしている。

ここへ来てはじめに受けた印象は、とにかく全体的にくねくねしているということだった。そしてまるまるしている。受付嬢がすわる机にしても、壁にかかっている社名が刻印されたアクリル板にしても、アメーバのようにくねくねまるまるしている。電話機もヘンテコだった。受話器は真ん中が細くて両端が空気で膨らませたようにまるく、そして必要ないくらい長かった。まるでロバ用だ。

アクリル板の文字を見たが、ともに読めなかった。たぶん「フォーム」と書いてあるんだろう。なぜならフォームという会社に面接に来たからだ。昨日、突然電話がかかってきた。女性の声があなたはリュックかとたずね、答えると就職の面接は明日になったからまちがえないようにと言い、質問しようとするやと乱暴に切られた。人ちがいじゃないかと思つたのだが、おもしろそうなので受けることにしたのであった。それに採用されればお金も入るし、そうすればまともな『買い物』ができるようになる。

「そうです。ほんとのところはそうなんです。いいえ、そこだけはちがうんです。はい。はい。まったくちがいます。そうじゃありません」

唐突に受話器を置いたので、リュックはあさつてを向いて壁の染みを気にしていたのだというふりをした。

「で？」

受付嬢はふたたび手を組み、まっすぐリュックを見て言った。

「あなた、営業で来たわけじゃないよね？」

「ちがうよ。ぼくは」

「道に迷って、たまたまここをとおりがかったとか？」

「ちがうったら。就職の面接に来たんだ。十三時から。聞いてない？」

メガネのフレームから両方の眉毛が飛び出してきた。受付嬢はなにかを言おうと口を開いたが、思い直すように首を振ってパソコンのモニターに向かった。

「担当は？」

「エイミルって人」

「ああ、あった。三分後に面接」

「あと三分か。三分でネクタイの結びかたとビジネスマナーを学べるかな？」

受付嬢は立ち上がって、机越しにさっと手を伸ばした。ネクタイをつかみ、ぐいっと引き寄せる。乱暴だかしなやかな手つきでネクタイを交差させ、細いほうの先をつまんで太いほうをぐるっと一周させ、そのまま喉もとの交差点の内側に手をつっこんで外側にとおり抜けさせ、結び目の中をとおした。結び目をつまんで揺すり、喉にぐいぐい押しつけてきた。

「はい、できあがり」

仕上げにぽんと胸を叩き、にっこり笑った。そして次の瞬間、にっこり笑ったことを後悔するかのように表情をなくし、どさっとイスに腰を下ろした。

「ありがとう」

「あとは、ビジネスマナーだっけ？ そんなの簡単。こいつは百戦錬磨のビジネスマンだ、ただものじゃない、って相手に思わせなければなら、こうするの。まずネクタイをきちんと締めて、相手の目を見てしゃべる。それから、おもしろいことを言われたらむっつりしてつまらないことを言われたら大笑いするの。これでバッチリ。中

身力ラッポでも通用する」

「そうか、さすがだね。助かったよ」

「これがセキュリティ・カード。廊下のいちばん奥の左手の部屋で待ってて」

リュックはゲスト用IDカードの入ったストラップを受け取り、首から下げた。

「いいね、これ。もうこの一員になった気分」

「あなたと同じ職場で働くんだと思うと複雑な気持ちになるんだけど、この気持ちは長つづきしないでしょね。たぶん受からないから。がんばって」

リュックはもう一度お礼を言って先へ進んだ。受付嬢の言うとおり、廊下のつきあたりに来て左を見るとドアがあった。ノブをまわしたが動かない。どうやって開けるのかを考えているうちに、自分でも気づかないままその場で一回転していた。

本人だけが知らない事実として、リュックはよく一回転した。一回転するのはだいたい考えごとをしているときで、気づくのはいつも一回転し終えたあとだった。目の前にドアがある。回転したあとも同じドアがある。だから回転したことをよく覚えていない。と、そんな具合だった。考えごとが長引くとその場で何回転もするはめになり、またよく覚えていないものだから、何回転かしたあとにふと、どうして体が左側に傾こうとし、目の前に自分の尻があるのだろうかという不思議に思うのだった。

リュックは追加でもう四回転した。そのおかげかどうか、カードを首から下げていることに気がついた。とりあえずストラップからカードを取り出し、眺めてみた。青くてくねくねした字で「グヌ人」と書いてあった。例に漏れずおしゃれだが人に読ませる気のない字体をむりやり読んだだけなので、まちがっているかもしれない。カードキーであることはわかったが、ドアのどこを見ても差込口がない。

ドアに抱きつかんばかりに調べては回転を繰り返していると、青

いシャツの従業員らしい男がやってきた。しばらく人間掘削機を眺めていたが、あきれたようにかぶりを振り、リュックの肩をつついた。つついた指をそのまま扉の横にあるのっぺりしたクリーム色のパネルに持っていた。

「こいつにカードをかざすんだ。そしたら開く」

やっぱりそうか、その方法はすでに選択肢に入っていたが決めかねていただけなんだ、とリュックはうなずき、言われたとおりにした。

カチツという音がした。

「わからないことがあれば、そのへんの連中に聞いてくれてかまわないぜ。その場で回転しつづけるよりよっぽどいい」

回転とはなんのことかわからず、もしかして流行の悪口ではないかと勘繰りむつとしたが、受付嬢の言葉を思い出した。

「そうなんだ」なにがそうなんだと考えながら、体をのけぞらせて大爆笑した。「最新のセキュリティ・ドアかと思ってさ！」

男はかぶりを振り、その場を立ち去った。

応接室はこじんまりとしていて、廊下と同じくらい暖かった。

茶色いてかてかしたソファに、ガラス面のテーブル、観葉植物に自動販売機、大型のワイドスクリーンテレビに、三脚にセットされたビデオカメラがあった。壁かけの時計を見たのだがぐにやぐにやしているうえに針が六本もあって何時だかわからない。

ホットコーヒーを買ってソファにどさりと落ち着いた。コーヒーを一気に半分飲んで、コーヒーくさい息を吐いた。体は落ち着いたが頭が落ち着かない。無理もない。就職面接はじめてで、これかななに飛び出してきて自分をビックリさせる気なのかまったくわからなかったし、それにビデオカメラがさっきからまっすぐこっちを見ているような気がしてしうがなかったからだ。

レンズを見つめ返す。ゆっくりコーヒーをすすする。

カメラはなんの反応も見せなかった。猫背でぼんやり立ち尽くしている。シャツをたくし込んでズボンで胸まですり上げているガリ

ガリのおじいさんみたいだ。ぼんやりしているが眼光だけは鋭い。
「飲み物はなにがいいかね？」

さっそくビックリさせられた。背後から突然話しかけられ、飛び
上がってコーヒーをこぼしかけた。

「ああ、もう飲んでいるのか。それはけっこう」

リュックはコーヒーの香り立つゆらゆらを見つめてつぶやいた。

「コーヒーを買ってる。お金を入れてないのに」

「オフィス用だからね。お金はいらない。ただボタンを押すだけ」

自分のコーヒーを持って向かいのソファに腰を下ろした。「エイ
ミルだ。人事の責任者で、役員も務めている。よろしく」握手する。

エイミルは四十過ぎくらいに見えた。金色の髪の毛がふわっと頭
の上に乗っかっていて、もうじき在庫が尽きて倉庫の床が見えそう
だった。ガサガサした肌は青白く、見るからに不健康な感じだった。
青い目がしょぼしょぼして、目尻はカラスの足跡だらけ。若干お疲
れのようなだった。

「お代わりは自由だ。好きなだけ飲んでくれ」

「最高。エレノアが聞いたらここに住みたいって言うな」とつぶや
く。

「エレノアとは？ きみの彼女かね」

リュックはなにげなしにビデオカメラを見た。おじいさんがぼん
やりと見つめ返す。

「いえ、近所のおばさんです」

「けっこう。わたしも近所のおばさんにはいくつか言いたいことが
あるんだ」エイミルはなごやかに冗談を言った。が、まぶただけは
いうことを聞かず、すでに嫌気をさして垂れ下がりはじめていた。

「今日はわざわざ来てくれてありがとう。名前はリュックでよかつ
たかな？」

「いえ、あの」と言いかけて、なにが「いえ」なのか、なぜ名
前を隠す必要があるのかと思ひ直した。どうやら緊張しているよう
だ。「そうです」

「経歴書を拝見」

バッグから職務経歴書を取り出した。エイミルはその紙ペラを受け取り、テーブルに置いて、顔を近づけた。

「無職」

「そうです」

「実家暮らしかね？」

「いいえ、ひとり暮らしで」「と言いかけて、口ごもった。なにかがおかしい。どうしてさっきからエレノアのことを隠そうとするのだろう。「そう、ほんとうにひとり暮らしなんです。猫と住んでるんです。これってひとり暮らしっていうのかな、って思って」

「親からの仕送りは？」

「ありません」

「ということは、まったくの無一文で暮らしているということだね？ きみと、その猫とで」

「そういうことになります」

エイミルは疲れたまぶたを持ち上げ、じっとリュックを見据えた。

「それは大変だろうね」

「よくそう言われますけど、なんとかなるもんですよ。なんでなんとかなっているのかわからないんですけどね。仕事に就こうと思つたのは、なんでなんとかなっているのかわからない状況から抜け出して、あらためてなんでなんとかなっていたのかを知るためです」

「もうけっこう」

エイミルは経歴書（というよりしみのついた紙ペラ）をわきにどけて、指を組んだ。

「すでに知っているとは思いますが、いちおううちの事業内容を説明するよ。われわれの事業は、簡単に言うとお小売だ。インターネットやカタログでの通信販売を行っている。販売しているのは、現在のところデザイナーもののおしゃれなテーブルやチェア、おしゃれな収納家具、おしゃれな服飾小物などだ。十二期目に入っており、売上の規模としてはまだまだだが、創業三年目からはずっと黒字を

計上している。自慢じゃないが優良企業だよ、うちは。そして現在は、取り扱い商材を増やし、安定期からのさらなる飛躍を目指す時期にある。だから、事業拡大に伴い、大幅な増員を行っているところなんだ。おもにきみのようなバカ者を採用している」

リュックはほとんど聞き流していたが、最後のセリフが耳にこびりついているのに気づいた。「はい？」

「以上が会社概要だ。ここまでで質問は？」

「質問というか」「まだビジネスマナーを学んで五分と経っていないので、勝手がつかめない。「いまの、爆笑するところなのかな」

「なぜわたしが先ほどから『おしゃれ』を連呼しているのかという」とエイミルは人の話をまったく聞いていなかった。「『おしゃれ』はうちの事業コンセプトだからだ。ロゴやオフィスのインフラまわりはもちろん、取り扱う商品も、ダイニング・チエアから名刺入れまで、すべて『おしゃれ』かどうかで可否が決まる。それを手に入れたことで自分までおしゃれになったと錯覚するような『おしゃれ』な商品だよ。『おしゃれ』とはなにか？」

リュックはコーヒーの最後の一滴を舐め取ろうとがんばっていたが、質問を受けていることに気づいた。

「『おしゃれ』ですか？」空のカップを見る。「コーヒーを半分残すことかな」

「近い。『おしゃれ』とは、本質を突いていない、という意味だ。すわれないテーブルのようなものだよ」

「テーブルはすわるものじゃないでしょ？」

しかし、エイミルは徹底してリュックの話を聞いていなかった。

「すなわち、機能性は問題じゃない、ということだ。座面がいやに盛り上がっていてまるでケツ骨をぶつけ合っているようなすわり心地のイスや、一度入れると破壊しないかぎりぜったいに取り出せない名刺入れなど　それを人は『おしゃれ』という」

「そんなもの売れますかね？」リュックは率直に聞いた。

エイミルは阿呆のようにぽかんと口を開け、リュックを見た。そ

してはじめて笑った。それも半端じゃない大爆笑だった。体のタガがはずれたようだ。

「潜在的なニーズだよ、リュック。なにが欲しいか正確に把握している顧客など、どこにもいやしないんだ」

だいぶ落ち着いたようだだった。首を押さえ、深呼吸を繰り返している。ビジネスも楽しやなさそうだ。

「じゃあ、『おしゃれ』であれば売れるんですか？」

「いい質問だ」と言ってから、はっとした様子でかぶりを振った。

「いや、悪い質問だ。もつとふざけて」身振りを交えてつつける。

「舐めた質問とか、してみて」

「それってつまり」

「もつと阿呆に。非常識に。テレビは見るかね？」

「いまですか？」

「そう。大事な面接の真っ最中にだ」

と言って、エイミルはソファに転がっていたリモコンをつかみ、大型ワイドスクリーンのテレビに向けた。

「きみは自宅でも、そうやってかしまってテレビを見るのかね？ もつと楽にして。テレビを見るにはテレビを見る格好というものがある」

家電売り場でしか見たことがないような高解像度のリッチな画面に映ったのは、いかにも安いセットの料理番組だった。この番組は見たことがある。『ほんとうのところの料理』だ。

エイミルを見た。自宅でももう少ししゃんとしているだろうというような格好で、ほとんどソファに寝転がり、尻がはみ出すくらい腰を突き出し、足を投げ出している。

『ほんとうのところの料理』はエレノアのお気に入り、でなければリュックが料理番組など見るはずがないし、覚えているはずもない。そしてさすがにエレノアのおめがねに適っただけあって、毎回かなりおもしろかった。最終的にまったく料理と関係なくなるところがいい。せつかくこしらえた料理が、いろんなハプニングのせい

で仮設キッチンに飛び散るのがお約束で、視聴者もそれを期待していた。いまやまともにテーブルに着いて試食しようものなら、客席からブーイングが起こるほどだった。

えげつなく、視聴率のためならなりふり構わない番組をたくさん抱えている『MUTV』らしい。

「さあ、今日はどんな『料理』が飛び出すのかな」
エイミルも期待していた。

主演のお料理おばさん、ヨンナは、あらゆる点で妥協知らずな人物として知られている。それが料理研究家としてなのか、芸能人としてなのかはわからない。おそらく両方なのだろう。料理番組ではふつつ、調理済みのストールなんか別個に用意されていたりするのだが、そんなインチきをヨンナが許すはずがなかった。レシピを発表して材料を読み上げ、アシスタントといっしょに調理を開始し、すべての品目を完成させるまで、リアルタイムで実際に行く。

どうやら番組ははじまったばかりだった。リュックはこっそり立ち上がって、自動販売機でオレンジジュースを買った。ソファに戻り、姿勢をくずしてジュースをすすする。

うつとうなつて、カップに戻しかけた。オレンジリキュールだった。

「いいね。わたしにもオレンジジュースをくれないか」

エイミルはコーヒーを飲み干すと、紙コップを握りつぶしてそのへんに放り投げた。

「というわけで、今日はニシンの燻製をつくります」美人アシスタントのイグノラが、となりに立つヨンナに話を振った。「わたし、燻製づくりははじめてなんです。まず気をつけることはなんでしょうか？」

ヨンナは顔半分をおおうおしゃれメガネを持ち上げ、不機嫌きわまりない顔でアシスタントをにらんだ。初孫も泣いて逃げ出す恐ろしさだ。肌は上薬を塗った紙粘土さながらで、しゃべるたびに口のまわりがぼろぼろくずれてきそうだった。

「あなた、料理に向いてなさそうね」

「あら。こう見えてもわたし、お料理は得意なんですよ。シェフの免許も持ってて、彼氏にはいつもヘルシーなレシピで」

「でも、こういう伝統料理は無理ね。若くてかわいいからってなんでもできると思ってるの？ いい、あなたは世の中舐めすぎ。まじめにやってちょうだい」

ヨナナ特製、論点のすり替えだ。観客はざわついた。目を輝かせ、ハブニングを待ち構えている。

言いたいことが百はありそうな顔で、イグノラがしぶしぶと準備をはじめた。ヨナナは指先ひとつ動かさず、不動の心で仮設キッチン中央に立ち尽くしている。

「これが燻製マシーンね。はじめて見ました」

「でしょうね」ヨナナはぎろりとにらんで言った。

「これがチップ」カメラに向かってかわいらしく持ち上げてみせる。

「紅茶の葉を混ぜてもいいんですって」

「その手、甘やかされて育った人の手ね」

なにをやっても気に食わないらしい。ニットのセーターを腕まくりし、エプロンを引っ掛けているイグノラは、美人なうえに庶民的、気立てもよさそうで、こんな女性を奥さんにできたらどれだけ幸せだろうと思わせた。

「そして、主役のニシン　が、ない」テレビ用の身振りでおちやらせる。

「ここにはないの。決まってるでしょ」

「どこにあるんです？」

「外よ」

「外？」

「燻製をつくるにはね、まず自然の中で乾燥させる必要があるのよ。こんな基本もわからないで、よくもそんなイヤリングを着けていられるものね」

「着けてません」

「でも、普段は着けてるんでしょ？ ごまかさないで」

理不尽な仕打ちにさすがのイグノラも口ごもり、しばしにらみ合う。スタジオの空気が凍りついた。客席のだれもが、イグノラの実存がさらけ出されるのを期待している。

「スタジオの外を呼んでみましょう」

ヨンナが陰気に言うのと、画面が屋外に切り替わった。三枚におろされフックで吊るされたニシンのどアップが映った。

「はいはい！ ヨンナ、スタジオのみなさん、ヘルマンです。ぼくは民家の軒下を模したセットの前にいます」

というヘルマンも、ニシンのとなりにフックで吊るされていた。

現場は海に面した崖だった。吹きすさぶ風、荒れ狂う海、鉛色の空。一見して自殺の名所を思わせた。ちびた草がまばらに生えた地面にセットを組み、竿のようなものに吊るされたニシンの切り身が暴れている。もちろんヘルマンも暴れているが、これはわざとだった。おもしろくない若手芸人はただの洗濯物だと言わんばかりに、奇声を上げてニシンを平手打ちしたり、冗談めかしたすぐさで蹴りを入れたりしている。

「いい具合に乾燥されてるみたいです！ あと三日もあれば、スタジオにお持ちできますよ！ ばくも表面の水分が乾くまで、ここでいっしょにぶらぶらしていようと思います。社長、今度はちゃんとギヤラ払ってくださいよ！ じゃ！」

「三枚におろされていたら、ほかのニシンと見分けがつかなくなつたでしょうね」

スタジオのヨンナが陰鬱な調子で言った。「ここで待ちましょう」「三日もですか？」イグノラの腰から下はすでに帰り支度をはじめていた。つま先は自宅の玄関にすべりこんでいて、頭は食材を切る以外の使い道が包丁にあるのかどうかを考えていた。

「若い人はなんでも、樂をしたがるのね。いいものをつくるには時間と手間がかかるものなのよ」

「かかりすぎです。テレビなんですよ。もう我慢できない。今

日こそ言いたいことを言わせてもらいます。あなたはだいたい
「飽きた」

エイミルはべろべろに酔いつぶれて自宅に帰るなりソファに沈み込んだときでももう少し背骨の位置を気にするだろうというような格好でつぶやいたが、実際酔っていた。

「わたしはどうすればいい」

「チャンネルを変えろというのはどうですか？」

「いいね。じつに的を射た提案だ。いや、ちがう。じつにくだらん。若気の至りもはなはだしい」

エイミルはぶつぶつ言いながら、リモコンをテレビに向けた。モードが地上波からインターネットに切り替わった。ショッピングサイトだ。白と黄緑色を基調としていて、それからやたらとくねくねしていた。

「うちのショッピングサイト。『フーム・オンライン・ストア』だ。どんなものか気になるだろうから、参考までにね」

リュックは驚いた。面接官がまともなことを言い出したからだ。

「いい色ですね、アイスクリームみたいで。どこを押せばいいのかわからないですけど」

テーブルのカテゴリから、あるテーブルを選び出した。何度も何度も「ほんとうに移動しますか？」という警告のポップアップが表示され、「はい」を押すたびにポップアップ自体が飛び跳ね、「移動しました」と表示文が切り替わった。ノミみたいに飛び跳ねる三十あまりのポップアップすべての「いいえ」ボタンを押すと、ようやく商品の紹介画面に遷移した。透明感あふれる写真がじんわり表示される。

リュックは思わずテレビの画面を下からのぞきこんだ。そして指摘する。

「このテーブル、脚がない」

「そのとおり。よく気づいたね」

「意味がないですよ」

「そのとおり」

「脚がないなら、どうやって食べるんですか？」

「買った連中がなんとかするんだろう。みんなで持ち上げて支え合いなから食ってもいいし、みんなでイスにすわってめいめいの膝に乗せ合って食ってもいい」

「ひとり暮らしだったら？」

「それもちゃんとお見とおしだ。こういうものを買う連中は、たいてい友達の数ばかりやたら多くて、みんなで共同作業というのが大好きだからね。膝に乗せて食いながら、『おい、おめー、ガタガタさせんなよ』『うるせー』『フィンボガちゃん、だいじょうぶー？』『ダメかも。あたし非力だから。腕がプルプルしてきた。あーもうダメ、助けてー！』『よっしゃ、おれが助けたる』『あー、あんた彼女が好きなんだ』『バ、バカ言うなよ』などと言ってたね」
エイミルは熱のこもった苦々しい口調で言った。きっと口く大な大学生を送ってこなかったにちがいない。

次の商品を表示した。

「おしゃれキーホルダーだ」

「まともですね」

「そうだろう。それに、万能鍵がおまけで付いてくるんだ」

「万能鍵？」

「手持ちの鍵をつける必要もない。万能鍵は大陸じゅうのどの家のどのタイプの鍵穴にも合うようつくられているから。おしゃれだろう？」

「でもそれって、人の家の鍵穴にも合うってことじゃ？」

「そうだよ」

「犯罪につながりますよ」

「いや、そんなことはない。そのようなクレームは一度も報告を受けていない。だいたい、こういうものを買う連中は度胸がないんだ。いいやつである自分が好きなんだ」

「泥棒なら、おしゃれに興味がなくても買っでしよう」

「問題ないね。うちのサイトを見ただろう？　ここから探して購入するより、自分で合い鍵をつくったほうがよっぽどはやい」

さらにべつの商品。枯木を模した白いコートハンガーだった。

「あつ、これ」

「どうしたね？」

「このコートハンガー、持ってますよ。どうやって買ったのかは覚えてないけど　でも、これはヘンじゃないですよね。すごく使いがいいし、気に入ってるんです、ぼくもエ　猫も。おしゃれですよ」

「そうか。ではあまりほめられた使い方をしていないわけだな」

「どういうことですか？」

「コートを掛けたり」

「そうです」

「帽子を掛けたり」

「そうですね。それ以外にどんな使い道があるんですか」

「話しかけるんだ」

「え？」

「そして水をやるんだ」

「水？」

「そしてベランダに出す」

「さっきから、どれもこれも狂ってると思えないんですけど」
リュックはお世辞を言った。

「成長するんだ。コートをひっかける枝がなくなったときのためにね。それに、こういうのを買う連中はたいい生き物が好きだ。好きじゃなくても好きなふりをしている。いずれにしても同じことだ」

「でも、材料の段階で完全に死んでるでしょう」

「ハンガーのやつは気づいとらんよ」

テレビを消して、つつける。

「『おしゃれ』であれば売れるのか？　そう、そのとおり。では『おしゃれ』の定義とはなにか。まず、役に立たないこと。かさばる

こと。すぐに壊れること。そして、親に買ったことが見つかる叱られるようなことだ。これらはそのまま社訓にもなっている」

エイミルの手がポップコーンを探すかのようにテーブルの上をあちこち動き、卓上カレンダーにたどり着いた。くるりとまわし、リュックに向ける。

リュックは顔を近づけた。

「読めないんですけど」指さす。「これ、何月のカレンダーなんですか？」

「『役に立つな、かさばれ』と書いているんだ」

「役に立たない社員がいいんですか」

「そのとおりだ。役に立とうとするから役に立たない。そして同様に、売ろうとするから売れないのだ。黎明期の暗黒時代、かつての経営陣は、あらゆる手をつくしたあげくにそう結論づけた。こ

んなにがんばったのに業績は回復しない、ならば売らない努力をするべきだ、とね。発想の転換というやつだ。そして現在に至る。販売サイトのユーザビリティは壊滅的だし、『検索エンジン逆最適化』も独自にチームを組み、ぜったいに検索されないよう対策を講じている。しかも、なんとか買えたとしてもまるで役に立たない商品しか届かない。しかしそこから、業績が一気に好転したんだ」

「おしゃれだから」

「そういうこと」

「なんとなく理解できましたよ。なんてすばらしい」

じろりと非難するようなまなざしを向けられる。マナー違反だ。

リュックはあわてて「なんのことだかさっぱり」と言い直した。「おめー、意味わかんねーんだよ」とも言った。阿呆な表情も加えたほうがいいだろうかと考え、目玉をまわしたりあごを突き出したり腰をくねらせたりした。

「きみはまだ若いようだから」「エイミルは大人の寛容さを見せつつ言った。「わたしも不惑を過ぎたばかりなのだが、いまでも無能であるうと努力しているんだ。だからしたり、泥酔状態で出社

したり、休憩に行つてそれつきり戻らなかつたり。上に立つ者としては、模範を示さなければならぬ。そして人事の責任者としては、こいつだけはぜったいに採用したくない、クソの役にも立たない、と思える人材を積極的に採用する努力をしている。その点、きみは若いわりにいい線いつている。まれにだが、そういう人材に巡り合うんだ。会つた瞬間ビビツと来る。あつ、こいつはバカだ、と「ほんとですか？」目を見開いて身を乗り出し、ひざを叩いて笑つた。だいぶマナーが飲み込めてきた。

「職務経歴書が物語っているよ」紙ペラを持ち上げて表をリュックに向けた。「こんなに熱のこもつた職務経歴書はじめてだ。プリンターのインクの節約をするために人生を送つてきたようなものだからね」

そして唐突に体をねじつて後ろを向き、なぜかビデオカメラに向かつて紙ペラを見せた。

「なにをしてるんですか？」

エイミルは正面に向き直つた。「べつに」

そのとき、バッグの中から盛大な着信音が鳴り響いた。あわてて胸に抱え、中を探る。

「電話だ。取つてもいいですか」

「もちろん。バカで非常識な行動は大歓迎だ。ほかのスタッフに見習わせたいくらいだよ」

電話はエレノアからだつた。「もしもし？」

「助けて」

「どうしたの？」

「いまね、モールに来てるの」

「ほんと」

「テレビを買おうとして」

「テレビはあるだろ」

「壊れちゃつたの。家電売り場に来てる」

「で？」

「買おうと思って、レジでお会計してるの」

「うん」

「お金を払えって」

「レジの人はそう言うよ。お金がないときはとくに」

「でね、がんばってるんだけど、ぜんぜん意識を失わないの。息を止めたりすればいいのかな。とにかく、どうやって買い物すればいいのか教えて」

ようやく理解できた。エレノアは今朝話した『買い物』をマネしているのだ。だれもができる技じゃない。自分でもよくわからないし。

「待ってて。とにかく、危険だからレジから離れて。面接が終わったらすぐ行くよ」

電話バッグに戻す。エイミルが先ほどから変わらない姿勢で言った。

「だれからかね？」

「うちの猫からです」

言うやいなや、エイミルは勢いよく膝を叩いた。

「採用だ。その才能をわが社のために活用してほしい」

「ほんとですか？」

エイミルはうなずいて、リュックの経歴書を破り捨てた。

思わず「やった」とこぶしを握りそうになったが、ビジネスマナーを思い出し、祖母が死んだと聞かされたときのような顔をした。

エレノアに知らせてやるう。これからは社会的にまともな生活が送れる。まともな『買い物』ができる。そう考えるとよけいに心浮き足ち、じつは親父に二十年来の愛人がいたと聞かされたときのような顔になった。

「最後になるが、就業するにあたって、なにか不安な点や質問などはあるかね？」

「あります。ずっとひっかかっていたんですけど 正直、バカばかりじゃ仕事にならないでしょ？」

「バカばかりとはいかないさ。努力はしているがね」疲れたように言う。「有能な人材ばかりの会社などない。うちだけの問題ではなく、雇用に関してはどこも苦労しているんだ。新人には三ヶ月の研修プログラムを設けているんだが、効果はいまひとつだね。若い連中のなかには、一ヶ月と立たずに雲隠れする者も多い。自分は無能ではない、役に立つ存在なんだ、などと言って」

「じゃあ、有能な人はどのくらいいるんですか？　　ぼくの言ってる『有能』っていうのは、役に立たないかさばったバカ者のことで　　なんかややこしいな。もうふつうに話していいですか？」

「バカは少ないよ。現状はね。やはり、わたしの責任でもあるかな」
「そんなことはありませんよ」

「そうだろうか」

「だって、バカをなかなか採用できないってことは、あなたが役立たずだからでしょ？　　ということは、やっぱり会社はあなたを必要としてるんですよ」

「　　本気で言っているのかね？」

「もちろん。あなたはとてつもなく無能なろくでなしなんです。大かさばりの大バカ者ですよ」リュックは齒の浮くようなお世辞をまくし立てた。

あれだけ疲れた顔と態度だったのにもかかわらず、エイミルは突然ソファの上で飛び跳ね、スーツが裂けるのではないかと心配するほど体をよじり、背もたれを叩いて涙を流しながら爆笑した。

「さっそくわが社に馴染んできたようだね」目を拭って、笑いの余韻で声を震わせながら言った。「では、面接を終わろう。期待しているよ」

エイミルは痙攣しながら立ち上がって、手を差し伸べてきた。リュックも立ち上がり、しっかりと握手を交わした。エイミルはまたも弾かれたように体を仰け反らせて大爆笑をはじめ、リュックもつられて笑った。

次の瞬間、エイミルは真顔でリュックの頬をぶん殴った。

「詳細はのちほど連絡するよ。それでは失礼」

リュックはひとり取り残され、しんとした部屋でしばらく横たわっていた。びりびりする顔を押さえながら立ち上がる。

顔を上げると、ビデオカメラと目が合った。

ゆっくりと、バッグとコートを抱える。その間もカメラから目を離さなかった。心なしか、面接の前より近づいているような気がする。正対したまま、これまたきわめてゆっくりと、カニ歩きで視界のそとに出てみた。どうしてもかは知らないが、被写体を追ってカメラが動くのではないかと思ったのだ。実際はそんなバカなことは起こらず、カメラはあさってを向いたままぼんやりしていた。

当然だ。リュックは肩の力を抜いて頭をかいた。すっかりバカが板についたらしい。きつと面接のときは、その様子をビデオカメラで撮影することになっているのだ。リュックは自分を納得させるように何度かうなずきを繰り返し、去り際にカメラに友好的な感じで手を振った。

さつとカメラが振り向いた。リュックはたまげて、下ろそうとした足が地面を踏みそこねた。体が横に傾いた時点でふかふかのカーペットに倒れこむことにしたのだが、そうはならなかった。ドアがリュックの耳をぶん殴りにやってきたからだ。

「カメラがこつちを見た　自分で」

リュックは横たわりながら、われ知らずひとりごとをつぶやいた。お互い目をそらさない。

エレノアと同じだ。自分も監視されているのだろうか。それも、エレノアの話によるとテレビの中のキャラクターから。

そんなことってあるのだろうか。

「小さいころ『人をじろじろ見るもんじゃありません』って教わらなかったのか？」

ビデオカメラは返事をしなかった。それも当然だ、とリュックは思い直した。カメラは人をじろじろ見てなんぼだからだ。「なにト

チ狂ったこと言ってる？」ってなもんだ。子供のころ母親と街中を歩きながら「見なさい、すばらしい景色よ」とか「あつ、見て！殺人現場よ」とか「ダメよ、アングルがよくない。もっと女の子に接近して。こうやって下からのぞきこむように　そうそう。そうやって迫力を出すの」とか、とにかくそんなふうに着てられたにちがいない。

リュックは跳ね起きた。そして持ち物を投げ捨て、自動販売機に駆け寄った。ボタンを押し、ドリンクを二十四種類ぜんぶ買った。テーブルに紙コップを一行に並べ、端から順に飲んでいった。いくつかはやっぱリアルコール入りのドリンクが混じっていて、意表をつかれてむせたりゲップしたりしながらもぜんぶ飲み干した。

カメラは困ったような顔をしていた。

これでよし。だれがどこでこの映像をのぞいているのか知らないが、いきなり狂った行動を見せられたらしばらく考え込まずにはいられないはずだ。

「見たか！　これがほんとうのぼくだぞ」

最後に超特大のゲップをかました。その昔、親父がところかまわずゲップするのがイヤでしうがなかった。「おとうさん、人前でゲップするのはよくないよ」とリュック少年は親父の袖をひっぱりひっぱり忠告したものだ、返事をくれることはなかった。あったとしてもゲロまみれだったので、その中から探し出すのは容易ではなかった。

廊下に飛び出し、もつれる足で走った。途中で受付嬢とすれちがったので、ブレーキを踏んで振り返った。

「さっきはありがとう。役に立ったよ、ネクタイも、ビジネスマナーも」

「それはなににより。で、どうだったの？」

「最高。即日採用だつてさ。きみのおかげだ」

「よかったね。外でコーヒーでも飲まない？　午前中だけで二回も休憩を取ったんだけど、上司がうるさいのよ」

「もう飲み物はたくさん。それに、急いでるんだ。モールに行かないか。彼女がお金を持ってないのにテレビを買おうとしてるから」

リュックはバッグを肩にかついで、ふたたび走り出そうとした。

「なんだ、彼女いたんだ」

「いるよ。いちおうね」と振り返って答える。

「正直言つと、あなたとはじめて会ったとき、個人的にはね、彼女がいてほしいなって思ったの。だらしなくて無能でスネかじりで家事もなんにもできない、かわいいだけがとりえの彼女。で、あたしはその彼女とお知り合いになりたい。あなたより彼女と仲良くなりたい。そしてあなたがトイレへ行った隙に、突然ひどい悪女に豹変して、彼女を泣かせてあなたに家から蹴りだされたい。これ、

いまの正直な気持ちよ」

「そう」さっそくビジネストークを披露した。「ぼくもきみが好きだよ。すごく常識的だし、性格も文句なしだ。エレノアを捨ててきみと付き合おうかな」

リュックはエレベーターに駆け込んだ。一階に降りると、大股でエントランスを横切りながらコートに羽織った。酔っ払っていることを差し引いても、なにか妙に大きな気分になり、いっちょまえの男になった感じがした。バッグを抱えて颯爽と回転ドアを抜け、颯爽と通りに出た。勢いで路上に踏み出して颯爽と手を上げ、タクシーを止めた。後部座席に乗り込み、「モールまで」と告げた。タクシーは走り出し、リュックは満足げにシートにもたれた。

金がないのになぜそんなマネをするのか。次々と流れる建物を眺めながら、リュックはあらためて考えてみた。が、たとえば母親を納得させられるようなまともな理由は思いつかなかった。ただ、これだけは言えた。コートにネクタイをなびかせてビルからとりに飛び出したときには、たいがいそうするものだと思ってる。だからやった。かあちゃんがこれを聞いたら息子を心配して病院に連れていこうとするだろうが、結局のところ、かあちゃんというのはなにを言われても息子を心配して病院に連れていきたがるものなの

だ。どうにかなるだろう。

3話 テレビの買い方

緊急事態でもないかぎり、エレノアはめったに外出しない。食べるものにしても、冷蔵庫を開ければたいい「これだ」とピンとくるものが入っているし、ピンとこなくても食べた。ピンどころか賞味期限が切れて外箱がふやけている冷凍食品でも食べた。ボール紙の味しかなくても気にしないし、食べればなんでもいい。テレビでぺらぺらのチーズみたいな宇宙食の紹介を見たことがあったが、一生あれを食っていてもよかった。

エレノアは家から徒歩十分のところにある超巨大ショッピング施設『フィヨルズルナカズル・モール』に来ていた。名前が大げさすぎるので、たんに「モール」と呼ばれている。エレノアはベージュが白っぽくなったファーコート巻きつけて、ウサギ皮の帽子をかぶり、口から毛があふれ返ったブーツをはいていた。毛玉を引き連れて歩いているようなものだ。今日は風が強いし雪混じりなので、モールに着くころにはすでに凍えてがたがた震えていた。家電品売り場は四階にあった。

ここでテレビを買って、さっさと家に帰る　お金はないが、さっさと帰る。リュックにできるのだから、自分もきつと『買い物』ができるはず。

リュックに電話する。面接中なのか、応答がなかった。四階のテレビ売り場へ向かう。通路が目の前を一直線に伸びている。左右の棚にはテレビがずらっと並んでいて、競って画面をちかきさせ、自分を買ってください、必ずお役に立ちますよとアピールしている。

その声を聞きたび、エレノアは眉間にしわを寄せた。どれもこれも同じに見える。ペットショップに入ったら黒毛のシーブドッグがずらっと並んでいていっせいに顔を向けられたようなものだ。大きさはそれなりにばらけていて、たまに突然変異体のような大型スク

リーンがどつかと待ち構えていたりするが、形はいつしょ。四角くて、ワイドで、薄型。ほんの少し、同型で白や赤やピンクのものがあつた。たぶん親がヒッピーかなにかだったんだろう。

テレビそのものについては、譲れないこだわりがあつた。リュックもそうだし他の人も例外なく、テレビは画面が大きくて、画質がよくて、薄くて四角いほどよいと考えている。そうではないのだ。エレノアにとってテレビはパートナーだつた。黒服を着て紅茶のポットを持ちむつとりと立っているお役立ちの執事など、いらない。ふわふわしていて、ころころしていて、おなかをさするとうれしそうに床を転がって、たまに抱きしめたり、いつしょにソファの上で飛び跳ねたり。とにかく具体的に表現できないがそんなパートナーがほしい。いままでふわふわころころのテレビにお目にかかったことはなかったが、もし売り場でふわふわころころが通路を飛び跳ねているのを見たら、なにはなくとも捕まえにいったことだろう。

通路を一行ごとに行つては戻りし、歩くたびに気分が沈んでいった。ブーツの中が蒸れて水っぽくなってきたし、首をねじるのにも飽きてきた。それでも薄暗い雰囲気の際際に近づくにつれて、ふつうじゃない感じのテレビがちらほら出てきはじめた。この列はさしずめ落ちこぼれの補習クラスだ。三年ほども居残っているのか、うつすらほこりをかぶっている。客もない。

落ちこぼれたちは画面が小さくて、ワイドじゃなくて、幅が分厚かつたりブラウン管だつたりしている。どれも古くて、時代遅れ。口があればへの字を、眉毛があれば八の字を書いていることだろう。かわいそうで、悲しい気持ちになる。

通路も終わりに差し掛かったところで、棚の一角が妙に輝いていることに気づいた。エレノアは胸をざわざわさせながら足ばやに近づいた。あれかもしれない。

あれだつた。

大きさはほどよくて、液晶の画面は十五インチくらいだつた。つやつやした水色で、ふちはすりガラスか製氷皿の氷のようなプラス

チックでまるっこく覆われている。指先で触つてみると、ざらざらと心地よく、少し柔らかかった。抱きかかえて持ち上げる。驚くほど軽い。ラベルには名前が書いてある。クレツパ（水色）。アラニスというデザイナーもので、昨年発売されたばかりだった。新しく、ほこりもかぶっていない。マツチョでもなく、いじけてもいない。一年もすればおすわりくらいはできるようになるだろう。

これだ。クレツパ（水色）。これしかない。

「わたしに買つてほしい？」

胸まで持ち上げて、顔を近づけてそつとたずねる。テレビはうなずいた。ほんとはうなずいていないのだが、イヤだとも言わないので同じことだ。しまいには頭を押さえてむりやりうなずかせた。

「よし。あなたを買うことにした。いっしょに帰ろう」

そんなわけで、五分後エレノアはレジで店員の男と向き合っていた。背後の時計を見る。十三時二十分。『31』の放送には余裕で間に合いそうだ。

「どうも。わたしね、買い物しに来たの」

「だいたいみんなそうだよ」

店員のおじさんは不機嫌そうに返答した。買えるものなら買ってみると言わんばかりだが、たぶん気のせいだろう。身長は低くてエレノアの頭半分くらいで、髪が薄くて鼻が大きい。黄色いエプロンをつけていて、胸のポケットからはボールペンやマーカーやらが何本も頭につき出ている。鼻の穴をぐいと持ち上げてエレノアを見た。

「支払いはカード？ それとも現金？」

「ううん」

エレノアはにこにこして答えた。

「なんだその『ううん』ってのは？」

「どっちでもないから」

「じゃあ、小切手か」

「なにそれ？」

「じゃあ、ポイント支払いか」

「そうじゃないの。そういうことじゃなくてね。 ちょっと待って」

エレノアはリュックの話を思い出そうとした。『買い物』の話だ。まず、どうするんだっけ？

「 わかった。まず、金額をレジに打ち込んで。ピツて」
「ふざけてるのか？」

「順序が大切なの。とにかく打ち込んで。はい、どうぞ」

店員のおじさんは鼻の穴を広げた状態でしばらく固まっていた。そしてうつむいてなにか考えていたが、おもむろにバーコードリーダーを持ち上げて、カウンターの乗ったダンボールに近づけた。ピツと音がした。

「五百九十九グラム。これでいいか？」

「ばっちり」

「順序にまちがいがなきゃ、次はあんたが金を出す番だ」

来た。リュックによれば、このあと記憶がなくなつて、気づくと品物を抱えて家の中にいるということだった。やりかたはわからないが、とにかく記憶がなくなるんだらう。エレノアはにこにこしたまま待った。おじさんも待った。

記憶がなくならない。

レジ係のおじさんの鼻の穴がみるみる膨らみ出した。と、しゅつという感じでしぼんで、爪先立ちでエレノアのうしろをのぞきこんだ。申し訳なさそうにうなずき、となりのレジを指した。かぶりを振ってエレノアに向き直る。そして思い出したように鼻の穴が広がる。

エレノアは精神を集中しようと目を閉じた。そうだ、じっと立っているのがいけないのかもしれない。新しいアイデアをもとに、エレノアは怒つてみたり、悲しんでみたり、祈つてみたり、死んだふりをしてみた。アイデアをさらに発展させ、おなかが痛いふりをしたり、まじめなふりをしたり、たいしておもしろくないくせに自分

のことを頭の回転がはやくてお笑いの才能があるやつだと思い込んでいる人のふりをしてみた。

後ろのほうざわついていた。振り向くと、それぞれの品物も抱えた二十人くらいの客と目が合った。どれも同じ顔をして、敵意に満ちていて、同じ目的につき動かされていそうだった。ゾンビ映画みたいだ。ちょうど場所もモールだし。

なにが大したことないのか説明するまでもなく大したことないという表情を顔に貼りつけたまま、あせってポケットを探しまくった。携帯電話を取り出して、電話をかけた。

リュックの声。「もしもし？」

「助けて」

「どうしたの」

お客さんの様子が本格的にゾンビ化してきた。家電品を手になじり寄り、直接的に怒鳴りつけてくる男も出てきた。

「待ってて。とにかく、危険だからレジから離れて。面接が終わったらすぐ行くよ」

電話が切れた。

「んー」

追い込まれたエレノアは、いきむように喉を鳴らした。レジのおじさんが驚いた顔で見上げる。どんどん声のピッチが上がっていき、おじさんの身長も上がってきた。エレノア自身も上がってしまいそうだった。酸素が足りなくなってきた、頭のとっぺんがばちんと弾けそうになる。

エレノアは辛抱たまらず息をついた。おじさんの身長がみるみる下がっていく。

「ダメ。できない」と言っ、悔しげに腕を振り下ろした。「これじゃ念力だ」

「いいかげんにしてくれ」

レジのおじさんは、勝手に身長を大きくされたのが気に障ったのか、有無を言わさない調子で言い放った。べつの店員を呼んで、力

ウンターのダンボールを片づけるよう身振りで指示した。エレノアは箱にかぶりついた。

「待って！ わたしはどうしてもこのテレビが必要な。買わなきゃならないの！」

「金を払えば買えるんだよ！」

箱の上によじ登ろうとして、店員にひきずりおろされた。エレノアは周囲を見まわし、売り場のテレビが目にとまった。さまざまなチャンネルのさまざまな番組を映している。中でもぱっと目に飛び込んできたのは、『ほんとうのこの料理』だった。あれはアシスタントのイグノラだ。包丁を持ったまま、手の甲で目頭をぬぐっている。お料理おばさんは休みだろうか。

いや、いた。スタジオの隅、セットから外れた場所で、特製の音楽イスにすわって紙の束をめくっている。手持ちのカメラがふざけるように映像を揺らしながら近づいていって、ヨンナの表情を大写しにした。それだけで嫁を出家させるといわれる恐ろしい顔が、さらに陰しくゆがんだ。ヨンナのまわりに無意味にカメラをうろつかせて機嫌を損ねるのは、もはやなくてはならないお約束だった。

大きなおっかない顔の映像に、ナレーターのしゃべくりがかぶさる。

「魚が届くまで三日。ヨンナはもちろん、待つつもりだ。イグノラも着替えを用意し、準備は万全の様子。さあどうなる、今週の『ほんとうのこの料理』！ みんなはどうだい？ このまま残って、『料理』が完成するのを見届けたいか？」

拍手と歓声が起こった。観客はいつになくテンションが高い。

「じゃあここでお待ちかね、『シャワー&クイズ』だ！ スタッフのみんな、簡易シャワー室を用意して！」

スタッフが電話ボックスのような代物をごろごろと運んできた。箱は天井がなく、シャワーヘッドがひよこつとつき出している。四面すりガラスにおおわれているのだが、高さは胸の上くらいまでしかない。

「三日待つわけだからね、妙齡の女性には、どうしたってシャワーが必要だ。でも待てよ、シャワーからお湯が出るなんてだれが言った？」

観客は立ち上がり、狂ったように騒ぎ出した。どんな液体が出るにせよ、シャワーを浴びてクイズに答えるのはヨナでないことだけはたしかだった。イグノラは周囲を見まわし、ようやく状況を把握したようだった。「はあ？ 聞いてないよー」といった身振りで両手を広げる。だいぶ泣きはらしたのか、目の下はくずれたマスカラで灰色っぽく変わっていた。

「いかがわしいだろ？ お昼に放送するなんて信じられない。まさに放送コードすれすれ。下半身を露出した着ぐるみのネズミがコードの上で綱渡りをするようなものだ。そしてそのコードをゆさゆさしてネズ公を地面に叩きつけるのは」「プロらしく絶妙な間を置く。」「きみたちだ」

イグノラは包丁を持ったまま肘を抱え、顎に手を当て、憎々しげに観客を見渡した。客のひとりから野次が飛ぶ。それに向かってなにごとか叫び、包丁を振った。音声が入ったアウトして、楽しみに飛び跳ねるようなテーマ音楽が流れ出した。

「ではここでいったんCM」

エレノアは店員ともみ合っているのも忘れて眉をひそめた。以前はこんなにかわしい番組じゃなかったはずなのに。これもミールの仕業だろうか。そんなことを考えていると、周囲の様子が変化した。視界全体が袖でごしごしこすったみたいに色あせ、なんだかよくわからないしみになった。まわりの音声も、番組の音声に合わせるようにフェードアウトした。代わりに当たり障りのないラウンジミュージックが流れはじめた。

展示用テレビのひとつがCMをとめ、ヨナの顔をアップで映し出した。

「あら。おひさしぶりじゃない。お元気？」

穏やかなおばあちゃん声だった。顔つきもふだんとちがう。穏や

かな微笑みに穏やかなまなざし。穏やかだが、とても悲しそうだった。じつはこんなおばあちゃんだったと見せつけられたら、嫁の弁護士も気まずそうに目をそらして訴訟を取り下げるにちがいない。

「まだだ　テレビから話しかけられた」

「驚いているみたいね、エレノア」

「ええ、いろいろと」

「なにかから説明してほしい？」

「うーん」エレノアはあらためて周囲を見まわした。「あなた、いつもとキャラがちがう」

「あれはテレビ向け」

「見て。わたしのまわりが固まっちゃった。ぼんやりしてるし」

「そうね」

「みんなしてテレビから話しかけてくるのはなぜ？　どうやって？

なんのために」

「来週になればわかること　」　「ヨンナはため息をつき、声を震わせながらつづけた。「ごめんなさい。あたしたちは都合が悪いときにはこんなふうにはしか言えないの。『つづきはまた来週。次回をお楽しみに！』って」

「なにかが起こってるのね？　つまり、そっちとこっちで」

「恐ろしいことよ。あなたがたの世界でもあるでしょう？　いきなり氷河期になったり、津波に襲われたり、エイリアンに侵略されたり」

「そっちでも似たようなことが起こってるの？」

「もつと恐ろしい。番組改編期がやってきたの」

「この時期に？」

「ヨンナはうなずいた。「どうしてかはわからない。だけど、ここ数日だけでたてつづけに番組終了が決定しているのよ。『名探（犬）ワンだふる・ツイッピー』も、『ビジネスっぽいアノ話』も」「『ビジネスっぽいアノ話』は、貿易赤字や株価の動向など経済に係するニュースを読み上げたうえでそれらを徹底的に無視するとい

う内容の番組だった。インチキニュースを読み上げたり、皮肉ったり、キャスターにセクハラ発言をしたりといったバラエティ番組とは一線を画しており、お笑い要素はいっさいない。はじめはなにがおもしろいのかと疑ってかかるのだが、見つづけるととたんに病みつきになる。ニュースを読み終えたあと、解説者がコメントもせず阿呆のように正面を向いていたり、職場風景を伝えるはずのレポーターがマイクを持ったまま社員を無視してオフィスを徘徊し、あまつさえ勝手に本部長の席に腰掛け、だからといってなにをするわけでもなくただぼんやりと前を見ていたりする。

「おもしろい番組ばかり」「エレノアは自分の一部が削り取られていくような気がした。そしてふと気づいて、背筋がひんやりした。「じゃあ、『31』も打ち切り？」

「『31』？　ああ、リンちゃん番組ね。さあ、あたしは聞いてないけど」

「ほんと？」
「ヨナはうやむやにうなずいた。「来週になれば　わかるかもしれない」

エレノアはひとまずほっとした。ヨナの挙げた番組はどれもお気に入り、終わるのはたしかに残念だったが、『31』ほどではない。『31』は完璧だったし、もはや自分の一部だし、背骨を引っこ抜かれるようなものだ。リン・タウンゼンドに会えなくなるなんて、とうてい考えられない。

というわけで自分の心配がなくなったので、ひきつづき他人の心配をすることにした。

「そういえば、あなたの番組もヘンだった」

「内容の変更があったのよ。さっきの展開を見たでしょ？」

「お色気路線に変わってた。もとから狂った感じだったけど、大好きで毎週見てたのよ。でももう見たくない。イグノラがかわいそう」

「あたしが『シャワー&クイズ』に参加するの」
「え？」

「プロデューサーが変わったのよ。新しいプロデューサーは急進的過激派のおばあちゃん子なの。お年寄りのセクシーネスを追求するんだって息巻いていた」

「なにそれ」

「あなたもやることあるんじゃないかった？」

「そうだった。わたし、テレビを買わなきゃ。お金を払わずに買う方法、知らない？」

「ヨシナは横を向いた。「CMが終わる」

「ねえ、知ってるなら教えて」

「時間がないの」ヨシナは言った。「ほんとうはあるけど」

「お願い」

「今日のお料理は『ニシンの燻製』なの」

「それで？」

「『ニシン』よ。『論点のすり替え』。いまのあなたにはとっても役に立つはず」

テレビがぷつと消えた。とたんに現実が再開した。

「金を払えば買えるんだよ！」

レジ係のおじさんがちよつと前のセリフを言った。CM明けだから視聴者に配慮したのだろう。ふたたび揉み合いがはじまる。

エレノアはヨシナの言わんとしたことを考えていた。ニシンの燻製 そうだ、ヨシナはいつも理不尽な論理でアシスタントをやり込めていた。ニシンの燻製、すなわち論点のすり替え。これだ。

ダンボールから離れ、抵抗する意思がないように両手を上げた。そしておじさんに正対する。

「お金がないと、買えないわけね」

「あたりまえだ」

「お金がないのが悪い、と」

「そうだ」

「お金が」

いつまで経っても次の句が出てこないの、レジ係のおじさんの

頭がちよつとずつ傾き出した。「お金がないと」「傾きつつけてカウンターに耳が付きそうになった。

「ごめん、いまのナシ。最初からはじめていい?」

おじさんはなにか言いたげな顔をしていたが、思えばずっとなにか言いたげな顔をしていた。

エレノアは咳払いした。もっと法廷もののドラマを見ておけばよかった。

「ねえ、よく考えてみて。本当に、お金がないと買えないの?」

「そのとおり」

「みんながそうしてるっていうだけで、他の方法がないわけじゃないでしょ?」

「いや、ないね」

「そんなはずない。よく考えるんだ!」

エレノアが急に怒鳴ったので、おじさんははつとして、言われたとおり金を払う以外に商品を買う方法がないか考えはじめた。

「思いつかん」

「時間はそんなにないけど、まだだいじょうぶ。わたしもいっしょに考えるから」

ふたりはカウンターをはさんでしばし考えていた。

エレノアが先に口を開いた。

「おじさんが払えばいいのよ!」手を叩く。

「そうか　だが、おれになんの得があるんだ?」

「ほしくないの?」

「テレビは持つてる」

「すごくかわいいのよ」

「おれはかわいいテレビなんていらん。　うちの娘がほしがるよ
うなもんだ」

「娘さんのために買ったら?」

「こんなもん、贅沢すぎだ」

「買ってあげたら喜ぶでしょうね」

「まあ、たしかに」

「わたしもね、はじめて自分用のテレビをおとうさんに買ってもらったとき、すぐくうれしかったのを覚えてる。娘さんのこと、大事に思ってるんでしょう？」

「もちろん。なにより大事に思ってる」

「お金よりも」

「あたりまえだ」

「決まり。買ってあげて」

「　　だけど、それじゃおかしいだろ。娘に買ったならあんたのものにはならない。あんたはどうする？」

「わたしのことは気にしないで。それについては買ってから考えましょう。とにかく買うのが先。はい、お金払って」

レジ係のおじさんは自分の財布を尻のポケットから取り出した。中をのぞきこんで、手持ちで足りるだろうかと札を繰って数をかぞえた。

「足りる？」

「ああ、たぶん」

目をしばたいた。魔法の粉を払うように頭を振り、どうしておれが手持ちで足りるかと札を数えなきゃならんのだと言いたげな顔になった。

「どうしておれが」

と実際に言った。

エレノアはアニメのキャラクターのように、大げさな身振りで指を鳴らすしぐさをした。「うーん、惜しかった！」

となりになにか大きなものが立ちはだかっているのに気づいた。そっちを向くと、目の前に男の腹があるような気がした。大きすぎるシャツをめくってたしかめたわけではないので、たぶん腹だろうと思った。腹があるなら顔もあるはずだと視線を上げていったのだが、延々と黒ネクタイの道がつづくだけでなかなか顔が出てこない。道中、わき道で盾形のバッジが腰を下ろし休憩していた。警備

員だった。

視線がようやく顔までたどり着いた。その顔はむっつりと無表情であるような気がした。袖つきの工場用アームが動いて、エレノアの二の腕をつかんだ。必要なら腰だって片手でつかんで持ち上げられそうだった。

「わきへどいて。こつちへ来るんだ」

レジのおじさんがあらためてエレノアと向き合い、ふんと鼻を鳴らした。ずっとそうしたかったのだがやっとこ機会がやってきた、ようやく念願叶ったといった感じだった。

警備員にひっぱられて、売り場を離れ、階段を降りる。家電品の立てるざわめきが遠くから聞こえてくる。ご退場願われたのだ。子供のころ仲間はずれにされたときも、ちょうどこんなふうに感じたものだった。おまえはここにいちやダメだよ、その資格はないんだよ、と。自分と警備員の靴音がやたらと響く。ひどい話だ。エレノアは頭の中でつぶやいた。お金がないだけで出て行かされるなんて。みじめな気分になって、目の端がじんわりにじんできた。お金がないとテレビが買えないなんて。わっと泣き出しそうになったが、すぐに思い直した。どうやらあたりまえであるような気がしたからだ。これぞ論点のすり替え。

「どこまでひっぱっていくの」

「敷地の外までだ」警備員は頂上付近にある口を開いて言った。「おとなしくしているよ」

「逮捕されるんだ」

警備員は喉を震わせ、笑い声を立てたような気がした。

「あんたみたいな迷惑な客は山ほどいる。金も持たずに買い物しようつとする客はとくにな」

薄暗い階段から、三階中央に出る。目の前が開け、巨大な円形のフロアがあらわれた。中央は吹き抜けになっていて、超長い垂れ幕が何本もぶらぶらしている。ドーナツ状のフロアを飲食店が取り囲

んでいる。

「待つて！　ここで降ろして」

「降車ボタンを押すんだな」

「またまた　ここで放して、つて言いたかったのよ。連れと待ち合わせしてるから。　ほら、あのベンチ。あそこにすわって、おとなしくしてる。ぜったい迷惑はかけない」

「ほんとうか？」

思い切り背伸びして、バレエみたいに爪先立ちで歩きながら警備員の顔を見上げ、うんうんとうなづく。すると警備員の表情がわずかにゆるんだような気がした。

立ち止まって、巨大手袋が二の腕から離れたような気がした

二の腕から離れた。

「ありがとう。恩に着ます」　かかをつけて、ねじれたコートをひっぱって直す。

「二度とわれわれの想像を超えるようなヘンな真似はするんじゃないぞ。不審な動きがあれば、すぐに駆けつけるからな。あれが見えるか？」

警備員は壁を指差した。なめらかにカーブする壁面と天井の境目に、控えめな感じで白い箱が突き出ていた。

「監視カメラ」エレノアは背中がぞくつとした。

「そのとおり。当然だが、モール内のあらゆる箇所に設置されている。管制室のスタッフが随時見張っているから、なにをたくらもうとぜんぶ筒抜けってわけだ」

「おとなしくする」エレノアは請け負った。　「トイレは行くかもしれないけど。ご迷惑かけました」

去り際につぶやく。「あんたの連れが元海兵隊員でなければいいんだがな」

「ははは。おもしろい」

のっそりと立ち去る警備員のうしろ姿を見送る。さて、どうしようか。『買い物』は大失敗だった。だがそれほどがっかりはしてい

なかった。だれでも得意不得意があるものだ。その道のエキスパートを呼んでおいたし、時間もまだある。

監視カメラを見やる。うつむきがちで、なにを見ているというわけでもなく、ただぼんやりとぶら下がっているだけのようだ。

エレノアは黄色いベンチにすわってぼーっとした。ベンチが硬いので何度もお尻をもそもぞさせたが、それ以外はほとんどなにもしなかった。猫背であごをつき出し、頬杖をついて、たまにため息をつくくらいだ。中央の吹き抜けに、垂れ幕が何本もぶら下がっている。その向こう側で、透明の筒の中をエレベーターが上がったり下がったりしている。

館内放送が流れた。

「迷子のお知らせ。迷彩柄のパーカーに迷彩柄のズボン、重たいバックパックを背負いフェイスペイントを施した二十一歳の男の子が迷子になっています。自称二十一歳ですが三歳くらいの男の子だと思われます。第四十二空挺師団に所属のおとうさん、おかあさんがいらっしゃいましたら、七階の特設コーナーまで空爆の要請をお願いいたします。オーバー。繰り返します。迷彩柄の」

おながが鳴った。退屈をまぎらそうと気を利かせてくれたのだろうか。もう一度。たしかにおながが空いている。しかも目に入るお店はレストランだらけときた。

お金がないのは不便なことだ。エレノアは目を閉じた。頬杖をつきなおし、なんととはなしにほったを指先でいじった。冷たいベンチもあつたまってきた。他にすることは？　なんだっけ？　なにかおもしろいことは？

エレノアはひとつうなづいて、自分の電源を落とした。テレビがないと、おもしろくない。

どのくらい経ったのかわからない。突然リュックが目の前を通過した。「お待たせ」ブレーキをかけたが間に合わず、つるつるの床に革靴の底をすべらせ、そのまま壁に激突した。

勢いよく振り向き、なんだか大げさな身振りで走って戻ってくる。

「おま　　」ふたたびとおりすぎる。

「なにやってるの？」

エレノアは立ち上がり、三度目で戻ってきたところを捕まえる。

勢いでふたりは一回転半した。

「　　お待たせ」

息を弾ませる。顔が真っ赤だ。前髪がだらんと垂れ下がっていて、汗っぱい額にくっついていて。ついでに言うところも格好もよれよれだった。スーツはゴミ箱から拾ったみたいだったし、ネクタイは結び目がほだけかかっているし、シャツも半分はみ出ている。

「タイムスリップでもしてきたの？」

「面接をして　　戻ってきた」

「知ってる。で、どうだったの？」

「ばつちり。これでもくも社会人の仲間入りだ」

「それから？」

「タクシーに乗ったんだ」

「お金もなく？」

「そうだね。すぐ着く予定だったんだけど、途中で戦争があつてさ」「戦争？」

「比喻じゃないよ。戦争みたいな夫婦喧嘩とか、この世の終わりみたいな賠償請求とか、そういうのじゃなくてね。解放軍と反乱軍が市街戦をしてた」

「なんととはなしにうなずく。ふと、エレノアのテレビ脳がひらめいた。

「　　解放軍と反乱軍って、どっちも反体制派なんじゃない？」

「そう思うよ。連中も首をかしげてたから。どっちもなんのために戦ってるのかわかってなかったみたい」

「ケガはないの」

「だいじょうぶ。らちが明かないから、交戦地帯をつきつてきた。タクシーの運転手、あの人の勇氣には脱帽したよ。ほんものの英雄

だね」

「タクシー代は払った？」

するとリュックは眼球の体操をはじめた。

「覚えてない。払ったんだと思うよ。ここに着いて、気づいたらここできみと抱き合って回転してた」

「上々だったわけね」

「戦争の話はもういいや。タクシーも、監視カメラも。そっちはどう？」

「こっちはさんざんで。今度はエレノアが眼球体操をするはめになった。言葉を飲みこんでおなかの足しにする。」「監視カメラ？」
「いや、いいんだ。ほんとうに、なんでもない。どうってことないんだ。はい、そっちの話」

エレノアは事の顛末をかいつまんで説明した。身振り手振りを交え、わかりにくいところは注釈を入れ、説明的すぎると感じるころは行間から情景がにじみ出てくるような描写を挿入した。筆のりすぎて散漫になったようなのでどこを削るべきか考えているうちに三十分が経過した。

「そうだったんだ。みんなに迷惑かけたんだね」

「ああもう、また時間がなくなった！」吹き抜けを見下ろしたところに、噴水と緑におおわれた大時計があった。もう少しで十六時になるところだった。どこへ行っても時計があつて、まったくありがたいことだ。「あと一時間で『31』がしまっちゃう」

「余裕だよ。家まで歩いて十分。テレビを買うのは五分で済む。そのためにぼくを呼んだんだろ？」

「ほんと？ほんとに買える？」

「裏づけはないけど、二年の経験があるからね。踊りながら待つて。じゃ」

リュックは意味不明なセリフを残すと、靴底をつるつるすべらせながら駆け出した。角を曲がって階段に消えかけたところで、エレノアが叫んだ。

「水色だよ！」

「水色！ 了解！」

いろいろと不安になったのだが、言われたとおりほんとうに踊って待つわけにもいかず、だからといって他にやることもなかったの
で、先ほどのベンチに腰掛けることにした。リュックはやけにテン
ションが高い。それもそうかも。働き口が決まった帰りに戦火をく
ぐり抜けてきたりしたら、ちょっとは興奮してもおかしくない。

リュックはほんとうに五分で戻ってきた。戦場から戻った夫を迎
える妻のように、エレノアは立ち上がった。リュックはエレノアを
見つけると、とびきりの笑顔を見せた。体を斜めに傾けて、片方の
手に懐かしいダンボール箱を持ち、よたよたと近づいてくる。

エレノアは思わず駆け寄った。膝を折り、ダンボールを丸抱えし
た。印刷された表示とイラストを確認する。

クレツパ（水色）。イラストもまちがいない。

「やったー！」

エレノアは立ち上がってバンザイし、そのままリュックにしがみ
ついた。

「ほんとうに買ってきた！」

「こんなに喜んでもらえるなら、あと二、三個買ってきてもいいな
ー

通行人が振り返り、不審そうなまなざしを向ける。

「ダメ。そんな贅沢はいらないの。これだけでじゅうぶんだよ」エ
レノアは興奮で目をきらきらさせて、リュックの口もと一センチに
せまってべらましく立たた。「あなたってすばらしい！ 人生
もすばらしい！ 生きてて楽しいって思ったのはじめて！」

「つばが飛ぶ」

ようやく落ち着いて、リュックにしがみつくのをやめた。通行人
が急に増えたようで、右から左に歩きながら、振り返りまくってい
る。何人かはとおりすぎた後で引き返し、知らん顔でもう一度振り
返ったりしている。

唇を軽く触れさせてから、ふたたびつばを飛ばしはじめた。

「ねえ、どうやって買ってきたの。コツを教えてよ」

「わからない。覚えてるのは　きみのほしがってたテレビを探して、在庫を確認して、店員にレジまで運んでもらって　そうそう、レジ係が鼻の穴を自由自在に変化させるおじさんで　」

「わたしもいろんな意味で苦労させられた」

「んで、気づいたら目の前にきみの顔があった」

「『買い物』は、いまだ謎のままね。もしかしたら、知らないほうがいいのかも」

なぜかリュックは腕時計を見るしぐさをした。なぜなぜかなのかというと、腕時計などしていないからだ。ともあれ、いよいよビジネスマンらしくなってきた。エレノアは袖をひっぱり、吹き抜けから見下ろせる飾り時計を指差した。

「まだ時間はあるよね。食事しよう」

「お祝いね」

ふたりは手すりにもたれかかり、一階のフロアを見下ろした。床のタイルの並びがなにか意味のある記号に見えたので、ふたりで当てっこクイズをした。エレノアはガチョウだと言い、リュックは七十五ミリ高射砲だと言った。まだ戦争の記憶を引きずっているらしい。正解は床のタイルだけが知っていて、じつのところ上から眺める人のことなどこれっぽっちも気にもしていなかった。

「いつもなら一刻もはやく帰りたいところだけど。なんだか人生に余裕が出てきたみたい」

「よし、行こう。お祝いならファーストフードだ。子供の遊び場もあるしね」

ふたりでテレビを持ち、エレベーター乗り場に着く。リュックは下のボタンを押した。すでにランプがついているにもかかわらず二秒もしないうちにもう一度押し、せっかくだからともう三回押した。ようやくというほど待ってはいないのだがようやく到着すると、ジャンプして乗り込み、操作盤の前に貼り付いた。どこへ行きたいの

かわかっていない人のようにめくらめつぶす押しまくり、結局八階から地下二階までぜんぶのボタンのランプを点灯させた。

「子供のころからの夢だ。一度やってみたかった」

乗り合わせた人たちの顔を極力見ないようにして、エレノアは相手の赤い顔をのぞきこんだ。

「聞きそびれたんだけど、もしかして酔っ払ってる？」

「いや、これくらいじゃ酔っ払わないよ」と大学生のようなことを言う。「面接のこと、話したっけ？ 受付の女の子にネクタイの結びかたを教えてもらったんだけど」

各駅停車のエレベーターがゆっくりと降りていく。一フロアごとに立ち止まり、「まあ見てってよ、なんにもないけどさ」とばかりに扉を開ける。そこにはほんとうになにもない。

冷たい視線を浴びながらエレベーターを降り、きらびやかなエントランスから外に出ると、濃い灰色の現実世界が待ち構えていた。日没までもなく、風が冷たい。ふたりは足をとめ、互いになにか言おうとした。おそらく会話に困ったときによく言う「もう日が暮れるね」とか「外は寒いね」とか、そんなたぐいのセリフだろう。代わりに白い息を吐き、コートをしっかり巻きつけ、かじかむ手でダンボールを持ち直した。通りと建物のあいだのただっ広いスペースに立ち、リュックが左を指差す。エレノアが目で追う。某ファーストフード店の看板があった。まるで希望の光のように明々と、赤地に黄色のMマークが回転していた。

4話 MCは世界一のファーストフード店

某ファーストフード店とは、言うまでもなくマクドナルドだった。この世にマクドナルド以外のファーストフード店など存在しないからだ。モールに寄り添うように建ち、いつか宿主よりも大きくなつてやると意気込んでいる。マクドナルドはどこにでもあった。どこにでもあるものといえばマクドナルドだ。マックは最高。バリューセツトに、おまけもついていて、そのうえおいしい。専門家連中は肥満の原因だとか食の安全がどうかさかんに騒ぎ立てているが、それでもマックは最高なのだ。いまはそれしか言えない。

店内は客が大勢いた。列に並びながら、メニューのパネルの写真を眺めている。

いっしょになつて眺めながら、エレノアは気づいた。

「わたし、お金ない」

「ぼくもだよ」

「『買い物』するつもりね」

「コツを教えてつて言っただろ？」リュックはテレビの箱を置いて、両手をこすり合わせた。「さあ、うまくいくかな」

「ようやくその瞬間を目撃できるのね。ようやく謎が解明されるのね？」

「テレビ番組っぽく言うと、そんな感じだ。悪いんだけど、席を取つといてくれる？ テレビも運んで。あ、あとメニューも。なにがいい？」

エレノアは笑みをこぼした。「なんでもいい。毛が生えてなければね」

「わかった。毛は抜いてもらうよ」

エレノアは隅っこのふたりがけの席にすわり、テレビの箱をとなりに置いた。リュックはコートのポケットに手をつっこみ、落ち着かなげに足踏みを繰り返している。

エレノアは妙に胸が騒いで、ペーパーナプキンをいじり倒した。といっても、CM明けに未知の生命体の正体が明かされるのを待つ時のようなわくわく感ではなかった。この手の番組の結末はたいてい、ガツカリさせられるか、なんだかよくわからない説明でお茶を濁されるかのどちらかなのだが、CM明けに実際に宇宙人の顔がドバーンと映し出され、隣人が侵略者かどうかを見分ける実践的方法なんかをやられたりしたら、おそろくわくわくどころではなくなるはずだ。

つまり、そういうことだった。知らないほうがいいのかもしいい。

十五分の子供向け科学番組『ここだってりっぱな宇宙』は、教育ものでありながら常に「母親が二度と子供に見せたくない番組」の上位にランクされており、実際視聴率も最悪だった。内容はシンプルながらいたってまともではなかった。宇宙科学者であり友達がないと評判のストーリーテラー、ソルヴィグが、毎回街なかに繰り出しては子供を捕まえ、宇宙人の特徴を想像力豊かな語り口で伝え、身近に宇宙人はいないかと切羽詰まった調子でたずねる。子供は信じ切って体をがたがた震わせ、そういう宇宙人は身近にいる、自分を支配しようとしているのだ、できることなら殺してほしいと訴えはじめる。連れていかれる宇宙人のアジトはたいていその子の家の台所にあつて、ソルヴィグは脱出ポッドを発見したとか言つて冷蔵庫を漁ったり宇宙燃料の組成をコンロで説明しようとし、しまいに母親に見つかつて蹴りだされるといのがいつものパターンだった。通りにうずくまつたソルヴィグにカメラが近づく。顔を上げ、ひとこと決めのセリフをはく。「ここだって宇宙なのです」

正直ワンパターンだし、内容もつまらないし、まったく科学的でもなかった。友達がほしただけなのだろうというのが大方の評論家の意見だった。

この番組が今のエレノアの心境を代弁しているかというところ、そういうわけでもなかった。ただなんとなく思い出しただけだ。

そうこうしているうちにリュックの番になった。エレノアはまさにCM明けのごとく身を乗り出し、ペーパーナプキンで鼻水をぬぐった。どれほどの鼻水がついたかを確認したあと、たたんだりひっぱったりこすりつけたりを繰り返す。

リュックはいまのところ、あたりまえの手順を踏んでいるようだった。カウンターのメニューをあれこれ指し、顔を上げる。ヘッドセットをつけたレジの女がなにごとかをたずね、リュックはうなずいた。　　思ったら訂正するように何度もかぶりを振った。女がレジを打つ。

ついに会計の瞬間が来た。エレノアはナプキンを細かくちぎりはじめた。

リュックはぼんやり立っている。あまりに深刻なぼんやり具合だったので、そのうち看護婦が入り口から駆け込んできて肩をつかみ、「こんなところでぼんやりしていたのね。さ、おうちに帰りましょう」などと言いついそうだ。順番待ちの客がざわつき出した。

首がちぎれ飛びそうな勢いで右を向いたので、右に立っていた人はたいそう驚いた。もう一度右を向いた。それから右を向き、右を向き、考え直してからやっぱり右を向いた。首から下が追いかけるようにその場をまわり、気づくと一回転していた。つづけて三回転ほとしてから、なにかを探すように足もとをのぞきこんだ。客のひとりが影になっていて、エレノアからは見えなかった。よく見ようと立ち上がったりとなりの席に移動したりした。するとリュックは客をかきわけエレノアのほうへやってきた。

テーブルに勢いよく手をついた。ちぎった鼻水つきのナプキンが舞い上がった。エレノアに顔を近づけ、息を切らしながら言う。「お金持ってない？」

「ここ何年もね」エレノアは慎重にうなずいた。「知ってるでしょ？」

「そうか。それでいい」

すつくと立ち、兵隊のようにまわれ右をすると、入り口近くにあ

るゴミ箱へ突撃していった。戸を開け、ポリバケツを取り出し、両手と頭をつつこんだ。店内はすっかり静まり返っており、ビニールのがさがさという音しか聞こえない。テレビの中のドナルドでさえ、番組を中断してリュックの様子を見守っている。

「見つけた！」

リュックがバケツの中で叫んだ。顔を上げ、両手を出した。パンパンに膨らんだ茶封筒を手に持っている。中身を確認し、「よし」と言つと、客をかきわけレジに戻った。封筒からなにかを出し、カウターに叩きつける。

店員の女のぼんやり具合もまた深刻だった。ヘッドセットのマイクを押さえて右を向き、もう一度右を向いた。さらに右を向くかと思われたその瞬間、なんと左を向いた。さすがファーストフード店の店員だけあって、左を向いたほうがはやく正面に戻れるとわかっているのだ。そんなこんなで正気を取り戻し、ふだんどおりレジを打つ。リュックにつり銭を渡し、バーガーやらドリンクやらが山盛りになったトレイを渡した。

リュックはトレイを持ち、たくさんの視線を背中につきさしたままやってきた。トレイをテーブルに置き、着席するかと思いきやまたしてもまわれ右をして、先ほどのゴミ箱に戻った。封筒をポケットから取り出し、バケツにねじこんだ。バケツをボックスに戻し、戸を閉めて、ばたばたと駆け戻ってくる。

席に着き、息を整える。顔を上げてエレノアに笑顔を見た。先ほどまでの狂った感じではなく、いつものよく知った笑顔だった。

「買ってきたよ」

「すごい」エレノアはなんといいかわからず、とりあえずその口にした。「解明された。なんというか」

ふと目を向けると、客が注文そっちのけでゴミ箱に殺到していた。ドナルドも番組を放り出して駆けつけそうな勢이었다。リュックも気づいてそちらを向く。

「連中、なにやってるの？」

「あなたがお金を戻したから」と言いかけて、かぶりを振った。どうしてか説明できないが、言うてはいけないような気がする。「なんでもない。食べましょう」

あらためてトレイに目をやる。ビッグマックに、カップのサラダに、ストロベリーサンデー。

「ヨーグルトはぼくのだよ。クォーターパウンダー（チーズ）も。あとポテトのしに、コーラ」

それだけ食えば一週間は水だけで生活できそうだ。エレノアはプラスチックのフォークでサラダをつついた。

「もう時間ないかも。時計はどこ？」

リュックはクォーターパウンダー（チーズ）にかぶりつきながら、店内を見まわした。

「時計がない。どうしてだろう」

「心配でぞわぞわしてきた。テレビの設定って、時間がかかるんじゃない？ うだうだしてる間にもし『31』がはじまったらと思うと」

「ぼくの体内時計からするに、ここへ来てから一分も経ってない」「経ってます」

いや、蒸し返すのはやめよう。シェイクを飲むと、急に疲れが襲ってきた。今日はもういい。とにかくはやく食って、ずらかるう。家に帰って、テレビをつないで、寝床で布団をかぶってぬくぬくだらだらしたい。それが自分だし、これからもそうするつもりだし、リュックがいれば楽しく暮らせる。眠くなってきた。テーブルにひじをつく。マックでリュックと。カップのサラダにシェイクを飲んで。

「韻を踏んでるね」

どうやら口に出していたらしい。ぼんやりと返す。「ヨーグルトは踏んでない」

「ラップしてるの？」

「そう。マックラップ」

そろそろビッグマックにかぶりつきながら、テレビに目をやる。ドナルドはいちおう陽気なピエロを演じていたが、新商品がどれだけおいしくて安全かの説明もやつつけ気味で、子供たちを困惑させていた。ことあるごとに、客の群がるゴミ箱を未練がましくチラ見している。

ドナルドがカメラ目線になり、言った。

「きみの彼氏はすごい力を持っているんだね、エレノア」

急に周囲全体が風呂場の磨りガラス状態になって、動きがとまった。

「またまたまた、ぼくの登場だ！」

唯一、店内のテレビだけが磨りガラスになっていなかった。エレノアは目を向ける。あれはドナルドに見えるが、声は完全にミールカだった。あんな格好までして、なにを伝えようとしているのだろうか。偽ドナルドはひょうきんだがおつむが足りないような声でつぶけた。「ぼくがだれか、わかるっかな？」

「ミールカでしょ」

「ちがう、ドナルドだよ。MCドナルドだよ」

群がる子供を乱暴に追っ払って、セットにひとり立ち尽くす。そして礼儀正しく気をつけをした。

「なにをするつもり？」

「ラップさ」

急にくねくねと体を揺すり、ドタ靴でリズムを取りはじめた。後ろ手に持っていたマイクをチャライ感じで口へ持つていき、持っていないほうの手を結局なにがしたいんだかわからないのだがとにかくカッコいいと思わせる振りつけでゆさゆさ揺らした。

「YO」

「なに？」

ドナルドは強烈に冴えたりリリックをつむぎだした。

「退屈な日常もうウンザリで／さあ飛び出さず Have a Nice Day」

エレノアは気分が悪くなってきた。

「気になるアノ娘の健康診断／飛び出た××はけっこう敏感」

見た目よりそうとうハードらしく、MCドナルドはとたんに息を切らしてきた。ネタ切れなのか「YO、YO」しか言わなくなってきたし、顔が汗ばんできて、メイクがじんわりにじんで浮き上がった。

バカ面メイクの奥から、よく知った顔が出てきた。

「やっぱり。ミーカ？」

「ご名答だぜきみの推理／明日はきつと晴れの日さ」

「韻を踏んでない」

「うるさい！」急に音楽が消え、ミーカはマイクを放り投げた。「ラップなんかどうでもいい。きみに用があるんだよ、エレノア」

「わたし、急いでるんだけど」

「目的を果たすまでは行かせないよ。まずはこれを見る」

なにを見せるかと思えば、その場で着替えをはじめた。赤いもじやもじやカツラをはずして、メイクをペーパーナプキンでごしごしこすり落とし、ドタ靴を脱ぎ、衣装を脱いだ。ついにパンツ一枚になった。スタッフが着替えを持ってくる。

「なにやってるの」

ミーカは上着を着て、ヘッドセットをつけて、帽子をかぶった。

マツクの店員のコスプレらしい。が、下半身はパンツのままだった。

「ズボンは？」

「なに言ってる、これが正装だよ。レジの人の下半身を見たことないだろ？」

スタッフのひとりがあわてた様子でズボンを持ってくる。ミーカはスタッフの去り際にケツへ蹴りを入れた。

目の前にあるリュックらしい染みが、顔のあたりをごしごしこすりじめた。風呂場のガラスのように顔の部分だけがきれいにあらわれた。ふうと息を吐き、エレノアを向いた。

「やっと出てこれた。どうしたの？」

エレノアはなにも言わずにテレビを指した。リュックが振り向く。
「これがきみの言ってたヤツ？」

「そう。お天気キヤスター。これで信用してくれる？」

「イヤな予感がするな。こいつがただの変態ならいいんだけど」

「なんでもいいよ。『31』がはじまつちゃう。無視して帰ろう。
体もごしごしして」

ふたりはうなずき合って、席を立った。エレノアはミーカをちらつと見やり、トレイを持ち上げようとした。が、つかみ損なって素どおりした。あらためて目を落とす。トレイは「これはいったいなんでしょうか？」的なクイズ番組の問題みたいに荒いモザイクがかかっていた。それどころか、エレノアがちらつと見やるころすべとモザイクがかかっている。というか、エレノアがちらつと見やる
とモザイクがかかるようだった。

リュックを見た。せつかくごしごしした顔にモザイクがかかり出す。エレノアは思わずリュックの顔に手を伸ばしたが、触れることはできなかった。

「無視なんかさせないぞ」ズボンをはき終えたミーカがずかずかとカメラに近づいて、アップでエレノアをのぞきこんだ。「だまつてすわるんだ。でないと『31』の番組を中断して、当たらない天気予報を延々と垂れ流してやる」

エレノアは何度もうなずいて、座席らしいモザイクに腰を下ろした。

「なんの用？」

「近況を報告したくてね。きみのおかげで、計画は順調に進んでいる。ついに、最終的な手つづきが完了したんだ！」

「イヤな予感がするな」たぶんリュックが言った。モザイクのうえにボイスチェンジャーまでかかっているかなり匿名性が増している。

「とてもイヤな予感が」

「計画ってなんなの」

ミーカは悪者顔でニヤリと笑った。「計画があるんだ」

「それはさつきも言った。計画の内容のことよ」

「は、は。その手には乗らないよ」ミールはドアップのまま、ちつちつと指を振った。テレビ画面の中を巨大な人差し指が行ったり来たりする。「聞かれてすんなり教えるほど、ぼくはバカじゃない。刑事ものの映画じゃよくあるけどね。『冥土の土産に教えてやろう』とか言つてさ。しゃべってないでさつさと撃ち殺せばいいのに、バカだなあつて思われる。ぼくはそんなふうに思われたくない。そんなのはイヤだ」

「だったら言わなくていいよ」エレノアはあつさり言った。「ただなんとなく聞いてみただけ」

「ほんとはものすごく言いたいんだけどね」

「じゃあ聞かない。興味ないもん」

エレノアは意地悪く、ぷいと顔をそむけた。そむけた先がモザイク化する。

ミールはしばらく無言だった。咳払いし、ヘッドセットのマイクをつまんで調節し、「じつは」と言いかけてまた口ごもった。

「こつちを見てくれよ。じゃなきゃお互い、話ができないだろ」

「わたしはしたくないもん。勝手にすれば」

「話すうちにちよつとずつ口をすべらすことはあるよ?」必死な様子でおうかがいを立ててくる。

「どうでもいい」

「そこまで言うなら教えてやろう」前後の文脈など知るかといった調子で、強引に語りはじめた。「ずつときみを監視してきたのは、この計画を進めるためだったのだ」

「あつそう」エレノアはつきはなすように言った。男のあしらいかたがわかってきた。冷たくすればするほどいいらしい。

「監視をつづけ、きみの映像もだいぶ集まってきた。きみの彼氏の映像もだ。それはなんのためか? きみらの映像を編集し、パイロット版をつくるためさ。きみが主役の番組のね」

「わたしが主役?」と思わず聞いてしまつて「あつ」と取り繕った。

あわててそっぽを向いて、氷の女を装い直す。「まったく興味がござんせん」

「ははは。もう遅いよ」ミーカは調子を取り戻した。「こつちを見てなくても、意識が向いているのはわかる。嫌いな友情ドラマに好きな俳優がゲストで登場したときみたいな感じだろ？」

エレノアは観念してテレビを見上げた。「わたしが主役の番組って？」

「そのまんまだよ。きみの新番組。内容とかコンセプトはまだ決まっていないけど、きつといい番組になる。いまのところドタバタコメディっぽいのを考えてるんだ。きみは意外とドタバタしてるみたいだからね。タイトルはいくつか案があつて、『エレノアの日記』とか『エレノアに首つたけ』とか『エレノアの好きなコト』とか、いろいろ思いつくんだけどどうもぜんぶパクリなんじゃないかって気がするんだ。ともあれ来週中には局へ売り込むつもりだよ」

エレノアは話を聞きながら、どんどん渋い顔になっていった。ミーカが話し終えるころには、渋い顔すぎて眉毛が目にくつつきそうになっていた。どう受け止めればいいのかわからない。

「わたしの番組なんか、だれが見るの？ おもしろくないよ」

「知らないだろうけどね、きみはこつちではものすごい人気者なんだよ。見たい人が大勢いる。きみがテレビを大好きなように、われわれもきみが大好きなんだ。だから選んだ」

「よっぽどおもしろい番組がないんだ」

カメラが引いて、スタジオ全体を映し出した。がらんとしたところへ、左側から巨大なセットがずるずる運ばれてきた。マクドナルドの店内だ。スタッフ数人がかりで据え付け、べつのスタッフがレジつきカウンターを押してきて、ミーカの前に置いた。

ミーカは満足げに笑みを浮かべていた。スタッフを自在に操る様子はたしかに神さまのように見えたとし、学芸会の準備で空気が読めずにひとり盛り上がりすぎてリーダーぶっている鼻持ちならないクラス委員のようにも見える。

セットが完成した。レジが一個しかないコントみたいなマツクの店内に、ミーカがスタンバイしている。カメラが寄ると、ミーカは神妙な顔でカメラを向いた。マイクを調整する。

「きみの言うとおりだよ、エレノア。テレビ界にはおもしろい番組がないんだ。われわれにとっての番組とは、きみたちの世界で起こる出来事だ。ずっとテレビとか監視カメラをつうじてこっそり『番組』を見つづけてきた。朝の支度の最中とか、家族と夕飯を食いながらね。だけど、きみたちは正直おもしろくないんだ。まったくおもしろくない。きみたちのやることを見てても、どきどきもわくわくもしない。朝起きて顔を洗って歯を磨いて、家族とどうでもいい会話を交わして仕事や学校に出る。職場や学校ではとくになにも起こらない。家に帰ってふたたびどうでもいい話をしながら夕飯を食って、風呂に入って寝るだけ。テレビにしがみついても、なんにも起こりはしない。起こったとしても、職場で上司にいびられてビルの屋上でたそがれながらサンドイッチを食べたり、朝起きるときに血のつながっていない妹にぶん殴られたりするくらいだ。退屈だよ、きみらは」

「退屈って わたしの生活は退屈でもいちばんだと思うけど」

「きみは愛情いっぱいテレビに話しかけてくれる。布団にくるまってじーっとテレビを見つめて、ときに笑ったり、泣いたり、ビツクリ顔の超ドアップでのぞきこんだりするたびに、視聴者から問い合わせのお便りをもらうんだ。『あの女優さんのことを詳しく教えてください』とか『家族全員、彼女のファンです。他に出演している番組があれば教えてください。エレノアちゃん、ファイト！』とか」

ミーカはカウンターの下から、折れ曲がってしわくちやの紙をこっそり取り出した。一枚を選んでこちらに向ける。カメラが切り替わって、紙を映し出す。たしかに視聴者からのお便りのようで、似てなくもないが少し気分を害しそうなイラストに「エレノアちゃん、ファイト！」と太字で書いてあった。

「これだけ要望があるんだ。もちろんぼくも見たい。だからきみの新番組をつくることにした。で、今回は素材をそのまま使っただけで、手を加えることにした」

「手を加える？」

「演出だよ。ぼくが見たいようにきみを変える。基本的な演技は任せるつもりだけど、きみの家族をだれにするかとか、恋人をだれにするかとか、仕事とか、わくわくするイベントとか」

「現実の人間を演出するなんて、そんなことできるはずない」

「できるさ。なんたって神さまだからね。それにいまは、選ばれし伝説のマクドナルド店員でもある。年収は六桁。メニューを見るかい？」

ミーカはカウンターを指でこつこつ叩いた。カメラが近づいていて、カウンターに貼ってあるメニューをのぞきこんだ。

「言つとくけど、バーガーは置いてないよ。ぼくらの楽しい番組一覧さ。ああ、いらっしやい」

袖から若い男性がすたすたとやってきた。ものすごい歓声と拍手。だぶだぶパーカーにジーンズのスケーボー野郎といった格好で、よくわからないが人気者らしい。観客に気づかないふりをしながら、中ごろで立ち止まり、わざとらしくまわりを見まわしている。目の前にあるマックをようやく見つけ、「あ、こんなところにマクドナルドが。ちょうどおなかペコペコだったんだ」とでも言いたそうな素振りで店内に入った。ドアのセットがないのでわざわざパントマイムで開けるふりをする。

ミーカは営業スマイルでたずねた。「なんにします？」

「あー」と、男性はポケットに手をつっこみながら体を左右に揺らした。「事件とか起こるやつ」

「クライムものですね」

「そうそう。銃でバンバンとかさ。車が」手で爆発を表現する。

「ブーン！ とにかく興奮するやつ。すげえやつ」

「すげえやつ。ありますよ。異星人の侵略はあり？ なし？」

「いないよ。異星人とか、くだらねえ。なんつーかさ、熱い男？
哀愁系？　よくわかんね。とにかくそういうのが見たいの」

「警察ものがひとつ。かしこまりました」

ミーカは客の背中越しにカメラをのぞき込み、張り倒したくなるような笑顔を向けた。

「新番組は、きみのだけじゃない。さまざまなジャンルの番組を同時進行で製作中だ」

厨房にオーダーをとおす。といってもだれもいないのだが、ジュー・カンカンわさわさという効果音を鳴らして、つくっているんですよと視聴者に伝えていた。

効果音が切り替わるたびに、エレノアのまわりも変化していった。モザイクが細くなり、もとに戻りかけている。

エレノアはリュックの手を取った。もう触れることができる。

「われわれのノウハウはまだまだ足りないけど、そこはそれ。みんなで猛勉強中だよ。きみらの番組　つまり、ぼくらの現実世界のことで、番組制作を学ぶためにスタッフがいろいろ実験してるんだ」

「だから番組がめっちゃくちゃになってるんだ。あなたの実験のせいで」ミーカをにらみつける。「勝手に終了させたり、いかがわしい内容に変更したり　」

「結果的にはね」

「『ほんとうのところの料理』も、『ここだってりっぱな宇宙』も　」

「終了させたのはそっちの重役連中だよ。ぼくは番組の改変期をはやめて、いじりやすくだけさ。ただいろいろいじくりすぎて取り返しがつかなくなったことはあるけどね」

「『31』も　」

ミーカはおつかぶせた。「それにきみらはいままで、われわれの『番組』でそうとう楽しんだらう。今度はきみが退屈な番組を見つづけるのも悪くない」

「お願い、『31』だけはほつといて」

「あんなつまらない番組のどこがいいんだ？　まあ、いいさ。

リンからも手を出さなつて釘を刺されているからね。べつに奥さんが怖いわけじゃないよ？　ただ、あの番組から学ぶことはなにもないから、好きにさせてるだけさ。　おつと、オーダーができあがつた」

ミーカは厨房を振り向いて、トレイを受け取った。心からうれしそうに笑顔で、カウンターにどんと置いた。

トレイにはおもちゃのパトカーと警察の人形が乗っていた。

「さあ、新番組の警察ドラマがはじまるよ。きみの番組のための試運転みたいなものだけど。CMのあとすぐ！　乞うご期待」

トレイを受け取つてスケボー野郎はカメラを向いて派手に笑い、「やったね」と親指を立ててみせた。

5話 三流の刑事ドラマ

テレビがぷつと消えた。クイズの正解を表示させるときみに、周囲のモザイクが急激にうすれていった。

もうすっかり忘れていたしかなりどうでもいい話ではあるのだが、ゴミ箱付近では相変わらずマック客による現金争奪戦が行われていた。といっても、ほとんどが戦線を離脱しているようだった。どういふ打撃を食らったのか床にうつぶせたままピクリとも動かないスーツ男に、おばさん連中がテーブルに着いて休みながら負け組どうし意気投合し、お金で幸せが買えるものか、お金なんかはちよつとでいいのだとお互いを慰めあっている。人間の汚い部分を見せつけられ、同じ人間として恥ずかしいと言いたげにかぶりを振る女性が、連れの男の子に「あんなふうになっちゃダメ、人間として最低の行為よ」と言い聞かせていた。じつのところ、床に伸びているビジネスマンを必殺パンチでノックアウトしたのはこの女性だった。

ネクタイが首のまわりを一回転していて目を真っ赤に腫らしている店員もいたが、悔しそうな表情を見ると、決してとめに入ったわけではなさそうだった。

そして現在、夢をあきらめないふたりが、床に転がり封筒を巡ってくんずほぐれつやっていた。ひとりは華奢だが気の強そうな茶色髪的女で、もうひとりとは体もおっぱいもなにからなまでにまで大柄な金髪的女だった。太ももが絡み合い、頭を押さえつけようとしてまちがっとおっぱいを押さえつけ、伸び切ったセーターの首もとからブラひもがのぞく。上になったり下になったり、お互いの股ぐらをくぐり合ったりするうちに、どんどん衣装がはだけてくる。そのうちだれかが気を利かせてビニールのマットと大量のヨーグルトを運んでくるかもしれない。

「エレノア」

聞き覚えのある声に正面から話しかけられた。

「どうして手を握ってるの？」

ふっとわれに返り、エレノアは振り向いた。相方の顔をまじまじと見る。後遺症なのかたまに口もとにモザイクがかかったりしてはいるが、それ以外は元のリユックだった。エレノアはほっと息をつき、握る手に力を込めた。

「どうやらないへんなことが起きてるみたい」

「ゴミ箱の争奪戦？」

「ちがう。ミーカが言ってたこと」

どう説明すればいいのか。エレノアは茶色い天井扇に焦点を合わせて、あれこれと言葉をまとめようとした。「あのね」

すると説明はもうけっこうと言わんばかりに、どことなくラップノリのサイレンが聞こえてきた。急に背筋がしゃきとし、まじめに生きてきてよかった、あるいはまじめに生きていればよかったと思わせる音だ。あつというまに周囲はサイレンだらけになった。背中の青いライトをぐるぐる回転させながら、白黒のパトカーがタイヤを鳴らして大げさに横滑りし、次々と通りにとまった。

エレノアは体をねじり、マック窓越しに外を見た。

「ほんとうに起こった」

「なにが？」

「たいへんなこと」

「たいへんだよね。事件だもの」リユックは映画でも見ているみたいに楽しそうだった。「しばらく見物していかない？」

最後のひと鳴きをし、サイレンがやんだ。ライトのぐるぐるもとまった。ドアがいつせいに開き、警官が頭を低くしながら姿を見せた。パトカーの陰に隠れるように集まり、身振りからするに打ち合わせをしているようだった。そのうち、引き寄せられたかのように一般市民が集まり出した。警官は散開し、仕事を開始した。ワゴン型の車両からバリケードを運び出すあいだに、べつの警官が手を広げて野次馬を追っ払おうとする。パトカーのドアを開いて盾代わりにし、犯人に向かって銃を構える。無線で連絡している警官もいる。

現実で刑事ドラマがはじまろうとしている。それともほんとうの事件だろうか？ エレノアとしては正直、どっちでもよかった。わけも知りたくないし、とにかく厄介ごとに巻き込まれるのだけはごめんだった。ミーカのうれしそうなニヤニヤ笑いが浮かぶ。もしかして、あの男の嫌がらせなんじゃなかるうか。いざこざのせいで十七時前に帰れず、『31』を見逃し、泣きながらふて寝するエレノアを、ポップコーンでもつまみながら監視カメラで楽しむつもりなのかもしれない。

エレノアは立ち上がってテレビの箱を抱えた。「はやく帰らないと」

「まだ時間はあるよ」リュックはのんびりと店内を見まわす。が、やはり時計はどこにもない。「たぶんね」

「お願い、あなたもいつしよに来て。あなたが必要な」

「ほんと？ はじめてそんなこと言われたな」

「ほんとよ。テレビのセッティングをお願い」

リュックはトレイを指差した。「これ、まだ食べ終わってないんだけど」

エレノアは待ちきれず、まるで病気の子供を病院に連れていく母親のようにテレビを抱え、出口に向かった。キャットファイト中の女性ふたりをまたぎ越え、ピクリとも動かないビジネスマンを危うく踏みそうになった。

「いま何時？」

立ち止まってそのへんの人にたずねる。そのへんの人腕時計を見た。「十六時三十分」

自動ドアが開いて一歩踏み出したとたん、銃声が立てつづけに三発鳴った。女性という女性が悲鳴を上げた。店内の客みんなが振り返り、ついでにがちり相手の関節を決めていた金髪の女も振り返った。その隙をついて小さくて気の強そうな女がアームロックをはずし、その勢いで反転してパンツ丸出しで馬乗りになり、金髪女に何度も往復ビンタをお見舞いした。金髪女がだらりと動きをとめる。

封筒を奪い、勝利の雄たけびをあげた。

言うまでもないがまったくどうでもいいことで、反応する者もいなかった。

エレノアはテレビを抱えて歩道のふちに立ち、焦りに焦ってあたりを見まわした。野次馬や偶然そこに居合わせたらしい人たちが、思い思いに叫んだり、泣いたり、楽しそうにカメラで撮影したりしている。中には恐怖にうずくまる者や、恋人と抱き合う者、夫や妻と抱き合う者、好みのタイプだったのでどさくさ紛れに知らない女性と抱き合う者もいた。

不幸にも抱き合う相手が見つからなかった人たちは、みな同じ一点に目を向けていた。防御線の向こう側、通りをちよっと上ったところにごじんまりとした雑貨屋がある。入り口付近に男と女がいた。体を寄せ合っていたが抱き合っているわけではなく、男は銃を持ち、女は泣いていた。へたりそうになるたびに男がどやしつけ、ぐいと持ち上げる。男は銃を振りまわし、ついでに首も振りまわしていた。あれだけやればだれでも「クスリでキマっているんだな」と思うだろう。

犯人のいる雑貨屋は家の方向にある。これでは帰れない。「やっぱり」

エレノアはダンボールを抱えて、前に出ようと野次馬をかきわけに進んだ。となればやることはひとつ。ふつうに帰り道を進み、犯人に「こんにちは」とかあいさつしながらとおりすぎるのだ。危険な目に合うことはないだろう。自分は出演者じゃないのだから。

さらに銃声が一発。エレノアは思わず飛び上がった。テレビとぜんぜん迫力がちがう。やっぱりほんものの事件かもしれない。

バリケードのすきまをとおリ抜けようとする、帽子を目深にかぶった黒人の警官がしなやかに駆け寄ってきて、手を広げて制止した。

「越えちゃダメだ。下がって」

「ここをとおらないと家に帰れないの。お願い、とおして」

「で、犯人に『こんにちは』とかあいさつしながらとおりすぎるつもりか？」

「そのつもり」

「冗談はよせ。事件が解決したら、そのうち帰れる。それまで待て」「あと五分くらいで解決しない？」

「いいから外側にいろ」

「外側って？」なおもつつかかる。

「現場の外側、ってことだ。そっちが外側、こっちが現場。わかるだろ？」

「つまり、そっちがテレビに映ってるほうで、こっちがテレビを見るほうっていうこと？」

「非常にわかりやすい例えだが、不謹慎だ。テレビの刑事ものとはちがうんだぞ」

「その可能性もある」

「もういい。これ以上面倒を起こすようなら、あんたを逮捕するぞ。下され」

エレノアはあきらめて、ふたたび野次馬をかきわけ引き返した。歩道の縁石にすわり込み、ダンボールをわきに下ろした。

「迂回すればいいよ」

いつのまにかとなりにはリュックがすわっていた。そのままお持ち帰りしたらしく、マックのトレイを膝に乗せている。

「これってテレビ番組なのよ。わかる？ ほんとうじゃないの。たぶん、刑事ものの冒頭の場面で」

「それはどうかかわからないけど、とにかく連中は実際にここにいるんだ。さわれるし、においもある。テレビみたいに消すことはできないだろ？ ちよつと遠まわりになるけど、走れば余裕で間に合うよ。たとえばあっちの通りを」

リュックは「たとえば」と言いながら、雑貨屋と逆方向を指差す。その先にはやはりバリケードと警官がいた。「たとえば」「わき道もふさがれている。たとえば」

もう指を差すところがなくなつたので、リュックは決まり悪そうに腕を下ろした。

「ちようど帰れないようになってる」

エレノアはじつとしていられず、立ち上がって足踏みした。「どうしよう」

「漏らしそうなの？」

「はじまっちゃう　どうかして　もう」

「強行突破してみる？　もしほんとうの警官だったとしたら、逮捕されるか撃たれて死ぬか」

「『31』を見逃すくらいなら死んだほうがまし」

パトカーのあいだから呼ぶ声がした。「おい、スコッティ！」見ると、口ひげに白髪頭のトレンチコートを着た責任者っぽいおじさんが部下に呼びかけていた。

だれも反応しないので、もう一度叫んだ。「スコッティ！　おまえだ！」

やつぱりだれも応じない。責任者っぽいおじさんは勘弁してくれよと言いたげに天を仰いだ。「ワシントン！」

先ほどエレノアとすったもんだした黒人警官が、ぱつと振り返った。「は？　なんすか？」

「呼ばれたらすぐに返事をしろ！　おれは副本部長ということになってるんだぞ！」

「すみません。ただ、おれはスコッティじゃないっすよ。おれの名前はシヨーティです。　たしか」

「じゃあスコッティはだれだ？」

「おれです、警部補」

べつの警官が手を上げた。車のバンパーに背中をもたれてすわりこんでいる。そのスコッティはシャツも顔も手もまっかつかで、これ以上ないくらい死にかけているように見えた。

「警部補じゃない、副本部長だ！」

「へえ。それってどっちがえらいんですかね？」

「軽口を叩くな、このお調子者め！　なぜ返事をしない？」

「この格好を見りやわかるでしょう？　おれは死にかけということになってるんですよ。血まみれなのに呼ばれて『はいはい』なんて返事しちゃ、おかしいでしょ？」

「なぜ死にかけてる？」

「さあ、なんででしょうね。犯人かだれかに撃たれたんじゃないですか」

「副本部長、おれになんか用すか？」ショーティだかワシントンだかがのんびりした口調で言った。「呼んだでしょ？」

「ああ、そうだ。　マーティはどこだ？」

「ここです、副本部長」とくにこれといって特徴はないがやたらと背の低い警官が、通りの反対側で手を上げた。「どうかしましたか？」

「おまえはルーディだろうが！」

「いえ、マーティです」マーティはうなずいた。「最初はデショーティでしたけど」

「だったら最初からマーティを呼べばいいじゃないすか」ショーティがツツコミを入れた。

「まったくふざけた連中だ！」副本部長は手のひらでパトカーのボンネットをぶつ叩いた。「名前がややこしいぞ！」

そんなやり取りをぼんやり眺めていたエレノアだったが、脳みその奥深くで極めて厄介なことが起こりはじめていた。というのもエレノアには妙な癖があつて、テレビドラマなんかを見はじめると、無意識のうちに登場人物の名前をチョイ役にいたるまでぜんぶを覚え、頭の中で相関図をつくってしまうのだ。やたらと出入りの激しい群像もののドラマでも、同様だった。その癖がこんなところで動き出した。相関図の線が副本部長からスコッティに向かうと見せかけてショーティにくつつき、「片思い？」と書かれたハートマークが付け加えられた。ショーティからマーティへ向かった線がぐるつとひとまわりして犯人に向かい、と思っただけでウターンしてワシントン

ンの下に潜りこんだきり二度と出てこなくなった。

「気持ち悪い」

エレノアは膝に顔をうずめた。脳みそが冷たくなってくる。

リュックはすわったまま尻をずらして寄り添い、エレノアの肩を抱いた。

「どうしたの？」

「名前が　頭の中をこねくりまわされてるみたい　」

「これもあいつの仕業かな？」

エレノアはうなずくことすらできなかった。

拳銃を構えた警官が、犯人に向かって叫んだ。「銃を捨てて、両手を頭の上に置け！」

「おまえら全員死んじまえ！」犯人が金切り声で言った。人質の女性の髪の毛を乱暴にひっぱって引き寄せ、体の前に持ってくる。「ヘタなマネをすると、こいつも道連れにするぜ」

「おれは現場の責任者だ。副本部長の　」言葉を詰まらせたが、力強く言い直した。「副本部長だ！　名前はまだない！」

「そうかい。だったら副本長を呼んでくるんだな！　名前をつけてもらえよ！」

「うまいこと言われたので、副本部長は悔しそうに歯噛みした。「要求はなんだ？」

「要求ってなんだ？」

そう返された副本部長はちよつと考え込んで、部下に振り向いた。「だれか、辞書を持ってないか？」

「完全にブツ飛んでます」無線を持った警官がささやいた。「ただのヤク中でしょう。要求なんかありませんよ」

「いや、必ずある！　たとえ要求の意味を知らなかったとしてもだ！　」ふたたび犯人に呼びかける。「おまえ、名前は？」

「名前なんかねえ！」

「おれといっしょだな」

「死ぬのは怖くねえ。怖くねえぞ！」

リュックはこのやり取りとエレノアの様子を交互に見ながら、思い切り眉間にしわを寄せていた。型どおりのセリフ。テレビの刑事もので百万回は聞いたことがある。ほんとうの事件でも、犯人はそんなふうに言うものなんだろうか。

なにより気になるのは、連中の大根ぶりだった。セリフは噛みまくりだし話の筋は見えないし、副本部長は名前すらないらしい。それに、これがほんとうに刑事ドラマだったとしたら、監督はどこにいるんだろう。スタッフは？ DVDのメイキング映像でよくあるような、カメラや照明はどこにあるのだろう。なんだか俳優が指示もなく勝手に演技をしているような感じだった。

「ねえ、副本部長」血まみれで瀕死のスコッティがのんびりと言った。「あいつ、ほんとに知らないんだと思いますよ」

「どうしてだ？」

「もう立っていいですかね？ さつきから地べたにすわりっぱなしで。ケツが冷たくて」

「いいからはやく言え！」

「だって、はじまったばかりじゃないですか。はじめにおれらの簡単な紹介が必要なんです。署でうだうだ無駄話しても緊迫感がないってんで、とりあえずきとうにチンピラを用意したんだと思いますよ。本チャンの事件は、これからじょじょに明らかになるんです」

副本部長は信じられないといった顔で振り向いた。「サワリということか？」

「ご名答」

「サワリの事件なものか！ サワリならなぜ副本部長のおれが現場に来ている？」

「おれに聞かれてもね。だけどそのへん、評論家連中からツツコミが入りそうだな。考証不足だ、って」

「バカを言うな！ どこまでふざけた野郎なんだ、きさまらは。これはテレビドラマの警察ものじゃないんだぞ！」

リュックの眉間がパツと広がった。元栓を開いたように、思考がどばどばと脳みそに流れ込む。エレノアの背中をさすって、顔をのぞきこんだ。

「気分はどう？」

「吐きそう」エレノアはなんとかつぶやく。「頭の中で激論してる

評論家たちが」

「なんとなくわかってきた。きみの言ってたことは正しい。任せて家へ帰れるかもしれない　もちろん、『31』がはじまる前にねこれ持つてて」

バーガーやポテトが乗ったトレイを置いて、リュックは颯爽と立ち上がった。

「演技ぐらい楽勝さ。なんたってぼくは社会人だからね」

「演技？」

リュックは商談前のビジネススマンのように髪の毛を直し、スーツのほりりを払い、ネクタイの結び目を整えた。さあはじめましようというところでふと考え直し、今度は逆に、髪を両手でぐしゃぐしゃにかきまわした。ネクタイを緩め、ワイシャツのボタンをはずし、ズボンからすそをだらしない感じで出した。スーツを脱いで襟元を持ち、博打で大枚すった闘牛士のように歩道の縁石に何度もたたきつけた。溝のどろどろにこすりつけ、ズボンも同様に汚しまくった。どろどろをすくってシャツに塗りたくって、顔にも塗りたくった。口の中に入った泥を吐き出し、靴下を片方脱いで思い切り投げ捨てた。革靴を履き直して、身なりはきちんとしているだろうかと確認した。

「それ、よこして」

リュックはエレノアからトレイを受け取り、お礼を言った。「おもしろいことになるよ。見てて」

そして現場と逆の方向に全速力で駆け出した。すれちがう人は時限爆弾でも抱えているのだろうかといった感じで振り返ったが、なんだただのマックかとたんに興味を失った。

エレノアは頭を抱えて目を閉じた。これ以上わけのわからないことを脳に取り込みたくなかったからだ。

リュックは交差点に着くと、青いバリケードにタッチし、もと来た道を引き返した。事件現場に到着するところには、そうとう息が上がっていた。入れ物からはみ出たポテトをトレイの上で躍らせながら、よたよたと警官のひとりへ近づいた。

「おまわりさん」

あえぎながら言う。すると現場にいるおまわりさん全員が振り向いた。

「えーと、ショーティ　だっけ？」

のんびり振り向いたショーティは、リュックを見てぎょつとした。「どうした？　ひどい格好じゃないか」

「じつはぼくたち　ぼくは　」いまにも倒れそうで切羽詰まったように見えればいいがと思いいながらつづけた。「ある物を届けに

非常に重要な　事件に関わることづてで　」

「そんな話は聞いてないぞ。だれからだ」

「本部長。えーと　」思いつきで答える。「キネッティさん？」

「なに？　それをはやく言わんか！」目的をなくした老人のようにぼんやりしていた副本部長が、だしぬけに振り向いた。「この事件を解決する手がかりか？　それとも本チャンのほう？」

「本チャンです」リュックはほんとにそうなんだと自分に言い聞かせながらうなずいた。「副本部長に直接お渡ししたいんです」

「よし！　こっちへ来い。頭を低くしろよ！」

副本部長はとたんに活気づいてきた。ほおに赤みが差して、だらしなくゆるむのを必死で押さえつけている。リュックはバリケードをまたいで、言われたとおり頭を低くしながら副本部長のところに向かった。

このとんちんかんな現実をようやく把握できた。まちがいない。警察も犯人も、テレビの中から出てきたのだ。そして現実世界で芝居をやっている。どうしてかはわからないが、とにかく起こったこ

とを受け止め、うまく立ちまわることだ。

体をつんのめらせながら進み、パトカーに肩をぶつけてそのままへたりこんだ。ほんとうに膝ががくがくしていたが、トレイはしっかり両手にあつて、ポテトもそれほど散らかつていなかった。

「だいじょうぶか？ ケガは？」 副本部長がかたわらに膝をついた。「なにを持ってきた」

「クォーターパウンダー（チーズ）です」 リュックは大儀そうにまぶたを持ち上げ、副本部長を見上げた。「食べかけですけど」

「ポテトのＬサイズに、ヨーグルト こいつは驚いた。これをどこで？」

セリフにつまった。「わかりません 事情を知らないんです。ただ、キネッティさんに、これは必要なものだからと言われて」ちらつとのぞきこむ。「必要でした？」

「必要も必要！ なぜこれが必要かと言うと」「困ったように考え込む。ほぼ残飯状態のマックがなぜ重要なのか。腕の見せどころだ。「腹が減っていたんだ。朝にコーヒーをがぶ飲みしたきりだからな！」

「食べましょう。ふたりでわけっこして」

トレイをアスファルトに置いて、犯人そっちのけで副本部長といっしょに散らかったポテトをつまんだ。バーガーをはんぶんこしながら、これまでの経緯を説明する。経緯もなにもないのだが、とにかく経緯を説明した。

「ではきみは、本部からはるばるマクドナルドへ立ち寄り、ここまでやってきたというのか！」

副本部長はもぐもぐしながら鼻を鳴らした。鼻から吹き出た空気には、単純な驚きと、無鉄砲な若者を非難する響きと、ちよっぴり賞賛の隠し味が含まれていた。

「ご苦労だったな。あとはわれわれに任せろ」

「ぼくにできることは？」

「一般市民の出る幕じゃない」べたべたの手をパトカーのドアにこ

すりつけた。声に自信が蘇っている。「さて、食い終わったぞ。トレイを返却しなければな」

「ぼくがやります」

「ダメだ」

「やらせてください。これはぼくの仕事です」

副本部長は、あきれてものも言えないというふうにかぶりを振ったが、まなざしにはゆるぎない信頼の色みたいなものが浮かんでいた。どうやら友情が芽生えたらしい。リュックの肩をつかんで、荒っぽく揺さぶった。

血まみれのスコッティに目をやると、ニヤリと笑みを向けて親指を立てた。

リュックはトレイを見た。空の容器に食いカスまみれで、クロス代わりの広告紙は油で黄色いしみだらけだ。広告文と写真と、だれも付き合わないそんなクイズ問題を眺める。

「なにか気になることでも？」と副本部長。

リュックは答えない。紙のはしをつまみ、なにげなく裏返した。

紙の裏側には赤いマジックで「電話して！ 555 1066」と殴り書きがしてあった。

副本部長は孫ができたと思われでもしたように息をのんだ。「新しい展開だ！ 仕事に戻らねば。よくやったぞ」

リュックの首筋を親しげに叩き、チラシを受け取った。

「ワシントン、電話だ。はやくよこせ」

「本名で呼ばんでくださいよ」ワシントンはポッケから携帯電話を取り出して、副本部長に放った。

副本部長は慣れない手つきで携帯に番号を打ち込み、耳に当てた。急に表情がこわばった。そしてこれまた急に顔をにやけさせる。ものの数分で終わったが、会話というよりエッチなテレホンサービスにかけているみたいだった。携帯をしまうときの息の荒さも、ちょうどそんな感じだった。

「集まれ！」

全員に呼びかける。「犯人などほつとけ！」

副本部長とリュックを取り囲むように警官が集まってきた。

「これで全員か？ よし。大変なことが起こった。一度しか説明しないからよく聞け！ だが聞き逃したらあとで教えてやるぞ！」
「電話、だれだったんですか？」

「局の重役だ」

全員が同じように目をまるくし、息をのんだ。

「方針に変更があったそうだ」チームひとりひとりの顔を順に見ながらつぶける。「問題は主役のはみ出し刑事だ。やつが降りた。予定ではここに駆けつけて、紹介がてら事件をちゃちゃっと片づけるはずだったらしいんだが」

「降板の理由は？」

ひとりと言った。副本部長はじつと見つめてこいつの名前を思い出そうとしたが、めんどくさくなつたのでやめた。

「ギャラの交渉で揉めたらしい。ヤツはドラマも掛け持ちしてるからな。スター街道でスポーツカーに取り巻きを乗せて、ギアを四速にシフトチェンジしましたってなもんだ」

「監督がいなくてこうなるんだ。現場の責任者がいなくちゃ、だれがおれたちを守ってくれるんだ」

「おまけに台本もなし」

「演出も。全編インプロでやれってか？ そんなんでホスカーが取れるかっての」

「まあまあ」おまえがハカデミー賞にノミネートされるわけないだろうと思いつながら、副本部長は若い衆をなだめた。「とりあえず撮影班と監督は用意するという話だ」

「じゃあ、主役は？ だれが代役をするんでしょう？」かなり背の小さい警官が言った。

「いい質問だ。上の連中は決めかねている 予算の関係とか、なんやかやでな。もうスターは雇えん。そこでわれわれにお鉢がまわってきたというわけだ。この事件を解決し、なおかつ目を引く活躍

をした者を主役に抜擢することだ」

高校のクラスに蜂の巣を持ち込んでつついたような大騒ぎになった。

「おい、マジかよ？」スコッティがすつとんきような声を上げた。

「おれはケガしてるんだぜ？ 不利じゃねえか」

「小銭を稼ぐこつたな」同僚は非情にせせら笑った。「それでもギリギリ生活はできるぜ」

「クソつたれ。おれはあと三週間で除隊で」スコッティは頭をかいた。「ちがうか。作品をまちがえた」

リュックは取り巻きから抜け出しつつ言った。「もう行っているのか？ 用事があつて」

「ああ、構わないぜ。これで採用の確率が上がるってもんだ」

「お願いがあるんですけど。あつちのバリケードを越えてもいいですか？ 家に帰らなくちゃ」

「つべこべ言わずにとつと消えな」とスコッティ。「頭をぶち抜かれたくなかつたらな」

「おい、それじゃ悪役じゃんか」

「ちやうちやう。あえて狙いはずしてるんだって。アウトロー系のヒーローさ。よくあるだろ、たとえば」

ということで、リュックは喜んでずらかることにした。これ以上付き合う義理はない。エレノアのもとに駆け寄り、声をかける。

「気分は落ち着いた？」

エレノアは急に顔を上げ、目をぱちくりさせた。

「急によくなった。頭の中の相関図が消えてなくなった。評論家も」

背後からめりめりぐしゃぐしゃという音が聞こえてきた。白いワゴンがケツを振りながらぶつ飛ばして近づいてくる。駐車中の車を吹き飛ばし、とくに障害がなくてもわざわざ歩道に乗り上げ、消火栓があれば必ず轢いた。強烈な圧力によって、とんでもない高さまで水柱が立った。

警官が言った。「テレビ局の連中です」

「クソ、もう嗅ぎつけたか」副本部長はさっそく売り込みをはじめた。「クソつたれが！」

ワゴンは両手両足を踏ん張ってさらに加速した。飾り帽子のようなアンテナを乗せた無表情な顔がどんどん大きくなる。急に車体はずっこけたように左に傾き、後輪が横滑りした。悲鳴を上げる後輪で道路に落書きしながら路肩に寄り、完璧だが無意味な縦列駐車を見せつけた。

全員があっけにとられていると、消火栓から噴き出した水が、雨になって降り注いだ。エレノアは空を見上げ、顔に冷たい水をもろに受けた。

「テレビが！」

と思わず叫んで、テレビが濡れないようおおいかぶさった。リュックはずたぼろの背広を脱ぎ、ダンボールにかけた。

「ありがとう」

「警官はもうぼくらを気にかけない。やっぱりただの役者だったよ。許可はもらったから、とにかく家に帰ろう」

いっしょにテレビを抱えて走る。エレノアはリュックの横顔を見上げた。顔もシャツも泥だらけだし、息を切らしているし、おまけに水浸しだ。巨悪と戦い死線を乗り越えた男の顔をしていたが、ただたんに汚れているだけかもしれない。

同時にバリケードをひよいと飛び越えた。

「もう時間を過ぎてるか」不安でおながぞわぞわする。エレノアは事件現場をとりざま、犯人と人質にあいさつした。「ここにちは。いま何時？」

人質の女性が腕時計を見た。「十六時五十分」

「ぎりぎりだ！」

「どしたの？ 家に帰って『31』でも見るつもり？」

「そのつもり！」

「あたしも帰ろっかな」背中から声をかけてきた。「リンちゃんに

よろしく言つといてね！」

警官たちが突然、犯人に向かってめいめいの武器で発砲しはじめた。副本部長などは二丁拳銃を構えていて、うれしそうに雄たけびを上げながら威勢よく鉛玉をぶっ放している。犯人も、人質を放り投げて応戦する。放り投げられた人質の女は、わけがわからないというふうに両手を広げると、立ち上がって携帯電話を耳に当てながらどこかへいなくなった。

「見てると遅れるよ」

「わからない。でもなぜか見ちゃうの」

「なるほど。たぶん番組だからだね」

数人がえらい勢いで駆け寄ってくるのが見えた。レポーターとカメラマンだった。先ほどのワゴンから排出されたのだ。

「お話を聞かせてください！」

リュックは無視して走れと言った。エレノアも銃撃戦という見せ場をなんとか頭から締め出し、リモコンでチャンネルを切り替えるイメージを思い浮かべた。

レポーター・カメラ・ケーブル持ちはぴったりと連携し、三位一体で追いかけてくる。「『ヴィッスル』のジャッキー・テイラーです！　どうかひとことだけ」

ふたりは登り坂を走った。流れ弾も気にせず道路を横切って、赤レンガの釣具屋の角を曲がって細い路地に入った。レポーターはだれかを走って追いかけまわすのが仕事だ。距離がどんどん縮まっていく。

「これからどうされるんですか？」女性レポーターが質問した。

「テレビを見るの！」エレノアはなぜか答えてしまった。

「どんなテレビを見られるんですか？」

「答えなくていいよ」リュックが言った。

「『31』！」やっぱり答えてしまう。

「そうなんですネ。『31』のどんなところに惹かれましたか？」

「リン・タウンゼンド！　かわいいから！　わたしよりずっと」

「またまたご冗談を！ でも、あんなふうになれたらなっと思いま
すよね！ 実際にあんな家族が持てたら、最高だと思いませんか？」
「だいいいけど！」

「なるほど。ありがとうございました！ 無事番組を見られるとい
いですね！ 以上、ジャッキー・テイラーが現場からお伝えし
ました」

わが家の玄関にたどり着いた。リュックがポケットを探っている。
エレノアはノブを引き、ドアを開けた。「鍵をかけるの忘れてた」
ばたんと玄関のドアを閉じる。と同時に振り返って、ふたりで分
担して大急ぎで三箇所とも鍵をまわした。

レポーターがほとんどドアを叩く。「もうひとことだけ」

リュックは遊園地帰りの子供みたいな表情で息を吐いた。

「やっと帰ってきた」エレノアは薄暗いなか、ドアにもたれてへた
りこんだ。「テレビを見ただけなのに」

「だいぶ狂ってたね。でもおもしろかった」

「おもしろくない。二ヶ月は外に出たくない気分」

リュックは手探りでスイッチを探し、電気をつけた。

狂っているといえば、部屋の様子もだいぶ狂っていた。

6話 『31』と毛むくじゃらのおともだち

エレノアはテレビを抱え、玄関から大部屋に飛び出した。ひとりおり見まわす。リビングに、エレノア区画に、カウンターつきの台所。ゴミだらけのテーブルに破壊されたテレビ。その途中、どうにもひっかかるなにかが視界をとりすぎたが、ぜったいに見ないようにした。見なければ対処する必要もない。

壁掛けの時計に目をやる。目をやったのは時計のみであって、すぐそばでぶらぶらしているなにかではなかった。なにがどうぶらぶらしているのかなど気にもならないし、壁掛けの時計のすぐそばにはたいていああいったものがぶらぶらしているものなのだ。通常どおり。いたってふつう。エレノアはそう自分に言い聞かせてから、満を持して驚くことにした。

「あと二分しかない！」

リュックはうなずいた。立ち上がって、停電のときみたいに手探りで一歩ずつ進んだ。おそらく、エレノアと同じことを考えているんだろう。

「了解。なにはともあれ、テレビが先だ。これだけ苦労したんだから、なんとしても間に合わせるぞ。あれについては」「あたりを見まわしながらにも見まわさないという複雑な動作をやったのける。「気にしない。というか、変わったとこなんかにもない。どう思う？」

「なんにも！」エレノアは急いで言ったせいで声がうわずっていた。「えっ、なんの話？」

「そうそう。気にしなければ、ないのと同じだ。しばらくその調子でいこう」

エレノアはガムテープをちぎって上蓋を空け、手をつつこんでスチロールごと中身を引きずり出した。おニョーのテレビは半透明のビニールに包まれ、新鮮なおいがした。スチロールの拘束具をは

ずし、ビニールをひっぺがし、何時間かぶりにクレツパ（水色）とご対面する。思わず液晶の画面に唇をつけた。嬉しさで胸があったかくなる。もうなにも気にならない　口先だけでなく、心の底から。天井からなにかがどさつと落ちてきたのも気にならないし、だれかが玄関を叩いて「お話を聞かせてください」と怒鳴っているのも気にならない。

空のダンボールを部屋の隅に蹴っ飛ばして、クレツパ（水色）をテレビ台にセットする。二本の尻尾の先を握って、振り返りざま寝床へダイビングし、一方をアンテナソケットに、一方をマルチャツプに差し込んだ。

「受け取って！」

リュックがリモコンを投げてよこした。おなかキャッチで受け取る。なにせリモコンまで超かわいいもんだから、毛むくじやらで背の低い生物のようなものが相方の背後を横切ったのを見てもまったく気にならなかった。

毛むくじやらの生物はよたよたと洗面所に消えた　　ような気がした。

エレノアはリモコンの赤いボタンを押した。カチツと音がして、徐々に画面が色づきはじめた。すばやくチャンネルを『ヴィッスル』に合わせる。おなじみのアイスクリームのCMだった。エレノアはようやく体の力を抜いた。このCMのあと、『31』のおなじみのテーマ曲『アイム・ステイル・ヤング』が流れる。

つまり、間に合ったのだ。

「やったー！」エレノアはバンザイした。

「これぐらい苦労しないと、テレビを見るのもおもしろくないよね」リュックが満足げにうなずいて言った。

CMが終わると、一瞬の間を置いて『31』のオープニングがはじまった。おなじみのタイトルロゴに、おなじみのイントロが流れ出す。エレノアはあまりの喜びで声も出ず、だれもいないはずの洗

面所からトイレの水を流す音が聞こえ、天井から隕石めいたものが立てつづけに落ちたのも気づかなかった。

「やったね」

「あなたのおかげよ。ありがとうございました」めったにないことだが、エレノアはオープニングの最中にも関わらず目を上げてリュックを見た。「お礼しなくちゃ。今夜は期待してて。たぶん、はじめてづくしだから。あんなことやこんなことを」

「ぼくはシャワー浴びてくる。顔がどろどろ」

リュックは洗面所に向かった。入り口のところで毛むくじやらの生物とすれちがう。げっそりした顔でおなかを押さえているようだったが、すべて気のせいなのは言うまでもなかった。

肩をねじってコートを脱ぎながら、エレノアは集中力を高めるため、いつものようにオープニングの曲を口ずさんだ。理由はまったく見当もつかないのだが気が散ってしょうがなかったたので、両目に釘を打ち付けて画面からぜったいに離れないようにした。

監視カメラがテレビ台の中からこちらを向いている。

エレノアはお守りのようにリモコンを握り締め、あぐらをかき直した。オープニングは進み、曲に合わせて登場人物がテンポよく紹介される。

ちなみにテーマ曲は、結成四十年のベテラングループ『ミッチ＆ヤング・アルバトロス』の二十四枚目のアルバムに収録されている（ライブ盤は除く）。バンドはいまだ現役で、演奏は力強く、音楽的にも進化への挑戦をつづけているのだが、世間の声は否定的なものが多かった。バンド名を逆手にとって「ステージの袖にローディーが控えていると思ったら主治医の先生だった」とか「新ボーカルを探すため孫の友人に当たっている」などと書かれたり、新聞には点滴を打ちながら演奏するメンバーの風刺漫画を掲載されたりと、さんざんネタにされていた。

バンドリーダーのミッチ・ホランドは「教授」の仇名のとおり、気難しい性格で有名だった。昨年ニユーアルバムの宣伝も兼ねて、

めったに出ないトークショーへ出演した。リーダートラックでシットコム『31』の主題歌でもある『アーム・スタイル・ヤング』について質問されると、われわれは年寄りだなんだと騒がれているが、昔となにも変わっていないと思っている、この曲には他人を気にせず、いくつになっても自分の人生を貫けというメッセージを込めたのだと答えた。その髪の毛はカツラなのかと質問されると、ミッチは傲然と席を立ち、これ見よがしにふさふさしたホストの髪の毛を思い切りひっぱった。

アーム・スタイル・ヤング

みんながぼくを 年寄りだという
もう若くないと

ファッションデザイナーも 電話の交換手も
よってたかって決めつける

恋人は去っていった

中二のころなんて なにも覚えていない
なにも残されていない そう
ここにあるのは年寄りのぼくだけ

年寄り 年寄り 年寄りなのさ
ほんとにそうなのかい？

年寄り 年寄り 年金暮らし
ひとつ聞くが きみたちはなにをやってきたというんだ？

ぼくはまだ若い
老人ホームでロックンロール
ぼくはまだ若い

追い越し車線をつつ走る

ところで

きみたちはなにをやってきた？

屋根から飛び降りたことは？

星に手を伸ばした？

彼女に告白したのかい？

結局のところ

ぼくらは等しく なにも持っていない

ぼくらは等しく 歳をとるだけ

リュックが洗面所でいつしよになって「年寄り、年寄り」「と歌っている。毛むくじやらの生物も、楽しそうに体を揺らしながらハミングしていた。

エレノアは思わず動いた眉毛をもとに戻した。テレビにリモコンを向け、音量を上げる。

そしてついに『31』ファーストシーズンの最終回がはじまった。ギターがフェードアウトし、見慣れた部屋に画面が切り替わる。ティーンエイジャーのような少女趣味の壁紙に、鏡張りのクローゼット、机には本が申し訳程度に並んでいる。時刻は夜の十一時五十五分。ベッドではパジャマ姿のリン・タウンゼンドがうつ伏せになり、枕に顔をうずめている。明かりはついたままだった。

なぜリンが枕に顔をうずめているのか、エレノアは知っている。

あと五分で三十二歳の誕生日を迎えるからだ。

リンはうめき声を上げながら、ナイトテーブルに手をさまよわせた。目覚まし時計を持ち上げてからすぐに下ろし、コップに手をひっかけて床に落とした。傾いたコップから液体がダイビングして、それからごつごつという音がした。バナナをつかむと、体をくねらせて横向きになった。ボサボサの前髪が顔に垂れ下がり、目の下が湿

っている。バナナを耳に持ってきて、ふと目を開けた。なんだこりやという顔でバナナを見て、ばいと捨てる。さっそく聞き覚えのある笑い声が上がった。エレノアも笑った。まるでふてくされた女の子みたいな顔だ。

上体を起こしてあぐらをかき、リンは肩で大きく息をした。あらためて電話の受話器を持ち上げる。

「ジョーイ？」目を拭って髪をかき上げた。「こんな遅くにごめんなさい」

「構わんよ。起きてたから」ぶっきらぼうな声。

「ほんと？　いつもならもう寝てる時間じゃない」

「きつと今夜あたり、あんたから電話がかかってくるんじゃないかと思って」

「どうしてわかったの？」

「さあ、どうしてだろうな」

観客の含み笑い。

「さっそくだけど、聞いてほしいことがあるの」リンは鼻をすすった。「だけど、どう言っているのか　頭が混乱して。わたしの頭の中は複雑すぎるから、説明してもわからないでしょうね」

「いや、わかるよ」ジョーイはあっさり言った。「それどころか、あんたが知らないことまですべてお見とおしだ」

「長いことカウンセラーをやってるから？」

「というより、あんたの頭が単純すぎるんだ」

リンは気を悪くしたように頭を持ち上げた。そのしぐさに笑いが起こる。

「あと五分で誕生日だよな」

「そうなの」

「三十二になるのか」

「　　たぶん」

「だからそうやってベソかいてフテ寝してるわけだ」

「気味悪い。わたしの声色でわかるわけ？」

「去年も一昨年もそうだったろうが。おれの患者になってから、ずっとそうだ。あんたはまったく進歩してない」

「クライアントに言うセリフ？」

「カウンセリングなんかやっくらん。ただの無駄話。もし受けたきや、お友達価格で割引してやってもいいぞ」

「あなたのところで働いてるのに」

「それとこれとはべつ」

ジョーイ・カウフマンは六十過ぎの老カウンセラーで、リンとは付き合いが長い。顔じゅうヒゲだらけで頭は禿げ上がっていて、口ツクと野球が好きなわからず屋だった。最初は大きな屋敷でひとり暮らしをしていたのだが、シーズンの半ばくらいで仕事をクビになったリンをお手伝いさんとして雇い入れた。それからもふたりはすったもんだといがみ合い、ときには友情を深めたりもした。

しばらくするとジョーイが腰を悪くし、リンは事務作業まで任せられるようになった。そもそもリンはジョーイのクライアントだった。設定では二年前、三十歳の誕生日を迎えたとき、リンは体の歯車と頭のねじがおかしくなった。カウンセリングを受けるうちに、数字そのものに対して強迫観念を抱いているということが判明した。そのリンが数字を扱う事務を任せられるという展開に、エレノアはパズルのピースがぴったりハマったような快感を覚えたし、シットコム通として唸らされた。

「で、明日は恒例のアイスクリームパーラー巡礼の旅か」

「そうしようと思ってたの。カーティーンもそのつもりだろうし」

「あの子の提案だからな。『これから誕生日は、一日じゅう好きなことをするの。糖尿になるまでアイスを食いまくろっ』って。きみの娘は意外と深いことを言ったぞ。専門家から見ても、理になってる。今年もぜひ、そうすべきだな」

「そんな気分じゃないの」

「どうして。アイスが嫌いにでもなったか」

リンはかぶりを振ってから、ふと気づいて声に出した。「ううん、

ちがう」

「べつにアイスじゃなくてもいい。好きなことをすればいいんだ。ピザでも寿司でも、食いもんじゃなくてもかまわん。テーマパークに行くとか、卓球するとか」

「そんなことをしても無駄じゃないかって思うの。逃げているだけじゃないかって」

「心境に変化があらわれたな。いい兆候かもしれん」

「ほんと？ 治ってきてるってこと？」

ジョーイはしばらく黙ってから、質問した。「あんた、何歳になるんだっけ？」

「あの」リンはそう言ったきり言葉が出ず、魚みたいに口をぱくぱくさせた。「えーと」

「まだ治つたらんようだ」

「ははは」お約束のやりとりに、エレノアは声を上げて笑った。反動で顔が持ち上がり、テレビの向こうを見てしまった。

毛むくじらの生物がテレビの後ろに立ち、エレノアの気を引こうと細っこい手を振っていた。

怒ったように目を戻す。

「とにかくだ、家族や友達を引き連れてアイスを食べに行つてこい。明日は土曜だし、ちょうどいいだろう。去年なんか平日なのにみんなで一日じゅう付き合ったじゃないか。みんなの好意を無駄にするんじゃない」

「わかりました」

「なんなら逆ナンパして男をひっかけてもいいぞ」

「先生、いっしょに行く？」

「悪いがおれは用があるんだ。野球のチケットが急に手に入って

」

リンは静かに受話器を置いた。ぼんやりと見上げてつぶやく。「男か」

「無理だよ、レイノーとくつつくんだから」エレノアは思わずテレ

ビにツツコミを入れた。それからやはり怒ったような顔で、中身の入っているポテチの袋はないかと手を床に這わせた。

毛むくじゃらというと、ひきつづき両手を振ったりジャンプしたりひねりを加えた宙返りをしたりしていたが、あきらめた様子で肩を落とし、横を向いた。そして一步ごとに跳ねるような奇妙な歩きかたでエレノアのとなりにやって来て、袖をひっぱった。

「パソコン使わせて」

エレノアは片方の腕をさっと上げ、パソコンデスクのあるほうを指差した。

「どうも」

お礼を言つと、猫背でよたよたとデスクに向かい、イスに飛び乗った。なにをするのかと思えば、ネットサーフィンをはじめた。検索してはページを開き、頼杖についてぼんやりとモニターを眺めている。枯れ枝のようなちっこい手で器用にマウスを操作し、ときおり思い出したように勢い込んでキーボードを叩いた。それから。エレノアは毛玉に気を取られている自分に気づいて、いかんいかんと頭を振った。そして正面しか見えないように掛け布団を頭からかぶった。

ストーリーは進む。リンは言われたとおりアイスクリーム屋に行くことにした。昼ごろに起き出し、パジャマにピンクのガウンを羽織って家の中をうろろする。そしてアイスクリームパーラー巡礼の旅のお供探しをはじめた。

長女のカーティーンが、スリッパをひきずりながら逆方向からリビングにあらわれた。どうして笑い声が上がったかというと、寝起き顔で髪の毛を爆発させていたからだ。なぜか『粘着ゴロゴロ』の名で知られるカーペット掃除用製品を持っている。

ふたりは中央で向かい合い、しばらくお互いを眺めていた。

「こんなところに鏡が」カーティーンが半笑いで言った。「ちがうか。くもりガラスだった」

「あんだ、今日はなんの日か覚えてる？」

「さあ」

「あの日よ」

「あの日って」「カーティーンは顔をひきつらせてまぶたを持ち上げた。「あの日？」

この番組はたまに下品なネタが飛び出してくる。

「ちがうって」「リンは咳払いした。「その」「わたしがこの世に生を受けた日よ」

「誕生日か。忘れてないよ、思い出せなかったただけ」半分寝ながら言う。「おめでとう」

「おめでたくない」

「祝ってほしいの？」

「祝うというより、儀式ね。一年間は脳みそがばらばらに飛び出しませんようにっていう。アイスクリーム、食べにいこう」

「あー、ダメ」

「どうして？」「いつも行ってるじゃない」「あの日には」

「この歳になると、例年どおりってわけにはいかないの。友達との約束が詰まっちゃって」

「あっそう」「リンは無理やりといった感じで眉を上げ、大きい口でニコニコマークをつくった。「なら、しょうがないか。行つてらっしゃい。わたしはいいの。ぜんぜん気にしないで」

「またあとでね。来年の分、いま予約入れとく？」

リンは無視した。「あんた、なに持つてるの？」「粘着ゴロゴロ」？」

「そう。これでね」「と、カーティーンは『粘着ゴロゴロ』を持ち上げて、パジャマの腹のあたりをゴロゴロしようにとしてやめた。今度は頭に持ってきたが、やはりやめた。どこかをゴロゴロしようとチャレンジするのだが結局めんどくさそうに放り投げた。

「わかんない」

と言つて、長女はいなくなった。ひとり取り残されたリンはしばらく立ち尽くしていたが、手のひらで目頭を押さえ、ふっと息をは

いた。

お供探しはつづく。だがどうも去年とは勝手がちがうようだ。美容師で友人のターニヤに電話する。

「あたしの仕事、知ってるでしょ？ 土日は出てんのよ」

「知ってる。思えばあんたをアイスクリームに誘うなんて、わたしもどうかしてるかも」

「どうかしてると言えば、最近カットしてないでしょ？ あんたは歳のわりにかわいいんだから、身だしなみに気をつけないと運が逃げるよ。いまだって、ボサボサ頭でパジャマ着たままじゃないのさ」

「ねえ、どうしてみんな電話でわたしの格好がわかるの？」

観客の爆笑がしばらくとまらない。エレノアも布団の中に自分の笑い声を響かせた。

パソコンのほうから聞きたくない声がした。「おねえさん。

フォトシヨップ、ある？」

エレノアはもつと大きな声で笑った。

「フォトシヨだよ。入ってないの？」

がばつと布団を下ろして、エレノアは二回かぶりを振る。そしてまたかぶり直した。

「そうか。じゃあアングラサイトからライセンスをダウンロードしてと」

毛むくじやらの生物はぶつぶつ言いながら、やかましくキーボードを叩きはじめた。

「あの男を誘えば？ なんて言っただけ？」

あの男とは、お隣さんのレイノーのことだ。ターニヤに言われて、リンは複雑な表情をした。

「やめとく。出会ったときのことを思い出すから」

レイノーと出会ったのは、アイスクリームパーラーだった。ちょうど去年の誕生日、一家三人ボックス席で三段重ねと格闘しているときに、満員だからと空いている四人目の席に割り込んできたのだった。

となりですわった男を、リンはひと目で嫌いになった。そこで縁が切れるはずだったのだがドラマなのでそうとはならず、翌日タウンゼンド家のなりに引越してきたのだった。「またなりになったね」とレイノーは笑った。

ふたりはいろいろあった。キッチンのボヤをいっしょに消したり、息子のリュックのエイリアン騒動をいっしょに解決したり。毎週いるんなことが起きる中、くっついたり離れたりしてエレノアをやきもきさせたものだ。

リンがキッチンに行くと、その息子が冷蔵庫と巨大なドアの間に頭をつっこんでいた。

「なにやってるの？」

リュックは答えない。ちなみにエレノアの相方と名前がいっしょなのは単なる偶然だった。

「ご飯か。ごめんね。シリアルでいい？」

と言うと、ちびリュックは冷蔵庫を閉じて、音もなくテーブルに着いた。

「そうだ。あんた、今日はママとアイス食べに行こう。いいよね？」

リュックは八歳とは思えないくらい目つきで母親を見上げた。そしてうなずく。

「よかった。これでひとりゲットだ」リンは息子の頭をくしゃくしゃかきまわす。ちびリュックはされるがままだった。「レイノーを誘うくらいなら、ふたりで行ったほうがいい。そうよ」

シリアルを用意し、陶器のうつわをテーブルに置いた。ごとりという音が静かなキッチンに吸い込まれていく。ちびリュックががさがとシリアルを食べはじめ。

リンは気が抜けたように肩を落とした。

だれかがキッチンの裏口の戸をノックした。開けるとレイノーが立っていた。首まわりがよれよれの黄色っぽいTシャツを着て、すでに何色だかわからないスウェットにサンダルをひっかけている。

リンの顔を見ると、パツと表情を明るくした。

「やあ」

「どうも」

レイノーは後ろ手に隠し持っていたマスタードの容器を、リンの鼻面に振ってみせた。「ホットドッグをつくらうとしたら、マスタードを切らしちゃって」

言い終える前に、リンはうんざりした様子でレイノーを招き入れた。レイノーが調味料を切らしてやってくるのは第一話からつづいているお約束で、ほんとうは食事をたかりに来ているのだ。といっても、リンの得意料理は冷凍食品の解凍かピザ屋に出前の電話をすることくらいなので、真の理由は言わずもがなだった。観客もよくわかっていて、おなじみの展開に笑い声を漏らしている。

レイノーは遠慮なく上がりんで、遠慮なくテーブルに着いた。

「よう。元気か？」腕を伸ばしてリュックの肩をたたく。

リュックはシリアルから顔を上げて、仏頂面で親指を立てた。ふたりはなぜかウマが合う。

「ひとり暮らしがこたえてるんじゃない？ やることもないだろうし」

カウンターでふたり分のシリアルを用意しながらリンが言った。

「けっこう忙しいよ。新作を執筆中なんだ。運が向いてきてね。ここに来るのは息抜きみたいなもんだ」

「小説？」

「いま流行りの生きかた本だよ」

「あなたに生きかたを教わる人って」ふと、ちびリュックを見下ろした。「それって絵本？」

シリアルをテーブルに置いて、自分もテーブルに着く。と、リンは近視の人がよくするように目を細めて、レイノーを見つめた。エレンアはこの涼しげなまなざしが大好きだった。

「なんでじろじろ見るの」

「あなた、もしかして」

ひじについて、スプーンをもてあそぶ。ふたりはなんだか微妙な空気のなか見つめ合っていたが、急に催眠術が切れたようにリンは背筋を伸ばし、テーブルにぽんと手を置いた。

「なんでもない」

レイノーはちよつと肩をすくめ、シリアルに手をつけた。

「で、本の話だけだね。タイトルは『フレンドリーなやつは口がくさい』っていうの」

「それってどういう本？」

「今度たしかめてみるといいよ。ほんとにそうだから。口がくさい連中ってのは、見境いなしになんでもかんでも取り込んでしまうんだな。つまり、この本ではこう言いたいんだ　友達いっぱい口をくさくするか、孤独で無臭がいいか」

「あなたの人生、終わりに近づいてるんじゃない？」

「次の巻も考えてるんだ。タイトルは『パンツを替えないやつは口がくさい』で、なぜかっていうと　まあ、そのままだな」

電話が鳴った。エレノアは思わず振り返ったが、テレビの中の話だった。振り返りついでに、デスクでネットをつづける毛むくじらの生物をもろに見てしまった。

「もしもし」ちびリュックが電話を取った。しばらく無言でうなずく。「　　いいよ。じゃ」

「だれからだったの？」

リンがたずねる。

「ティミー。遊びに来ないと死刑だって」

「刑務所ごっこか。ぼくもよくやったよ」

リンはスプーンを置いて、お得意のふてくされた女の子みたいな顔をした。リュックが静かに近づいて、慰めるように母親の肩をたたく。リンの顔がやわらいだ。

「　　いいよ。行つてらっしゃい」

横を向いてリュックを抱き寄せた。

「ごめんね、ママ」

観客全員がため息を漏らした。

「レイノーと行けば？」リュックはリンの肩にあごを乗せながら悪魔的な声で言った。「ふたりっきりでね」

リンは顔を上げた。レイノーは目をぎよろつかせた。「なんのこ」と？」そしてまたしても微妙な空気のなか、ふたりはお互いを見つめ合った。

画面が切り替わった。CMタイムだ。どぎつい色をしたアイスクリームがありえない格好でくるくるまわったりしている。

エレノアは溜めに溜めた息を吐き出し、呼吸を再開した。次に息を止めるのは一分三十秒後だ。それまでどうしようか。お菓子を取ってきてもいいし、もちろんこのままCMを見つづけてもいい。

「ああ！ まったくもう。うまくいかない」

ゆっくりと横を向いた。茶色い毛玉が悪態をつきながら、マウスを操作している。

エレノアは思った。そろそろあの生物の存在に気づいてもいいころだ。

「なにやってるの？」おずおずとたずねる。

毛むくじやはどこが首だかわからないのだがとにかく首らしきものをまわしてエレノアを見た。「ソリティア」

「そういう意味じゃなくて。あなただれ？ どこから来たの？ なののために？」

「それ、おれの映画のあらすじのことか」

「あなたの映画？」

「また質問が増えたぞ。おれは主役じゃない。ただの導き手」

「導き手って」「言ってるそばから質問を追加しかけて、あわてて口を閉じた。

「主役はどこ？」

「主役？」

「おれは主役じゃない。ただのチョイ役」神経質に何度もマウスをクリックする。「フィギュアはできる？ 子供はほしがるかな？」

タイアップは？ CMに出られる？ ハッピーセットのおまけは？

ふん！ いまのおれじゃ無理さ」

エレノアは脳が漏れ出さないように、両手でこめかみを押さえた。やっぱり気づかなければよかった。

「CMが終わった。つづきはじまるよ」

エレノアは反射的にテレビに顔を向けた。頭の中がごちゃごちゃで集中できない。どうしてみんな、よってたかつて脳みそをひっかきまわすのだろう？ ただテレビが見たいだけなのに。

リンはひとりリビングのソファにすわっていた。ため息をつき、テレビを見ている。

「忙しい、か」とひとりごとをつぶやいた。またため息。どうやらCMのあいだにレイノーに断られたらしい。「わたし、そんなに魅力ない？」

「そんなことないよ。レイノーは恥ずかしがってるだけ」

エレノアもテレビに向かってひとりごとを言ったのだが、いつものぶつぶつとは意味合いがちがっていた。テレビではなく、リンに対して話しかけたのだ。ミーカも、ヨンナおばさんも、テレビの中から話しかけてきた。向こうの言うこともわかったし、こっちがしゃべれば反応した。もしかしたらリンも、こっちを向いて応答してくれるかもしれない。

「あなたはぜんぜん年寄りじゃないし、かわいいし、魅力的なのにみんなあなたが好きなのよ。もう一度レイノーを誘って！」

リンは答えない。例によってまぶしげに目を細め、頬杖をつき、テレビを見ているだけだった。口をとがらせながら自分の格好を見て、だるそうにため息をついた。よっころしょっと立ち上がって、スリッパをひきずり階段へ歩いた。階段へ足をかけて立ち止まり、くるっと半回転して逆の方向へ向かう。

壁際のコードレス電話を取った。難しい顔をして番号をプッシュする。

「そうよ！ もしかして声が聞こえた？」

リンはあさつてのほうを向いて受話器を耳に当てている。カメラを見もしなければ話しかけてもしてこなかった。

電話が鳴った。今度は現実の電話だ。やかましい電子音にエレノアは顔をしかめた。

「リュック、電話！」いつものように、洗面所に向かって叫んだ。

「まだシャワー中？」

「おれ、出ようか？」毛むくじやはイスから飛び降りた。「玩具メーカーからかも。おれを商品化したいって」

「いい！」

リンは受話器を構えたまま、応答を待っている。いらいらした様子で腕を組み、体重を片方の足にかけ直した。

いつ展開しセリフがはじまってもいいように、エレノアは顔をテレビに向けたままゆっくりと立ち上がった。中腰で後ろ向きに進む音を頼りに、このへんだろうところというところで止まり、背中のように腕を伸ばして受話器を探った。

「もうちょい右」毛むくじやらがアドバイスする。「ちがう。おれから見て右」

気も狂いそうになるなか、ようやく受話器に触れた。持ち上げて、手をもつれさせながら耳に当てた。「もしもし？」

「あ、ようやく出た」

聞き覚えのある声だった。言うまでもないが、エレノアはテレビの画面から目を離さない。どんなことがあるかと、離さないといったら離さないのだ。

リンが画面奥で、横を向いて電話を構えているのが見える。

また当然ながら、エレノアはもう片方の手にリモコンを持っている。テレビに向けて音量を上げる。するとリンがしゃべった。

「聞こえてる？」

聞こえていないどころか、まったく同時にテレビのスピーカーからも「聞こえてる？」と聞こえてきた。

毛むくじやが見上げる。「だれ？ 玩具メーカー？」

エレノアはやかましいと手を払った。

「あなた、リン？」

「そうよ」とステレオで答える。「こんにちは。はじめまして、エレノア」

「リン・タウンゼンド？」

「わたしはそのつもりだけど」

「あのリンゼイ・タウンゼンド？」自分の声までテレビのスピーカーから聞こえてくる。「ほんとのほんとに？」

「そこまで言われると自信ないかな」

観客が笑う。するとリンは声をひそめて言った。

「あまり大げさに話しちゃダメ。みんな聞いているから。ふつうに話してね」

そしてくすりと笑った。エレノアは腰が砕けて、受話器を取り落としそうになった。あのリンが、受話器の向こうで耳もとにささやきかけている。体はわなわなするし、呼吸は荒くなるし、アニメのキャラクターだったら、いきなり顎をがくーんと落としてつま先をかすめているところだ。そこまででないにしても、だいたい同じような顔になっているのはたしかだ。

代わりにやってあげようと思ったのか、毛むくじやらが目の前に来て、得意げな顔で文字どおり顎を床までがくーんと落としてみせた。器用なことだ。

「ふつうになった？」おかしげにリンがたずねる。

「だいじょうぶ　たぶん」エレノアは胸にリモコンを当てて、深呼吸した。「どうもこんばんは」

笑い声がおつかぶさる。そういえば、向こうはまだ昼だった。「ひさしぶりじゃない。どうしてた？」

「テレビを見てたの。あなた　」と言いかけて、口を閉じた。それだけは言うなと直感がわめきたてている。「　天気予報を」

エレノアはいきなり観客の心をつかんだようだ。それとも大物ゲストかなにかとかんちがいしているのだろうか。

リンはびっくりしたように眉を寄せ、それから持ち上げて何度もうなずいた。いつものリンだ。つまり、演技をはじめただ。

「いきなりで悪いんだけど、今日はヒマ？」

「ど　どうして？」

「付き合ってほしいの。宗教儀式に」

と冗談めかす。どうしよう。こちらも演技しなければいけないのだろうか。もちろん演技などしたこともないし、俳優になりたいと思ったことすらなかった。

「　宗教儀式？」とりあえずオウム返ししておいた。

「ごめん、冗談よ」リンは力なく笑った。「誕生日なんだけどだれも相手にしてくれなくて。もしよかったら、アイスクリーム食べに行かない？」

答えを必死に探しながら、これはいったいどういうことなのだろうと考えた。オーケーすれば、ほんとにリンとアイスを食べるのだろうか。それともたんにドラマの中の話で、オーケーと答えても力ツトがかかってハイお疲れさん、ということになるのだろうか。さらにいうなら、番組の出演者として、次のシーンでテーブルに向かい合ってアイスを食べたりできるのだろうか。テレビの中で。

エレノアはだいぶ混乱していたが、それを表に出す必要はなかった。毛むくじやらが代わりに唸りながら頭をかきむしり、床をのたうちまわっていたからだ。

「おしゃれしたほうがいい？」

思わずきいたセリフが、観客のツボに入った。しばらく拍手が鳴りやまない。リンまでつられて笑ってしまい、顔をゆがめながらもとか押さえようとがんばっていた。

「そうそう。近所のアイスクリームパーラーは服装規定があつてね。カクテルドレスが必要になるかな。わたしは準備万端整えてる」

「ドレスなんて持ってない」

「おれ、ネットで買ったよ」と毛むくじやら。いつのまにかパソコンの前にすわってマウスをカチカチさせていた。「お急ぎ便で

本日配達だつてさ。おれ、気が利くやつだろ？」

「リンは冗談で言ったのよ！」エレノアは毛むくじゃらを見て、テレビを見て、また毛むくじゃらを見た。気がつくとその場で一回転していて、体にコードが巻きついていた。

「なんだかよくわからないけど、よかった。付き合ってくれてありがとう」

「行く！ 行くけど」

「じゃあ、三十分後に現地集合で。場所はわかるよね？ 大通りの角にある、あそこで」

正直、どの大通りのどの角だかまったく見当がつかない。その角のあそこは現実世界にあるのかとたずねそうになったところで、急にリンが声をひそめて言った。

「導きに従って」

「なに？」

「導き手がいるでしょ？」

「おれだよ、おれ」導き手とはだれのことだろうと探すまでもなく、毛むくじゃらがイスの上に立って手を上げた。なんとも自己顕示欲の強い毛玉だ。「おれの役目だよ。とても重要な」

さらに、湯気をまわりつかせて洗面所からリュックが出てきた。パンツードにタオルを首にかけて、さっぱりした顔だ。

毛むくじゃらを見て、さっぱりした顔がさっぱりわからないという顔になった。「これなに？」

「リン？」エレノアは受話器に向かって言った。

「なに？」

「頭がおかしくなりそうなんだけど」

「時間がないの。よく聞いて」リンはさらに声を抑えて言った。「わたしは味方よ。あなたの助けがぜひほしいの。ミーカがあなたたちの世界に干渉し、しっちゃんかめっちゃんにしようとしてる」

「旦那さんでしょ？」

「もと旦那よ。別れたの」

「自分から言いに出てきたから、なにをしようとしてるのかは知ってる。大変なの？」

「決まってるでしょ。あなたたちの世界がテレビ番組になるの。もしそうになったら」

レイノーがとつぜんキッチンからやってきた。

「あのさ、じつはさっきのことだけど。気になっちゃって」

受話器の口を手のひらで押さえながら、声をうわずらせて笑った。

「はは！ ぜんぜんだいじょうぶ！ 気にしないで」

「おお、いたのか！」

ジョーイが息を切らして玄関からあらわれた。鍵がかかっていないのはシットコムではよくあることだ。

「なにしに来たの？ 地区シリーズを見に行くんじゃない？」

「わからん」

「わからん？」

「たぶん あんたが心配になって」

「先生、そんなキャラじゃないでしょうが」

そのうしろからピザの配達人が顔をのぞかせた。「あー、ピザの出前ですけど」

「頼んでない！」

「あ、あたしが頼んだの」さらに二階からカーティーンが男を引き連れ階段を降りてきた。「この人ね、あたしの彼氏」

「ちっす」彼氏はチャラチャラと言った。

「こんなときに！」リンは聞いたこともないような悲鳴を上げた。

「どうして一気に」

「どうして？ みんな、きみを必要としてるんだよ」レイノーが神妙に言った。「さっきは断ったけど、やっぱり行くことにしたよ。」

みんなだね。この彼氏も」

「ちっす」彼氏は礼儀正しくうなずいた。

リンはリビングの中央で、出演者全員に取り囲まれた。まるでエレノアとアイス屋へ行くのを阻止しようとしているかのようにだった。

思いつきり眉を下げて電話に口を近づける。「エレノア？」

「なに？」

「わたしも頭がおかしくなりそう」

「ねえ、どうすればいいの？ どうすれば会える？」

「導き手に従って」

唐突に電話が切れた。テレビを見る。見たことのあるゲストが――齊に玄関からなだれ込んできた。市長や近所のおばさんや親友だったのに途中でなかったことにされた男など総勢二十人くらいが、やはりリンを取り囲んで思い思いにしゃべりまくっている。まさにしつちやかめつちやかだ。

「おれ、導き手」

エレノアとリュックは同時に振り返った。

「主人公ども、おれに従え。ストーリーを進めてやる」

預言者にでもなったつもりなのか、手を上げて満足げに一同を見まわしている。

その背後で、天井から箱が降ってきた。どさつと床に落ちる。

毛むくじやは手を上げたまま悦に入ってにやにやしており、取りにいくそぶりも見せない。リュックが頭をかばいながら箱に近づき、包装をやぶって開けた。

「ドレスだ。エレノア、こんなの注文した？」

「おれがしたの」

毛もじあのニヤニヤはとまらない。まさに主役を食ってやると言わんばかりだった。

7話 カラーパターンの誘い

「手はじめに、おれのことを教えてやろう。知りたくてしょうがないんだろ？」

エレノアは毛むくじやからテレビに目を移した。『31』は残り時間も半分を過ぎていたのだが、相変わらずドタバタ騒ぎがつづいていた。収まるどころかさらに人数が増えていて、文字どおり玄関の外まであふれ返っていた。

思わずリモコンを向け、音量を絞る。なんだか頭がぼーっとする。憧れのリンに話しかけられ、アイスにまで誘われた。本来なら天井をブチ破る勢いで飛び上がって喜ぶところなのに、どうしてだかそんな気にはなれなかった。

ちなみになぜそんな比喻を思いついたのかというと、実際に家の天井がブチ破られてポツカリ大穴を空けていたからだった。

「無視するな」毛むくじやらがドスを聞かせた声で言ったが、それすらも無視された。

「こりゃひどい」

リュックが穴の真下から見上げてつぶやいた。まさにそのとおりだった。粉塵が部屋の照明に照らされて渦を巻き、漆喰がぼろぼろと落ちてくる。間一髪転落を免れましたというように、クラゲ型の照明が伸びたコードに捕まって穴の端でぶらぶらしている。助けてくれと明かりが不規則に点滅している。

大穴から部屋の奥のほうへ向かって亀裂が走っている。エレノアは亀裂を目でたどっていき、たどり着いた先に見慣れたコートハンガーがあった。木を模したデザインで、枝の部分にコートや帽子がかけられるというおしゃれインテリアだったが、巨大化して先端が天井につき刺さっているのを見るとそうとも言えなかった。

「成長したんだ」リュックは勢いよく振り向いた。「フォームで買ったコートハンガーだ」

「フームって？」

「おしゃれな通販サイト。ちょうど今日、面接に行ったところだよ。面接官からこの話を聞いたんだ」

リュックは頭をかばいながらエレノアのもとへ寄り、水をやると成長するおしゃれなハンガーの話を真顔で説明した。しゃがんで話し込んでいると、いつのまにか毛むくじやらの輪に入ってふんふんうなずいていた。ひとりではダメなタイプらしい。

コートハンガーの幹は体ふたつぶんの幅に成長していた。枝に実のようなものがいくつもぶら下がっているのにエレノアは気づいた。「あれは」「リュックも気づいたようで、よく見ようと顔をしかめていた。ふと気づいたようにまばたきし、顎を上げた。「監視カメラだ。監視カメラの実」

ちっちゃいのからおっきいのまでたわわに実った監視カメラは、おぞましいとしか言いようがなかった。エレノアは思わず敷布団にへたりこんだ。現実はいったいどうしてしまったのだ。

「ようやく聞く気になったか」

毛むくじやらは比較的穏やかなキーキー声で言い、エレノアの肩をぽんとたたいた。

「あなたは何者？」

「そこからはじめるのか！ もうさんざん言ったぞ」

エレノアは目をぬぐった。「ごめん。ぜんぜん聞いてなかった」

「まったく！」毛むくじやらはカリカチュアライズされたマフィアのように両手を広げて一回転した。「すごい主人公だよ」

無然とした表情で腕を組んだ。いまさらながらこの毛もじゃ、ウニから手足が飛び出たような格好をしていた。顔の部分だけ円形脱毛症のように毛がなく、その顔には牙を生やした口なんかもあったりしたのだがべつだん恐ろしいというわけでもなかった。だからといってかわいらしいわけでもなく、こんなフィギュアが商品化されたらおもちゃ屋は在庫の処分でさぞ頭を悩ませることだろう。

「いいよ。聞いてあげるから、はじめから話して」

「導き手とか言ってたな」パンツ一丁のリュックがエレノアのとなりにすわる。「それはつまり、ぼくらを導くってこと？」

「そのまえにひとつ、驚くほど有効なアドバイスをやろう」

「なんなの？」

「テレビを消すの」

リュックが心配そうな顔を向けた。付き合いが長いので、よく理解しているのだ。エレノアは「テレビを消せ」と言われるのが大嫌いだっただし、そんなふうに言う人間も大嫌いだった。「なにもしないで、テレビばかり見て」ということらしいのだが、なにもしていないわけはなく、テレビを見ているのだ。消せという連中はたいがい、テレビは悪いものと考え、テレビを見ている姿にむかつ腹を立てているようだった。ほかのことなら、たとえば本を読むとか、卓球をやるとか、クレジットカードを偽造するとか、とにかくほかのことをしてくれるととてもうれしいんだけど、とても言いたげだった。あなたたちも夕飯を食いながらお笑い番組を見るじゃないかと指摘しても、それはちがうのだという。どこがうちがうのかわからなかったし、ちゃんと説明してくれる人もいなかった。

エレノアはあらためてテレビに目を向け、『31』を見た。リビングはすし詰め状態で、リンの姿は見当たらなかった。

ゆっくりとリモコンを持ち上げ、思わず他局を選択しそうになるのぐつと押さえて、電源ボタンを押した。

「これでいい？」

「よし。いいだろう。お次はおれのこと。おれの名前は完全にオリジナルな怪物」

「は？」とエレノア。

「おれの名前は完全にオリジナルな怪物」

「なんて？」とリュック。

「もう！　なんてばかどもだ！」毛むくじゃらは地団駄を踏んだ。それから急に平然とした顔で毛の中に手をつっこんだ。白くてまるいものを取り出し、ふたりに見せる。

「ほら！ここに書いてあるだろ」

取り出したのはコースターだった。レストランなんかで出てくる使い捨ての紙製だ。リュックはコースターを受け取り、上を探して左右にまわした。青い水性ペンで、寄せ書きのようにあっちこっちから書かれている。

「おれの産みの親が書いたんだ」

「産みの親って？」

「シナリオライター！」

「わかったよ。で、そのシナリオライターが一杯ひっかけてるときに、この毛もじゃのキャラクターがひらめいたんだな。どれどれ」

「

リュックはある方向を上にして読み上げる。エレノアもほっぺたをくつつけるように寄り添ってのぞきこんだ。

「ここには『完全にオリジナルな怪物』とあるね」

「そう。それがおれの名前」

「『完全にオリジナルな怪物』が？」

「おかしいか」

「こつちには」リュックはコースターをさかさまにした。「こつちにある。『がーがーおしゃべり』」

「それが苗字さ」

「『着ぐるみか、CGか？ 予算は？』」

「おれはCGだ。『完全にオリジナルな怪物・がーがーおしゃべり』で、イニシャルCG。まちがってないだろ？」

「それ、名前じゃなくてアイディアのメモなんじゃない？」

エレノアがつっこんだが、毛むくじゃらは聞いていなかった。

「CGのCG、というわけさ。しゃれてるぜ。お次はこれを見て、ひよこひよこパソコンデスクに向かった。イスに飛び乗って、モニターを向ける。」

「これがおれの設計図」

モニターには、不正な方法で入手したフォトショップが表示され

ていた。画像が何枚も重なり合っている。よく見ると、ぜんぶ毛むくじらのイメージ画像だった。パターンはいろいろあつて、微妙に強そうだったり、微妙に愛らしかったりしているのだが、どれもヘタクソなのは変わらなかった。

「おれはついに、こいつを入手したんだ。で、フォトショでデザインし直してるところ。うまくいったら近所の大学生に頼んで3Dモデルをつくってもらうの」

「なんのために？」

「マルチメディア展開するため。これじゃ、ゲームになつてもだれも使ってくれないだろ」

「これをわたしたちに見せたのは？」

「見せたかっただけ。意味はないんだ」毛むくじらはパソコンの電源を落として、本体からUSBメモリーを抜き出した。「でも、それが人生だろ。よし。そろそろ出発だ。行こう」

イスから飛び降りて、コートハンガーの大木に向かって歩いた。途中で止まつて振り返る。

「出発だと言われたら、立ち上がるの！ おまえ、リンに会いたいのんだろ？」

「会いたい」

「だったらついて来い。おれはリンに頼まれたんだよ。お礼にキラクターデザイナーを紹介してもらうことになる。それからおまえ、そのドレス着て。普段着じゃ、追い出されるぞ」

毛むくじらは大きくて平べったい箱から衣装を取り出し、薄紙と防虫剤を放り投げた。ドレスは緑色で、やたらテカテカしていた。さらに箱から、真珠をあしらった靴と細長い棒を取り出した。棒をまじまじと見て、右に左に振ってみせた。

ドレスその他を頭に乗せ、走つて戻ってくる。

「はやくしろ。時間がない」

手渡されたものを広げてみて、エレノアはピンときた。

「ティンカーベルだ」

ドレスは安っぽくてごわごわしていて、ご丁寧に背中の中の羽まで完全再現されていた。

「人気出るぞ。はやく着ろ」毛むくじゃらは背中を向けた。「おれ、見ないから」

「ディングが好きなの？」

毛もじゃは答えなかった。

というわけで、着替えをはじめた。リンが正装しろというのだから、しかたがない。だが羽を生やして魔法のステッキを振りまわすのはドレスコードにひつかからないだろうか。「申し訳ありません、魔法のステッキはお預かりする決まりです」と受付に言われるかもしれない。エレノアはジーンズを脱いで、ふと顔を上げた。毛むくじゃらは紳士的に背中を向けていて、紳士的じゃない自分の目玉と格闘していた。顔から飛び出し頭のとっぺんからまわりこもうとするたびに、ぴしゃぴしゃと手で払いのけていた。

「いいよ。着終わった」

衣装も靴もぴったりサイズだったが、だからといってうれしいというわけはなかった。

「死にたくなってきた」

リュックが手を挙げた。「おれも着替えを」

「おまえは裸でいい。それに、裸のほうが人気出るぞ」

「これで外に出たら肺炎にかかるよ」

「外には出ない。レポーターがいるからな。だから、ここから出る」

毛むくじゃらはスカしたしぐさでぱちんと指を鳴らした。エレノアもリュックも、どうせなにも起きないだろうとてれてれていたのだが、今回ばかりはまちがいだった。油断させるような間を置いてから、コートハンガーの大木の幹の根元が爆発した。まさに大悪党が地下金庫の扉をダイナマイトで吹っ飛ばしたような感じだった。白い煙が思わせぶりに正体を隠す。天井の亀裂が大きくなり、ごろごろした塊が追加で二、三個落ちてきて、ボール紙の箱をつぶした。白い煙がゆっくりと床に降りる。それと入れ替わるように、ピー

という一本調子の電子音が耳に飛び込んでくる。ハンガーの根元には、半円形の穴が開いていた。そこにあるのは無記名債権や金塊の山などではなかった。

そこにあるのはテレビの放送が終了したあとのカラーパターンだった。

エレノアは思わず手で目をおおった。

「目がちかちかする」リユックも目をそらす。「遠近感がつかめない」

「この中に入るの？」

「そうだ」

「いったいどこへつうじてるんだ？」

毛むくじゃらはいきなりげらげら笑い出した。「けっさくだ！」

『いったいどこへつうじてるんだ？』だと！ 台本の読み合わせじゃ、大爆笑確定だな！ 教えてほしいか」

「もちろんよ」育ちすぎのティンカーベルが言った。「ワープ空間みたいだけど」

「SF用語は使うな」毛もじゃは笑いやめ、ぴしゃりと言った。「ファンタジーなんだぞ。で、どこへつうじてるのかというと、

おまえらの進むべき道につうじてるんだ。どう、意味深だろ？」

「つまり、知らないのね」

「知ってるけど、言わない。おれは導き手だから、そういうことは言っちゃダメなの」

毛むくじゃらはまた指を振った。今度はなにも爆発しなかったが、代わりに天井といわず壁といわず床といわず、四方八方で亀裂がばきばき言いながら徒競走をはじめた。家ぜんたいが、インフルエンザにでもかかったように横に細かく揺れ出す。

「家がぶっ壊れる！」衣装のせいか、エレノアは思わず汚い言葉を叫んだ。「なにやったの、このトンチキ！」

「そのまんま。だって、家があつたら冒険にならないだろ？」

「はやく行こう！」

天井から漆喰の塊がぼろぼろ落ちてくる。そのうち、もつと大きくて当たると死んでしまいかもしれないものまでが落ちてきた。リユックがエレノアの腰に手をまわす。

「待って！ テレビが」

「また買えばいい アパートもね。起きたことはしょうがないよ。それに主人公だっていうんなら、主人公らしくしようじゃないか」

「頭がおかしいんじゃない？」

「どうして？ いつもの現実よりよっぽどおもしろいよ。きみもデインクがよく似合ってる」

毛むくじやらの後につづいて、エレノアとリユックは穴に近づく。高さが背丈の半分もなかったので、四つんばいで進むしかない。エレノアは魔法のステッキを口にくわえ、リユックはバスタオルを首にくくりつけた。毛むくじやらの尻を眺めながら這い進んだ。カラーパターンがどんどん広がっていき、ピーという音が鼓膜を震わせる。どれもが吐き気を催させた。

エレノアは振り返った。買ったばかりのテレビが背中を向けている。犬のように追いかけてこないだろうかとぐずぐずしていたが、リユックにせつつかれた。

出口が消え、上も下も一面カラーパターンになった。

毛むくじやらがエコーたつぷりに話しかけた。「最後にひとこと、言いたいことがある」

「なに？」

「ひどい格好だな、おまえら」

8話 ジョン・レノン（偽者）

その部屋は、小ぢんまりとしてくつろいだ雰囲気にはセッティングされていた。今回インタビューを務めることになったネイサン・ハントが、テーブルをはさんで向かい合ったソファの一方にすわっている。よいしょと勢いをつけて腕を伸ばし、テーブルの上にあるおしゃれな水差しを持ち上げ、自分のグラスに注いだ。前かがみでグラスに口をつけ、半分ほど飲み干した。ネイサンはロマンスグレイを絵に描いたような白髪交じりだったが、五十五歳にしては若々しかったし、体臭もそれほどなかった。自宅にジムをこしらえたのは正解だった、とネイサンは言う。おかげではらわたを床にひきずらずに歩けるんだ、と。

大儀そうに背もたれに寄りかかって、満足げに周囲を見まわす。スタッフが近寄り、キャメルのスーツにピンマイクをセットする。逆側にメイク係の女がまわりこみ、顔や髪の毛をあれこれといじくりまわす。

「ありがとうございます」

メイク係はにっこりと笑みを返した。名前はサリー。ネイサンは自分に気があると思い込んでいたのだが、残念なことにサリーはだれにでもにっこりと笑う娘だった。

ネイサンは向かいの男に目を向け、やつにもジムとプールを買ってやったほうがいいだろうかと考えた。四十前後で、オタクがそのまま歳をとったような、なりふり構わない文化人だった。赤いポロシャツのすそからいまにも腹があいさつしてきそうだった。だが顔だけは青白いものの若々しく、眼光は鋭かった。

この男の才能だけは認めざるを得ない。ネイサンは思った。あのバーコード頭をスキャンしたなら、きつととてもない金額がはじき出されることだろう。

「それでは、インタビューをはじめます。よろしくお願いします」

顔の前にカチンコをつきつけられる。ネイサンは眉を上げて耳の後ろをかいた。スタッフがヤドカリのように下がっていった。

「ヘアスタイル変えたんだ。どう？」

ニヤリと笑う。本番前の余裕だ。だが余裕を見せながらも、カメラがどこにあつて、自分がどう映るかは完璧に把握していた。だれも新しいヘアスタイルを褒めてくれないのは、きつと緊張しているせいなのだろう。

ネイサンは男のプロフィールなどが書かれた紙の束とペンをテーブルから持ち上げた。長い足を窮屈そうに折りたたみ、前かがみで膝にひじを当てる。インタビュー時のいつものスタイルだ。すそから黒いつやつやの靴下がのぞいているのだが、もちろん三足いくらで売っている安物ではない。

「今日はありがとう。まずは名前を覚えてくれないか？」ツカミのジョークを言った。「いやいや、申し訳ない。だが、そう思っているのはぼくだけじゃないんだよ。きみの名前はちよつと発音が難しくてね」

男は、いや構わないよと頬を持ち上げて笑った。

「ジョンだ」背もたれによっかかって腹をつき出す。「名前はジョン・レノン」

「レモン？」

「レノン」

「レンコン？」

「ちがう。レノンだ」

「いや、失敬」上品に身をよじらせて笑う。「ジョンでいいかい？」

「いいよ。偽名だけどね」

「本名は？」

「ドクター」

「ドクター、なに？」

「ぼくはただのドクターだ」

そしてなにがおかしいのか急に腹を揺らして笑い出した。「ここ

で『あなたは何代目？』って聞いてくれないと。　　だけど傑作だ
る？　シリーズが変わって、いきなりおれみたいな腹の出っ張った
ドクターがターディスから出てくるんだ！　『やあ』とか言って。
そりゃあコンパニオンも家に帰るって言い出すよ」

ソファの肘かけをばんばんたたく。ジョンはときどき、意味不明
のジョークを言う。天才はやはり、頭の構造がちがうのだろう。

だがネイサンもプロだった。プロであるからして、たとえインタ
ビュアーという役わりだろうと自分以外に注目が集まるのはたい
へん気に入らなかった。

「　　きみは輝かしい才能の持ち主だ」

ようやく収まったジョンがすわりなおして肘かけに持たれた。口
に手をやり、うなづく。

「舞台俳優としてキャリアをスタートさせ、同時に脚本家としても
デビューした。その処女作は　　いや、これはあとのお楽しみにし
よう、みんな知ってると思うけどね。性格俳優として映画にドラマ
にひっぱりだこで、『マクダイと三百人の非正規雇用者たち』では
声優にまでチャレンジした。この作品については？」

「簡単だった。セリフといえば『お先真っ暗ですね』くらいだった
し」

「だが、いい作品だ」

「そうだな。だが派遣会社の社員が全員黒タイツでお面みたいのを
つけて『シャー』とか言ってたろ？　あれはどうかと思ったんだが

まあ、アニメだから」

ジョンは顎をかいだ。

「きみはバンド活動もやっているね」

「そうだ」

「俳優としての代表作は？」

脳を検索するように、ジョンは厳しい顔で目をさまよわせた。

「迷うだろう。出演作はかなりの数になるからね」ネイサンがフォ
ローする。「傑作も多い」

ジョンは慎重に言葉を選んでいようだった。「これがベストというわけではないが、いま頭に浮かんだ映画を言っと　『横になる男』かな」

「傑作中の傑作だ」そろそろ歯が浮きはじめてきたので、そのへんにしておけとネイサンは自分に言い聞かせた。「演技のうえで考えたことは？」

「横になろうと考えたよ」

「ほかに『おじさん船長』や『いいわけ探し』など　」

ジョンはうなずきながらコップを持ち上げてわずかに口に含み、すぐにテーブルに戻した。

「『穴掘り』にも出たね？　百八十分に渡って穴を掘りつづけるという問題作だ」

周囲を気にし出している。どうやら興味を失っているようだ。ネイサンはいちばん上の紙をめくって後ろにまわした。

「　　去年は詩集も出版している」

「まあね」

ここで勢い込んで声のトーンを上げる。「教えてくれ。ぼくは平凡な男で、アイロンがけすらまともにできないんだが」自虐ギャグで相手を持ち上げる。「きみにできないことがあれば、ぜひ知りたい。そんなものがこの世にあるのかい？」

「卓球だ」ジョンは言い切った。「あれは難しいよ。ほんものの才能が必要だ」

「いまのうちに自分の彫像をつくらせるべきじゃないかな？　きみの偉業は後世まで残るだろうから　」

「それはどうかな。後世もなにも、おれはずっとこの世にいるつもりだしな。神さまに雇われた身だから」

「神に選ばれし才能、という意味だね？」

「いや、ほんとうに神さまからオファーがあつたんだ」

ネイサンは相手の顔をじっと見つめた。絶妙な間を演出したというよりも、そうしないとこれまで築き上げてきたキャリアを一瞬で

ふいにしかねないことを口走ってしまいそうだったからだ。また紙をめくったが、さっさと本題に入ろうと考え直し、一気に最後までめくった。

「そして現在、初の映画監督作品を撮影中だ。タイトルは？」

「『コインランドリー、宇宙へ行く』だ」

「内容を説明してくれるかい？」

「詳しくはできないな」

「資料にはこうある。『超巨大コインランドリーが宇宙を旅し、ほかの惑星を洗濯しまくる』」

「それ以上は言うなよ」

「どうしてコインランドリー？」

「とくに意味はない。ウケ狙いさ。あんまり詳しくは言いたくないけど、テーマは『魂の救済』で」

「奥が深そうだ」

「ぜんぜん。よく言うだろ、『命の洗濯』って。ただの思いつきなんだ。ただのシャレなんだ。主人公たちは墮落した惑星の住人をかたつぱしから洗いまくる。魂を救い、着替えは渡さない」

「試練を与えるわけだ」

「そういう解釈もできる。いや、そうとも限らないかもしれないな。かたつぱしから洗濯されるのは若い女だけだから」

「ほかにこだわったことは？」

「あるね。これが最高に笑えるんだけど、船内じゃ、なにをするにも小銭がいるんだ。なんせコインランドリーだからね。『超空間航行に備えよ！』『艦長、小銭が足りません！』みたいな。光学迷彩スーツを着て敵に忍び寄っていると、時間が来て丸見えになって人工智能に『小銭を追加してください』と言われたり。笑えるだろ？」

で、味方は札しか持ってなくて、悪い連中は小銭しか持っていないって設定にした。札をポケットに入れたまま洗濯してシワシワにした経験、あるだろ？ あれと同じさ」

なにが同じなんだと思ひながら、ネイサンは相槌を打った。「興

味深い」

「あと傑作なのは、この船は超巨大ロボットに完全変形しないと両替できない構造になってるってとこだね。『これより両替を行う。総員、直ちに配置につけ！』ってさ。バカだろ」

「完成が楽しみだ。はじめての監督は大変だった？」

「正直、役者には恵まれなかった。実際、ほとんどが素人レベルだったし」

ネイサンはちらつとスタッフを見てから、乾いた笑いを漏らした。「だいじょうぶ、いまのはカットするよ」

「かまわないよ。中でも××なんか、ひどいもんだった。アラン・リックマンみたいに優雅でいい声してるんだけど、脳みそは石器時代ってとこだね」

「アラン」「ネイサンはかぶりを振って、言いかけの質問を追い払った。「ところで、大物が参加するって聞いたけど？」

「ああ。彼女ね」

「だれだい？」

「若手の有望株だ。家に一台以上テレビがある人なら、みんな知っているはずだよ」

「役どころは？」

「まだ決めていない。着ぐるみを着せる気はないよ。あのルックスと表情がウリだからね」

「アイドル系？」

「ひきこもり系かな　強いて言うなら」

「教えてくれよ」

ジョンは額にしわを寄せてインタビュアーを見やった。ネイサンは興味津々といった表情で微笑み、ペンを神経質にくるくるまわしている。「そういうことなら」「とジョンは言い、ポケットからリモコンを取り出してネイサンに向けた。

動いているのはジョンだけになった。

「おまえなんかに教えてやるもんか」

ジョンはリモコンを放り投げ、だるそうに立ち上がった。固まっているカメラの正面に寄り、UFO番組の司会者よろしく手を前に合わせて立った。

「見てるかい、エレノア」

手を振り、黄色い歯を見せて笑った。

「おれはジョンだ。きみの監督をすることになった。きみの人生を監督するんだ。演技を指導し、カメラへのきれいな映りかたも教えよう。きみはすばらしい素材だが、訓練ができていない。おれの言うとおりにすれば、きみの人生は完璧で、それなりに波乱万丈だがぜったい安全、だれもがうらやみ、女子高生は全員きみの真似をするようになる。そんな人生に憧れてるんだろ？ 現実の連中ってやつは」

ジョンは立ち去りかけたが、ふとあることを思いつき、くるりと振り向いた。

「おべっか使いのうぬぼれ屋め」

口をぱっくり開けたまま固まっているネイサンに近寄る。しばらくそのマヌケ面を眺めていたが、おもむろにテーブルから水差しを持ち上げると、ネイサンの股間に恥ずかしい染みを「演出」した。

「なにがジムだ。おれは自宅にプールをふたつ持つてるんだ」

一時停止を解除した。

9話 退屈脚本賞の選考

エレノアは一面緑の丘に降り立った。正確に言うと、丘の上に転げ落ちた。

うんざりするほど長い時間、カラーパターンの中を這い進んだ。

深夜、放送終了後も消さずにテレビを眺めているときがよくあるのだが、そのときの感覚に近い。これ以上テレビをつけていてもなにもはじまりませんよ、はやく消して寝なさい、と言われていているような、おなじみの感覚だ。

ティンカーベルのコスプレでハイハイをつづけていると、毛むくじやらとリュックが立ち止まり、「じゃ、また明日」といった感じであいさつし、それぞれべつの方向へ歩きはじめた。エレノアはリュックのあとをついていくことにした。なぜ別れたのかたずねなかったのだが、魔法のステッキを口にくわえているのでしゃべることができなかった。

またしばらく進むと、リュックが今度はエレノアにあいさつした。なにも言わず無造作に手のひらを向けると、左のほうへ猛然とハイハイした。これが赤ん坊であれば、そんなスピードでハイハイできるならいいかげん立って歩いたらどうだと言われそうなほどの勢いだ。どうして自分を置いていくのかと声をかけようとしたが、またしても魔法のステッキに邪魔された。

リュックはカラーパターンに吸い込まれるようにいなくなった。どうすればいいのかわからず、エレノアはその場で膝を抱えてすわりこんだ。ため息をつく。膝を胸に引き寄せて、顎で皿をついた。なにげなく手を下ろして、地面があるらしきあたりを探してみたが、手ごたえがない。尻の下に手を入れてみた。なにもない。とすれば、いま自分はどこにすわっているのだろう。

なにかしなければと思い、完全な思いつきででんぐり返しをしてみた。すると急にカラーパターンが消えた。エレノアは地面に転げ

落ち、ひとりパイルドライバーの要領で頭をもろに打ちつけた。

マットから頭を引き抜いて、うねる緑のじゅうたんを見下ろした。小高い丘の上にいるようだ。草に触れる。水分をたっぷり含んだ丈の短い草で、妙なことに命を感じた。命の大切さや尊さなら、ネイチャーものの番組『大自然の勝ち』や、医療ドラマ『ICUと云えなくて』で毎週叩き込まれていたのだが、思えば長いこと草に触れたことがなかった。空気がおいしい。目にも神経にも優しい澄み渡った青空が途方もない勢いで全方位に広がっている。

ここにリンがいるのだろうか。

リンを探そうか。だけどひとりでは、どうしたらいいのかわからない。リュックはどこに行ったのだろう。それにここはどこだ。バスで帰れる距離だろうか。アイス屋どころか人口の建造物もまったく見当たらない。

そのとき、久しぶりにピー以外の音を聞いた。コロコロとしたチャイムの音色が調子つばずれなメロディを奏でていて、それほど遠くないところから漂ってきているようだ。エレノアは立ち上がり、丘を駆け下りた。慣れないハイヒールでずっこけそうになったので、思い切って脱ぎ、正気を保っているほうの手で持つことにした（もう片方の手は魔法のステッキを持っていて、こちらはだいたい正気を失っていた）。だが裸足で草を踏む感覚は気持ちいいとしか言いようがなく、チャイムが奏でる音楽を聞いていると、駆け下りながらくるくるまわって魔法のひとつでもかけなくなるのだった。

喜びとともにならかな斜面を下りていく。コロコロのチャイムが大きくなっていった。ふざけて魔法のステッキを振ると、ふもとの緑に白い染みが出現した。ビックリしたのと立ち止まろうとしたのでかかとを踏ん張ったのだが見事にすべらして足が空中をかき、後頭部をしたたかに打った。

そのままずるとふもとまですべり落ちる。

めくれ上がったドレスのすそを下ろして、よろよろと立ち上がった。腕は草の染みだらけだし、足もとを見ると背中が一個取れた。

て落ちている。

十歩先に、車が停まっていた。スピーカーから例のメロディがキンコンカンと流れている。白とピンクのまるっこいバンで、やたらめつたらとステッカーが貼られていた。アイスクリーム屋さんだ。エレノアは急いで近づいた。青とピンクのロゴが、バンの正面に書いてある。『バスキン・ロビンス』と書いてあった。

リンを探そうとしたが、エレノアはすぐに暗い面持ちでかぶりを振った。ここにいるとは思えない。『31』のスポンサーは『ベン&ジェリー』だったからだ。

カウンター代わりの横側の窓のところに立って、中をのぞいた。奥にサーバーがあって、手前の透明のケースにはミントチョコレートチップやベリーベリー、バナナにペカン、オレンジシャーベットなどのバケツのずらり並んでいる。見ているだけでほっぺたが縮こまり、歯の根っこがうずうずしてくる。

「だれかいけないの？」

分厚い手が後ろからエレノアの肩をつかんだ。もろ出しの肩に生で触られ、窓枠に後頭部をぶつけた。

浅黒い肌のおじいさんがまっすぐエレノアを見ていた。白髪交じりの顎ひげはきちんと整えられていてなかなかハンサムだったが、アイス屋の帽子がまったく似合っていなかった。目に宿る悲しげな光は帽子のせいなのかもしれない。腕まくりした白いシャツからたくましい腕がのぞき、これから上げようとしているのか下げようとしているのかわからない中途半端な格好で手のひらを向けている。おさわりの体勢に見えなくもないが、息子の嫁にちよっかいを出すようなタイプには見えない。

「あんだ、エレノアだな」

おじいさんがほとんど表情を変えずに口を開いた。

エレノアは急いでうなづく。「えーと――」

「話す必要はない」おじいさんはさらにエレノアの目をのぞきこむ。それから微妙に眉を上げ、微妙に表情を和らげた。ちよっかいを出

しそうなポーズで固まっていた腕を下げる。「わたしはすべて知っている。業界関係者というやつだ。わたしには、あんたが歩んできた道が見える　来月のフレーザーのように」

「ほんとに？」

「あんたは『完全にオリジナルな怪物』に導かれ、ここへやってきた」

「そうです」

「リンの指示どおり、正装してきたな」

「ティンクでなければね」エレノアはうなずいた。「リンがここにいるの？」

「そしてあんたは」とおつかぶせる。「くさい連中とともに大いなる試練をくぐり抜けてきたわけだ」

「え？」

「ファンタジーだ。三人組のパーティ。みな勇敢で、正しい心を持ち、とても口がくさい。足もくさい。なんとなく全身がくさい」
「エレノアはさえぎった。『ここでだれかに会ったのはあなたがはじめてよ』」

「では、そのぼろぼろの格好は？」

「丘を転げ落ちたの」

思案げにうなり、顎ひげをさすった。「なるほど」と斜め上をチラツと見上げたのでエレノアもつられて見上げたのだがとくになにもなかった。

「そうか。場面をひとつカットしたな」

何度も名前を聞いたのだが、おじいさんは答えなかった。愛称みたいなものはないのかと問いただすと、「愛称は『おじいさん』だ」と答えた。

「リンはどこ？　あとから来るの？」

「時間がない。まずはアイスクリームを食べなければ」

おじいさんは大股ですたすたとバンの向こう側にまわった。から

がらとドアを開ける音がし、鳴りっぱなしの音楽が消えた。

「いまのうちにフレーザーを選んでおけ」しゃがんでなにやら準備をしている。「だが、慎重にな。これは、あんたが思っている以上に重要なことなのだ。結婚相手を決めるように選びなさい」

「チョコミント！」エレノアは速攻で選んだ。

「だから、結婚相手を選ぶようにと」

「チョコミントが好きだもん」

「なるほど。あんたの旦那は幸せ者というわけだな」

「まだ結婚はしてないけど」

「しかし、いずれはするんだろう？」

車内に収まったおじいさんが、ケースを開けながらなんとはなしにたずねる。エレノアは考え込んだ。言われてみればいままで考えたことがなかったし、リュックが言い出したりにおわせたりしたことも一度もなかった。いまのままで満足だし、どうせずっといっしょにいるつもりなので結婚などしてもしなくても変わらない。

「そうともかぎらないぞ」

頭の中を読んだのか、表情に出ていたのか、おじいさんが口を開いた。

「なぜ退屈な結婚式を、顔も見たくない親戚連中を集めてわざわざやるのか。イベントだな。人生にはイベントが必要なのだ。日記に書けるような出来事だな。『昨日と同じ。終わり』じゃ、日記も人生も長くはつづかんだろう」

「わたしの親戚にも、子供のころに似たようなことを言われた」エレノアは思わず顔をしかめる。そして口をひん曲げ、かなり悪意のこもった声真似をした。「『テレビばかり見て、なにもしない。やりたいことはないの？』って。だからわたしは、『テレビを見たい』って答えたの。ほんとにそうだったから。そしたら親戚のおばさんはおかあさんのところに行って、心配そうにひそひそ話してた。わたしが万引きかなにかでもしたみたいに。だから、テレビを見るのは悪いことなんだって、そのときは思ったの」

鼻をすすってつづける。

「やりたいことってなに？ イベントって？ わたしがやりたいことは――」

どうしてこんな身の上話をしているのだろうか？ ステッキを持つた手で頬をぬぐう。

「心配されなきゃいけないの？ やりたいことをやってるだけなのに。変わってるねとか、頭がおかしいんじゃないかとか、将来口くなくならないとか――」

「そんなふうに言われたのか」

「ううん。でも、話しているのが聞こえた。おかあさんは取り合っていない感じだったけど、だんだん見る目が変わってきた。心配してる目つきなの。心配？ 将来が心配なんだって。将来ってなに？

頭がおかしいのはおばさんのほうじゃない！ その親戚のおばさん

「苦勞して息を吸い込む。「卓球の元オリンピック選手なの」

おじいさんはなにも答えなかった。ただ黙ってアイスを差し出す。

「これはおまけだ」

と言つて、チョコミントをもう一個差し出す。受け取ろうとした手は魔法のステッキを握っていた。

「魔法のステッキはそのへんに置いておけ。たぶん、もう必要ないから。こいつも用なしか。恥ずかしい思いをして買ったのに。

孫のプレゼントだとかウソをついて――」

おじいさんはぶつぶつ言いながら、引き出しから安っぽいコンパクトのようなものを出して、向こうに放り投げた。

「あんな」なにか思いついたのか、おじいさんは身を乗り出した。

「この商売をはじめるまえ、わたしはサトウキビ畑を栽培していたんだ」

「そうなの」

「なぜサトウキビを栽培していたと思う？」

「わからない」

「わたしもだ。だからやめた」

「なんの話？」

「身の上話だ」ニコリともせず言う。「あんたを元気づけようと思つて」

あまり元気づかなかつたのだが、とりあえずお礼を言った。

おじいさんは横を向き、だれかに親しげな様子で話しかける。「連れは注文したぞ。あんたはなにがいい？」

だれもないはずなのに、答えが返ってきた。「バナナスプリット」

「うちにはない。『バスキン・ロビンス』だつて、何度も言つてるだろう」

「名前を騙つてるだけでしょ？」

声がおかしそうに言う。そこでだれかがしゃべっているというよりも、スピーカーをとおして話しているようにざらざらしていた。無線とか、ラジオとか、テレビとか、そのたぐいだ。

「リン？」

両手のアイス車をにぶつけないように、慎重に頭をつっこんだ。

おじいさんが表情を和らげながら、ストラップでぶら下がった石鹸みたいな箱を指差す。箱は携帯用のテレビで、小さな画面にリンの顔がいつぱいに映っていた。映像は揺れていて落ち着かず、たまに背景がちらつと割り込んでくる。どうやら自分撮りをしているようだ。

リンは待機中といった感じでぼんやりしていたが、エレノアがもう一度声をかけると、まばたきをして焦点を合わせた。目が合ったとたん、リンは笑顔をはじけさせた。

「あ、いいの持つてるね」おちやらけた様子で言う。「うちのリュックも、チョコミントが好きなのよ」

「よかった」思わずエレノアは口走っていた。胸がじんわりする。

「あ　会えてよかったって意味」

「わたしもよ。　ところで付き合ってくれてありがとう。こんなとこまで来させちゃって」

「あなたに会えるならどこにだって行く。羽が生えた服だつて着る」

「で、においは取れた？ 連中といっしょにいと、シャワーの二、三回じゃにおいは落ちないから、たいへんよ」

「その場面はカットされたようだ」

「そうなの？ どうして？」

「さあ。どうしてだろうねえ」テレビに向かっておどけたように肩をすくめる。どうやらふたりは付き合いが長いらしい。「注文しないなら出てってくれ」

「はいはい。じゃ、チョコレートファッジをひとつね」

「まいど」

アイス屋のおじいさんがリンのぶんを用意しているあいだ、エレノアはカウンターにひじをついて、うつとりとリンを眺めていた。実際に会ったり握手したりはできなかったが、まるで特別な友達のように笑いかけてくれた。それでもうじゅうぶんだった。部屋にぶちまけて散らかしたままだった親戚のおばさんや子供時代の思い出を、急いでたたんで新しい引き出しにしまいこむ。そういえば、かなりひどい顔をしているにちがいない。エレノアはほてった顔をなんとかしようとしたが、両手にアイスではどうしようもない。

「わたしも去年はそんな顔をしてアイスを食べてた」リンが言った。「専門家じゃないし、わたしも人のことはまったく言えないんだけど、話をしてみる？ 聞いてあげるよ」

「いいの。雰囲気が暗くなるから」

「じゃ、聞かない」いつのまにかアイスを手に持っていた。「ただ食べるだけ」

手持ちのカメラをいっばいに引き、乾杯するようにアイスを掲げた。

「あなた、どこにいるの？」

「トイレ」

「連中から逃げてきたのね」

「それもあるけど。この家にはトイレがひとつしかないから。用を

足したくなればみんな帰るでしょ」

リンはひょいと眉を上げて、チョコレートのアイスに口をつけた。複雑な表情でうなる。

「うーん。便座にすわって食べるなんて。一生忘れなそう」

「ははは」エレノアは声を上げて笑った。自分のに歯を立てる。

「申し訳ないんだが、時間がない。本題に入ろう」

「本題って？」

おじいさんは携帯テレビを壁からはずし、向こう側から外に出た。リンが遠ざかりながらエレノアに笑いかけ、手を振る。

陰でしばらくどたばたやったあと、折りたたみのイスとテーブルをわきに抱えて小走りに駆けてきた。テーブルを広げ、イスを広げる。イスはキャンプで使うような安っぽい代物で、背もたれに銀色の星マークがプリントされている。

「さ、スターはこちらに」

たぶん自分のことだろうと言われたとおりにすわった。小さすぎるうえに柔らかい地面にパイプの脚がめりこみ、お望みとあらばいつでもひっくり返れそうだった。エレノアはスカートを肘で押さえ、中身が見えないように脚を組んだ。

おじいさんは携帯テレビをテーブルに置き、よっこらせつとべつのイスに腰かけた。

「申し訳ないんだが、時間がない。本題に入ろう」

「本題って？」

「ふたりとも、レコードが壊れちゃったの？」

リンがツツコミを入れる。おじいさんは不機嫌そうにテレビを見下ろした。分厚い手を組んでテーブルに寄りかかり、「これから大事な話が」と言いかけたが安っぽいテーブルがぐらぐらしてすっ転びそうになったのでやっぱり膝の上に手を戻した。

「見てのとおりわたしはただのアイス売りなのだが、リンに助けを求められたのだ。テレビ界と現実の均衡をもとに戻さねばならん」

「どんなことになってるか、あなたも知ってるでしょ？」

リンがいつになくシリアスな声で言った。テレビ界をもとに戻す、
というのは大賛成だ。エレノアは言うべきことを考えながら右側の
チョコミントを攻め、かなりの損害を与えた。

「今日はさんざんだった。ミーカがテレビから話しかけてきて
『きみを監視している』って言うし、テレビは壊しちゃうし、演技
の下手な警官とかヘンな毛むくじやらが出てくるし。家を破壊され
ちゃった。でね、ミーカはわたしの番組をつくるんだって。どうや
るか知らないけど、いうことをきかないとおもしろい番組をめちゃ
くちやにしてやる、って。実際しっちゃんかめちゃか。テレビも現実
も」

「あのハナクソ喰らいが」おじいさんは汚い言葉を使った。「いま
でこそ神さまだなんだと威張りくさっているが、わたしはあいつが
小僧のころから知っているんだ。とんでもない悪ガキでな、わたし
は何度も言ってやったんだよ、『ハナクソは喰うな』ってな。『耳
クソならいいの?』と平気な顔で聞き返すもんだから、『喰えるも
んなら喰ってみろ』と怒鳴りつけた。そしたらやつこさん、耳に指
をつっこんで、ほんとうに耳クソを喰いやがった。そしてなんと
言ったと思う?」

エレノアはかなり聞きたくなかったが、話の流れでしかたなくた
ずねた。「なんて?」

「『思ったよりも苦いんだね』だと」

「もしもーし」

リンがこちらをのぞきこみ、手を振っている。

「耳クソを喰う話をしにこの子を呼んだわけじゃないでしょ?」

「そうだ。時間がないのだ」

リンは真顔でエレノアのほうを向いた。「あなたが狙われている
のは、力があるからなの」

「力?」

「番組と現実をこっちゃんにする力だ」とおじいさん。

「だからミーカはあなたを利用してるの。現実を番組をひっくり返

すためにね」

「でも、両方をもとに戻すのに、どうしてわたしが必要なの？」
「逆もまた真なり」

おじいさんは厳かな調子で言った。が、だれも反応しないので急に不安そうに付け加えた。「意味は合ってるかな？」

「このおじいさんが言いたいのは、現実と番組をごっちゃにできるなら、もとに戻すことも可能だってこと。あなたはこの事態を収拾できる唯一の鍵なのよ、エレノア」

「そういうこと」おじいさんはほっとして言った。「ぜひ、力を貸してくれ」

エレノアはふと思い出した。「『31』も終わっちゃうの？」

「そうね。でも、もともと今日で最終回だったから。しょうがないのよ」

「おもしろかったのに。わたしのいちばんのお気に入りだった」

「ありがと」

「新番組の予定は？」

「ううん。それにこの状況じゃね。ほかの番組は、どんどん退屈で意味不明で、いかかわしくなってきた。おもしろい番組は打ち切りになって、新番組がぞくぞくとスタートしているの。たとえば

なんだっけ？」

「『数学その一』だ」おじいさんが引き継いだ。「視聴者参加型で、数学の問題を解かせる番組だ。あれはひどい」

「ほかに『量子力学』とか」

「まったく笑えないんだ」

「あと、『会社勤め』なんてのも。主人公は会社に行って、お昼を食べて、イスにすわって、時間が来たら帰るの。それだけ」
「タイトルは傑作だけだな」

「『年中行事』」リンはコーンをかじった。

「くだらん連作ドラマだ。　　そうそう、『それぞれの結婚』ってやつ。あれもひどかったぞ」

「だれも離婚しないの」

「『街角お笑いパフォーマンス』も　　」

「それ、おもしろそうじゃない」エレノアは口をはさんだ。

「ぜんぜん。本人たちがおもしろがってるだけ。それから　　」

エレノアはチョコミントにかぶりつきながら、次々と退屈な番組を挙げるふたりの話を聞いていた。ひとつを平らげ、もうひとつに顔を向けながらべとべとの手をさまよわせた。ドレスで拭こうとして思いとどまり、おじいさんで拭こうとしてイヤな顔をされ、しかたないので地面に手を伸ばして草でぬぐった。

ネタが尽きたのか、リンがため息をついた。　　ひどい世の中」

「まるでテレビ現実だ」

「なに？」体を起こしてエレノアは聞き返した。

「『テレビ現実』だよ」おじいさんが繰り返す。

「わたしたちが見るテレビのこと」

「あんたらの現実を見るんだ」とおじいさん。「退屈な現実をな」

「こっちは世の中楽しいことだらけだから、たまにはテレビ現実を見て退屈な気分になるのよ」

「家族で夕飯を食いながらな」

エレノアは混乱し、しばらく固まっていた。アイスが垂れてきたので、急いでベロでコーンのまわりを舐めた。「つまり、テレビ界ではテレビ番組が現実ってわけね？」

「そういう言いかたは無神経だと思う」おじいさんはエレノアを見据え、低く抑えた声で言った。「『テレビ番組』なんていうのはな」「ごめんなさい」エレノアは謝りながら、なにに対して謝っているんだろうと思った。「退屈なほうがいいの？」

「当然だ。テレビ現実だからな。退屈で平凡で、飽き飽きするような内容ほどいいのだ」

エレノアはだいぶこんがらがってきた。

「だいぶこんがらがってきたんだけど」「エレノアの舌もこんがらがってきた。」

「ようは、まったく正反対を目指せばいいってこと」

「まずはテレビ現実をもとに戻さねば。もとの退屈な状態に」
なんて間の抜けた話なんだとエレノアは思った。たしかにいきなり殺人事件が起こったりヘンなファンタジーのキャラクターが家に出現してインターネットをはじめられるのはまったく迷惑な話なのだが、わざわざがんばって現実を退屈にしようとしている。がんばらなくても自然と退屈になるものなのに。

だがエレノアとしては、おもしろい番組がなくなったら死んだも同然だった。べつにエキサイティングな人生を望んでいるわけじゃない。ふだんどおり、おもしろいテレビを見ながらだらする生活を取り戻せるなら、なにが現実だかなりあやしくなってきた。いるのだが現実的なことであればなんだって協力するつもりだった。それに、もとに戻ればリンの新番組を拝めるかもしれない。

「わたしはどうすればいいの？」

「協力してくれるのね。ありがと。ここにあなたがいれば、抱きしめたところなんだけど」

「今度お願い」エレノアはうつとりと言った。「ぜひ」

「やるべきことは簡単だ。敵さんはいま、現実世界を使って番組制作を進めている。脚本を書き、俳優を雇ってな。しかしなにこともそうなのだが、経験が浅いうちはトラブルつづきだ。現場は混乱し、スターはわがままを言い、ギャラの支払いは不明確。そもそも自分たちがなんのためにやっているのか、まったく見えていないのだ」
エレノアはマクドナルド付近で発生した警察官と犯人のやり取りを思い出した。

「たしかに、番組になってなかった」

「だからミールは、大物監督を雇ったって話よ。」「ジョン、ナン
ト力って人。インタビュー番組、見た？」

「いいえ」

「現実はそのように、おもしろかったり、感動したり、ときどきわくわくするもんじゃない。連中がすっかりした『番組』をつくれるようになってはおしまいだ。そうなる前にだ」

おじいさんは立ち上がって、バンのほうへいそいそと走っていった。そのまま向こう側へ消える。

「どうかしたの？」エレノアは足を組み直し、リンにたずねた。

「計画の準備」

リンは手持ちのカメラを積み重なった雑誌の上に置いて、トイレツトペーパーを巻き取って手をぬぐった。

「あの人ね、ただのおじいさんに見えるでしょ？」便器のふたを上げて紙を落とし、水を流した。「でもほんのところ、神さまなの。テレビの神さま」

おじいさんが戻ってきた。「正確にはちがうぞ。わたしは引退した身だ」

よっこいしょとイスに腰かけ、かなり厚い紙の束をテーブルに置いた。

「神さまを引退？」

「もう歳だからな。それはいいんだ。さつき、わたしはサトウキビを栽培していたと言っただろう？」

エレノアはうなずいた。

「やめてからは、自分の人生について考えた。そして心の声に従い、夢を追いかけることにしたのだ」

「神さまなの？」

「神にもできないことはあるさ。たとえば物語の創作」
「どうして？」

「わたしは物語を書かれるほうだからな」

「作家になりたかったの」

「いや。脚本家志望」

おじいさんは親指を舐め、紙の束を繰りはじめた。だいたい三等

分し、ひとつをエレノアに、ひとつを携帯テレビの前に置いた。

「これは『テレビ現実』用のシナリオだ。まずはこの中から、最高に退屈なシナリオを選ぶのだ」

「おじいさんが書いた脚本？」

「わたしが書いたものも混じっているが、ほとんどは一般公募で集めたものだ。選考を手伝ってほしい」

「わたしたちには、退屈ってよくわからないから」

リンが言った。エレノアは割り当てられた紙の束を見下ろし、それからふたりを交互に見た。退屈なら任せるとでも言えばふたりを安心させられるところだったが、言いたくなかったのでやめておいた。

そんなわけで、エレノアを中心に退屈なシナリオ選びをはじめた。

「これなんかどう？ 『ぼくはパンがきらい』っての」エレノアはさっそく選んだ。「あらずじは『男がパンを喉に詰まらせて死んだ』」

「だめだ、おもしろすぎる」

「おもしろくないよ」

「パンが人生の無常さを暗に示しているだろう」

「考えすぎだと思うけど」

「次」

「えーと」リンはテレビの角度を調整してもらい、自分の割り当てを読んでいた。「ページ、めくって」

エレノアはめくってあげた。リンが発表する。

「題名は『鮫 鮫 ぱにつく』で」

「いらん。現実では鮫に襲われたりしない」

「襲われる場合もある」エレノアは意見した。

「ちよつと買物に出て襲われるというものでもないだろう」

「『ふたりは親友』」 エレノアは途中まで黙読した。「これ、そうとうつまらない。ただ話をしてるだけ。オチもないし、筋もない。キャラクターも魅力がない」

「『親友』というのがひっかかるな。『ふたりはほとんど赤の他人』だったら採用していたかもしれんが」

「友達いないの？」

おじいさんは答えなかった。

「あ！これ、おもしろくなさそう」リンが声を上げた。「タイトルは『ぼくは妹に恋をした』。わーお」

「期待できそう」エレノアはさぶいばを立てた。「内容は？」

「血のつながっていない妹がいて、なぜか両親は事故で亡くなつていて、主人公が妹の行動をひたすら観察してる」

「却下。いかがわしすぎて先が気になる。それに、その手の話はテレビ界の闇マーケットじゃ大人気だ」

「ねえ、わたしが選ぶんでしょ？」エレノアはつつこんだ。

「そうだった。つい、指図する癖が」

エレノアは次の脚本を取り、題名を読み上げた。

「『家族』。ストレートだし、興味を惹かれない」

またおじいさんからツツコミが入るかと思つたが、注意されたのを気にしているのかなにも言わない。

「家族は、ふつうだね。『朝。一家は朝食を食べる』。ここからセリフ。『おい、かあさんや。そのサラダを取ってくれんか』」

「

「なにそれ。時代劇？」とリン。

「現代みたい。けどみんな、セリフが妙に年寄りくさいの。子供まで」

「だれが書いたの？」

おじいさんはなにか言いたげに口をもごもごさせていた。

「その わたしが書いたものだ」

「最高につまらない」エレノアは心から褒めた。「先を読むのが苦

痛だもん」

「やるじゃない」

おじいさんは最高に複雑な表情を浮かべていた。

「ひとまず、これで行きましょうよ。時間もないことだし」

「出来レースだと思われるかもしれん」

「このあとは？」エレノアが聞いた。

「ほかの脚本も見ただろうが」「おじいさんはまだぐずぐずしていたが、リンにせっつかれて今後の展開を話しはじめた。簡単に言うとおじいさんが（どうやるのかは知らないが）現実世界に残り、退屈な脚本を抱えて世直しの旅に出るということだった。

「とりあえずはこの脚本で足りるだろうが、退屈なシナリオがもつと必要になる。あんたには今後もちよくちよく選考を手伝ってもらう」

「わかった」

「テレビ界を直すのは簡単だ。ミーカに説教を垂れてやればいい」

「うん」

「最後にあんたを」

リンがさえぎった。「それはあとで。それでも混乱してるんだから」

「情報は小出しに、か。なるほど」おじいさんはうなずいて、エレノアに向き直った。「住所を教えてくれ。定期的に脚本を送るから住所で思い出した。」「そうだ。電話していい？ 実家に」

エレノアはポケットを探したが、ポケットなどどこにもなかった。手でだけが素どおりした。ティンクだったのを忘れていた。まったくいまいましいことだ。

「家が完全に破壊されたから」「エレノアはだれに言うでもなくつぶやいた。」「住まわせてもらわないと」

「ご両親とは、あまりうまくいってないようね」

エレノアはうなずいたが、いかにリン相手でも、もう一度あの話をする気にはなれなかった。

「電話はそこにある」おじいさんは携帯テレビを指差した。

「そう。わたし」リンが冗談めかして手を振る。

「リンが電話してくれるってこと？」

リンはなにか言いかけたが、おじいさんが無造作にテレビを持ち上げたので口を閉じた。おじいさんはテレビの背中側を見てなにやら探している。なだめるように「すまん、もう少しで終わるから」とつぶやきながら、縦にしたり横にしたりとこねくりまわすうち、スイッチかなにかを探り当てたのかカチツという音がした。

縦にして両側から押しつぶすと、厚さが半分になった。おもしろいようにどんどん折りたたまれていく。仕上げにアンテナを伸ばす。できあがりはどこからどう見ても携帯電話だった。

おじいさんから受け取った。液晶部分に数字が浮かび上がっている。リンの姿はない。

「リンはどこへ行ったの？」

「心配ない。テレビに戻せばまた話ができる。変形させるのはかなり複雑だが、これを読めばわかるだろう」

説明書を受け取る。ペラペラの紙一枚で、細かい字でびっしりと注意書きが記されている。見出し部分に太字で大きく「注意！ 話しかけないでください」とあった。

「そいつはデジタル家電製品ならなんにでも変形できる万能機械だ」「すごいね」

「そこが厄介なのだ。なんでもできるというのがな。なんでもできますよと言われたときにかぎって、なにをすればいいかわからなくなる。『どんな音楽を聞くの？』『なんでも聞きますよ』『たとえばどんな？』『えーと』という会話がしょっちゅうあるような」

「わたしはテレビが見たい」
「であれば、テレビを買えばいい。なんでもできるからこそ相手にされず、そんな世の中に絶望している。昔は、自ら持ち主に提案していたようだよ。『音楽は聞きます？ パンでも焼きましようか？

ラベルのプリントなんかどうです?』と。だがそのうちすっかりイヤになって、ひきこもりの真っ最中というわけだ。天才家電の宿命だな」

エレノアは注意書きを読んだ。「『この子の名前はマリーエです。変形させるときは謝ってください』だって」

実家の番号をダイヤルする。すると急に暗くなった。暗くなったときにだれもがするように、エレノアは空を見上げた。くすんだ青空に雲に太陽、それらは頭上からまるごと消えていて、代わりに黒くて半透明な夜空がおおいかぶさっていた。妙な感じだった。夜空はこんなにつやつやしていないし、近すぎる気がしたし、ゴゴゴとうなって大地をゆらしたりもしないはずだ。つやつやの夜空の向こうに、赤や黄色や青の染みがぼんやりと渦巻いている。美しいといえなくもなく、星雲のようにも見えたが、洗濯物のようにも見えた。「敵の宇宙船だ! 遅かったか」

おじいさんがわかりやすく叫んでくれたのと、空を端から端まで見たのとで、ようやくふつうの空でないことを理解した。大きすぎて一望できないいいかげん首が痛くなってきたのだが、四角くて白っぽく、中心にまるい窓があるようだった。宇宙船だというのは納得が行かない。どう見ても巨大なコインランドリーだ。

「はやく車に乗れ! 逃げるのだ!」

こっちへ来いという身振りをしながら、車に乗り込んだ。エレノアは携帯電話を取り落とした。あわてて拾う。おじいさんが運転席からなにごとか怒鳴ったが、振動が激しすぎてなんと叫んだのかまったく聞こえない。

エレノアはよろめきながら車に向かう。一步また一步と裸足で大地を踏みしめていたのだが、そのうちだんだんと大地を踏みしめていなくなっていく。足もとにどんどん空気が集まり出し、エレノアを持ち上げた。宙を歩いていたのはほんのわずかで、その後は文字どおり空気におみこしを担がれ、そして放り上げられた。空中でじたばたし、さかさまになり、仰向けになる。われながらひどいあ

りさまだと思い、どうしたら空中でまともに恥ずかしくない格好ができるだろうかと考えた。

ちょうど仰向けになったときに気づいたのは、湖ほどもある（よ
うな気がする）コインランドリーの投入口がパツクリと開きはじめ、
にやけた口をこちらに向けているということだった。投入口に吸い
込まれようとしているのだとわかり、またじたばたした。そのせいで
頭が下を向き、だいぶ遠ざかった緑の大地が目に入った。落ちた
ら死ぬような気がしたので、逆らわずに吸い込まれようと思った。
ただ、どうすれば恥ずかしくない格好でいられるのかだけは教えて
ほしかった。

携帯テレビ（いまは電話だ）がぶるぶる震えだした。ひとことでは
言いあらわせない複雑な回転をしながら苦労して液晶画面を見ると、
実家からだった。よりによってこんなときに。エレノアは無視
することにした。親はきつと娘を心配してかけてきたのだろうか、
いまは自分のことで手いっぱい、とても親と話す気分にはなれない
のだった。

ランドリーの投入口は半分も開いており、にやけた口にはもはや
見えなかった。完全に洗濯機に見えた。中には何千人分もの洗濯物
が大渦巻きを演出していた。なにをされているのかといえば、洗濯
されているんだろう。渦の中からこの世のものとは思えない人間の
悲鳴がいくつも聞こえ、ああやっぱり電話に出ればよかったと後悔
した。

「心配するな！」おじいさんの声がかすかに聞こえた。「ただのテ
レビ番組だ！ てきとうにあしらえ！ だらだらするのだ！ ぶら
ぶらしろ」

10話 テレビ化した日常

リュックはしばらくカラーパターンの中を這い進んでいたのだが、なんの前触れもなく目の前にエイミルの疲れた顔があらわれた。そのせいでしばらくのあいだ、リュックの世界はエイミルの顔だけになった。面接で会ったときもそうとうお疲れの様子だったが、いまは生きているかさえ疑わしい状態だった。まぶたは垂れ下がり、とくに右側はほとんどくっつきかけていた。口もとはだらしなく開かれていて、いまにもよだれが糸を引きそうだった。正気を保っているのは頬だけのようで、こんな顔にはいたくないとひくひく動いては逃げ出そうとしている。

他人の顔がいきなり目の前に出現したというのに、エイミルはなんの反応も示さない。それなので、逆にリュックのほうが自分の存在を疑いはじめた。

エイミルの口が、ついによだれを垂らした。

リュックの脳みそが必死になって動き出した。四つんばいになっている。ハイハイはしていないようだ。手とひざがひんやりする。下を見て納得した。リュックはいま、ガラステーブルの上でハイハイしていなかったのだ。

小ぢんまりとした部屋で、壁がまるっこくカーブしていた。テレビがあつて、アメーバみたいな形の水ワイトボードがあつて、おしやれだがなんだかよくわからないぐにやぐにやしたオブジェがあつた。壁掛け時計は針が十三本あつて、それぞれの数字を指したままピクリとも動かない。残りの一本だけが活発に動いていて、恐る恐るといった感じでほかの針に寄り添ってみたり、気が狂れたようにぐるぐるまわり出したり、縁の部分に触れないだろうかと背伸びをしたり、いたずらっぽくほかの針の後ろに隠れてみたりしている。

疑いようもない。フームのオフィスの一室だ。

あらためてエイミルの顔を見た。顔だけじゃなく全体を見た。ソ

ファにだらしくすわり、ジャケットが肩からずり落ちている。シヤツは染みだらけだったし、ネクタイの上からネクタイを巻いていた。すでに巻いているのに気づかず、うっかり巻いてしまったのだろう。

「久しぶりじゃないか」二本ネクタイが口を開いた。顔が全体的にひきつっていたが、どんな表情を浮かべたがつているのかわからない。「どこへ行っていたんだ、三ヶ月も無断で欠勤して」

「三ヶ月？」

「ドラマじゃないんだ、繰り返さなくてもいい。指折り数えていたから」声が尻すぼみになる。「きみの勤務態度は　すばらしいという報告が　」

「ここ、もしかしてオフィスですか？」

「もしかして会議室だ」

エイミルはうわごとを言いながら腕をゆっくりと持ち上げ、テーブルの向かい側を指差した。

「そしてきみがいまケツを向けているのが、取引先の社長で」

急に言葉を止めた。目が裏返し、がくと仰向いて頭を背もたれにぶつけた。「名前は　」

「わたしはスノツリだ」

社長とやらが尻のほうから話しかけてきた。リュックは頭を下げ、股ぐらをのぞいた。白髪の老紳士がさかさまになっている。

「よろしくな」

いまさらどうすることもできないので、リュックはとりあえずあいさつを返した。「はじめまして　」

スノツリ社長は口ひげがおしゃれで、微笑みは温和そのものだ。寄り添う孫にヴェルタース・オリジナルをあげて特別な気分させるようなタイプだった。

「さあ、握手をしよう」

腰を浮かせ、リュックの股の下に手を差し入れる。リュックも手を伸ばして、あれこれ苦労しながらもなんとか四次元握手を成功さ

せた。

「こちらの 会社は 「エイミルは呼吸が浅くなってきている。なんか 宅配業みたいな」

「宅配業だ」スノツリ社長はうなずいた。リュックのふくらはぎをぽんと叩く。「きみ、名前は？」

「リュックです」

「なかなかパリッとした若者じゃないか、エイミル」

「そうですね」「と言ったきり、エイミルは動かなくなった。

「シャキッとしているな」取引先の腕がソファからだらりと落ちても気にする様子もなく、スノツリ社長はえびす顔でつぶけた。「目の前に突然あらわれる心意気というのかな。感心したよ。若いうちはそうやって体を動かし、仕事を覚えるものだ。フットワークが肝心だからね」

しばらくリュックのふくらはぎを撫でていた。リュックもどうしていいかわからず、撫でられるがままになっていた。

「そうだ、名刺を」-と言いかけてから、スノツリは大げさに口を開けて驚いたような表情を浮かべた。「いいことを思いついたぞ。わたしもきみにケツを向けて渡すでしょう。若者は見習わないと」

リュックは丁重にお断りして、テーブルからそろそろと足を下ろした。ふかふかのじゅうたんが足の裏をくすぐり、そういえばパンツ一丁で首からタオルをかけただけの格好だったと気づいた。だが、なにことも気づくのに遅すぎるということはない。あわてるな、と自分に言い聞かせる。スノツリもエイミルもまったく気にしていないようだったし、社長などは「若者を見習って」ズボンを脱ぎかけたほどだ。素っ裸に近い状態で会議の席に乱入するのは、ビジネスマナー上むしろ歓迎されることなのかもしれない。

-ということ、リュックは久々に社会人として振る舞うことにした。

「繰り返しになるが、われわれの会社は宅配業をやっている。シェアは三番目だが、大陸一のスピードを自負している。ヤバいん

だ」

「なにがです？」

「スピードがだよ。鬼はやい。注文したら即お届け。十秒と待たせないんだ」

「そんなことが可能なのかな」リュックはつぶやいた。どこかでそんなことがあったような気がする。

「顧客が望んでいることだからね。ニーズに応えるのが会社の使命だ。顧客のためなら法も犯すし物理の法則だって捻じ曲げる。本来なら注文する前に届けるべきなんだろうが、そいつは少しばかりSF的すぎるかな。どう思う？」

リュックは自動販売機を指差した。「一杯やってもいいですか？」
「ああ、かまわんよ」

自動販売機の前に立って、オレンジジュースのボタンを押した。ビジネストークは多少酔っ払ったほうがスムーズに運ぶし、それに少しでも裸でいる理由がほしかった。ふつうは飲んでから脱ぐものなのだが、どっちが先でも結果は同じことだ。

カップに注がれたのはオレンジリキュールではなくカルーアミルクだった。会社というのはなかなか思いどおりにはいかない。

「さあ、社交辞令はもういい。すわって、すわって」

リュックはコップの中身をすりながら、すわる場所を探した。

一人用のソファがふたつで、空きはない。

「こういう場合、どこにすわればいいんですか？ ビジネスマナー的には」

「あつ」と、突然エイミルが蘇生した。震えながら大きく息を吸う。

「わたしの」

と言いかけてから、足を投げ出しソファの上で大の字になった。

「わたしのおなかにすわるといい」

「テーブルの上でもいいぞ」とスノツリ社長。

「でなければ」「エイミルは禁断症状かなにかのようにぶんぶん首を振った。「いや、それはダメだ。頭の上にはすわらせないぞ」

「リュックはかなり心配になって、エイミルの顔をのぞきこんだ。
「なぜそんなに疲れているんですか」

「会議疲れだよ」と答える。「ここ二ヶ月間、ずっと会議だった。
ぶつとおして二ヶ月」

「どうしてそんなに会議を」

「実行に移したくないからだよ！」エイミルはパラノイア的に声を
震わせた。「実行するのが怖いんだ」

「それに、会議はいいものだ。仕事をした気になる」スノツリ社長
がにこやかに言った。「たとえなにもしていなくても、参加してい
るんだ、という満足感がある。夕方には心置きなく飲みに行けると
いうわけだ」

アルコールもまわり、だいぶリラックスしてきた。リュックは床
にすわり、壁にもたれた。「どうぞ、つづけてください。ぼくも参
加しますよ。ぼんやり眺めてるだけだけど」

ふたりは会議を再開した。なにを話し合っているのか少し気にな
ったのでしばらく様子を眺めていたが、すぐにやめた。すること
いったら五分に一度「どうしましょうかねえ」とつぶやき、あとの
時間はうなりながら腕を組んでいるだけだったからだ。それに飽き
るとテレビを見はじめた。奥さまのあいだで大人気の昼メロ『愛の
ホスピタル』を真剣な様子で見ながら、ジャクリーンの行動は不自
然なのできつと浮気をしているにちがいないと指摘し、アイーダの
本命はだれなのかを熱い口調で話し合っている。

文字どおり腰を落ち着けて、リュックは今後のことを考えはじめ
た。アイーダはベネディクト院長に弱みを握られているから、たぶ
ん関係を持つだろう。若手医師のエディは一度アイーダの家に遊び
に行っていて、かなりいい雰囲気だったからこちらもチョメチョメ
するのは時間の問題だ。エディは院長の逆鱗に触れ、おそらく仕事
をクビになる。しかもジャクリーンはエディと親戚関係にあるので、
原因となったアイーダとの仲もおかしくなるはずだ。結局全員がお

かしくなるのだ。全員チヨメチヨメしてドロドロする。そんなバカなど言いたくなるが、ドラマだからしかたがないのだろう。

『愛ホス』の展開も読めたところで、リュックは今度こそ自分の今後について考えることにした。エレノアの行方も気にかかったし、得体の知れない生物に破壊された家のこともある。いままでは人生どうにかなるだろうとしか考えず、実際にどうにかなってきた。しかし今度のは、理解の範疇を軽く越えている。暗殺者に追いまわされるとかならまだ理解できなくもないのだが、テレビっ子がテレビの神さまに目をつけられたなんて話は、どんなドラマやドキュメンタリーでも聞いたことがない。昼メロみたいには展開は読めないし、ずっと厄介だったし、ついでに言ってしまうと、ときどきもわくわくもしない。出演者は楽しくないものらしい。

やれることはいまのところなさそうだった。それとも、映画の主人公みたいにもっと悩んだり、エレノアの名前を叫びながら走りまわったりしたほうがいいのだろうか。無意味とわかっていても。

「番組の途中ですが、ここで臨時ニュースをお伝えします」

リュックは顔を上げ、テレビに目を向けた。昼メロから報道スタジオに切り替わり、独身ゆえに人気の美人キャスター、クリスタが原稿を読み上げる。

「三ヶ月前に突如飛来した謎の宇宙船について」

エイミルは素早くリモコンを向け、テレビを消した。

おもしろニュースでしか聞けないような単語が耳にこびりついている。リュックは膝を立てて立ち上がりかけた。

「宇宙船って、なんの話ですか？」

「なんでもない」エイミルは早口で言った。「たぶん、おもしろニュースだろう」

「昼メロの真っ最中に？」

「番組はわれわれが決めることじゃない」

スノッリ社長が割り込んできて、子供に言い聞かせるような口調で言った。「宇宙船なんて実在しないんだよ。わかるね、リュック」

「でも、ニュースで」

「きみはタブロイド新聞の記事も鵜呑みにするのかね？」世界初、魚がレーシックで魚眼矯正』みたいな記事を？」

ノックの後、ドアが開いた。女性の社員がずかずかと入ってくる。無然とした表情で、手にした赤いバスケットをテーブルの上に叩きつけた。中身が驚いて飛び上がる。フライドチキンとポテトだ。

女性社員は出ていかず、テーブルの前に立ったまま、エイミルをにらみつけている。憎々しげな表情が決意に満ちたものに変わり、それから顔を真っ赤にしてあごを震わせ、半分泣き出しかけた。

「この××野郎！」指を突きつけ、涙混じりに汚い言葉で怒鳴った。「あんたはもう終わりよ！ 覚悟しなさい、この腐り切った××の××め！」

女性社員が話すたびに、ピーという音がどこからともなくかぶさる。「テレビ番組だ」「リュックは思わず口走った。エイミルを見る。しわしわのまぶたがゆっくりと開き、青い目が正気を取り戻しているのがわかった。女性をぎろりと見やる。

女性社員の手には黒光りする拳銃が握られていた。銃口をエイミルに向ける。エイミルは仰天した顔で肘かけをつかみ、体を起こそうともがいた。大声でなにごとかを叫ぶ。女性社員がぴたりと照準を合わせ、引き金に指をかける。開きっぱなしのドアから警備員が入ってきて、目を見開く。最短距離で女の背後に駆け寄り、一方の手で拳銃を持つ手を、もう一方で体を狙い、押さえつけようとする。これら一連の動作は、まるでスローモーションのようにきわめてゆっくりと進んだ。しかしよく見てみると、実際スローモーションだった。

「やーめーろー」エイミルが野太い声で叫び、かばうように手を上げた。

不安をあおるクラシック調の音楽が聞こえてきた。リュックは部屋を見まわした。そうして、自分だけはふつうに動けることに気づいた。女の指が少しずつ引き金をひいている。リュックは跳ね起き

て女に駆け寄り、拳銃をつまみ上げた。ずっしりと重い。

どこに置こうかと部屋を見まわしてその場で一回転したあと、くずかごを見つけた。中に拳銃を落とし、ほっと一息ついた。

壁に寄りかかり、あらためて連中を眺める。女の指はまだ気づかずにコの字に曲がったままだし、警備員は器用にも両足を宙に浮かせたままちよつとずつ前進している。また現実で番組が起こった。リュックはウンザリしてコップの中身を一気にあおった。テレビを買った帰りに出くわした警官たちを思い出す。連中は台本もなく、監督もいない状況で、ひどい演技をしていた。だが今度のはちがう。シチュエーションは意味不明だしスローモーションもありきたりだが、以前はこんな演出はなかった。それに女性社員の演技はかなり迫力があつた。役者のほうも上達している。ほんとうに三ヶ月経っているのだとすれば、そのあいだにスタッフも役者も技術を磨いたにちがいない。

事態は悪いほうへ転がっている。そのうちもつと大がかりになって、大陸じゅうで戦争がはじまったり、そこらじゅう悪漢やヒーローやスパイだらけになったりするのだろうか。日に一回はヘンな生物と遭遇し、通りの角を曲がるたびに女性とぶつかって運命的な出会いをしたりするのだ。

「だからなんだってんだ」

リュックは紙コップを握りつぶした。くずかごのほうへ無造作に放り投げる。けっこう距離があるのだが、どんぴしゃのど真ん中に入った。

それを見て、急に不安な気持ちになった。いまのは妙にカッコつけたしぐさだった。「だからなんだってんだ」だって？　いつからそんな気取ったセリフをはくようになったのだろう。

リュックは急いで自分の格好を見れるだけ見た。しましまパンツにバスタオル。ヘソ毛がパンツから顔をのぞかせている。なんてマヌケな格好だろうと思ひ、酒の勢いも借りてげらげらと笑った。そうして危ういところで自分を取り戻すことができた。

冷静になったところで、ふいにやるべきことを理解した。テープルのバスケットからフライドチキンをひとつ取って、銃の代わりに女に握らせた。

大型テレビがパツとついた。

「揚げもので殺そうとする女のコメディか。なるほど」

テレビには、頭をハゲ散らかした不機嫌そうな男が映っていた。

「ウィットのもりか？ モンティ・パイソンみたいな。おまえはコメディアン志望なのか、ん？」

男はメガネをずり下げて額にしわを寄せ、のぞきこむようにリュックを見た。

モンティ・パイソンとはなんだろうと思いつながら、男に聞いた。

「あんたは何者だ」

男はぷつと吹き出し、大きな顎を揺らして笑った。

「いいな、それは。おまえは男前だがパツとしないから、連続ドラマ向けだ。『ヒーローズ』に出たことは？」

リュックはまたしても演技をさせられていたことに気づいた。警備員を慎重に避けて自販機に飛びつき、アルコールっぽいものを選んだ。コップをひったくるように取り出す。今度はジントニックだった。半分飲み、半分は頭からかけた。

「なかなかやるじゃないか。おれはジョン。監督だ。ゆくゆくはおまえら全員を監督するつもりだが、いまはエレノア専属だね。どういう意味かわかるだろ？」

リュックは派手にゲップをかました。なにからなにまで酒くさい。

「エレノアって、だれのことだ？ このチ××頭」

自分のセリフもマスキングされた。

「言葉には気をつけたほうがいいぞ」ジョンが威嚇するように低い声で言う。「テレビドラマではとくにな」

「その手は通用しないよ。なにがドラマだ」もっと酒が必要だ。リュックはみたび自動販売機に駆け寄った。途中で警備員のつるつる頭に紙コップをかぶせる。「だったらぼくは ぼくは、問題を起

こして芸能界を干されてやる！ 公然わいせつに、未成年に酒を飲ませて　そうさ、だれもぼくを使いたがらない。演技なんかしないぞ！」

ジョンは無言だった。鼻の頭をかいて、静かに言った。

「わかったよ。演技のことはもういい。ふつうに話そう」

リュックはぶんぶんうなずいた。セブンスヘブンとドラゴンフライを半分ずつ飲み、標的を探して部屋じゅうをうろろする。

「エレノアがどうしているか、おまえに伝えてやりたくてね。いま、宇宙船の中でスクリーンテストの真っ最中なんだ。雇い主の意向でね。演技は不慣れだが、どうしてもあの才能が必要なんだとさ。おまえは心配していると思ったんだが　」

リュックはテーブルに飛び乗った。当然、意味などどこにもありはしない。

「心配じゃなさそうだな」

「し　」　だんだんろれつがまわらなくなってきた。「心配したら、身代金を要求されるだろ　」

「よくわかってるじゃないか。　まあ、いまのところはせいぜい抵抗するといい。いずれおまえも、俳優として参加してもらう」

「どんな陰謀だか　番組だか　知ったこっちゃないが　」　リュックは何度目かわからないゲップをかました。「わざわざ自分から言いに来るなんて　バカな悪役みたいだ。言わなきゃ、すんなり事が運ぶのに　」

「現実ではそうだろうがね。おれたちの住む世界ではちがう。知れば知るほど泥沼だ。なぜならば、知れば知るほど番組が盛り上がるから。そしていずれは、演技せざるを得なくなる」

「ぼくは　ビジネスマンだ　たぶん。だから演技は得意だぞ。得意のセリフは　」

リュックはエイミルを飛び越えてテレビの前に着地し、鼻と口を押さえてありったけのゲップを溜め込んだ。耳から嘔き出しそうになるのをこらえ、スピーカーの穴に口をつけて残らず注入してやっ

た。

ジョンは心からイヤそうに顔をしかめた。「おまえ、酔っ払いきだぞ」

すっぱい中身を胃袋に押し戻し、紙コップをふたつともエイミルの頭の上に傾けた。しかしいつのまにか空になっていた。やることがなくなったリュックは、よろめきながら部屋を徘徊した。かなり酔っ払ったらしく、室内のものすべてがまともに見える。壁はシャキッとまっすぐだったし、卓上カレンダーが何月のものなのかわかったし、壁掛け時計の時間も読めた。一本だけ忙しくしている針がプラスチックの透明板を内側からカチカチ叩いている。ちょうど昼休みのようだ。

「おまえはフームの社員なのか」

リュックは答えない。「この部屋、暑すぎない？」と、何度も上着を脱ごうとするが、どうしても脱げなかった。

「そうか。そういうことか」ジョンは頬をかきながら、なにやら考えごとをしていた。「なるほど」

「なにがなるほどだ」

「家はどうする？ めちゃくちゃに破壊されただろう？」

「どうして知ってるんだ」

「なんでも知ってるさ。だが心配するな。住む場所ならなんとかするから」

「おまえがなんとかする気なのか」

「いやいや。運命のお導きというやつだよ」

「そううまくいくかつての」

「わからんよ。なにこともな」黄色い歯を見せて不気味に笑う。「現実でも奇跡は起こる。なのにおまえらは、いつもそうだ。『起きるわけないよ、そんなバカな話あるもんか』ってな。バカはどっちだよ。『そんなの常識だろ？』なんて賢いふりをして、退屈な人生を自ら選んでいるじゃないか」

「あれか。『がんばって奇跡を起こそう』みたいな」

「あんなアホ番組、よく見てるな」

「エレノアが好きなんだよ」

『がんばって奇跡を起こそう』は、はたらくるまが好きな若手芸人ヘルマンが、ある実話をヒントに地元局『R I V』に持ち込んだひとり遊び系の番組だった。その実話とは、こうだ。

ある老婦人と息子がドライブしていると、車が故障し動かなくなつた。息子は車を修理するため、ジャッキで車を持ち上げ、下にもぐりこんだ。すると急にジャッキがはずれ、息子は車の下敷きになつた。驚いた老婦人はどうしたかというところ、できるかどうかなど疑いもせず、息子を助けたいという一心で、バンパーをつかんで車を持ち上げたのだ。息子は助かり、この美談は多くのニュースで取り上げられた。

そのニュースをにいたく感動したヘルマンは、それならおれもという単純な発想から、ある番組を企画した。「やってみなくちゃわからない」と、体当たりで奇跡を起こすためにいろんな実験を試みたのだ。「素人でも火事は消せるのか」というネタでは、空き家に火をつけてから自前の消防車で消火活動を行った（近所も何軒か追加で消化するはめになった）。「雨乞い」は、開始から二十三日でなんとか成功させた。「スーパーモデルと付き合おう」では、狙いをつけたモデルの女を数ヶ月かけて尾行し、電話番号を入手し、自宅をつきとめ、女に交際を申し込み、こちらのみごと成功を収めた。主な勝因は持参したソードオフショットガンだった。

番組自体は最後まで人気が出ることなく、ヘルマンがついに御用となつたことであつて終了した。この番組がゴールデンタイムで放送されたのがいちばんの奇跡だった、と関係者は冗談めかしてコメントした。ヘルマンは塀の中でもなお奇跡の存在を信じていたが、くだんの老婦人が体重百三十キロで、重量挙げの元オリンピック銀メダリストであつたことはまったく知らなかった。

「エレノアはテレビが好きだ。愛している」ジョンが抑揚のない声で言う。「退屈な人生なんだろうな。しょっちゅうテレビに話

しかけていくくらいだから。おまえはどうだ？ 楽しませてあげようとか、感動させてあげようとか、そんなことを考えたことがあるのか？ テレビよりおもしろくなるうと思っただことはあるのか？」

リュックは答えなかった。

「エレノアは哀れだな。彼氏は恋人が行方不明になっても、探そうとすらしないんだから」

「そのうち返してくれると言ったから」

「ああ、そうだな。目的を果たしたら、返してやる。ただし」
「含み笑いをする。」「そのあとのおまえらの関係までは保証できないが。昼メロは好きか？」

「いや」

「おれもだ。ドロドロの情事だなんだとすったもんだして、バカみたいだっと思うだろ？ ありえないっと思うだろ？ だがそれは、機会がないからなんだ。機会があれば現実のおまえらだっけ浮気もするしドロドロもする」

「するもんか」

「いいよ。機会をつくってやる。まあ、がんばれ。ふたりの愛情がほんものかどうか、見物させてもらうよ」ぞんざいに手を振る。「ではまた来週」

テレビが消えた。

と同時に、不安をあおるクラシック調の音楽もやんだ。女性社員その他もろもろのスローモーションがいつせいに解け、めいめいがやるべきことを再開させた。エイミルは悲鳴のつづきを叫びながら顔をゆがませ、ソファでもんどりうった。暗殺者役の女はエイミルに向けて腕をつき出し、人差し指を引いた。リュックはフライドチキンだからとたかをくくっていたのだが、バーンという音と同時にテレビに大穴が開いた。エイミルに当たらなかったのは、引き金をひく瞬間に警備員が女におおいかぶさったからだ。そのまま抱きかかえるように床へ押し倒した。何者かのいたずらで警備員の頭に乗せられた紙コップが、遅れてぼとりと落ちた。

リュックは自分でも知らないうちに頭を抱えてうずくまっていた。女は揚げものを振りまわしてもがいていたが、警備員がひっぺがしがच्चりと押さえこんだ。

観念したように動かなくなる。

エイミルがそろそろと立ち上がった、女を見下ろした。いまいまいげに鼻を鳴らし、革靴の底を使ってフライドチキンを部屋の隅にすべらせた。チキンはごろごろ転がり、毛をいっばいくつつけながら壁にぶつかってとまった。

「連れていけ」エイミルは冷ややかに言った。「警察が到着するまで、例の部屋に閉じ込めておくんだ」

「例の部屋ってどこです？」と警備員。

「じゃあおまえの部屋でもいい」

「危機一髪だったな」スノツリ社長がひとことのように言った。

つるつばげの警備員が女を立ち上げらせ、後ろから両手首をつかんで動かないように押さえつけた。肩に乗った無線機に口を近づけ、警察に連絡するよう指示する。女は振りまわせるところはすべて振りまわし、なおも抵抗する。呼吸を荒くし、ぎらぎらと敵をにらみつける。

ふと、リュックを見て表情を変えた。困ったように眉をひそめ、わずかに目をさまよわせた。

リュックも見返す。

だがそれもほんの一瞬のことだった。女の顔がみるみる哀願するような表情に変化した。

「あ　あなた、こいつらの仲間じゃないんでしょ？　助けて！

わたしはある人に雇われて　目的の遂行を　子供を殺されたの！」

はじめはつつかえながらセリフを口にしていたのだが、話すうちにどんどん感情がこもり、舌もなめらかになっていく。アドリブでつなげる気らしい。あまりの迫力に圧倒されかかったが、話の内容はトンチンカンだ。どうすべきかはわかっている。これは芝居なの

だ。連中に乗せられ、演技をしてはいけない。

リュックは膝を抱えて女を見上げた。「ぼくは観客だ。気にしないで」

女は、なに言っただこいつという顔をした。

「きみの芝居を見に来たんだよ」

「こ　これは芝居なんかじゃないのよ！　陰謀なの！　わかる？　こいつらのせいで、世界が終わろうとしているの！　こいつらはワルよ！　死ななきゃならないの！　ここの製品を買った人たちはみんな　」

エイミルは盛大なあくびをかましなが、警備員に出て行けと手を振った。なぜか頭が湿っている警備員は、思い出したように女を廊下へひきずっていった。

ばたんとドアが閉じる。

「おかげで眠気が吹き飛んだ」エイミルは涙目で伸びをしながらリュックのほうを向いた。「昼休みは取った？」

「まだです」

「なら、行くといい。来週また合おう」

無造作に手を振って、ソファに腰を下ろす。リュックは去りかけたが、いったいどこに去ればいいのかと思い直し、振り向いた。やるべきことが（そんなものがあるとすればだが）はつきりするまでは、ここに残って情報を集めたほうがいい。

「さっきの女性ですけど　」

「ああ、まだいたのか」エイミルが顔を上げた。「気にすることはない。よくあることなんだ」

「今度のはなかなかだったな」スノツリ社長は夕飯の感想でも述べるような調子で言った。赤いバスケットに手を伸ばし、ポテトをひとつつまんだ。

「あれはうちの社員なんだよ。眠気覚ましに、たまに命を狙ってもらってる」

と言うエイミルの背後で、大穴開けてひび割れたテレビが煙を噴

いている。

「あなたもかなり驚いていたように見えましたけど」

「演技だよ。ただ命を狙われるんじゃ、おもしろくない。社員もやる気をなくすしね」びちゃびちゃに濡れたガラステーブルに目を落とす。なんとなく拭こうとして、やっぱりやめた。「ひとつ言っておくが、きみもこの一員なら、ああいう場面ではちよつとは驚いたりスローで動いたりしたほうがいいな。今後のためだよ。わかったね？」

「わかりました。あ、予備の服なんか、用意してありますか？ 部屋着でもなんでもいいんですけど」

「どうして？」

「裸なので」

「下着は何枚？」

エイミルはそう言うやいなや、ぶつと吹き出した。スノツリ社長と大学生みたいなノリでハイタッチをした。内輪のジョークかなにかだろうか。

「そのへんの連中に聞けばいい」終わつたとたんに仏頂面でソファにもたれる。「ほかには？」

リュックは散らかり放題の部屋をなんとなく見まわした。

「じゃあ、ぼくは昼休みに行ってきます」

会議室を出て、シャキッとまっすぐに伸びたフームの廊下を進んだ。ひとけはない。みな昼休みに行ったのだろうか。

とにかく服を調達しなければ、外にすら出られない。順番にドアノブにひねってまわったのだが、すべてセキュリティで守られていた。いまのリュックはIDカードも持っていない。

ジョンとかいうやつに言われたことが、ひっかかる。やつによればエレノアもいずれ返してくれるということだったが、やけに含みを持たせた言いつぶりだった。演技派女優として戻ってくるのだろうか。そして昼メロがどうか。なにを企んでいるにせよ、その手には乗るかとあらためて心に決めた。演技しないこと。これがいま

わかっている唯一の対抗手段だ。

考えごとをしていたせいで、曲がり角に気をつけるのをすっかり忘れていた。気づくと目の前にビクリした女性の顔があつて、次の瞬間にはふたりとも見事にすっ転んでいた。

ファイルや書類がありつたけ散らばつた。それはもう大げさなくらい、床が見えなくなるくらい大量に散らばつた。追加で上から郵便物の封筒や小包が山ほど振ってきて、ふたりとも半ば埋もれた。リュックは思わず「クソ」と毒づいた。女のほうが先に起き上がり、しゃがみながら急いで書類をかき集める。

「クソ？」

女が手をとめてリュックをにらみつけた。「ぶつかっておいて、そんな言いかたはないでしょ？」

「ちがうんだ。そういう意味じゃなくて」

リュックは女の顔をまじまじと見た。「きみ、面接のときの」
女のほうも気づいたらしく、メガネ越しに目を見開いた。「あな
た、ネクタイの人ね」

「そうそう。ネクタイの人」

「リュック　だっけ？」

「きみは受付嬢だ」

「彼女のいるリュック」

不吉な予言のようにぼそつとつぶやいた。それから怒つたように下を向き、ふたたびファイルや書類をかき集める。リュックも手伝つた。

「　　そういえば、名前を聞いてなかった。なんていうの？」

「名前はヴァラよ、リュック」

「そうなんだ。よろしく」

「　　で、どういう意味で言つたの？」

「なにが？」

「『クソ』って」

「ああ、ごめん。予想してたもんで」

「ぶつかるのを？」

「うん。よくある話だから。なんて言ったらいいかわからないけど、角を曲がるとぶつかるっての、よくあるだろ？　そういうのに巻き込まれると　　なんというか　　」

「映画みたいなの？」

リュックが顔を上げ、同時に受付嬢も顔を上げる。かなり問題のある距離だった。メガネの奥の緑の瞳がとろんとなった。化粧品のおいが鼻にまとわりつき、リップグロスが誘惑するようにつやつや輝いている。

ヴァラが先に下を向いた。「あなた、裸ね」

「　　そうだ、服を借りたいんだけど」

「あたしは裸でも、ぜんぜん気にしない」

そう言って顔を上げ、リュックをふたたび見つめた。これまたそうとうに問題のある距離で、これ以上近づくと国境警備隊に射殺されかねない。

「彼女がいてもいいの　　」

ヴァラの吐息が口にかかる。だれかとおりかからないだろうかと、リュックは必死であたりを見まわすが、人の気配すらない。

すると背中でも刺されたみたいに、ヴァラは急に目を見開いた。憑きものを払うように頭を振る。「あなた、お昼休みは行った？」

「これから行くところ」

「そうなんだ。あたしはさっき行ったとこ。いっしょに食べに行かない？」

「これを片づけなないと」

「片づけなくていい。散らかしとけばいいのよ」

「必要なんだろ？　だれかに届けたり　　」

「わからない」じつと手を見る。「どうしてこんなものを抱えて、廊下を走っていたのか　　」

リュックはイヤな予感がした。はやくここから立ち去りたい。

「悪いけど、ひとりで食べるよ。家に帰る用事もあるし　　」

「あたしといっしょに食べたくないんだ」

「いやいや。そういうわけじゃないけど」

「あなたの家ってどこにあるの？」

「ちよつと遠いかな。歩くとだいぶかかるし」

「そうなんだ。ふうん。で、その格好で家に帰るつもり？」

と言って、ヴァラはにっこり笑った。

11話 なにも演じない

ヴァラが女子更衣室から着物を持って出てきた。リュックは聞いたことのないチーム名の入ったパーカーを着て、スウェットをはいた。大きめだが、少なくとも警官を気にせずに歩ける。

「大学時代の彼氏のものなの」ヴァラは言わなくていいことを言った。

三歩進んでは二歩横に動き、壁に肩をぶつけながらエレベーターに向かった。エレベーターは呼び出すまでもなく、ちょうどこの階でとまっていた。リュックはどうしても試したくて、中に入るなり操作パネルに張り付き、一階から八階までとほかに押せるボタンがあれば手当たり次第に押しまくった。

「なにやってるの？」ヴァラがたずねた。

「行きたくない階に行けるか試したいんだ」

結果は予想どおりだった。エレベーターはほかの階を無視して一階へ直行した。確実に捕らえられている。

エントランスを抜け、外に出た。リュックは深呼吸をしながら、なんとか演技から抜け出す方法をひねり出そうとした。警官のときはどうしたか。あのときは自ら演技をして切り抜けた。今度もうまくいくのだろうか。つまり、「女をひどい目に合わせる男」の演技だ。

はつきりいつて自信がない。とにかくシナリオどおりに進ませないことだ。

ヴァラがうれしそうに肩をくつつけてきた。「行こう」

向かってくる人を避けながら、並んで歩く。

「食べたいものはある？」ヴァラがたずねる。

「いや、ない。食べたくないものなら山ほどある」

「どうかしたの？ 心配してるわけじゃないけど」

「きみが決めてくれる？ 行きたくないところしか行きたくないん

だ」

「酔っ払ってるのね。昼間から飲んだくれるなんて最低」ヴァラはぶつぶつと言った。「だけど最高」

というわけで、リュックとヴァラは同じブロックの通り沿いのせまつくるしいカフェに入った。カウンターのみて、奥のほうになるとなりあつてすわった。なにげなしに振り向く。通りに面した壁はぜんぶガラス張りで、ショーケースの中で食事するようなものだった。

ヴァラはサンドイッチと、舌がこんがらがりそうな名前のラテを注文した。

リュックも振り向いて手を上げた。「ぼくはコーヒーでいいや。いちばん人気のないやつ」

主人の表情がみるみる険しくなった。

リュックは貧乏ゆすりをしながら、ロゴ入りパーカーの首まわりを何度も調節した。他人の服を着るのは、どうも気持ちが悪い。持ち主の思い出やら嗜好やら性癖やらもいっしょに着込んでいるような気になる。そんな気になってふと、これでいいのだと思い直した。できればもっと着心地悪くなりたいたい。靴下をはいたら中にごみが入っていてむずむずするんだけどもう外出してしまったのでどうすることもできないといった気持ち悪さだ。

「ここ、居心地悪いね」大声で言った。

「もう頼んじやったけど」

「イスは硬いし、カウンターはべたべただし」主人がぎろりとにらむのを無視してつづけた。「ガラス張りにしたってさ、どっち側にいたってロクなもんが見えないのに、意味ないよ。そう思わない?」

「リュック」ヴァラは眉間に小さなしわを寄せ、リュックの顔をのぞきこんだ。「あなた、どうしちゃったの」

「どうもこうも」

リュックはふと口をつぐんだ。ヴァラの言ってることがまともじゃない気がしたからだ。まるで長年の付き合いみたいな言いかただ。

おまけにいつのまにか手まで握られている。それがまたやたらと気持ちいがこもっていて、こうして見つめ合っているとありもしない向こう三年のさまざまな思い出が蘇りそうなほどだった。

「あなたと付き合ってから、こんなことは一度もなかった」

「ぼくら、付き合ってたないよ」

「まあね」手の甲を指先でなぞる。「じゃあ、どうすればお付き合いしていることにできる？」

リュックは混乱した。「あの」

「できれば幼馴染になりたい。ただの友達だったのが、じょじょに惹かれ合っていくの」

「不可能だと思っただけだ」ヴァラに合わせて過去形で言い直す。

「思っただけだ」

「あたしがきらいだったの？」

「彼女がいるって言ったろ」

「だれがいたって？」

「いや、いるの。昨日　三ヶ月前だっけ？　どうでもいいや。

覚えてない？　きみとはじめて会ったときに言った　」

「はじめて会ったのは三歳のときじゃないの」すっかり幼馴染になつてしまった。「例の公園で、あなたがつくった落とし穴にあたしがズッポリはまったときよ。覚えてない？」

「覚えてない」

「ひどい人。ほかに大事な人がいるみたいね」

「いるって言うてるだろ」

思わず強い口調で言い放つ。すると、とたんにヴァラは目をうるうるさせた。これでは分が悪すぎる。

「彼女がいるんだよ。もう何度目かわからないけど。で、エ　彼女とは、もうすでに付き合いはじめてる。きみより以前にね」リュックはなんとか筋道をおせそうだとほっとした。「もし仮に、先に知り合ったのがきみだとしても、ぼくは彼女と先に付き合ったんだよ。わかる？」

「なら、彼女と出会う前から付き合いはじめればいいのよ！」

ヴァラは名案がひらめいたといわんばかりに勢い込んで言ったが、どうして勢い込んで言えるのかまったくもって理解不能だった。リュックは気持ち悪くなって、ぎゅっと目を閉じた。酒のせいで考えがあつちこつちに飛び散り、まとめることができない。酒のせいというより、ヴァラのせいだ。どういうつもりか知らないが、いっしょになつて過去形で話をしているうちに、いろいろな記憶がどんどん過去に押し流され、ぼんやりとしか思い出せなくなってきた。エレノアとの思い出も。リュックは必死で思い出そうとした。そういえば、テレビを買ったじゃないか。あれはじつに　　なんというか　　昔のことなのでよく覚えていない。

ほかにもあるはずだ。リュックはヴァラの手を振りほどいてカウンターにひじをつき、耳もふさいだ。エレノアとの思い出。たとえば、あれだ。いつものあそこで、例によつてそこにあつたあれを、こんなふうにああして、あとはしっちゃんかめつちゃんかだった。そうだ。あのときはぐでんぐでんで、あんなふうにぶらぶらして、てれてれて、ふたりでゆらゆらした。生涯最高の思い出だ。

耳をふさぐのをやめ、代わりに顔をおおった。生涯最高の思い出であるはずのあれも、しっちゃんかめつちゃんかになったことしか思い出せない。ほんとうにあれをそんなふうにしたのだろうかと不安になつた。

ヴァラが唐突につぶやいた。「この店に強盗が押し入ってくればいいのに」

「なに？」顔から手を離して聞き返す。

「覆面をかぶつて、ショットガンを持っているのよ。まずお店の主人が撃ち殺されてね、あたしたちは交渉のために人質になるの」

リュックは自分の口を手でふさいだ。言つてはいけないうことを言いそうになつたからだ。

「別れ話で冷え切つた関係のあたしだったけど、力を合わせて窮地を脱出するの。ギリギリの場面を乗り越えたことでふたりは愛

情を再確認し、めでたくもとのさやに　　

イヤな予感がムカデみたいに背中を這い上がってきた。リュックは感覚を全開にして振り向き、ガラス越しに通りを見やる。するとどう控えめに言っても不審な人物が腰をかがめて店の中へ入ってこようとしていた。黒い目出し帽に銃身を切り詰めたショットガンを持っていて、ご丁寧に尻のポケットからダイナマイトを飛び出させていた。

リュックは爪の先でガラスを叩いた。すると不審な男は振り向いた。リュックを見ると足をとめ、周囲をきよるきよるした。それからゆっくりと体を起こし、またきよるきよるし、目的を失ったように立ち尽くした。

しっしっしと手を振る。不審な人物は頭をかき、手であいさつすると、ショットガンを肩に抱えて通りの向こうへ消えた。

「惜しかった」

ヴァラがメガネの奥で目をぱちぱちさせて言った。それからむつとりとうつむいて、サンドイッチの端をかじった。

ひとつ息をついて、カウンターに向き直る。店の主人が乱暴にコーヒーを置いた。命を救ってやったのに、愛想のないことだ。さっそくすすってみると、しっかき期待に答える出来だった。ぬるいしくさいし、おまけに洗剤の味がした。

マグを置いてなにげなく顔を上げると、監視カメラが目に入った。薄汚れた壁の隅で、ほこりをかぶってぶら下がり、明らかにリュックのほうを向いていた。

「思いどおりにはいかないぞ」

リュックはつぶやいた。どうしても演技に引き込みたいらしい。いつそ服を脱いでカウンターの上で踊ってやろうかと思ったが、そんな映画があったような気がしたのでやめておいた。それに、だいぶ疲れていた。頭の中の記憶はひっかきまわされ、過去に押し流されようとしている。

まずいコーヒーをやっつけながら、だんだんと腹が立ってきた。

ヴァラはおもしろくなさそうに皿を見つめていたが、気づかれないようにちよつとずつ肩を寄せてきた。

「きみは」

と、リュックは口ごもった。どれだけ怪しいとはいえ、目の前にいる人間に向かつて「あなたは役者で、自分を演技にひきこもうとしているのですか？」なんて聞くのは、まともじゃない。それだけは言っではいけない気がするのだ。

「いいかい、よく聞いて。　　といつても、きみがきらいってわけじゃないんだけど」

と言うと、よっしゃとばかりに体をくつつけてきた。

「さっきみたいな話はしたくないんだ」

「どんな？」

「愛とか恋とか、どうやって三年前から付き合ったことにできるかとか」

「じゃあ、どんな話がしたいの？　なんでもいいよ」

「無駄話がしたい。どうでもいい話。だれも興味を持たない、エキサイティングじゃない話。答えるたびに先の人生が大きく変わってしまうんじゃないかって心配しなくてもいいような話」

ぱつとエレノアの姿が頭に浮かんだ。

「そうだ、テレビを見よう。テレビはいいよね。大好きだ」

「いつものように肩を寄せ合って見るのね？」

「いや。だからと、目的もなく。他人行儀に」

店のテレビは、お昼のニュースを流していた。看板キャスターのクリスタが、いつもの落ち着いた雰囲気で原稿を読み上げる。

「　さて、次のニュースはみなさんもよく話題にされていることでしょう。地球外生命体を乗せた巨大宇宙船が上空に飛来してから三ヶ月」

キャスターの横にイメージ画像が割りこんでくる。見出しは「ようこそ地球へ」だったが、背景はこれでもかと武器をつき出した黒い宇宙船と、よだれを垂らして凶悪な鉤爪で一家に襲い掛かる異星

人のイラストだった。いったいどつちなんだと言いたくなる。

「最近このニュースばかり」ヴァラは小さく鼻を鳴らした。「くだらない」

「これっておもしろニュースかなにか？」リュックは確認しようとなずねてみた。

「ふつうのニュースよ」

「宇宙船が来てるの？」

「そうみたい」

どうやらほんとうらしい。あの中にエレノアがいるのだろうか？ クリスタが原稿をひととおり読み上げると、カメラがやや引いて、となりのダグルを枠の中に入れた。がっちりした顎に男っぽさをむんむんさせて、興味津々といったふうにクリスタのほうへ身を乗り出す。

「主門からのレーザー攻撃を受けて三日だけど、その後の展開はどうなったの？」

「つい先ほど、異星人からのメッセージを受信したと政府の発表がありました」

「なんて？」

「『ごめんなさい。まちがえました』ということですよ」

ふたりの背景に、レーザー攻撃を受けて壊滅状態となったオフィス街の様子が映し出された。瓦礫となり灰色の噴煙を上げるビル、頭から血を流して泣き叫ぶ女性、母親に抱かれ大きな青い目でなにかを見つめる少年、すでに顔を黒くし呆然とする消防隊員、ネタを切らして見物に来た売れない作家などの映像が次々と切り替わった。カメラが上空を映す。白くて巨大な物体が、空全体に横たわっている。宇宙船というより、巨大なコインランドリーだ。投入口が下を向き、ぱっくりと開いている。

「死傷者の数は？」

「負傷者は少なくとも七千人にのぼるようですが、死者はひとりもでない模様です」

「政府の見解は？」

「『だれも死ななくてよかった。今後は気をつけて』とのことですが、ダゲールは相変わらず横を向いたまま、クリスタから目をそらさない。」

「ほんとうによかった！　話は変わるけど、最近は宇宙船だけ

じゃないよね？　このところ、映画のような話ばかりだ。スポーツの実況アナウンサーは文句たらたらみたいだけだ」

「ええ、そうね　クリスタはダゲールをちらっと見た。笑顔がわずかにしぼみ、なにかを恐れるように眼球を震わせる。「いまや『信じられない、奇跡です』は、グラウンドやスクリーンの向こう側の話だけではなさそうです。実際にどのようなことが起きているのでしょうか。インタビューをまとめましたのでごらんください」

どこかの交差点に映像が切り替わる。クラクションがやかましい。「もう、楽しくてしょうがないって感じでさ！」

落ち着きのない高校生くらいの若者がインタビューに答えている。頭の悪そうな笑顔で、照れ隠しかなにかでカメラに向かって危なかしく親指を立てた。「毎日がパーティさ。学校も最高！　人生最高！」

「どんなことが起こってるの？」とインタビューアー。

「えーと　そうそう。女の子が全員かわいくなったんだ。中にはそうでもないのもいるけどさ。ていうかほら、ドラマなんかでよくあるじゃん？　ブスだって悩んでるけど、どう見たって美人だるおまえ！　っての」

「その『よくあるじゃん？』が、よくあることになったというわけだね」

「そういうこと。おれの友達、超能力を使えるんだぜ！　あといきなり踊り出すやつとか、妊娠するやつとか、とにかく週に一度はなにかが起きてる。あ、いまね、妹が誘拐されてるの。未解決でさ」
落ち着きなく体を揺らすので、しょっちゅう画面からはみ出ている。

「心配じゃないの？」

「ぜんぜん。よくあることだし。これまでの経験でわかったんだけど、なにがあってもぜったいいいほうに解決するんだよ。このまえ校舎が大火事になったときも、すげえカッコいい消防士がチャリダーの子を救出したんだぜ。間一髪！ それまではドキドキもんだけど、いまじゃみんな楽しんでる。すげえよな。人生、こうでなきゃ」

次のインタビューは、老人だった。インタビュアーとベンチに並んで腰かけている。

「悪くない人生だよ。ここまで生きてこれたんだ」ふと声を詰まらせる。「じつは先日、妻と再会してね」

「奥さま？」

「亡くなった妻だ。もうひと昔も前のことだが、いざ死ぬってときになって、おれはそばにいてやれなかった。さよならのひとことを言えなかったのが、ずっと心残りだった」

ついに話すことができなくなり、子供のように下唇をつき出し、しわだらけの顔を震わせた。ごつごつした手で顔をぬぐう。

「だが」と、夢見るような顔になった。「どういうわけか妻に会えた。家に帰ると、台所で昼飯の支度をしていたんだ。わけを聞くと、七日間だけ生き返ることができたんだという。妻はおれの顔をじっと見て言った。『それ以上は聞かないで、あなた。ネタをパクったと思われたくないの』と」

「まさに奇跡だ」

「たしかにありえん話だ。だが、そんなことはどうだっていいんだ。だれがどうやったのかもわからんが、感謝したいね。すばらしいことだ」

次はスーツ姿の中年の男性だった。満面の笑みで、見るからに生きる活力に満ちていた。

「おれは卓球をはじめたんだ！」

「みんな幸せそうだったね、クリスタ」

スタジオに戻り、ダグールが感想を述べた。

「そうね」というクリスタは、あまり幸せそうではなかった。笑顔に無理があつて口もとを持ち上げるのに苦労しているし、うつむかないようにするので精いっぱいという感じだ。

「どうかした？」

「いいえ、なんでもない。では次のニュース」

ダグールは眉尻を下げて、なおもクリスタを心配そうに見つめる。そして、番組の進行なぞ知ったことかといわんばかりに、イスにすり直して身を乗り出し、クリスタの顔をのぞきこんだ。

「ほんとにだいじょうぶか？」

声を抑えて言う。「だいじょうぶ。ニュースを読まない」と

ダグールの仕事用に貼り付けていた笑顔が少しずつ剥がれていき、ひとりの男の顔になった。真剣な表情で唇を引き結び、急に勢い込んで正面を向き、原稿の束を持ち上げた。とんとんと整え、それからわきにのけた。

「次のニュースは、ある男の話題です。男は悩んでいました。それは数ヶ月前からはじまり、いまもそのストーリーはつづいています。そのドラマが劇的かどうか、わくわくし、おもしろいかどうかそれはみなさんの判断にお任せしたい。ですが個人的には、このストーリーはハッピーエンドで終わってほしいと思っています」

クリスタは眉をひそめて相方を見、カメラのないほうに目をやった。ダグールは明らかに進行を無視しているようだった。「こつちを見て」とクリスタに言う。

ダグールは上着のポケットから小さい箱を取り出した。フェルトの宝箱みたいに見えたが、遠目から見てもなんであるかは一目瞭然だった。それはまさに宝箱だった。クリスタに向けてぱかっと開く。中に指輪が鎮座し、小さく輝いていた。

「これを」

ダグールが言うのとクリスタが口を押さえるのはほぼ同時だった。

「きみに。その 家庭の事情やらなにやらで、たいへんなときだ
と思うけど。オーケー？」

「あ わたしたち、付き合ってもいないんだけど ああ」クリ
スタは腰砕けで、イスにすわっていなければ床にへたり込んでいた
だろう。それをむしろ喜んでいようだった。顔をめぐって天井を
向き、笑顔で振り向く。「ええ、オーケー！」

周囲のスタッフはやんやの喝采だった。拍手をバックに、笑顔の
ふたりが身を乗り出して軽くキスした。

「おもしろいニュース」ヴァラはうつとりと言った。いつもの根暗
声に戻ってつぶける。「あんな指輪、あたしにはくれたことなかっ
たよね、リュック」

カフェの主人が鼻を鳴らした。「パクリだぜ、これ」雑巾を投げ
捨てる。

スタジオは拍手も止み、余興は終わったのでまじめに仕事をしま
しょうという雰囲気になっていたが、ニュースを読み上げようとす
るとスタッフが駆け込んできて、メモを置いていった。ダグールは
目を見開いた。

「息子が誘拐された」

「婚約したばかりだろ。なんで子供がいるんだ」リュックはテレビ
にツッコミを入れた。まるでエレノアだ。「展開がはやすぎだよ」

「連れ子じゃない？」

「いや。ダグールは初婚だしクリスタは子供がいなかった」問いた
だすように見つめられ、言い訳がましく説明する「彼女が詳しいん
だ。エレノアね。ぼくの彼女」

「どうしてそういう細かいことを気にするの？ おもしろいじゃな
い。わくわくする」

リュックはむしように腹が立ってきた。なにに腹を立てているの
かわからないくらい腹を立てた。

「どこが。興ざめだよ。あんなの、つくられた人生じゃないか」

「つくられた？ ダグールは自分で決心して、指輪を渡したのよ？」

「わざわざニュースの本番中に？ おかしいと思わないか？ いままでそんなこと、あったためしがない」

「いや、何度かあった」と主人が口をはさんだが、リュックは無視した。

「宇宙船からのレーザー攻撃を受けて死者が出ないだって？」

「宇宙人は『まちがった』って言ってた」

「そういう問題じゃないだろ。宇宙船が飛来しているのになんとも思わないの？」

「だって、実際にいるんだもの。否定するのは現実逃避よ」

「じゃあ、どうして死人が出ないかわかる？」

「ヴァラは肩をすくめた。」

「連中は、ハッピーエンドが好きなんだ」

「連中って？ よくわからないけど、人生にはバッドエンドもある」

「いつ？」

「この前モールがゾンビの大群に襲われたんだけど、客も店員も全員死んじゃったの」

「ホラー系はそういうものだからだよ！」リュックは思わず怒鳴った。「望まれてるんだ」

「望まれてる、って？」ほんのわずか距離を置いて、ヴァラがたずねる。「あなたは人生ハッピーじゃないほうがいいっていうの？」

本格的に頭痛がしてきた。リュックは顔をしかめながらコーヒースを飲み干し、こめかみをマッサージした。

「ハッピーエンドなのは、大半の観客がそうだったストーリーを望んでるからなんだ。連中が望んでる」

「それは映画やテレビの話でしょ？」

「ちがう」

リュックはかぶりを振った。

「いまもそこから見ている」

店内の監視カメラを指差した。

「見てるか？　ぼくは演技なんかしないぞ！　文句があるなら出てこい！」

マグカップでも投げつけようかと思ったが、連中の思うつぼだと考え直し、なにをしたいんだかわからない状態であれこれ試したあと、カメラにピースサインをつきつけた。まったくもってそんな気分ではなかったからだ。

すわり直し、勢い込んでヴァラに顔を近づける。

「きみと付き合うことはできないけど、ほんとうのことを教えてあげるよ。連中はテレビ界から、現実をあやつろうとしている。連中はずっと監視してた。でもいまは、ただのノゾキなんかじゃない。ぼくらは場面を設定され、台本を渡され、演出指導を受ける」リュックは興奮しすぎて声を裏返らせた。「連中は、テレビを見たがつてる。おもしろいテレビさ。そのせいでみんなは、連中が望んでいるとおりの人生を送らされるんだ！」

主人は頭のおかしな人間を見るような目つきでリュックを見た。ヴァラも似たようなものだったが、こちらはあきらめが悪いようだった。彼氏を長年の依存癖からなんとか立ち直らせ、まともな社会生活を送れるよう懸命に努力してきたが辛抱も限界だと言わんばかりの表情だったからだ。

ふたたび手を取ろうとしたので、リュックは払いのけた。

「わかっただろう？　きみはぼくの恋人役に選ばれただけなんだよ」

「なに言ってるの」

「いや、ちがうな。恋人じゃなくて、エレノアを奪う悪女の役だ。

演じさせられてるって、どうして気づかないんだ？　どうしておかしいって気づかないんだ？」

「あたしは　」ヴァラは言葉を詰まらせ、胸を押さえた。「あ

あなたが好きなだけで　」

「二回しか会ってない。ロクな会話もしてない」

ヴァラは静かにメガネをはずし、もう一度リュックの手を握った。リュックは顔を背けていたのでどんな表情をしているのかわからな

かったが、必要なら何度でも握ってやるという意味が感じられた。
「きつと、あなたは疲れているのよ。酔っ払ってるし」握る手に力がこもる。「あたしの家、すぐそこなの。ひとり暮らしでだれもいないし、少し休んでいったら？ 家は遠いんでしょ？」

リュックは確信した。昼メロみたいに次の展開が読めた。このあと自分はヴァラの家へ行つて休む。会話をつづけるうちに妙な雰囲気になり、コーヒーをこぼしたりとかぶつかって転ぶんだりとか、とにかくちょっとしたイベントをはさんで辛抱たまらずベッドイン。家もないので居候しているとそこにエレノアがあらわれる、といった寸法だ。家ではったりか通りではったりかはともかくとして、なにより腹立たしいのは、演技させられている現実の人間が、それに気づこうともせず、それどころかたいへん満足しているところだった。

「家に連れ込む。いいね。ぼくがどんな人間かもわかってないだろう？ いったいどこに惚れられたんだか」

「直感みたいなものつてあるでしょ！」ヴァラはついに泣き出した。
「理由なんかない。あなたが好きなの！」

リュックは頭をかきむしって、スツールから飛び降りた。

「だったら、はつきりさせるよ。言つとくけど泣いたって無駄だ。役者が汗をかいた場面を演じるときに霧吹きをかけるだろ？ それといっしょさ。演じているとわかった以上、そんなものはぜったいに信じてない。いい？ ぼくはきみと付き合わないし、二股かける気もない。エレノアと別れる気もないし、ふたりのあいだで葛藤する男の役を演じるつもりもないんだ！ 観客なんて××だ！ 楽しませてなどやるもんか！ ×××でも吸ってろってなもんだ！ どうだ！ これでスッキリしたぞ！」

リュックはヴァラの顔を見ないようにした。ここは酒の勢いを借りたほうがいい。

「おまえらなんかあっち行け！ バカつたれ！」

思いつきり手を振りまわした。ねじれたパーカーを直そうとバカ

みたいに何度もひっぱり、しまいには一回転して着地するとヴァラの目の前に立っていた。パーカーは落ち着いたが、中身は依然バカなままだった。

「最低な言いかた」

ヴァラはじつと見つめ、静かに口を開いた。目が震え、充血している。つばを飲み込み、ペーパータオルを取って鼻を押さえた。財布を取り出し、札を一枚カウンターに置く。「ふたりぶんよ」

リュックを一度も見ずに、背を向けて出ていった。リュックは背中を目で追いかけて、通りの向こうにいないまで見つづけた。いなくなると、肩の力が抜けた。

「あっちへ行くのはあんたのほうじゃないのか」

主人が腕を組んで見下ろしている。

「そうか。あんたは、人生に絶望してバーで酔いつぶれた主人公を店からつまみ出す役ってわけだ」

「主人公？　本気で言ってるのか？　自分勝手なキ×××野郎め」

「ほら！」リュックは主人の口を指差した。「いま『ピー』っていったら？　汚い言葉を使ったからだよ」

主人はのっそりとカウンターから出てきて、リュックの目の前に立った。顔がくっつかんばかりににらみつける。

「出ていけ！」

リュックは「ピー」についてなんとかわからせようと何度も「ピー」と言ったが、ついに担ぎ上げられ、外へ放り出された。

12話 スクリーンテストは洗濯機の中で

エレノアは真の安らぎと心地よさみたいなものを感じながら、ベッドで眠っていた。その快適さときたら、なぜベッドで眠っているのかを考えるのも眠たくなるほどだった。わが家のぺらぺらのマットレスやぺったんこの敷布団とはおちがいだった。まさに「包み込むような寝心地」。枕は上を向いても横を向いてもちょうどいい高さで、掛け布団はふんわり軽くてすべすべだった。エレノアは横向きになって枕に半分顔をうずめ、清潔なカバーのにおいを嗅ぎ、大満足のため息を漏らした。足の甲をこすり合わせて、もつと心地よくなるようにおケツの位置をずらした。

「さあ、目を覚ませ」

そんなわけでベッドで気持ちよく眠っていたエレノアだったが、だれかが耳もとでささやきつつけるのですっかり目が覚めてしまった。他人に起こされるほど頭に来ることはない。もう何度ささやかれたか覚えていないほどだったが、エレノアは今回も無視した。そしてもつと気持ちよく眠ってやろうと決心した。

「起きて、エレノア」

リンのささやき声が耳に飛び込んできたので、エレノアは全力全開で目を覚ました。枕に頭を乗せたままあたりを見まわしたが、リンはいなかった。リンどころかだれもいない。室内は白い壁に囲まれている、ベッドと自分以外なにもなかった。

「ははは。だまされた」

枕もとから声がした。思わずうなり声を上げ、両手で顔をおおった。

「また会ったね。ぼくだよ、ミーカだ」

気が進まなかったが声のするほうへ顔を向ける。大きめの石鹸みたいな箱が置いてあった。万能デジタル家電のマイエだ。肘をついて体を起こし、恥ずかしがりのテレビを持ち上げた。例のむかむ

かさせる笑顔があいさつしてくるかと思いき身構えたが、画面に映っているのはリンだった。

「どうしたの、リン」

リンは眉毛を八の字にして、途切れ途切れになにかを叫んでいる。声が聞こえない。聞こえていないのがわかったのか、今度はじたばたしはじめた。手でメガホンをつくって叫んでみたり、助けを求めようと両手を広げてジャンプしたりした。膝に手について呼吸を整えると、ジェスチャーゲームをはじめた。よく見て、というふう
に指を立ててから、手で大きな四角を描き、アニメの水兵かなにか
みたいに胸を張り肘をいからせて左右に歩いた。それから食事をす
るふりをしたり、おちゃらけたダンスをしたり、泣き真似をしたり、
架空の人物に指をつきつけお説教をし、ビンタをするふりをした。
画面に向き直って、自分の鼻を指差してなにかを言った。口をよく
見ると、「わたし、わたし」と言っているようだった。両腕で大き
なバツテンをつくり、エレノアを指差し、そして唇をぎゅっと結ん
で目を潤ませながら、胸に手を置いた。

「まったくわからない！」エレノアは画面に食らいにつき、つばを飛ばした。「なにが言いたいの？」

エレノアの目も同じように湿っぽくなってきた。鼻の頭がくつき
きそうになるくらい画面を近づけたが、それでもわからなかった。

むかむかさせる声がテレビから聞こえてきた。

「そのまま待て。いま姿を見せてやる」

画面が縮みはじめた。だがリンはそのままの大きさで、上下左右
がどんどん迫ってくる。リンも気づいて、パントマイムのように画
面の端を押したり引いたりする。

画面の後ろから出てきたのは、ふたりの男の顔だった。ひとり
はミールカ。この笑顔を見ていると、かかとで踏んづけてやりたくなる。
もうひとり知らない中年の男で、笑顔はなく難しい顔でむっつり
していたが、こちらにも機会があれば踏んづけてやろうと思った。

ミールカはさわやかに言った。「調子はどう？」

「ウンザリ」

「すこぶるいいようだね。さっそくは始める前に、ぼくの友人を紹介しよう」

エレノアはぶんぶんかぶりを振った。

「ジョンだ」ハゲ散らかした髪を横になでつけた。「あんたがエレノアか。はじめまして」

リンは画面の右下に追いやられ、膝を抱えて首を傾けていた。天井を押し上げようとするが、ぴくりとも動かない。顔を横にしたまましゃがみ歩きでカメラに近づき、エレノアに向けて指でバツ印をつくった。なにが言いたいのだろう。

「どうだ、いいベッドだろう？」ミーカが言った。

「ぜんぜん」

「嘘をつくんじゃない。さっきまで大満足の表情を浮かべていたくせに」

「浮かべてないもん」

エレノアはあらためて周囲を見まわしたが、みごとにまだになにもない。真っ白い壁はコンセントすらなく、家具もない。電灯もない。あるのはエレノアと白いベッドだけ。と思ったら出口がひとつあった。小さなまるい窓がついている。

羽毛布団をわきへ退け、足を床へそろそろと下ろす。入院患者になった気分だ。エレノアは裸足で立ち上がった。床はひんやり足の裏に吸い付き、思わず爪先立ちで足踏みした。

脳の奥から、宇宙船に吸い込まれて意識を失うまでの記憶が蘇ってきた。その記憶といまの状況をなんとかつなげようとして、はじめて自分がティンカーベルでないことに気づいた。肌触りもなめらかなシルクのパジャマを着ていて、あれだけ草原を駆けまわったはずなのに体の汚れもすっかり落ちていた。自分が自分ではなくなつたような気がする。わたしはエレノアであるという確固たるものが needed。心のうちを探ろうと目を閉じ、心に到達する途中で下着に到達した。心を探るように下着を探り、はつきりと理解した。完全

に、疑いようもなくおニューだった。

エレノアは恐ろしくなつて体を縮こませ、凍えるように肘を抱いて窓に歩み寄った。

のぞいてみると、外は宇宙だった。

「ぼくらを無視するな！ 無視をするな」

テレビの音量がどんどん上がっていき、ミーカの怒鳴り声がスピーカーをびりびり震わせた。エレノアは酔っ払いのようによろめきながら振り向き、ベッドに飛びついた。ミーカは「無視するな」と繰り返し叫びつづける。枕もとのテレビをつかんで、タッチパネルを呼び出して音量を下げた。

「下げすぎ。ちよつと上げて」

ちよつと上げた。

「よし。二度と無視するな。親兄弟をコケにされるのはがまんできるが、無視されるのだけは耐えられない。耐えられないんだ」

カメラが引いて、ミーカとジョンの全身を収めた。家庭的で小ぢんまりしたリビングで、ふたりがけのソファにふんぞり返つてすわっている。

「無視しないから、ここがどこか教えて」

子画面のリンがカメラに鼻をくつつけてまくしたて、かぶりを振っている。

「見ただろ？ 宇宙だ。きみは宇宙船に取り込まれたんだ。トイレの中に到着するわけないだろう」

「わ わたしを着替えさせたでしょ？ お風呂に入れて」

「だつて汚れてたから」

子供みたいな答えが返ってきた。エレノアは口を開きかけたが、ジョンが先まわりして言った。

「ランドリーでちよつと洗濯しただけだ。それに洗濯機というだけあって、下着の替えも山ほどあるしな。うまい具合にできてるだろ？ だいじょうぶ、だれもきみの裸は求めてない。おれだって

成人映画には興味がないからな」

エレノアは口を開きっぱなしで聞いていたが、言うべきことが見つからなかったので閉じた。

「ではさっそく、テスト映像を見てもらおう」ミールは画面の外に向かつて聞いた。「用意できた？　じゃ、流して」

「おれにくだらな深夜番組なんか撮らせるな」

「まあまあ」と相方をなだめたあと、エレノアに向かつて言った。

「きみをベッドに寝かせたのにはわけがあるんだ。テレビの世界では、なにをするにも理由がある。呼吸をするのも、髪をかき上げるのも。意味のないものは存在しない」

そしてこれまででいちばんのビッグスマイルを浮かべた。

「きみの初出演の番組だよ。題して、『激安テレシヨップ現実版』」

「センスないな、あんた」ジョンがぼそっとつっこんだ。

「いいだろ、企画用なんだから」

「プレゼンでもタイトルは重要だろう。そんなんでマイク・レビーやジョン・パーキンに勝てると思ってるのか」

ふたりがぶつぶつ言っているあいだに、映像が切り替わった。リンは相変わらず子画面でじたばたしている。

「リン　「エレノアはささやいた。わたし、どうすればいいの？」」

閑散としたスタジオが映る。なんだか絵にならない男が、マイクを手に笑顔で立っていた。

「どうも」と手のひらを見せる。

若手芸人のヘルマンだ。空き家を燃やしてとっ捕まったはずだが、出所してきたのだろうか。刑務所暮らしが堪えたのか、以前よりまだいぶやつれた感じだし、髪にはやくも白いものが混じっている。どこか緊張した面持ちだったが、いきなりテンションを上げてわめき出した。

「さあ、今週もはじまりました！　『激安テレシヨップ現実版』の時間だよ。今日もみなさまにすばらしい商品の数々をお届けします。司会はおなじみ、ヘルマンですー！」

スタツフらしき人の、お義理の拍手が聞こえた。

「こいつしかいなかったのか」

「急だったんだ。しょうがないだろ」

ミーカとジョンの声が割り込んでくる。

「司会といつても、ぜんぶぼくがこなすんだけどね」

ヘルマンは自分のジョークで笑い、マイクを構えてさかんにスタジオ内を行ったり来たりしている。

「みなさん、毎日眠ってますか？　もちろん。じゃあ、快適な

眠りはどう？　これにはいつも悩まされる。睡眠は大事だからね。

ぼくなんか、悩みすぎて夜も眠れないくらいだ。はは！」

だれも反応しないと、閑散としたスタジオではよけいに声が響き渡る。

「快適な睡眠に必要な条件とは、なにか。なんでしょうね？　そのあなた。どう思います？」どこのあなたかわからないが客席のほうにマイクを向けた。しばらく間を置いて、なるほどとうなずく。
「そう、寝具だ。いい枕に、いいマットレス。シーツは清潔がいいでしょ？」

架空のだれかがなにかを指摘したようで、ヘルマンは一本取られたという感じで仰向いて笑った。

「まいった！　ずばり言っちゃったね。そりゃテレシヨップだから、結局は寝具を紹介するんだけどさ」

マイクをわずかに下げ、間を置く。もしかすると客に話しかけられていられるかもしれないが、映像を見るかぎりではわからない。

「まあいいや。　ぼくとしては、じつはこう思っているんだ。寝具は二の次だ、ってね。シーツは不潔でもちゃんと眠れる。ぼくは刑務所にいたんだけど」

これがお笑いステージなら、思いがけない爆笑と拍手が起こってニヤニヤしながら観客を制するところだ。これで客の心をつかんだと手こたえを感じるべきところだ。しばらく刑務所ネタで稼ぐことができるか確信するべきところだ。

「快適な睡眠に必要なのは、適度な食事と適度な運動、そして毎日を充実させることだ。そう思わない？ その点、刑務所は完璧だったね。食事はあっさり風味だし、デザートを巡って取っ組み合いもできる。そうそう、それから懲罰の穴掘り十四週間。あれもいい運動になった。言うまでもないけど、人生を充実させるために趣味も見つけた。シャワー室で血を流した男を囲んでダンスを踊るんだ。これでご近所付き合いもばっちりというわけ」

だいぶあったまってきたのか、額から汗が噴き出している。ひとりぼっちだということも忘れそうなほどだ。

「それから、規則正しい生活。これも重要だ。ム所じゃ、夜は九時に消灯だろ？ 朝は六時きっかりに起床、そして点呼。 あれはいいね。みんなも明日から点呼をするべきだ。時間が来たら子供部屋のドアを警棒でガンガンぶっ叩いて、廊下に整列させるんだ。口答えしたら思い切りぶん殴ったり」含み笑いをして、間を置いた。

「これで子供たちは規則正しい生活を覚え、ぐっすり眠れるようになると思うよ。もちろん親御さんもね。 たぶん刑務所にブチ込まれるだろうから！」

オチのあと、親切なスタッフが笑い声を響かせた。ヘルマンはうるうるをやめてひと呼吸置き、感謝するようにうなずいた。

「とまあ、ぼくはそんなふうに信じていたわけだけど、ある日、それらはまちがいだと気づいたんだ。これから紹介する商品、こいつに出会ってからね。詳しい紹介はCMのあとで！」

ルアーを投げるみたいに腕をつき出し、客席に向かって指を立てた。決めのポーズだ。

「なんつって。これはほんの冗談で」
「キャスティングを誤ったな」ジョンがつぶやいた。

「本日最初に紹介する商品は、これ！ 『絶対的パツキン寝具』セットだ！」

ポーズもそこそこに、急いで奥に走った。段差に飛び乗り、中央に鎮座する「商品」のわきに立つ。商品はもちろん寝具で、ゴージ

ヤスなダブルのベッドに、クリームのような純白の掛け布団がかかっている。

たしかに高そうだが、いたってふつうのベッドだ。どこらへんが「パツキン」なのかとエレノアは思ったが、寝ているモデルがパツキンだった。手持ちのカメラがモデルに寄ると、ちょうどいいタイミングで気持ちよさそうに寝返りを打ち、顔を見せた。

パツキンのモデルはエレノアだった。そんな気がしていたし、わけのわからないことがつづいたせいですでにビックリ顔の在庫は使い果たしてしまっていた。ただ、テレビに映る自分を見るのはとても複雑な気分で、なんと例えていいのかわからない。

「すごく快適そうだね」

ヘルマンはカメラに向かって目をぎよろつかせ、声をひそめて言った。ベッドをまわりこんで枕側に立つ。

「この枕、じつはフェザーが五十パー　七十五？　低反発性素材もどうか　なんでもいいや。とにかくふわふわなんだ。見てよこれ」

寝ているのもお構いなしに枕をぐいぐい押す。そのたびにエレノアの頭がぐくぐ揺れたが、よっぽど気持ちいいのか目を覚まさない。

「カバーは三枚お付けしますよ！　つやつやでいて抜群の肌触り。使用した綿糸はなんと、従来の二十分の一の細さ！　ナノテクの結晶だね。うーん、思わず頬ずりしたくなる」

と言つて実際に頬ずりした。お互いの鼻の頭がくつつきそうな距離だ。吐息なら余裕でかかっているだろう。テレビを見ているほうのエレノアは顔をゆがませ、思わず振り向いて枕を見た。そしてひっくり返した。

「掛け布団はおしゃれなキルティング加工で、特殊な軽量素材を使っているんだ。指一本で持ち上げてみせるよ」

エレノアの首もとから、布団の中に勢いよく腕をつっこんだ。視聴者としてのエレノアが代わりに短い悲鳴を上げた。

「なんでごそごそしてるの」「ツツコミの声も思わず震える。あまりのおぞましさに、いま着ているパジャマも下着も剥ぎ取りたい気分になった。「なにをごそそと」

ヘルマンは指だか腕だかわからないがとにかく片手で掛け布団を持ち上げ、画面の向こうへ放り投げた。横向きで眠るエレノアがモロ出しになった。膝を折り曲げ、自分を抱きしめるように腕を体に巻きつけている。普段あんな格好で寝ているとは新しい発見だったが、うれしいかと言われればまったくそんなことはなかった。髪はぼさぼさだし、顔はボンヤリしているし、思っていたよりも尻が大きいような気がする。

テレビのエレノアは居心地悪そうにもにやまって、足の甲をこすり合わせた。

「ベッドパッドはウール製。そしてこのマットが優れもの！低反発素材　って、もう言ったっけ？　まあいいや。おたくのベッドマット、いまにもスプリングが飛び出してきそうなんじゃない？　こいつは細かいコイルがそれぞれ独立しているから、体の曲線にぴったりにフィットするんだ。背骨も安心だね」

なにを思ったか、ヘルマンはエレノアの尻をパチーンと叩いた。「もういい！」エレノアはテレビのスピーカーに怒鳴った。「なんか腹が立ってきた！」

反応はなかった。ヘルマンもいつのまにか画面から消えていて、ひとり取り残されたエレノアは周囲のことなどまったく気にせず寝こけている。芋虫のようにうごめいてうつぶせになり、わき腹をぼりぼり掻いた。オナラをしたりはしないだろうか。

袖からヘルマンがやってきた。ヘルメットに透明のゴーグルをかけて、重そうなバックパックに携帯用の火炎放射器を抱えていた。興奮した様子でカメラにうなずき、ベッドの近くに転がっている掛け布団に近づいた。

「そしてなにがすごいって、耐火性能も抜群なんだ。それ行け」銃口を向け、いきなり火炎を噴射した。やりすぎのガスバーナー

みたいな轟音を立て、炎が掛け布団を舐めまわす。エレノアは体半分を炎で赤く照らされ、ケーキかなにかのように焼き色をつけられそうになっている。それでも気づく様子がない。悪い薬でも盛られたのではないかと頭をよぎったが、そうではなかった。いつもと変わらない。エレノアは、ひとたび寝ると決めれば起きるまで寝るのだ。

「おもしろい」ミーカが感想を述べた。

たつぷり十秒もあぶり倒し、ヘルマンはようやくトリガーを離れた。どんな素材が使われているのか、布団には焦げ目ひとつついていない。

「丈夫で快適。万一の火事の時も安心でしょ？ 中身は焼け死ぬかもしれないけど。でもそれは保証の対象外だよ！」

布団を持ち上げて、無造作にベッドへ放った。うまいことエレノアにおおいかぶさり、寝息を立てながら首もとに引き寄せる。

「はい！ お求めはこちらの番号から。ネットでの購入は、『フォーム・オンライン・ストア』でどうぞ。アドレスはこのへん」

画面が切り替わった。拍手とアイキャッチの音楽が流れ、家庭的で小ぢんまりしたりビングが映し出される。ミーカとジョンが、コントみたいにならずとらしくソファに並んですわっていた。

キャッチが終わると、ミーカはジョンに笑顔で話しかけた。「これ、どう思う？」

「エレノアについては、いい寝っぷりだったと思うね。まさに天性の寝相だ」ジョンはテーブルに手を伸ばしてポップコーンをボウルごと抱え、がさがさと食い出した。「さすがだな。人気があるわけだ」

「番組については？」ミーカはジョンのボウルに手を伸ばしてポップコーンをひとつかみし、一気に口に入れた。「ぼくはそこそこいけるんじゃないかと思うけど」

「低俗だな」ジョンは口の中がいっぱいになるまでポップコーンを詰め込んだ。「ていぞくだ」

ミーカは両手でポップコーンをつかみ、なんとかぜんぶ口に押し込んだ。「そうじゃない　したしみやすさっていうか　」

ジョンは冷ややかに相方を見つめ、ボウルに目を戻すとペツとつばを吐いた。ミーカは驚いた様子で体を起こし、それから目を細めてジョンをにらみつけた。

険悪な雰囲気の中、ジョンは静かにポップコーンをひとつかみ口の中に追加した。

「ひとつ　ちめいてきなもんだ　」ついにえづいた。口からポップコーンを何個か吹き出し、急いでグラスに手を伸ばす。「もんだいがあるだろう　」なんとか飲み下し、肩で息をついた。「ひとつ聞くが、おまえ、これを見てベッドがほしくなったか？」

ミーカはつま先を見つめ、しばらく考え込んでいた。観念したようにかぶりを振る。「　いんや　」

そしてむせ返り、ポップコーンを吐き出した。

「次に期待しよう」無造作にミーカの肩を叩く。「テレシヨップなんてもう流行らないさ」

「そうだな、次に期待だ　」

エレノアは辛抱たまらずツツコミを入れた。「あなたたち、ふつうに会話できないの？」

「とうぜん。テレビの住人だからね」

「おまえらのいう『ふつうの会話』とはなんだ？」ジョンはすごい。「天気の話か？　今週のアニメの話か？　それとも自分話を延々つづけることか？」

「そうそう。みんな主役になりたがってる」

「どうして中身の無い話ばかりできるんだろうな。だれも聞いていないのに、ひたすらしゃべりつづけている。自分はどれだけ賢いか、どれだけ多趣味か、どれだけ金持ちか、どれだけ友達が多いかと、必死になって伝えようとしている。アホなくせに。カラッポな自分を知ってもらってなんになる？　口を閉じたほうがよっぽど利口に見えるんじゃないのか？」

「ははは。それは言えてるね」

ふたりはハイタッチした。

リンを見ると、寝っ転がって足の裏で天井を押し上げようとしていた。話をしたい。声を聞きたい。なのに聞こえるのは中年コンビのボヤキ漫才だけだ。どんな話をしたいかと聞かれても答えようがないが、「へえ」とか「ふうん」とか、それだけでもかまわなかった。一日じゅう天気の話をするのだって、リンとならきつと楽しいにちがいない。

床に置いた足が冷たくなってきた。ベッドの上であぐらをかく。

「台本どおりにしゃべるだけなら、だれだってできるじゃないの」
エレノアはなにげなくつぶやいた。すると不気味な間が空いた。

ミーカとジョンがこちらをじっと見ているのに気づいた。

「寝るのはもういい」ジョンが言った。「次は、本格的な演技のテストに入るう」

「もうけっこう」

「なにがけっこうなもんか。特別な存在にしてやると言っているんだ。おれの作品に出れば、スターになれる。みながうらやむ有名人だ」

「なりたくない」

「知ってる。だから選んだんだ」ミーカが口をはさんだ。「ほかはみなカッコついで、自意識過剰で、うんざりする。無意味な連中ほどスターになりたがるもんだ。いや、実際、あんな連中は見たくもない。連中を目にするとテレビを消したくなる。きみがいいんだ、エレノア」

「よし、はじめよう。スターがいいそうだから」ジョンは眉を上げて舌打ちした。「まずはオーディション番組か。おれも業界に飲み込まれかけてるな、まったく」

「エレノア、上を見て」

指を立ててミーカが言った。言われたとおり天井を見ると、監視カメラがぶら下がっていた。

「いまさら監視カメラくらいで」

部屋の四隅が小さく爆発し、白い煙を噴き出した。それを合図に、部屋の継ぎ目にいっせいに爆発が走った。板から百本くらい一気に釘を抜くような音がしたかと思うと、天井がスポンと上空に飛び出していった。

天井に宇宙が広がった。

13話 サイモン・コーウェルとスター誕生

宇宙は真空中で呼吸ができないらしいので、エレノアは息を止めた。顔を上げながらベッドを下り、テレビを取った。戦闘機かレーザーが異星人か、とにかくありがたいなにかが飛び出してきそうだったので、テレビをわきにはさみ、防火加工済みの掛け布団を持ち上げ、すっぽりと頭からかぶった。プレゼントの中身の気持ち良かった気がした。

布団のすきまから様子をうかがう。小爆発は天井から壁の継ぎ目を下りてきて、床で止まった。支えを失った壁がお互いを離れていき、ゆっくりと倒れていく。

轟音に耳をふさぐ。壁が床にぶつかる衝撃で地面が揺れた。床以外を宇宙に囲まれ、息もつづかなくなってきた。こんなバカな話があつてたまるかと、急激に腹が立ってきた。その勢いを借り、口を開けて思い切り吸い込んでみた。呼吸ができる。なんだふざけるなとよけいバカバカしくなつて、バカバカしさの頂を越えて逆に楽しくなってきた。まわりでなにが起ころうと、自分には関係ない。気にしなければ関係なくなるのだ。ただのテレビ番組なのだから。悟った気分になり、まわりを見るのをやめた。布団をかぶって天才家電マミーエをいじくり、バックライトをつけた。結局テレビを見るだけだが、家に帰ったらピザでも温めてもらおう。テレビの画面には海岸の夕日が映っており、「しばらくお待ちください」の文字が行ったり来たりしている。

子画面には相変わらずリンが閉じ込められている。ドライバーを手に、画面の枠のネジかなにかをはずそうとしている。

エレノアはふとひらめいた。「ねえ、マミーエ。起きて」

反応がない。

「起きてったら。寝てばかりいてもはじまらないでしょ」辛抱強くつづける。「助けてほしいの」

やっぱり反応がない。

「子画面と親画面をひっくり返してほしいの。子画面機能があれば、そのスイッチもあるでしょ？ わたし、まだ操作方法がわからないから」

さすがに頑固だ。

「いい。自分でやる」

エレノアはタッチパネルを呼び出した。ここまではできる。メニューから「画面」を呼び出した。画面の縦横比が変わっただけだった。「音声」「予約」を飛ばして「機能」をタップする。自動選局や視聴制限などがずらりと並ぶ。どれも目障りなアイコンで、ひと目見ただけでは理解できないボタンも多い。あちこち押しでは戻りを繰り返す。

フォークとナイフを模したボタンがあった。とりあえず押してみると、「食事をダウンロード中」という表示が出た。

終わったとたん、テレビから甲高い声がした。「ふう」

「だれ？」

「ぼくはぼくだ」

「えーと、マイイエ？」

「ぼくの名前を呼ぶのはだれだ？ ぼくの中の他人か。ぼくが人の関わりを切望しているということなのか？」やたらと早口でまくし立てるので、聞き取りづらい。「それとも宇宙が語りかけているのか。いやちがう。ぼくは宇宙だ。宇宙の一部であり、ぼく自身が宇宙全体なのだ。他人なんてどこにもいない」

「エレノアよ」なんとか言葉を割り込ませる。「助けてほしいの」

「食事を与えてくれた人？」

「そう　そうよ。よかった。ひきこもりだって聞いてたから」

「ひきこもり？ このぼくが？ バカ言わないでくれ」

「じゃあ、どうして返事がなかったの」

「おながが空いて気絶してたんだ。だれも食事を用意してくれなかったから」

しばらくのあいだ、宇宙はたったひとつのエネルギーからできているとか自己実現についてとか五分でできる集中力トレーニングについてとかをぺちゃくちゃとしゃべりつづけていたが、話を合わせたりなだめすかしたりしてなんとか話を聞いてもらうことができた。「オーケー」

マリーエはあっさり了解した。画面の親子が切り替わった。急に画面が大きくなったのでリンは空中に取り残され、次の瞬間床にしみもちをついた。

「リン？」エレノアは画面にかぶりついた。

リンは顔をこちらに向けた。「エレノア、聞こえてる？」

「聞こえる！」

リンは髪をかき上げながら、よろよろ立ち上がった。ノンストップで決勝まで勝ち上がってきたみたいに肩で息をついている。

「で？ いま、どうしてるの？」

「布団かぶってテレビを見てるの」

リンはヒステリックに笑った。「そう。いつもと変わらないってわけね」

「宇宙でだけどね」

「そこは宇宙なんかじゃない」

「そうみたい。呼吸もできるし」

「時間がないの。聞いて。あなたがいるところはミールカの用意した宇宙船の中だけど、同時にセットの中でもあるの」

「どういうこと？」

「宇宙船の司令室みたいなものよ。いかにも宇宙船ですって顔でいるけど、スタジオで起震機の上にセットを乗っけてるだけ。『敵のミサイル攻撃だー』って。ぐらぐらぐら」

リンはよろけて床に倒れる演技をした。

「それは知ってる。小学生でも知ってることよ」

「でも、これは知らないでしょう。あなたはとても微妙なところ場所にいるの。いい？ セットの司令室でも、信じれば宇宙船の中

になる。子供の夢と同じ」母親が叱るように厳しく言った。「わかった？」

エレノアはうなずいた。「わかった　と思う」

「おじいさんも言ってたでしょ、『ぶらぶらするのだ』って。信じではダメ。信じれば、あなた自身もキャラクターと同化する。月曜日はおさげのベティ、金曜日は娼婦のイヴオンヌ　そしてほんとうのあなたは、いずれ消えてなくなる。　わたしのように」

「リンのとおり、って？　もしかして　」

勝手にチャンネルが変わった。薄暗い、空っぽの劇場だった。クレーンカメラが下降しながらステージに近づき、ぽつんと立っているミーカを映した。グレーのスーツを着て、マイクを持っている。結婚式の司会者みたいだった。

リンの驚いた顔がまぶたの裏に焼きついている。

「おしゃべりは終わりだ、エレノア」ミーカがネクタイを調整しながら言った。

「もう、いいところで！」

「とうぜん。なんたってテレビ番組なんだから　」

「うるさい！」

ジョンの声がおっかなそうにうなった。「これはこれは。気が立っているようだな」

「オーディションの直前だから、緊張してるんだよ」

「だいじょうぶ。きみなら勝てるさ」ジョンが忍び笑いを漏らす。

「そろそろはじめよう」ミーカは司会者っぽく声を張り上げ、エレノアを指差した。「さあ、この番組でスターになってくれ。『チャンスがなかった』なんて、もう言わせないぞ。　題して『開け！才能の扉』」

「もつとマシなタイトルはつけられないのか　」

ふたりで好き勝手しゃべったあげく、テレビが消えた。

周囲がざわつき出した。エレノアは身構え、リンの忠告を思い出しながら羽毛布団をかぶり直した。「なにが起きても信じない」と

つぶやく。

はじめは数人が遠くで雑談しているだけのようだったが、右から左からたくさんの話し声と足音、くぐもった笑い声が近づいてくる。ざわざわが音のない空間を埋め尽くし、正面がぜんぶざわざわの波になった。波乗りするようにあちこちで大きな笑い声や叫び声が上がった。

目の前はおそらく人間だらけだ。ときおり自分の名前を呼ばれている気がして、エレノアは耳を澄ませた。が、思い直してかぶりを振った。気にしてはダメだ。

音楽が流れた。そのとたん、まさに津波のごとく歓声が立ち上がり、布団を吹き飛ばす勢いで押し寄せてきた。どしゃ降りの拍手が降り注ぐ。

「みなさん、お集まりいただきありがとうございます！ さっそくはじまるよ！」

エコーのかかった声が、津波の中に入り混じる。「どうも、どうも！」

どうもどうもという生声が左手から近づいてきた。声の主はとなりに立った。エレノアは布団の下から、その男の革靴をのぞきこんだ。

拍手が収まる頃合を見計らって、司会者は短く息を吸い、声を張り上げた。

「テレビは好きかー？」

観客が反応する。この声はミーカだ。聞きまちがえようがない。

「そう！ だけどぼくらはウンザリしている。もうたくさんだという気持ちだ。現実の連中を楽しませるために演技をするのは、もう終わりにしようじゃないか。今度はぼくらがおもしろい番組を見る番だ！ そうだろ？」

ミーカはいったん言葉を切り、タメをつくった。

「今日、最高のスターが決まるよ。エンターテインメントにはスターが必要だ。ぼくらはその一挙手一投足を見たい。同じ星座、同じ

誕生日だと喜びたい。恋人の名前を知りたい。気になる存在。憧れの存在。夢中になれる存在　きみらはどんなスターが必要なんだ？」

観客を騒ぐに任せ、ひと息ついた。

「その前に審査員を紹介しよう」

革靴が前に進んだ。

「まずはこの生物から。自分で自分をデザインし、改名し、キャラクター商品の常識を根底からくつがえした。かわいいものならなんでもござれ。毛もじゃのウッドウブードウ」

拍手。キーキー声で「親はまだ考えてないんだ！」と叫ぶと、どつと笑いが起こった。どこかで聞いたことがある。

「次は都合により名前がない男。名バイプレイヤーまであと二、三歩。審査員その二」

拍手。かすかに「一度でいいから役名がほしいよ」というボヤキが聞こえてきた。こちらもどこかで聞いたことがある。

「そしてサイモン・コーウェル」

一段と大きい拍手。こんなところでなにをやっているんだろう。

「ではさっそく、はじめの挑戦者に登場してもらおう。といっても、すでにここにいるんだけどね。みんな、生で見るのははじめてだろう？　今世紀最後のテレビっ子、テレビが好きでなにが悪い、悪いのは世の中のほうだ！　才能あふれる若きエレノアです！」

がばつと布団をひっぺがされ、思わず縮こまった。歓声が大きくなる。しゃがんだまま半身の体勢になり、おそろおそろ目を開けてみた。想像よりもはるかに巨大な劇空間が目の前に広がっていた。宇宙よりも広大で、しかもおそろしく巨大ななが薄闇の中でうごめいている。自分がちっぽけに思えた。パジャマ姿ではとくにそうだ。

無駄だと思いつつも、エレノアは衣服を胸にかき集め、なるべく自分を消そうと小さくなった。ステージは強烈な明かりで埋め尽くされていて、客席の奥からはスポットライトが浴びせかけられる。

ライトの熱で息がつまり、くらくらしてきた。

左手に白い布がかけられた審査員席があつて、審査員が三名、めいめいの格好ですわつていた。

となりに立つ司会者を見る。やはりというか、ミーカが笑顔で立っていた。

「どう、この舞台。すごいだろ？ 予選からやりたかつたんだけど、いろいろあつていきなり決勝戦にしたんだ。どうせ出来レースだし」
エレノアは感想を述べる代わりに顔をこわばらせ、バネ人形のように立ち上がり、たつぷりと一歩あとじさつた。

「同じところにいる テレビの人なのに」

「ここはぼくらのテリトリーだ。テレビ界にかぎりなく近い。今後のためにちよつとご登場願つたんだ」

「テレビに取り込まれるつてこと？」

「そうじゃない。そしたらぼくらはきみを見れなくなる。そんなのはイヤだ。ぼくはテレビできみを見たいんだ。役どころが決まったら、現実でお芝居をしてもらふんだよ。そのためのテストさ。わくわくどきどきのテレビ番組だよ。楽しんでくれ」

エレノアはぶんぶん頭を振り、さらに小さくなろうとしゃがみこんだ。

ミーカは客席へ向き直つた。「それではパフォーマンスを披露してもらふ前に」「しゃべくりながら、腕をつかんで立たせようとする。エレノアは腕を振りまわして手を払つた。「これまでの軌跡を映像で振り返つてみよう」

スポットライトが消え、背後からなじみのある色とりどりの光がじんわりとあふれた。振り返ると、スクリーン一面にエレノアの顔が映し出されていた。何台かある小型のスクリーンにも、同様の映像が流れている。

スライドは「これまでの軌跡」というよりも、これまでの隠し撮りの成果と言つたほうが正しい代物だつた。その中でエレノアは、布団をかぶつて枕にあごをつき、ゴミや洗濯物に囲まれ正面を向い

ていた。テレビを見ているのだ。ピクリとも動かず、瞬きすらしていない。と、急に布団を跳ね除けて立ち上がり、枠の外に走って消えた。画面が自宅のトイレに切り替わった。エレノアが駆け込んできて、頭のとっぺんをカメラに向け、便座にしゃがんだ。

「なんの意味があるの？　こんなものを見せて。なにが才能？　なにが技よ。ただの変態じゃないの」

ミーカは答えず、魅了されたような笑みを浮かべながらスクリーンを見上げている。

ふたたび寢床に潜り込むエレノア。同じ格好でテレビを見ているときおり笑い、話しかけ、手探りでお菓子を探し、リモコンを向けた。

奥から声がした。リュックが「出かけてくるよ」とかなんとか話しかけている。エレノアは返事をしない。リュックが大きな声で繰り返す。「食事は冷蔵庫に」エレノアは正面を向いたまま、ようやく返事をする。

なんてひどい女だ、とエレノアは思った。あれが自分かと思うとよけい胸が悪くなる。例の大人気青春ドラマ『キーパーズ・ハウス』（原題：A good keeper）に出てくるデニーズそっくりだった。髪の色はちがうが、イヤな女には変わりない。お金持ちでお人よしの彼氏ジョナサン・キーパーを顎で使い、感謝の言葉は一度もない。そのくせ、第三話でジョナサンが家出した親友の女性をアパートに居候させたときには、嫉妬で言動がおかしくなり、あげくにジョナサンの車のミラーを破壊したりした。デニーズがジョナサンに捨てられたとき、エレノアはうれしくて歓声を上げたほどだった。

泣かせようという意図がみえみえのバラード調の音楽が流れ、小さな女の子の写真が出てきた。なんの関係があるのだろうと思ったが、よく見ると自分の小さいころの写真だった。両親には生まれ、機嫌が悪そうな顔でカメラをにらんでいる。画質の悪いホームビデオが流れる。父親に背中を押されながらブランコをこぐ映像に、と

んがり帽子をかぶってケーキにかぶりつく映像。大きな魚を振り上げ、隙だらけのグジョンおじさんの背後から襲い掛かる映像。あのころからおじさんがきらいだったのだ

これではオーディションというより結婚式だ。

エレノアは見ているのがつらくなり、魚を頭にのつけてうつぶせに倒れているおじさんから目を離れた。観客は映像が切り替わるたびにいちいち反応して、あーとかおーとか爆笑とかをしている。こんなものを見て、なにが楽しいのだろうか。

巨大スクリーンに、現在のエレノアのアップがふたたび映し出される。テレビを見ながら大あくびしたところでスローモーションになり、感動的な音楽を残して暗転する。

映像が終了し、静かな拍手が波を打った。

「感動的だったね」ミーカが前に進み出て、審査員席に向かってうなづく。「審査員に感想を聞いてみよう。毛もじやのウードゥブードゥから」

毛むくじやは毛の中から細っこい手を出し、マイクをつかんだ。もったいぶって咳払いする。「親の名前、教えて」

「えっ？」エレノアは質問を聞き返した。

「親の名前！」

「なに？」

「もう！耳が遠いのは相変わらずだな！」毛もじやはおなじみの癪癪を起こした。

「あなた、例の毛むくじやらでしょ？わたしの家を壊した」

「そう。念願叶って商品化されたの。フィギュアに、クッションに、ハッピーセットのおまけだろ。ビデオゲームにもなったんだ。空を飛んで、ショットガンをブチかますぜ。バンバン！ぜんぶそこにいる司会者のおかげ。費用も一部負担してもらったの」

よく見ると、顔が微妙にちがっていた。モンスターの地方のマスコットみたいにパツとしなかった顔が、いまはパツチリしたタテ目に黒くてまるい鼻にニコニコ笑う口が耳もとまで裂けていた。どこかで見たことがある感じがしないでもない。

「裏切ったのね」

「夢を追い求めただけさ。親の名前は？」

「教えたくない」

ミーカが代わりに答えた。「ハルドウルとフローサ。ほかには？」

「兄弟は何人？」

「いない。ご両親がほしがらなかったんだ。ほかには？」

「やめて」エレノアは胸が悪くなった。「お願い」

ミーカは無視して繰り返す。「ほかには？」

「うーん」毛むくじやは体をかきながら考えていた。「おまえ、整形してる？」

「あなたに言われたくない！」

「ははは」ミーカは観客といっしょになって笑った。「もういいかな。それでは名なしの審査員B。なにか質問は？」

審査員Bは定年退職後の趣味を見つけそこなった老人のようにボンヤリしていたが、急に振られて驚いていた。どこかで見たことがあると思ったら、役がほしくて犯人と銃撃戦を繰り広げた例の副本部長だった。

「それじゃ」「副本部長時代の勢いはなく、落ち着かなそうに手を何度も揉みしだいていた。「好きな色とか」

「もうけっこう」ミーカがさえぎる。「それではサイモン」

サイモンは腕組みをして、じっとエレノアを見つめる。

「そう」わたしが聞きたいのは、だ。つまりきみの初デートについてなんだが「身を乗り出し、手にしたペンをもてあそぶ。「何歳のときだった？」

「デート？」

「キスはある？ なし？」

エレノアはくつつきそうになるほど眉毛を寄せて、サイモンの顔をのぞきこんだ。どのツラさげてこんなアホな質問をしたのかと気になったのだが、サイモンはいたってまじめだった。いまにも鼻で笑い出しそうな、それでいて厳しく値踏みするようないつもの表情。

エレノアは質問にどんな意味があるのか考えてみたが、唐突になにもかもバカバカしくなった。初デートが何歳だったかなんて質問にそれ以上の意味などあるはずがないのだ。だましてやろうとか、その歳までデートしたことがなかったのかとバカにしようとか、自分と比べてどうか、そんなことはまったく考えていない。スターの恋愛や、家族や、カップ数を知りたいだけ。なぜなら連中はテレビのキャラクターで、それがテレビというものだから。

リンの声が脳みその奥から浮かび上がってきて、エレノアに語りかけた。

「信じてはダメ。だらだらするのよ。ぶらぶらして」

ピンチに陥った主人公には、うまいことヒントが与えられるものだ。この空間はテレビ界にかぎりなく近いからなのだろう。リンの言葉をいま一度噛み締め、どうすべきかを悟った。

と思ったら一瞬で消えた。エレノアは自分の頭をはずしてガムの入れ物みたいに振りまわしたい衝動に駆られた。

「あなたが鍵なのよ」

鍵。鍵とはなんだろう。リンとおじいさんは言っていた。自分には現実と番組をごっちゃにできる力があり、元に戻す力も備わっていると。だけどこれまで二十数年歩んできた人生は平凡もいいところで、仕事をしたこともないし、友達もいないし、恋人はいるけどかならないがしろにしてきた。自分はなんのとりえもない。

いや、とエレノアは考え直した。テレビだ。わたしは市内でいちばんのテレビっ子。テレビのことならなんでもござれ。ドラマのキャラクターの名前も、番組表もすべて暗記している。テレビを見ることにかけてはだれにも負けない自信がある。

自分のせいで、現実と番組をごっちゃになった。それはなぜなのだろう？

だれよりもテレビを見つづけたからだ。

ようやく頭の中からガムが出てきてすっきりしたエレノアは、決然と顔を上げ、会場全体を見渡した。それからだしぬけにネットシ

ショッピングをはじめた。

「質問に答えないのかね？」

と言うサイモンを無視し、エレノアはステージのと真ん中に布団を敷き、寝床をこしらえた。うつぶせに寝そべり、一息ついてマリーエに話しかける。

「ねえ、ショッピングしたいんだけど」

「きみからそんな言葉が聞けるなんて。立派だよ。さっきのきみも自己実現にまた一歩近づいたね」マリーエはぺちゃくちゃとまくし立てた。「人生という名のステージでは、みんなそれぞれ主役を演じてるんだ。人気があるからといって、他人と同じ演目を選ぶ必要はない。きみは心の声に従って、大観衆を前にネットショッピングをしようとしてるんだね？」

「そうよ」話の内容は気に入らなかったが、この天才家電が好きになりはじめていた。人間はダメだが機械相手ならうまくいく。

「だけど、ほんとうの幸せは自分の中にあるんだよ。物質欲にとらわれてちゃ真の安らぎは得られないんだ。占いゲームしない？」

「いまはショッピングがしたい」

「オーケー。人生は山あり谷ありさ」

全体的にくねくねしたデザインのショッピングサイトが表示された。淡い緑色がおしゃれだったが、フォントが懲りすぎでなにが書いてあるのかさっぱりわからなかった。写真を頼りに、次々とカートにつっこむ。

決済方法の選択で、はたと気づいた。

「お金持っていない」

「お金なんかはちょっとでいいんだ」

「ちょっとじゃなくて、ぜんぜん持っていないの」

「人それぞれだよ。気に病むことはないさ。じゃあ、これを選

んだら？『電子マネー決済』ってやつ

「どういう仕組み？」

「架空のお金。存在しないお金なんだ。だから払わなくていいの。」

お医者さんごっこでほんとに注射を突き刺したりはしないだろ？あれと同じさ」

そういうことならと喜んで注文した。「散財ごっこね」まずは服がほしい。着るものにこだわりはないので、てきとうなＴシャツとパーカーとジーンズを選んだ。サイズ表記がおしゃれすぎてわからなかったもので、それっぽいものをかたっぱしから注文する。電子マネーは便利だ。

注文完了から十秒後、ダンボールが頭の上に落ちてきた。頭をさすりながら梱包を解き、ジーンズを並べてサイズをたしかめる。上下がそろったところで布団に潜ってせっせと着替えをはじめた。

外野がざわつき出した。布団からカタツムリ的に顔だけ出し、様子をうかがう。客席からはブーイングが起こり、サイモンは皮肉と毒舌を浴びせ、毛むくじゃらは効果音を出しながら高々とジャンプを繰り返す。

中でもいちばんひどいのはミーカだった。いつものにやけ顔が、ちよつと無視されただけで苦しそうにゆがみ、ぶるぶると震えている。

「なにをやってるんだ」

「着替え」

「言っただろう ぼくらを無視するなと」

エレノアは体をねじって顔を向けた。「だって、おもしろくないんだもん」

「なんだって？」ミーカは声を裏返して叫んだ。「はあ？」

「『はあ？』じゃないよ。あなたたち、退屈なの。だからシヨッピングしてるわけ」

「なんだって？」ともう一度言った。「ぼくの番組が つまらない 退屈」

「テレビは好きだけど、つまらないのはね」エレノアはひどいことを言った。「チャンネル替えていい？」

ミールカはよろめいた。頭痛でもしてきたのか、知能がウリのテロリストみたいにこめかみを押さえる。「チャンネルを――」

「どうしてそんなふうになったんだ、エレノア？」サイモンがミールカに加勢した。片眉を上げて言い放つ。「番組に文句をつけるなんて。おまえの親はどういうしつけをしてきたんだ？ それとも親の愛情が足りなかったのか？ それで性格がゆがんだのか？」

エレノアは目を閉じ、自分に言い聞かせた。テレビが勝手に話しかけているだけだ。答える必要はない。

「うるさくなってきた」

「いい方法があるよ」マイエが言った。「買い物で男を黙らせてやるんだ。『またバッグを買ったのか？ この前買ったばかりなのに』って。『おれの身にもなってみろ。働いて稼いでるのはこっちなんだぞ』って。ウンザリさせるんだ」

よくわからなかったが、ふたたび買い物をはじめ。片手でジョーンズを腰に引き上げながら、もう片方で商品をタップする。

「どんな商品がいいの？」

「重いものがいいね。シリアスって意味じゃないよ。別れた女房とか」

「わかってる」

エレノアは脚のないテーブルを買った。それでいったいどうなるのかと、混乱度合いを増した劇場を見まわす。十秒後、平べったいダンボールがサイモンの頭上に落下した。かなり大きな音を立てたあと、審査員席の前にどすんと落ちた。

マイエはうれしそうに言った。「『また家具を買ったのか！』って言われるよ。どう？ ウンザリしてるだろ？」

ウンザリというより、頭を打って失神していた。

「サイモン・コーウエルが！」毛もじゃはジャンプをやめて叫んだ。「なんてことをしたんだ！ 新しいスターが誕生しなくなるぞ！ これからはだれがスターを――」

と言う毛むくじらには、六缶パックのビールを一ダース注文し

てやった。さすがにフットワークが軽く、テーブルへ飛び乗って直撃を避けたが、モノを見るなり両手で目をふさいだ。

「アルコール、よくない」体じゅうの毛を逆立て、よたよたとあとじさる。「マスコットは飲んじゃダメ。子供にあくえいきようが」

「

テーブルの端から落ちた。

まったく面識のない親戚の法事に呼ばれたみたいに所在なくすわっていた副本部長の審査員Bは、まわりを確認してから缶ビールを一本抜き取り、ひとり乾杯して幸せそうにあおった。

「たしかに」エレノアは興奮のあまり舌を出した。「買い物つて癖になりそう」

「いろんなことに興味を持つのはいいことだよ。じょじょに内面を探っていけばいいんだ」

「次は本命」

エレノアは頭を押さえてよろするミーカのほうを向いて、スライドつき二段式の本棚を注文した。十秒経つのが待ち遠しい。

ミーカは頭上を仰ぎ、間一髪で本棚を避けた。ダンボールの角が床と衝突し、ぴかぴかの床板をへこませた。ミーカはエレノアをぎらぎらとにらみつけ、ゆっくりと近づいてきた。演技だとしてもかなり迫力がある。思わず布団から出そうになって、エレノアはふとひらめいた。

テレビの神さまなら、暴力は振るえないはずだ。

「テレビの暴力描写って年々厳しくなってるんでしょ？」と探りを入れてみる。

「おもしろくないだと」ミーカは聞いていなかった。「退屈だ」と？」

「そうよ。まるで『テレビ現実』みたい」

エレノアがその言葉を口にしたとたん、ミーカが見た目にもわかりやすく崩壊した。背中が割れてなにかが飛び出してくるとすればいまを置いてほかにないのだが、そうはならなかった。代わりに軽

やかなステップであつというまに近づいてきて、布団をまたいでエレノアの顔をのぞきこんだ。

「『テレビ現実』みたいだ？」

つばきが飛んできたので、エレノアは腕で顔をおおった。劇場内はいつのまにか静まり返っている。連中にとつてはかなりインモラルな単語だつたにちがいない。

ミーカはマイクを床にたたきつけた。布団を両手でつかみ、袖のほうへ放り投げる。

「チャンネルを替えると言つたな？」

しばらく怒り狂つた表情を向けていたが、唐突に背中を向け、コメディアンのように大げさに手足をばたつかせて走っていった。袖に消えたきり戻つてこない。

やつつけたと考えていいのだろうか。エレノアは袖をのぞき、振り向いて観衆を見やり、飲みすぎたあげく自己嫌惡に浸っている審査員Bを見下ろした。テーブルに伏したまま動かないサイモンの後頭部に乗せられたビールの空き缶をじつと見るうち、エレノアは緊張と興奮がひいていくのを感じた。いかかわしくも充実していたのが、いまは心にポツカリ穴が開いたようだった。

「きみはもう合格だ！」

そして床にもポツカリ穴が開いた。

14話 退屈の永久サイクル

リュックは通りをあてもなくさまよっていた。ほんとうにあてがなかったのだが、重要なのは、歩道ですれちがいざま振り返る人が例外なくそう思っているということだった。少なくともリュックはそう思っていると思っていた。そして、そう思っていると思ってるんじゃないかという妄想に支配され、やぶれかぶれになり、どんな役にハマり込んでいった。ただ昼間から酔っ払ってぶらぶらしているだけでは、あてがないことにはならない。昼間から酔っ払ったうえ、優しくしてくれる同僚の女の子に当たり散らし、バーじゃなくてカフェからつまみ出されてはじめて、あてもなくさまよっていると胸を張って言えるのだ。

すっかり演技させられている。

酒瓶のキャップをはずし、ウイスキーをあおる。ほら見る、とゲップ交じりにつぶやいた。ウイスキーの瓶なんか持っていなかったのに。負け犬野郎にはこの小道具が必要なのだ。

男性と肩をぶつける。「気をつける、この負け犬野郎」

リュックは振り返って叫んだ。「それ、ぼくがいま考えたセリフだぞ！」

振り返った先にショーウィンドウがあった。焦点を合わせようと目を細める。黄緑色の背景に、ニットをかぶってジャケット着た女性のマネキンが並んでいる。どれもカジュアルな出で立ちで、どれも腰を悪くしそうなポーズを取り、立っていたりすわっていたりしている。ボサボサの金髪がエレノアみたいだと思った。いまだここにいるのだろう。いまごろスターにでもなつて、あのマネキンみたいにポーズを取っているのだろうか。こちらら宿なしの浮浪者だ。こんなストーリーがあつたような気がする。

ふらふらと近づいていき、ガラスに映る自分の姿を見た。

映っているのは自分ではなく、連中に演出され、演技をしている

ただだということとはわかってる。ほんとうの自分はどこにいるのか。リュックは考えたこともなかったし、人生なんかなるだろう、くらいにしか思っていなかったし、実際になんとかなくてきた。だがいまは、うまくいっていない。うまくいかないようにがんばった結果だ。

リュックはウイスキーの瓶を投げつけそうになったが、ぎりぎりのところで思いとどまった。演出どおりじゃないか。この転落劇はいったいどこまでつづくのだろう。

酒瓶を懷に戻し、フードを目深にかぶった。そして通りをずんずん進んだ。

日は高く、通りはこざつぱりとしていた。道の中央に黄緑色のおしゃれな街路樹が並んでいるし、酔っ払ってさまようには適していないように思える。とくに考えもなくわき道に入ると、急に夜になった。

突然さびれた裏路地が変わった。道というよりも建物と建物のあいだにある掃き溜めみたいなところで、腐ったキャベツと卵と油のにおいがした。地面はじめじめして、遠くのネオンや車のライトを青白く反射させている。そこらじゅう生ゴミがべとついていて、ダストボックスは青や黒のゴミ袋があふれかえっていた。毛の抜けた猫が見上げている。

「見る、夜になったぞ！」リュックがわめくと、猫がゴミ箱のすきまに潜り込んで消えた。「宿なしの浮浪者の役をやっているからか？」

声が建物を反響する。上のほうから住人のものらしき怒鳴り声が降ってきた。

「やかましい！」住人Aが叫んだ。

「場所まで変わった　なんだこれ？　映画のセットか？」

「黙れ！」つづいて住人Bが叫ぶ。

「そっちが黙れ！」リュックは怒鳴り返す。「ほかのセリフを言ってみろ、チヨイ役のくせに！」

「うるせえぞ！」住人Cがここぞとばかりにアドリブでつづけた。
「そ　そのまま野垂れ死んじまえ！　この　」
「カミカミだな！　もつと演技の勉強をしたほうがいいんじゃないの！」

リュックは上を向いて大笑いした。笑いながら壁伝いに歩き、よくわからないぬるぬるにつまずいた。泥だらけで縮こまったポリ袋が靴の先にしがみついていた。思い切り足を振ると、ポリ袋が飛んで頭の上に落ちてきた。げらげら笑いを追加した。

建物の窓から住人が次々と顔を出し、あれやこれやと怒鳴り散らす。怒鳴るだけでは芸がないと気を利かせたおばさんの住人Eが、バケツを傾けてリュックの頭上に生ゴミを降らした。リュックは笑いで顔をひきつらせながら、余裕で避けた。ちなみに住人Dは得意顔で赤ん坊を降らせようとしていたのだが、まわりからきつくたしなめられてしぶしぶ引き下がった。

どうして笑っていたのかすら忘れてしまい、でもここまで笑いつづけてきたのだから突然やめてしまうのは不自然だろうと思い、だったらどんな顔をすればいいのか、少しずつ笑いやめるのはなかなか難しいことなのではないか、と脳みそと相談していると、少しばかり先のほうに数人が固まって立っているのが見えた。リュックはひとことでは言いあらわせない複雑な表情を浮かべながらそちらへと進み、もしコーラスグループだったらひっぱたいてやろうと思った。さらに近づくと、コーラスグループのほうがよっぽどマシだったと気づいた。

背格好からするとどれも若いにいちやんのようで、ただ立っているだけでなく、なにをしているかというと暴行を加えていた。だれかを取り囲んで殴ったり蹴ったり写真を撮ったりしている。おかげで笑顔を追い払うことができた。近くのダストボックスに隠れながら様子をうかがう。ひっぱたいてもひっぱたき返されるのがオチだ。若者は四人組だった。ふたりがしゃがみこみ、残りは明らかに不審な様子で周囲を見まわしている。追いはぎだ。ダストボックスか

らふんわりとゴミの悪臭が漂い、顔のまわりを取り囲む。咳き込みそうになったので、鼻と口を押さえた。これで呼吸はできなくなったが、見つかるよりはいいだろう。多少落ち着いたところで、もしかしたら助けに行くべきなんじゃないかと考えた。

見張り役がしゃがんでいる仲間の肩をたたき、はやく済ませるというふうにせつついた。そいつが拳銃を構えているのを見て、リュックはやっぱりやめと思うた。もし連中が追いはぎのチンピラを演じているだけだとしても、撃たれて死なない保証はない。死んでから「なんだ、演技じゃなかったのかよ」と愚痴っても遅いだ。

盗れるだけ盗ると、チンピラどもは向こうの通りに走って消えた。最後のひとりは立ち去りかけて振り向き、壁にもたれる被害者に銃をつきつけ、二発撃った。

全員が消えてからも、リュックは口と鼻を押さえたまましばらく動かなかった。忘れものを取りに戻ってくるかもしれないし、もうこれ以上の厄介ことはごめんだった。

しばらく待ってみたが、なにも起こらない。リュックは呼吸とむせかえるのを同時に再開した。

中腰でそろそろと被害者に近づく。みすばらしい格好をした老人だった。黒ずんだシャツが血に染まり、ほとんど広がっている。浅黒い顔がぼかんと驚いたような表情で固まっている。どう見ても浮浪者だったが、なぜか青いバイザーをかぶっていて、これだけはぴかぴかだった。

死んでしまったのだろうか。リュックはおそろおそろのぞきこんだ。

老人はぱつと目を開けた。「いや、死んでない」

リュックは仰天してあとじさった。「だ　　」

「なんだ」

「だいじょうぶなんですか？」

「なぜ？」

「撃たれたじゃないですか。いま救急車を」

「待つんだ」老人はリュックの腕をつかんだ。「呼んではいかん。救急車を呼ばれたら重症になってしまう」

言い返そうとしたのだが、理屈の糸が口の中でこんがらがって舌に絡みついてきたのでできなかった。老人は胸を血でべっちより濡らしながら平然と見上げる。ふと、このこんがかりは最近おなじみのあの感覚だと気づいた。

リュックは慎重にたずねた。「ケガはしてます？」

「いいや」

「その血は？」

老人は穏やかに笑った。ポーチでひなたぼっこでもしているみたいに落ち着いている。

「こいつは血糊だよ。火薬で破裂して中身が飛び出すやつ」

「演技ですか？」

ゆつくりと眉を上げ、言った。「まあね」

リュックは仰向いて両手で顔をおおった。安心するのとウンザリするのでしばらく口をきけなかった。人が死にかけているのすら演技だとすれば、まともに相手できるものなんてどこにもないのではないか。酒瓶を取り出し、口に含んだ。

「なんだ、もうすっかり対処できていると思っていたんだが」

「なににです？」

「番組化しつつある現実にだよ、リュック」

老人はそう言って、リュックをじつと見つめた。知恵のこもったまなざしだった。リュックは次に言うべきセリフが思い浮かんだが、演技くさかったので速攻で取り下げた。言いたいこともまともに言えない。この調子では狂ってしまうのではないか。

「こんなふうに聞いてもらいたいんですか？　『どうしてぼくの名前を？』とか、『あなたは何者なんです？』とかなんとか」

「その様子を見ると、完全に演技に取り込まれているようだな」

「あなただってそうだ。浮浪者で、しかも被害者の役をやらされて

いるように見えますけど」

「そうは思わん」

「思わなくても、実際にそう見えますよ」

またしても老人はじつと見つめる。やっぱり知恵のこもったまなざしで、そこへ悲しげな表情を追加した。それとも悲しげに見えるのは、まったく似合っていない青いバイザーのせいかもしれない。

「場所を変えよう」静かに言った。「ダストボックスに入って」

「はい？」

「ゴミ箱だ。詳しいことは中で話そう。ほら、蓋を開けて」

「ゴミ箱の中で？」

「そうだ」老人はちらとも目をそらさない。「そう演技されては、まともに話ができません。舞台を変えれば目を覚ますだろう」

「ゴミ箱が舞台？」

老人は辛抱強く伝えようといらいらを押さえているようだったが、ゴミ箱に入る話で辛抱強くされること自体がリュックにとっては心外だった。

「集中するのだ。テレビの連中は日ごとに力を増している。その証拠に、いまではリアルなセットを用意できるまでになった。テレビの連中は知っているな？」

リュックはうなずいた。

「いいかね。演技をしている者がセットから抜け出すには、せつかく苦労してこしらえたセットがぶち壊しになるような行動を取ればいいのだ。共演者啞然、スタッフ全員どっちらけ、エージェントに苦情の電話を入れて　とにかく撤収したくなるような行動だ」

「だからゴミ箱ですか」

「そうだ。それ以外に方法はない」

老人は振り向いて、ダストボックスの蓋を持ち上げた。つんとしてほっこりする異臭が漂ってくる。いっばいまで開けると、縁をつかんで風呂にでも入るように足を持ち上げた。

「他にも方法がありますよ。たとえば　空を飛ぶとか。社会派の

ドラマなのにいきなり空を飛ばれたら、どっちらけもいいところです。どう思います?」

老人はゴミ箱に腰を下ろし、肩まで浸かった。表情は真剣そのもので、周囲の暗さもあってかなり不気味だった。

リュックはかがんで目を合わせ、言った。「理由を聞いていいですか?」

「なんの理由だ。生きる理由か。そんなものありはしない」

「信用する理由ですよ」

「わたしは神さまだと言ったら、信用するかね」
「いいえ」

すると老人は、足もとのゴミ袋をさがさかきまわしてボルトアクシオン式のライフルを取り出した。

「こいつは神の使いだ」リュックに向けてぞんざいに構える。「説得がうまいんだ」

「撃てるはずがない」と、言い直す。「ちがうな。あなたといっしょですよ。撃たれても血糊が破裂するだけなんですよ?」

「どこに血糊が仕掛けてあるんだね」

というわけでリュックは説得された。酒のおいでごまかそうとウイスキーをあおり、これ以上ないほどしぶしぶとゴミ箱に入った。

「蓋を閉めるぞ」

「どうぞ」鼻をつまんで言った。

「そうそう。エレノアがあんたによろしくと言っていたぞ」

「ほんとですか?」

老人はふと考え込んで、言い直した。

「いや、言ってなかったか」

蓋を閉めた。

蓋が閉まると、リュックのあらゆる感覚が鼻に集中した。ビニールのがさがさという音さえ悪臭を放っている。もう一生キャベツは食えないだろう。

がさがさやっているのは老人のようだった。なにかを探っているようだったが、それをやめると今度はリュックをべたべたと触り出した。がさがさのあとのべたべたで、リュックはもう少しで吐きそうになった。

「ちがうな」老人がつぶやいた。「こつちかな？」

朝一番にカーテンを全開にしたみたいに、目の前が真っ白になった。リュックは目を細めた。強烈な光を透かしてぼんやりとなにかが見える。

足場がぐんと傾き、疑問や感想を伝えるヒマもなく、足もとのゴミといっしょに光の中へ転げ落ちた。

「ここなら安全だ。テレビの連中は近づかない」

リュックは自分の上下もわからず、手足をばたばたさせた。耳に硬くて平べったいものが当たっている。手で探ってみて、床だと気づいた。どうやら耳で立ち上がろうとしていたらしい。床に手をつけて足を下ろし、目を開けた。

老人が視界に入った。ライフルを肩に抱え、武将のように床にあぐらをかいている。

「そのまますわっている。部屋の様子が見えるか？」

言われたとおり、ひととおり見まわしてみた。

ただの部屋だった。

これしか説明できないのにはわけがあった。リュックの語彙が貧困なのではなく、観察眼がないわけでもなく、明らかに部屋のせいだった。間取りから調度類、壁の色やポスターなど、なにからなにまでふつうとしか言いようがないのだ。なにもないのであれば「なにもない部屋だ」と説明できるのだが、部屋らしさに必要なものはすべてそろっているのよけいに厄介だった。部屋の様子を正確に描写するには、映画であれば三部作、ドラマなら一シーズンまるまる必要になるほどだった。傑作アクション時代劇『荒野の二十七人』であれば一作で説明できるはずなのだが、それでも万全を期して二十八人目を用意しなければならならうと名監督を用心づかせる

ほどだった。

ここなら安全だとリュックは直感した。そしていつのまにか頭痛が治まり、酔いも消えていることに気づいた。それどころかこれ以上ないほど体が軽く、心は澄み切り、爪の伸び具合もちょうどよい立ち上がって、ただの窓から外を眺めた。特徴のない朝の景色が広がり、鳥が特徴なくピーピーチュンチュン鳴いている。そして振り返るころには、すでにどんな部屋だったかきれいさっぱり忘れていたのだった。

「ここは『朝起きるための部屋』だ」老人が重々しく告げた。「神聖で、純粹で、意味がない」

リュックは老人に向かい合って腰を下ろした。

「気分はどうだね」

「快調です」部屋の様子よりも先ほどまでの醜態のほうが生々しく、頭をかきながら老人にわびた。少なくとも相手がライフルを抱えているうちは謝ったほうがいい。

「ここは現実ではない。セットのひとつだが、連中が近寄れないのはその退屈さゆえだ」

老人は思わせぶりに言葉をとめたが、リュックがとくに反応しなかった。先をつづけた。

「わたしがここをこしらえたんだ」

ふたたび言葉をとめて質問を待った。が、リュックはまたしても反応しなかった。

老人はライフルを持つ手に力を込めた。

「なぜこのセットをこしらえたのか？」なんとか注目させようと声のトーンを上げる。「現実を救うためには、退屈さを取り戻さねばならんだ。それはなぜか？」ほとんど怒鳴りかける。「どうして無視するんだ！」

リュックは驚いて老人を見た。「無視してないですよ。ちゃんと聞いてます」と嘘を言った。

「あとで困るぞ。泣きついてきても知らんからな」

「なにもしたくない気分なんです、ここにいます」

「ここ。そう、ここは審査員特別退屈賞受賞作なのだ」

「そうですか」

老人はかぶりを振ってため息をついた。「学校の先生に『話を聞くときは相手の顔をちゃんと見なさい』って言われなかったか？」
「いいえ、一度も」リュックはしつかり老人の顔を見ながら、とくに理由もなく学習机を撫でた。「ほら、ちゃんと見てますよ」

老人は疑わしげな目を向けたあと、なにかを思い出すように上を向いた。「詳細は省くが、わたしはシナリオコンテストを開催した。退屈な脚本を集め、現実を救うためにな。そして三ヶ月前、受賞作を手に現実世界にやってきた。そして楽しそうに演技をつづける人々へ退屈な脚本を渡し、こっちを演じるようにと説教してまわった。脚本に適したセツトもこしらえてやった。だがだれもいうことをきかない。あの若い連中に襲われていたのも、チンピラの役に入り込んでいたところを助けようとしたからなのだ」

ここで言葉をとめ、ちゃんと聞いてるか確認するようにリュックを見た。リュックはふかふかのじゅうたんに触りながら、いまここで横になって伸びをしたらどれだけ気持ちがいいだろうと考えていた。

老人の目が細くなった。

「現実世界では、わたしはただの口やかましい年寄りだ。だれにも相手にされなかった。いまが楽しければいいんだ、将来なんて関係ねえ、サラリーマンなんかやりたくねえ、おれはミュージシャンになるんだぜ、ってなぐあいだな。ほんとに聞いているのか？」

「もちろんですよ。でもなんの話かさっぱり」

「酔いどれのときのほうがよっぽどまとまった」老人はつぶやいた。「まあいい。あれを見る」

ベッドを指す。中学生くらいの少年が眠っていた。部屋と同じで特徴をつかもうにも視線が素どおりし、見たそばからなにを見たの

か思い出せなくなる。

「こちらは作者だ。名前は『だれも求めていない少年』という。年のころは十四、五といったところで」

「それが名前ですか？」

「自分ではニーチェと呼んでいるようだ。脚本にはそうあったのだが、なぜかはわからん。おっと、はじまるぞ」

目覚まし時計が鳴った。少年は寝言を言いながら寝返りをうち、目覚ましをとめた。もう一度寝返りをうち、寝言をつぶやく。リュックは聞き耳を立てた。「ベークンキャセロール」と言っている。なにか意味があるのかと思い、老人を見た。老人はかぶりを振った。「意味はない。おもしろくて気が利いていると自分で思い込んでいるだけだ」

「おもしろくありませんよ」

老人は静かにしりと自分の口に指を当てた。

たしかに少年は気が利いたことを言ったと思い込んでいるようで、寝ながら笑いをこらえていた。ふつうのこらえかただった。

ドアが勢いよく開き、やはり中学生くらいの年かさの女の子が入ってきた。長めのショートボブにわずかに赤みがかった銀髪で、目の色は左右ちがっていた。頭にはレースのついたカチューシャやリボンやらがいくつも巻きついていて、ほどこかった包帯も巻きついていて。上はパジャマだが下はスカートで、首に鈴がついていて、右足には紺のハイソックス、左足には白いニーソックスをはいていた。靴も高さもあべこべなので、歩きづらそうだった。

あらゆる動物の尻尾を引きずりながら部屋をよたよたと横切り、窓に向いて立った。そして朝に開けるならこれしかないというやりかたでカーテンを開けた。

「妹だ」老人が耳もとでささやく。「かわいらしさを極めている」

「怪しいですよ。気が狂つてるとしか思えない」

「心配はいらん。興味をひくことはなにも起きないから」

振り向くといつのまにかメガネをかけていた。老人とリュックの

前を横切る。リュックは目を合わせないようにした。

妹とやらはベッドを前に立ち、起きておにいちゃんと言った。少年は寝言を繰り返した。妹は朝だよ今日から学校でしょと言った。少年は寝言を繰り返した。妹が起きなさいこの寝ぼすけーと怒鳴ると、少年は必死でニヤニヤをこらえた。

腰に手を当ててもうおにいちゃんたらとぶんすか怒った。それから振り向いて老人からボルトアクション式のライフルを奪い取ると銃床を少年のこめかみめがけて思い切り叩き落した。

少年は思わず「うつ」とうめいた。恍惚とした表情を浮かべているところを見ると明らかに目を覚ましているようだったが、それでも起きなかった。しかもわざわざ寝返りをつつて妹のほうに顔を向けるので、妹はそれならばと遠慮なく顔面を殴りつけた。少年は感極まったのか震え出した。もう少しでどこかへ行つてしまいうさだ。妹は銃を反転させ、慣れた動作で遊底を操作し、銃口を少年の口につつこんだ。このへんたーいと叫びながらためらうことなく引金をひいた。心臓と鼓膜によくない破裂音とともに薬莢が跳ね上がり、少年はもんどりうつてベッドの向こうに転げ落ちた。妹は容赦なく八発すべてをぶち込み、薬室をのぞきこんだあと、老人にライフルを投げて返した。

なにこともなかったようにるんと部屋を横切り、ドアを開けた。ふと立ち去りかけて振り向き、リュックを見て薄ら笑いを浮かべた。言いたいことでもあるのかと見返すと、なにを思ったかいきなりスカートをめくり上げてパンツを見せた。そして自分で見せたくせにほおをぷっくり膨らませ、ぶんすか怒りながらドアをばたんと閉めた。

リュックはとてもイヤな気分になった。

「退屈の永久サイクルが開始したぞ」

「退屈の永久サイクル？」

「繰り返すな。先ほども言ったが、テレビの連中は退屈が大の苦手なのだ。退屈の永久サイクルが稼働しているうちは、近寄れな

い」

そんなことはじめて聞いたような気がしたが、黙っておいた。

「あなたはなんともないんですか？ テレビの神さまなんですよ」

「もと、神さまだ」顔をゆがませる。額に汗が浮き出していた。「なんともないわけではないだろう。とても気分が悪い」

「ぼくも気分を害しましたけど」

「時間がない。はやめに済ませよう」

老人は顔をぬぐいながらつらそうにベッドへ這い進み、ナイトテーブルの引き出しを開けた。リュックはなにげなく背中を見やり、少年がいつのまにかベッドに戻ってはじめての姿勢で眠っているのに気づいた。

「いつのまに」

「このシーンは永久に繰り返される。とめようとしなにかぎりな」

老人はよれよれの紙の束を手に戻ってきた。「また目覚ましが鳴るぞ」

目覚まし時計が鳴った。少年は寝言を言いながら寝返りをうち、目覚ましをとめた。

「気にしなくていい。家電品のモーター音みたいなものだ。わたしの言うことにだけ集中しろ」

「その紙は？」

「脚本だ。栄えある最優秀退屈賞受賞作。わたしが書き、エレノアが選んだ。それをきみに渡そう」

よくわからないまま、リュックは紙の束を受け取った。

「こいつをよく読め。そして書かれているとおりに演じるのだ。脚本があんたを救い、エレノアを救い、ひいては世界を救うことになる」

リュックは読もうとしてページをめくりかけた。老人が浅黒い手でさえぎる。

「いまは読むな。家へ戻ってから、じっくり読め。手を洗い、鍵をかけ、電話のベルは小さくしろ。出前も取るな」

「ちらつとなら」

「ダメだ。書いた本人の前で見えてはいけない。なぜならば、そうすることで効力が薄れて世界の破滅が」

「恥ずかしいんですか？」

老人は無視した。

「家に帰って、か」リュックは思い出し、短くため息をついた。「家はなくなりましたよ。ヘンな生物が来て、こつぱみじんだ。ぼくはほんとうの宿なしなんです」

「たしかにそんな感じだったな。宿なしの酔いどれの負け犬だった」
「実際、そうですね。もう酔ってはいないけど、ここから出たらまた同じことを繰り返すんです。はじめはなんとか抵抗してたけど、自分の意志ではどうしようもできない」

ドアが開き、妹が二度目の登場を果たした。スカートはより短くなり、メガネの上から眼帯をつけ、そのうえパニエまではいていた。ライフルを手にベッドへ寄り、少年の頭を殴りはじめた。老人はその様子をじつと見ている。

急に振り向き、勢い込んで言った。

「あんたは負け犬じゃないだろう。家はなくなったが、負け犬じゃない。転落もしていない」

「そう思いますよ。でもまわりはみんな、負け犬としてぼくを見ている。現にそうだった。ゴミみたいに見られて、野次を浴びせられて」

「それはエキストラが、あんたと同じく役を演じているだけだ。あんたが負け犬を演じるかぎり、演技はつづくのだ。行く手にはいつもさびれた裏路地があらわれ、必ず酒瓶を手にしている」

「じゃあ、どうすればいいんですか」

「酒は飲まず、まじめに生きること」

と言って、妹が投げてよこしたライフルをキャッチした。

「そして、すべきと信じたことをする。あとは、人の話をまともに聞くことかな。負け犬じゃないという声が聞こえたなら、それ

を信じればいい。どんな衣装でどんなセットを用意されようが、自分の信じる役のみを演じる。そうすれば必ず、まわりもあんたが演じる役に合わせてくれる」

老人は唐突に話題を変えた。

「エレノアを助けないのか？ 心配するようなセリフがひとこともなかったが」

「テレビ界の ジョンとかいうやつにも、同じことを言われましてよ」

「だれだって言うだろう。恋人なんだから」

妹が夢遊病のようにうろろしはじめたので、リュックは顔を伏せた。

「 恋人を救う男の役、ってことでしょ。まさにヒーロー、役の中の役だ。ヒーローを演じろってことでしょ。この脚本にも、そう書いてるんじゃないですか？」

「なるほど」

妹が立ち止まり、こちらをじっと見下ろしている。

「ヒーローもいろいろある。中には超地味なのだっているだろう？ 人気のないのだっている。『ラットマン』とか、『赤ちゃんコップ』のロドニーとかな。なにも全身タイツにヘルメットでポーズを取らなきゃならないという決まりはない」

「あんた、視聴率を気にしすぎっ！」

妹がいきなり話しかけてきたので、リュックはぎょつとした。びしつと指を突きつけたまま固まっている。

「視聴率がなによ？ 一桁だって立派なもんでしょ！」

「そのとおり」

「なにが言いたいのかな」

「まあ、自分を信じろってことだろうな」

「そうよっ！」

「そして助けたいと心から願え。そうすれば叶う。願えば家だって見つかるぞ」

「まさか」

「そうならないのは、手に入らないと信じているからだ」

「だったらだれも苦労しないな。　　そういうのはテレビ界の話でしょ？　現実にはちがうですよ。そんなにうまくは」

「しかし、現実はどうどんテレビ化しているぞ」

「そうだろう？　というふうには眉を上げ、額にしわを寄せた。リュックは反対に眉を下げて、老人が言わんとしていることをまじめに考えてみた。そして気づいた。つまりいまの状況ならば、現実でも安っぽいドラマみたいな都合のいい展開もありうるということだ。まじめも悪くない。」

「つまりそういうことよっ！」妹が叫んだ。「このバカっ！」

「もうすぐ戻る時間だ」腕時計を見て老人が言った。「とにかく、ここを出たらシナリオを読め。そして演技を恐れず、冒頭だけでも演じてみる。きっとうまくいくから」

妹が目の前でがくと膝をつき、恐ろしい力で首もとにしがみついていた。「おにいちゃん、大好きっ！」リュックは窒息しそうになり、必死で引き剥がしにかかった。異変に気づいたのか、少年が上体を起こしてこちらを向いた。とたんに気の毒なくらい哀れっぽくあえぎ、鼻水を垂らし、ばったりと気を失った。

目覚まし時計が鳴った。

15話 きみに合う脚本は？

エレノアは目を覚ました。とたんに体が勝手に大きく息を吸い込んだ。ざらざらした冷たいものに頬が触れていて、息を吸った拍子に砂が口の中に入った。ぺっぺと吐き出す。

「カット！」怒り狂った声が、拡声器をとおして響き渡った。「ぜんぜんダメだ！ 撤収！」

どこも折れたり曲がったりしていないようなので、エレノアは手をついて立ち上がった。寝っ転がっていたのはところどころひび割れた歩道で、チョークで落書きがしてあった。立ち上がって白い線をたどる。落書きははじめ大きな輪ゴムのように見えたが、警察ドキュメンタリーの殺人現場でよく見る被害者の人型だとわかった。黒い血だまりが伸ばしすぎのパンケーキみたいに広がっていた。

「着替えます？」

若い男の顔が横滑りしてきた。

「はい？」

「着替えますよ」

「どうして？」

あたりを見まわす。男はフットワーク軽く視界に飛び込んでくる。

「その格好じゃ、帰りのタクシーも拾えませんよ」

妖精めいた顔で笑う。タオルをエレノアに差し出した。

「タクシー？」よくわからないまま、受け取ろうと手を差し出す。

白いブラウスがひじまで真っ赤に濡れていた。もう片方の腕も、胸も、腹も、とにかく見えるところはすべて血まみれだった。キャリ―も真っ青だ。

タオルで顔をぬぐう。お返しにべっとりと血がついてきた。

「どうして血だらけなの？」

「どうしてって、死体だからじゃないですか？」笑顔を張りつかせたまま答える。

「ここはどこ？」

「あのー、カットがかかったから、もう演技しなくてだいじょうぶですよ。それとも役に入り込むと、パツと切り替えられないもののかな。ぼくは役者をやったことがないんで、そのへんよくわからないんですけど」

いきなりわけのわからない場面に出現するのは、いつまでたつても慣れそうになかった。えらそうな拡声器の声が言ったとおり、撮影スタッフが機材を抱えて撤収作業を行っている。さほど広くない通りで、古風な雰囲気だった。非常識な感じはしない。雑貨屋やレストラン、レンガ造りのアパートなどがごっちゃにひしめいていた。「ダメですよ、死体が目を開けちゃ。監督が怒ってましたよ」とひそひそ声で言う。「まあ、イライラするのもわかりますけどね。あなたがこんなチョイ役を引き受けるなんて、だれも思っていないかったですから。冗談が好きなんですね」

ショーウィンドウに顔を映しながら、タオルでごしごしする。ガラスの向こうを見た。黄緑色の背景に、ニットをかぶってジャケツト着た女性のマネキンがいて、どれも腰を悪くしそうなポーズで立ったりすわったりしている。

ついに俳優デビューしてしまった。あのときはミーカをやったと思ったが、どうやらそうではないらしい。無視してもダメ、言葉責めも効かない。あとは実際に殺害するしか方法がなさそうだったが、そんなことをしなくても、とにかくあきらめてくれさえすればいいのだ。どうすれば興味を失ってもらえるのだろう。俳優が行き過ぎのファンをうっとおしがる気持ちがあった。こんな日が来るとは。

ふとマリーエを持っていないことに気づき、とたんに不安になった。あのテレビがなければ、完全にひとりぼっちになってしまう。「じゃ、ぼくは行きますんで」

「待って」エレノアはいちかばちかの賭けに出た。「わたしの家、どこにあるか知ってる？」

「家？　ああ、あなたのトレーラーなら、あそこにありますよ」

「ほんとの家よ。なんでかっていうと、話せば長いんだけど」

「すいません、行かないとドヤされるんで。じゃ」

自分の家の場所がわからなくなる理由をあれこれ考えているうちに、男はいなくなつた。

血まみれのまま重い足を引きずり、教えてもらつたとおりにトレーラーを探す。車道をふさぐようにずらつと並んでいて、見るからにえらそうな感じだつた。どれもまったく同じ形で、同じ銀色。自分の名前が刻印されたプレートを見つけ、ステップを上げて扉を開けた。

生徒たちが一斉に振り向いた。初老の教師は黒板に書くのをやめ、エレノアをメガネの奥からじろりとにらんだ。入る教室をまちがえましたと振り返り廊下に出て教室の番号を確認してから、教室へ入つたこと自体がまちがいなのではと思い直した。

「また遅刻ですか、エレノア」

エレノアは思わずうなづいて仰向いた。これはいいかげんにしてくれという感情表現だつたのだが、先生にとっては遅刻常習で反抗的なクラスの厄介者にしか映らなかつたようだ。しかも血まみれときている。

と思つたら、血はきれいに落ちていた。服装もちがう。サンダルにだぶだぶのジーンズをはいていて、ヘソがモロ見えだつた。BだかCだか、ファッションに関心がないので何系なのかはわからなかつたが、少なくとも二十四歳の女がするような格好でないのはたしかだつた。

「そこに立たれると迷惑だ。扉を閉めて、席に着きなさい」黒板に目を戻す。「出ていっても構わないがね」

しょうがないので席に着くことにした。クラスメイトの遠慮のない視線を浴びながら、自分の席を探す。背負つたバッグを他人の机やら他人の頭やらにぶつけながら、いちばん後ろの開いた席にすわつた。おしゃれだが使える面積が少ない机にバッグを置いて、中身

を確認する。制汗剤のスプレーに携帯電話にお菓子に錠剤の入ったケースに目薬、化粧品各種に帽子。教科書やノートはひとつも入っていない。筆記用具すら入っていない。だから不良なんだろう。

携帯電話に見覚えがあった。急いで取り出す。なめらかな手触りに心底ほつとし、授業中にもかかわらず声を出してため息をついた。さっそく起動する。

「また会えてうれしいよ、エレノア！」マリーエの声が教室じゅうに響き渡った。「なんとか潜り込めたんだ！」

顔を上げると、先生を含め全員がエレノアを見ていた。

「着信音なんです」とこまかす。

先生は皮肉を言った。「授業中にメールをするときはマナーモードに切り替えるように」

ここにいるのはテレビ界の人間なのだとわかっていても、教室で携帯電話と話をする気にはなれなかった。なので、エレノアは生まれてはじめて携帯電話自身へメールを打つことにした。

「助けて」

「助けることができるのは自分自身のみ」口調とちがってメールの文章は硬かった。「ぼくらは手助けをするだけ」

「どうすれば抜け出せる？」

「きみは演技をしている。授業中にメールするのは不良だ。まさに役柄どおり」

「無視したり、関係のないことをすればいいんでしょ？」

「一時しのぎにすぎない。逃れるためには、かみの」

後半が意味不明だった。返信しようすると追加のメールが飛んできた。

「打ちまちがえました。すみません」改行。「きみが心からやりたいと思えることは？」

もちろん、と書いてから、手がとまった。少し前なら考えるまでもなく即答していた。

「わたしがしたいことは」

ここまで書きかけたところで、マリーエから別のメールが届いた。「テレビが見たいのか。ほんとうに？　ほかに一生つづけたいと思うことは、ないのか」

そんなものはない。考えたこともない。

前のほうからなにかが飛んできて顔に当たり、床に落ちた。まるめた紙を拾い、広げて読む。汚い字でこう殴り書きしてあった。

「きみの一生はぼくがつくる。逃れることはできない」

終了のベルが鳴る。クラスメイトは一斉に席を立ち、思い思いにしゃべりながら廊下に出ていった。

廊下はすでに学生で埋め尽くされていた。教室を移動しようとする前から後ろからひっきりなしにやってきて体をぶつけていく。その場に立っているのもやつとだった。

「これもダメだ！」校内放送用のスピーカーから、ミーカの怒鳴り声が響いた。「高校生をやるには歳を取りすぎている。どうすればいいんだ？　どんな役ならびつたりハマる？　どんな脚本なら魅力を活かせる？　わからない。わからないぞ！」

「どうしてわたしにこだわるの！」聞こえているかもわからなかったが、手近なスピーカーに向かって叫んだ。「わたしより魅力のある人は大勢いるでしょ？　わたしに合う脚本なんてないよ！　わたしにだってわからないんだから！　もうほつといて！　好きにさせよ！」

「カット！　撤収！」

学生の流れがとまり、全員が逆向きに動き出した。エレノアは足を踏まれて声を上げた。サンダルが脱げる。大柄な男が体当たりするよにぶつかってきて、別の学生にもたれかかった。邪険に払いのけられ、足が床を踏み外して膝をついた。

両腕をつかまれ、ひっぱり上げられる。「ここが宇宙怪物ABCの巣だ」と片方が渋い声で言った。

「すべりやすくなっている。足もとに気をつける」ともう片方が言った。鼻が詰まったような声だった。

「銃は使えるな？　これを使え」

葉巻をくわえた渋い声のおっちゃんに銃を渡される。とんでもなく重く、取り落としそうになった。

「これってどういう」

「この銃か。十ミリ弾百発装填の標準仕様のライフルだ」と渋い声。「そうじゃなくて」

「ポンプアクション式のグレネードランチャーも装備」と鼻声。

「全方位モーションセンサー付で」

「反重力電子分散型シールドも！」

「いまのは嘘だ！」渋い声が渋く怒鳴った。「口がすべったのだ！」周囲は暗く、暑く、温泉みたいにじめじめしていた。光源はふたりの胸に埋め込んであるライトのみで、岩肌が青白く浮かんでいる。たぶん洞窟だろう。ふたりはどう見ても兵士だった。どちらもヘルメットをかぶり、迷彩服を着て、そのうえから鉄製のチョッキみたいなものを着けている。

「センサーに動きあり！」おっちゃんが銃を構える。「B型宇宙怪物が三体！　お出ましたぞ！」

「B型肝炎みたいだな」鼻声が言った。「もっとマシな名前は付けられなかったんですかね？」

「無駄口を叩くな、スコッティ！」エレノアに向き直って言う。「あんたも死にたくなければ銃を構えろ！」

言われるがままに銃を構えてみたが、重すぎてまっすぐ向けられない。腰を入れて持ち上げると、今度は行き過ぎて銃口が背中にまわりこんだ、

よたよたよろけると、力強い腕に支えられた。

「来たぞ！」

凶暴なおサルのような叫び声が何重にも響き渡り、ついでにエコーで跳ね返ってきた。心臓が冷え切って腕がこわばる。銃を取り落とした。暗い中、なにかがさっさと動くのが見えた。そちらへ向け、兵士ふたりは雄たけびをあげて同時に銃を発射し、突進した。

あたりがほぼ真っ暗になる。

支えがなくなり、エレノアはへたりこんだ。

ぶりぶりという太い発射音と、花火みたいな青白い光が点滅する。
「死ね！ このクソつたれ！ かかってきやがれ！ どうした、まとめてぶっ殺してやるぞ！ あっ
」

尖ったもので体を貫かれたときの効果音が聞こえた。男とは思えない悲鳴。おサルの声。「スコッティ！」とおっちゃんが呼びかける。「うわあああああ！」

顔を上げる。よだれを垂らす巨大な口がぱっくりと開いていた。エレノアはもう少しで目が裏返しそうになった。怪物の吐息が顔を撫でる。顔をかばおうにも腕が動かない。

エレノアは目を閉じた。それならばと宇宙怪物Bはひと声叫び、いただきますとばかりにふわりとおおいかぶさってきた。

「カット！ 撤収だ！」

かぶさってきたのは羽毛の掛け布団だった。完全に捕らえられた。逃げることはできない。

16話 負け組俳優とスネジャナ

リュックは国道のと真ん中に立っていた。なぜどうしてと考えるよりも先に、車がわきをかすめるように走り抜けていった。今度は反対側から。リュックは背筋をぞくぞくさせながら、体をなるべく中央のラインの中に押し込めようとした。車は前から後ろから、ひっきりなしにとおり抜けていく。へたに頭を動かすとすれちがいざまに引っこ抜かれてトラックの助手席に転がり込みかねないので、両目だけで左右を確認した。

車の流れが途絶えた。リュックは体を縮めながらストローの着ぐるみみたいな格好で歩道めがけて走った。歩道で一息つき、ストロ―から腕を出した。

少し歩くと、バス停があった。

冷たいベンチに腰掛け、車が行ったり来たりするのをぼんやり眺める。知らずに懐へ手を入れていた。硬いガラス瓶の感触を探るが、酒はなかった。その代わり、クリップで留めたよれよれの紙束が入っていた。最優秀退屈賞受賞作の脚本だ。

いまいる場所は、これ以上ないほど平凡なところだった。どこを見まわしても見慣れた光景に見慣れた建物があり、永久に終わらない道路の補修工事がいつもの場所でけたたましい音を立てている。なじみの近所だ。家まで歩いて二十分とかからない。

「近所ね」リュックは笑おうとしたが、むなしくなったのでやつぱりやめた。

紙の束を整え、目を落とす。タイトルは『家族物語』とある。受賞作だけあって、たしかに退屈そうだ。ページをめくる。登場人物と簡単な説明が並んでいる。エレノア 主人公。ここで思ったのは、自分が主人公ではないのかということだった。

リュック エレノアの恋人。脇役か、とつぶやいた。悲しくもなんともなかったが、堂々とおまえは脇役だと言われるのは妙な気

分だった。いったいだれが決めたんだと文句を言いたくなる。

おじいさん　アイスクリーム屋さん。あの老人のことが。名前くらいつけばいいのに。

リン・タウンゼンド　エレノアの親友。テレビのキャラクターだ。どうやって出演させる気だろう。エレノアは大喜びかもしれないが。

人物紹介は以上だった。かなりこじんまりとしたドラマらしい。ページをめくり、最初の一節を読んだ。「リュック、新しいわが家へ帰る」

いきなり難問があらわれた。ほかの人はどうか知らないが、家へ帰るのは並大抵ではない。

「願えば見つかるって？」リュックは気の抜けた笑い声を上げた。

「どこに方法が書いてあるんだよ」

ためしに自分のセリフをひとつ読み上げてみた。

「おい、かあさんや。そのサラダを取ってくれんか」

そこにあるのは退屈の極致だった。エレノアの目に狂いはない。

ふたりは結婚した家族という設定で、「おはよう」とか「調子どうとか」「学校に遅れるよ」とか、どうでもいい話を延々とつづけていくだけだった。シットコムのキャラクターが毎週必ず見舞われるようなトラブルもなく、ケンカもしないしゲストも出ない。三十枚程度の薄っぺらなシナリオなのだが、数ページで読むのをやめた。たしかにこれならテレビの連中は近寄らないだろうが、たぶんそのうちだれひとり近寄らなくなる。こんな生活はまっぴらだった。

となりにだれかがすわったので、脚本を懷に戻し、なんとはなしに目を向けた。巨大な黄色いニワトリだった。黄色いタイツをはいた足を投げ出し、盛り上がった尻をもぞもぞさせながら新聞を広げた。

といっても本物ではなく、ただの着ぐるみだった。リュックの視線に気づいたのか、ふたつの顔を同時に向けた。リュックはなぜかほっとした気分になった。ひさしぶりにまともなものを見た気がする

る。笑顔であいさつした。

「どうも」

ニワトリの首からのぞいているほうの顔がうなずいた。鼻の下にヒゲをびっしり生やしていて、顔色は悪く、小鼻のわきにイボがあった。表情は険しい。

「チラシ配りかなにか？」

ぎろりとリュックをにらむ。「いや。バスを待ってる」

「どこへ向かおうとしているんです？」

ぎろりとリュックをにらみ、新聞をふたつにたたんだ。ちなみにいまぎろりとにらんだのはニワトリのほうだった。

「わが家さ」

しわがれ声で言い、真剣な表情でうなずく。なんと深遠な答えだろうと思ひ、リュックは男の目を見つめ返した。

ニワトリはぶつと吹き出した。

「冗談だよ。これから仕事さ。日雇いの現場に行かなきゃなんねえ」

「その格好で？」

「親方にも同じことを言われたよ。『おれにニワトリ用のヘルメットを用意させる気か？』ってな」

バスがすべり込んできた。しゅうしゅういいながら乗降口を開け、ニワトリ男を招き入れた。

ここにいてもしかたない。思い切って乗ってしまおうか、と迷っているうちにドアが閉まり、走り去った。リュックは立ち上がってバス停のルート表示を見た。

路線は途中で何本かにわかれていた。停留所の名前を順に目で追う。終点はどれも「わが家」だった。

危険を感じ、リュックはその場で一回転した。さらに振り向いた先の建物には「空き家あります」の看板があった。次に目を向けた街路樹には、掛札がぶら下がっていた。黄緑色のプラスチックで、くねくねしておしゃれといえなくもないデザインだった。駆け寄って読んでみる。かわいらしいリスの絵が指を差しており、吹き

出しには「エレノアとリュックへ。家はあっちだよ」と書かれていた。あっちこっちに似たような掛札がぶら下がりがくっている。

あの老人が用意してくれたのだろうか。それにしてはいかがわしさかぶんぶんにおってくる。

リュックは掛札をもぎ取り、バス停に戻った。ベンチにすわってもてあそぶ。なにげなく裏返すと、目玉の飛び出たゾンビが大口を開けていて、吹き出しには「行かないと死ぬ」と書いてあった。リュックは思わず目を見開いた。ゾンビの顔がおっかなかったわけではなく、見覚えのあるロゴがプレート全体にうつすらと描かれていたからだ。まるっこくて、ぱつと見ではなんと読んでいいのかわからない字体。読めないが、理解できた。

フォームはどっちの味方なのだろう。

ヴァラを思い出し、胸のロゴを見た。パーカーとスウェットを返さないといけない。気が重かった。せつかく着るものを貸してくれたというのに、ひどいことをしてしまった。「おまえは演技をしているんだ」なんて、最低な物言いだ。リュックは超ヘコンで、あとで謝ろうと思った。そして顔を覆ってうずくまり、しばらくここにしようと思った。動こうにも活気を失っていた。

バス停というだけあって、次々と人がやってきてはとなりになすわった。しかしまともな人間は数えるほどで、だいたい動物の格好をしていたり、ジェットパックを背負って空からやってきたり、頭に斧が刺さっていたりしていた。

格好はさまざまだったが、どれも暗く落ち込んでいた。老人の言ったとおりだ。どんどんテレビ化が進んでいる。

「ここからわが家に帰れるって聞いたんだ」猫背の冴えないガーゴイルが言った。「おれは用なしだからさ」

「きみは役者？」リュックはなんとなくたずねた。

「さっきまではね。いまはちがうつぱい」

「つまり、さっきまでは現実で芝居をしていたってことだろ？
どうして帰るんだ？　もしかしてみんな帰るのか？　連中が飽き

たかなにかして」

「おれに才能がなかっただけさ」鼻をすすった。「田舎に帰って、これからの人生をじっくり考えるよ。スーパ―の守衛でもやるかな」力なく言うと、ヘルハウンドを抱いたご婦人のあとにつづいてバスに乗り込んだ。

「これ、ヘンなじいさんにもらったんだけどさ」ゾンビが腐臭を漂わせながら言った。手にはクリップで留めた紙の束があった。「これを演じてみる」だってさ。でも、やっぱ無理だと思うんだ。「自分を信じる」って言われてもね。ネズミが主人公じゃ、おれの個性は出ないと思うし」

力なく言うと、関節が悪い超合金ロボットに肩を貸してやりながらバスに乗り込んだ。才能のない役者が次々と退場させられている。いつのまにかバス停はいろんな役者でごったがえしていた。バスがやってきても一度では乗り切らず、順番を巡ってあちこちで口論が起こっている。せつかくひとりで途方に暮れようと思っていたのに、こんなにやかましくては落ち込むこともできない。リュックは場所を替えようかと、人だかりの外に出ようとした。

「この星のリーダーに会わせろ」トカゲ人間に襟元をつかまれ、すごまれた。

人だかりから小さな影がぽんと飛び出すのが見えた。黒い髪の子だった。首を吊られたおかげでよく見ることができたが、その代わり脳に血が行かなくなりぼんやりしてきた。女の子は短パンに大きなスニーカーをはいていて、細長い手足がよけいに細く見えた。上着はよれよれ、髪はもつれてあちこち跳ね上がっている。よろめきながら二、三步進んだ。

目の前が本格的に真っ暗になってきたので、そろそろ下ろしてもらうようお願いしたほうがいいかもしれない。トカゲは炎の目で見つめ、あくまでリーダーに会うつもりだった。リュックは両手で鉤爪をつかみ、えいやと広げてみた。万力を素手でこじ開けるようなものだった。

女の子は右に左に体を傾かせながら歩いた。縁石の段差で足を踏み外し、腰から上がぐんと折れた。なんとか持ちこたえてなおも歩きつづけるのだが、歩くたびに吸い寄せられるように少しずつ車道に寄っている。目が見えていないんじゃないかなろうか。

「あ　あの人がリーダーだ」リュックは群集をきとうに指差した。もう少しで目が裏返るところで、鉤爪が開いた。リュックは喉を鳴らしながら必死で呼吸した。

「リーダー　このおれが」

と言ったのは、全身赤タイツでヘンなヘルメットをかぶった男だった。顔は見えないが、代わりにこぶしを握って見つめることで感情をあらわした。

「そうだ　おれには大切な仲間と守るべき人が」

リュックは背伸びをして女の子を探した。未成年の女の子に執着するのはよくないと思ったのだが、どうしても気になる。

うしろ姿を見つけた。車道の真ん中で立ち尽くしていた。

「おい！　その子」はじめて聞く自分の必死な声に驚きつつ、リュックはつづけて呼びかける。「車に轢かれるぞ！」

反応はなかった。ひとり悦に入っている赤ヘルの肩をつかんだ。

「守るべき人が　助けを求めて」

「だったらあの子を助けてくれ」

現実世界に引き戻され、ビックリした様子で安っぽいマスクを向けた。「えっ？」

「あの子だよ。見えるだろ？　あれじゃ車に轢かれてしまう。」

「あんだ、ヒーローなんだろ？」

「他のメンバーは？」

「知るか」

「ひとりだと負けてしまうかも」

「子供を助けるだけだ。巨悪と戦うわけじゃない」

「なんだ子供か。　ならだいじょうぶ。子供は死なないから」

赤タイツはケロリとした顔で言った。素顔は見えなかったのだが、

中身はきつとケロリとしているにちがいがなかった。

バスが交差点を曲がり、こちらに顔を向けた。女の子はやはり気づいていない。リュックは今度こそ役者をかきわけ、人だかりからぼんと飛び出した。四角くてでっかい鉄の塊が、低くうなりながら近づいてくる。クラクシオンを鳴らした。女の子は動かない。あの世がわが家ということであれば、バスも喜んで送り届けてくれるだろう。リュックは走って車道に飛び出した。女の子の前に片膝をつき、腰をつかんで抱え上げる。抱える瞬間、女の子は大きな目をリュックに向けた。怒りと激しい拒絶の色がにじんでいた。

バスの四角い顔が視界全体に広がる。女の子が腕の中で暴れ出した。リュックは自分の足を置き去りにしながら歩道へ走り、街路樹の根元に背中から転げ落ちた。

靴底をかすめるようにバスがとおりすぎた。ゆつくりと路肩に寄り、悪びれる素振りも見せずバス停にとまった。またしても順番争いの小競り合いがはじまった。

「子供が死ぬとこだったぞ、バカリーダー！」

リュックは寝転がりながらありったけの声で怒鳴った。赤タイツは人ごみの中でちらつと振り返り、それから逃げるようにバスへ駆け込んだ。「この三流役者！」リュックはなおも怒鳴りまくる。「ヘボ劇団あがり！」赤いヒーローは窓側の席に着き、ヘッドホンをかけて知らん顔で音楽を聞きはじめた。

またしても乗りそこなった役者たちは、バスの尻を目で追いながらめいめい罵声を浴びせかけた。

「離してよ、バーカ！」

怒りと興奮のあとで、リュックはしばらく魂が抜けていた。体から離れて近くの街路樹の枝のあいだを気持ちよくさまよっていたのだが、耳もとで怒鳴られたので、魂はしぶしぶ体に戻った。

女の子が緑色の目をぎらつかせていた。鼻息を吹きかけながらわき腹の上でもがいて、リュックの手の甲を何度も叩いた。そういえば、この子の命を救ってやったんだった。リュックは思い出した。

なのにどうして怒ってるんだらう？

「きみ、だいじょうぶ？」

「離せ！」

自分の腕が女の子の腰をがちりつかんでいるのに気づいた。リュックは無罪を主張するように両手をぱっと上げ、女の子がわき腹にパンチを入れつつ離れるのを見届けた。「ごめん」

遅れてリュックも立ち上がった。女の子は華奢な肩をいからせ、もつれた髪から湯気が立つほど怒り狂っていた。すぐに逃げ出すかと思ったが、リュックの目の前を行ったり来たりし、バス停をにらみつけているだけで、そばから離れようとしなかった。

リュックは理不尽な思いでいっぱいだった。「助けてあげたのに

」

「は？」立ち止まって振り向いた。こめかみがひくついている。

「バスに危つく轢かれるところで」

「だからなに？ 質問はそれだけ？」

「は？」今度はリュックが言う番だった。「言ってる意味がよくわからないんだけど」

「あたしは騙されないよーだ！」

女の子は獲物を追い詰めるようにリュックのぐるりを大またでまわり出した。

「なんのことだかさっぱり」

「ほかに聞きたいこと、あんでしょ？ 大人なんだから。『お嬢ちゃん、お名前は？』」「大人の口調を真似ているつもりのようなのだが、かなり悪意に満ちていた。『歳はいくつ？ 体重は？ スリーサイズは？ 股下は何センチ？』」 大人はみんな知りたがるんだ！ げげ」と舌を出した。

「そんなこと、考えてもいなかったよ」

「そうそう、はじめはみんなそう言うんだよね」

「まあ、名前くらいは」

「ほら！ やっぱり！」うれしそうに叫んだ。立ち止まってリュッ

クを指差す。「あんたもほかの大人といっしょだよ。プレゼントなんかいらない!」

プレゼントってなんだろうと思いつながらトーンを上げる。「当然だろ? 名前くらい」

「なんでよ?」

「会話をするとき不便じゃないか」

「会話なんかじゃなくていい」

「現にしているじゃないか」

子供と言いつけ合っている。リュックは自分が大人であることを思い出し、大人として接しようとした。

「わかった。言わなくていいよ。ただ、ぼくは名乗らせてもらつよ。名前は」

「いらぬ! いらぬ! いらぬ!」金切り声でリュックの名前をかき消した。「次は犬の名前を教えて、それで家に連れて帰ろうとするんだ!」

ふたたびぐるぐるまわり出す。尋常ではない混沌ぶりに、リュックはすっかり怒りの感情を吸い取られてしまった。若い力をすべて怒りに向けているようで、どういつわけか知らないが大人は全員変態みたいな物言いをする。どんな環境で育ってきたんだろう。

好きにすればいい、と腹の中で思ったが、放つてはおけなかった。それに、接しているとなぜか気分が落ち着く。変態扱いされたにもかかわらず驚くほど冷静で、生まれてはじめて寛容な大人になったような気がした。

「ぼくはリュック。よろしく」名乗っただけでしかめ面をされるのもはじめてだ。「心配しないで。犬はいないから」

「いなくても家に連れてくんでしょ?」

「いや。じつは家もないんだ」

女の子はなにか言いかけたが、予想外の答えだったのかリュックの前で立ち止まり、ぽかんと口を開けて見上げた。そして口が大きく裂けたかと思うと、タガが外れたように笑い出した。冗談だと思

っているらしい。

「家がなかったら、どうやってあたしを連れてくのさ！」

リュックもつられて笑おうとしたが、大笑いする姿でさえ他人を寄せつけない雰囲気があったので、つられることはできなかった。

いきなり笑いやめ、もとの仏頂面でリュックをにらんだ。

「名前はスネジャナ。これで満足？」

まばたきひとつせずに見つめる。あまりにまともな表情だったので、リュックは驚いた。眉間のしわもなく、口もそれほどへの字でもなく、ほつたもひくひくしていない。

リュックはちよつとした感動を覚えた。家がないのもそう悪いことではないかもしれない。

「う　うれしいよ。ぼくを信用してくれたみたいで　」

「しーんよーう？」

「次はハイタッチ？　それとも、握手でもしようか」

「うれしーい。じゃ、靴を脱ぐの手伝ってくれる？」

またしてもげらげらと笑い出す。まったくかわいくないことだ。

笑い転げながらも、スネジャナはそばから離れない。リュックは少し冷静になって、どうしたものかと考えた。もちろん家に連れて帰るつもりはない。家があったとしてもだ。信頼が深まったはずなのでいくつか話しかけてみたのだが、なにを話しかけても癪癪を起こした。「おなか空いてない？」と聞くと誘拐する気かと言われ、「友達いるの？」と聞けば山小屋に監禁して身代金を要求するつもりだろうと言われた。

バス停はさらに人数が増えていて、ちよつとした群集になっていた。というよりパーティ会場になっていた。小競り合いをつづけていた役者たちは、いつしか負け組どうしで意気投合し、名刺や情報の交換をしたり、シャンパン片手に大げさに笑いながら互いの腹を探り合ったりしていた。腐っても役者だ。

ケータリングが運ばれてきて、長テーブルにパンチや簡単なバイキング料理が並んだ。向こうからやけに老けた高校生の集団がやつ

てきて、パーティを見るやハイタッチして仲間に加わった。

まちがいない。テレビ界の連中はどんどん計画を進めている。テレビ化と同時に花も才能もない「役者」は追い出され、バスに詰め込まれ、たぶん「大根役者島」みたいなところへ送られるのだ。老人の脚本はやはり役に立たなかった。

「きみも役者なの？」

スネジャナになにげなく質問し、とたんに後悔した。

「役者！」と吐き捨てる。「あたしは役者じゃない！ あたしはあたしだよ！」

「ごめん。ただ、あの連中といっしょにいたから、てっきり」

「だれともいっしょじゃないよ！」

「おかあさんは？ もちろんおとうさんもだけど、いっしょに」

「おかあさんなんていない！」

スネジャナは金切り声を上げた。すると会場が静まり返り、出席者全員が振り向いた。ケータリング業者でさえ驚いた様子で振り返った。だれもなにも言わなかったが、ひとり残らず「この変態野郎」という目でリュックを見ていた。

リュックは連中に怒鳴った。「ぼくのギャラを知ったら腰を抜かすぞ！」一斉にブーイングが起こる。「さつさとわが家に帰れよ！」

「おまえもな！」大根役者のひとりが言った。たちまち嘲笑が起こる。「この宿なしが！」

怒りで首が震え、言葉も出なかった。リュックはこぶしを握って連中に背中を向けた。

「どっか行くの？」

スネジャナがケロリとした顔で見上げる。

「ここにいてもしょうがないよ。あのバスにも乗っちゃいけないし、フームの掛札どおりに進んでもいけないんだ」

「掛札って？」

「こつちの話。とにかくぼくは行くよ。どこに行くかはわからない

けど、家を探さなきゃ。それとエレノアも。きみはどうする？」

またぎゃんぎゃんわめかれると思ったが、なにも言わなかった。

それどころか電池が切れたみたいにしゅんぼりし、動かなくなった。「家はあるんだろ？ このへんか？」聞いているんだかいなんだかわからない。「近所なら、送ってあげるよ。もちろん、きみがよかつただけだね。遠くなら どうしようかな。ぼくは行くところもないから、場所によっては送ってあげてもいい。イヤならひとりで帰ってもいい。ここでお別れってこと。どう？」

スネジャナはぱつと見上げた。そして泣き出した。はじめはダムからちよろちよろと水が漏れ出す程度だったが、すぐにコンクリートが破裂して大決壊した。

「どうしてそんな」しゃくりあげる。「たにんぎょうぎなの！」変態が今度は子供を泣かせたということで、バス停のパーティでは眉をひそめる人数がどんどん増えてきた。主催者らしき者が声を上げ、リュックに向かってあんたはだれの招待なのだとか、パーティから出ていってくれとか言い放った。ほかの者はそうだそうだと賛同し、眉毛を吊り上げながらパンチの入った紙コップを持ち上げた。スネジャナを保護しようと駆け寄ってくる者がひとりもないのは、たいへん残念なことだった。

リュックはしゃがんでスネジャナに言った。「いいよ、家に送っていく。ぜんぜん構わないんだ。家はどこ？」

「うちに帰りたい！」

「だから、送っていくって言っただろ？ 住所さえわかれば」

「ちがう、帰るの！」心臓がとまりそうな絶叫を上げた。「ふたりとも帰るんだよ！ あんたも帰るの！ あたしも」

「わかつたわかつた！ ぼくも帰るよ！ 家に帰ろう！」リュックは立ち上がってわめいた。「ふたりで帰ろう、いますぐ！」

とたんに泣きやんだ。涙と鼻水だらけで真っ赤になった顔がぴたりと動きをとめ、それからチャンネルを切り替えたようににっこりした。

リュックの手をつかみ、走り出す。

「家はそっち？」

「こっち！」

「よし、帰ろう」足をもつれさせる。「だれと住んでるの？」

「みんなと！」

そんなわけで、リュックはスネジャナにひっぱられながら走った。スネジャナはかなり足が速かった。しかも手首をつかまれているので走りづらく、ついていくのがやっとだった。なにかの拍子に手を振り払ってしまわないよう気をつけた。

細い路地をでたらめに走り、急にとまった。でたらめだと感じたのは、曲がり角に差し掛かるたびにスネジャナが迷う素振りを見せ、何度かは反転して引き返し、何度も行き止まりにぶち当たったからだった。

「近づいてきた！」

ふたりは歩きながら話した。スネジャナは相手のことなど構いもせず、話したいことを話したときにしゃべる。その最中も犬のようにぐるりをまわるので、足を踏んづけないかと冷や冷やししながら歩いた。

「あたしは世界を変える力があんの」

「だろうね」リュックは調子を合わせたが、半分は本気だった。

「『どうやって変えるの？』って聞いて！」

「どうやって変えるの？」

「どんどん変わっていくの　自分がね。全体を変えるんだ。頭んなかも、体も、ぜんぶ。気に入らなきゃ次のあたしになればいい。死んだりして」

まったく理解できない。

「さっきは死のうとしてたのか？」

「そう」

「いまの自分が気に入らないから？」

「そんなときもある」

ここまで来てはじめて、畏かもしれないという考えが浮かんだ。

テレビ界の連中は、駄々っ子を使つて都合のいいところへ連れていき、またなにかをやらかすつもりなのかもしれない。リュックのエピソードを好き勝手にこねくりまわし、新しく楽しい、スリル満点のわくわくどきどきを見せるつもりなのかもしれない。

わくわくどきどきならいいじゃないか、と思った。なにがいけない？ 現実に暮らす人間を楽しませるために、わざわざ手間をかけて企画を立ち上げ、脚本を書き、セットを組む。だったらこっちも指示されるとおり楽しめばいいじゃないか。

リュックはかぶりを振った。やはり、どうしていいかわからない。ただ、この子が連中の差し金だったとしたらがっかりするだろう、とは思った。

スネジャナが立ち止まった。

「ここが家。みんなの家ね」

17話 ドラマ『みんなの家族』

売れっ子女優として多忙を極めていたエレノアだったが、ファンタジー的な塔でファンタジー的な囚われの姫を演じていたとき、突然大男が数人押し入ってきた。なにかがおかしいと思った。押し入られるために監禁されているのでそれは構わないのだが、男どもは全員アイマスクをつけ、マントをひるがえし、そしてなぜか上着を着ていた。テレビ映画『男の宝箱』に出演する男性は例外なく上半身裸で、いつでも飛び込めるような分厚い胸板と赤銅色に焼けた肌に、皮のパンツ一枚で大剣を振りまわすものと決まっていたはずだ。テレビの向こうの奥さまがたも、これでは妄想のしようがない。

疑問を差しはさむひまもなく、掛け声とともに抱え上げられた。そして窓から放り出された。

ファンタジー的な世界が眼前に広がる。いつものようにエレノアは悲鳴を上げていたのだが、いいかげん声がつづかなくなつてから、普段と比べてだいぶ長いこと落下していることに気づいた。どこに着地させるか迷っているんじゃないかと思えるほどだった。それからちよっぴり、今度こそ地面に激突して死ぬんじゃないかと思った。エレノアは腹這いの状態で着地した。ちょうどソファのうえだったので死にはしなかったが、肘かけが顔面を直撃した。反動で頭が反り返り、首の骨が折れそうになった。

ぶざまにバウンドし、うまいことお尻から着地した。

拍手と歓声が沸き起こった。ボサボサの髪の毛をかき上げ、正面を見る。三百人分くらいと一斉に目が合った。女性に男性にチビっ子にご老人と、顔はさまざまだったがみなうれしそうに笑い、階段状の席でこっちゃんに固まっている。

エレノアは脚を組み、客席を右から左まで眺め、それから大きくため息をついた。今度はなにをやらせるつもりだろう。インタビュ―かトークショーか、それともクイズ番組でもおっぱじめるのだから

うか。

「おかえり！」男性が立ち上がった声をかけた。なにがおかえりなのかと、すねをさすりながら見まわしてみる。家っぽい。壁の片側がバツリ切り取られてまる見え状態なのをのぞけば、なにからなにまでリビングだった。もちろんわが家ではなく、セツトなのだろう。だから「おかえり」とはおかしな話なのだが、言われてみるとどこか懐かしかったし、見覚えがあった。玄関に、階段に、テーブルも。反対側の扉は開きっぱなしで、奥にキッチンが見える。

カメラを肩にかついだ男がキッチンからのぞいていた。さつと陰に隠れる。

テーブルにリモコンが乗っていた。テレビがあるべき場所には観客がいて、エレノアを見ている。これではあべこべだ。

玄関のチャイムが鳴った。ピンポンという音にも聞き覚えがあったが、どのうちでもピンポンと鳴るだろうと思い直した。これは知らないが、開けなくても勝手に入ってくるだろう。これがホームドラマなら、玄関に鍵はかかっていない。

またチャイムが鳴った。それでも無視しつづける。客はしつこく鳴らしまくる。思わず応対したくなるようなウキウキしたりズムを取り、しまいには怒りのこもった連打をおっぱじめた。あまりのやかましさにエレノアは立ち上がり、大またで玄関に歩み寄った。ミ―力だったらひっぱたいてやろうと思った。新しいゲストだったとしても、やはりひっぱたく。もし若手芸人のヘルマンだったら、ケツに火をつけてやろうと思った。

玄関を開けて、客人を見た。エレノアはひっぱたくこともケツに火をつけることもできなかった。

「はやく出てよ、バカ！」

女の子がエレノアを見上げて怒鳴った。黒い髪はもつれにもつれ、顔も身なりも清潔とはいえなかった。大きなスニーカーをはいている。怒りに顔をゆがめながら、ふたたび玄関のチャイムに何度も指

をたたきつけた。

観客がほえましげに笑っている。

「ごめんなさい」「子供が出てくるとは予想外で、エレノアはうるたえた。」「てつきりほかの人かと」

「ほかってだれよ?」噛みつくように言う。「あたし以外に帰ってくる人なんていないでしょ!」

「ここ、あなたの家なの?」

女の子は答える代わりに、鼻息を荒くしてチャイムを連打した。

「あなた、名前は?」

「なーまーえー?」

「わたしはエレノア。それで」「どうしてこんなに怒り狂っているのだろう。」「ここ、あなたの家なんでしょ? 中に入ったら」

陰からもうひとりあらわれた。女の子の肩をそつとたたき、チャイムのボタンを手でおおった。エレノアは顔を上げてリュックを見、その場にへたりこんだ。

「どうも」リュックはうなずいた。

観客の拍手を聞きながら、どうにか答える。「どうも」

女の子がネズミのようにすばやくわきを駆け抜け、ソファにすべり込んだ。テーブルに置いてあったリモコンを客席に向け、それからじつとにらみつける。

リュックがエレノアに手を差し出す。手を握り、エレノアは立ち上がった。

「家って聞いたんだけどさ」頭を差し入れて、客席を見やった。「ドラマのセットみたい」

「あ あなたも、ついにミールカに捕まったのよ。でなければ、ここにいないはずがないもの」

「どうなんだろう」「ひとごとのように言う。」「ぼくはあの子に連れて来られたんだ。名前はスネジヤナで」

同時に見やる。スネジヤナはさつきと変わらずテレビを見るような姿勢で、熱心に観客をにらみつけている。

ふたりは同時に向き合い、同時に目を細めた。

「あなた、ほんもの？」

「ぼくも同じことを考えてた」

「どう思う？」

「中に入ろう。話をすればわかるよ。実話もののドラマでも、ほんものそっくりとはいかないだろ？ それと同じでさ」

そんなわけでふたりは、ガンを飛ばしつづけるスネジャナをあいだにはさんでソファにすわり、これまでのことを話した。リュックも話した。どちらもまともな話はひとつもなかった。

観客が静かに見守っている。

「どうでもいいけど、ここじゃ暮らせないよね。デパートのベツドで寝泊りするみたいなものだ」

スネジャナが勢いよく振り向いた。「ここで暮らすんだよ！ みんなで！」

「ここはどこなの？」エレノアはたずねた。

「わが家！」

「あなたの？」

「みんなのだよ！」

エレノアは眉をひそめて、スネジャナの頭越しにリュックを見た。この子は何者？ 信用していいの？

リュックは答える代わりに小さくかぶりを振った。

「ぼくが代わりに教えてやろう」

背後から声がした。振り返らなくてもミィカだとわかったが、お義理で振り向いた。階段の踊り場で、手すりにもたれて笑顔で見下ろしていた。

「またあいつだ」リュックがささやいた。「バカだよ。悪巧みもなんでも、ぜんぶ自分から話すんだから」

「聞こえているぞ、リュック」

「おまえ、どうしてテレビの中にいないんだ？」

「それはここが」あっさりバラしそうになって口を閉じた。「

教えてやるもんか」

「じゃあ聞かない」とエレノア。

「いいだろう、教えてやる」

エレノアとリュックは同時に目玉をまわした。ミーカはニヤニヤ顔にくさい演技で全身をくさくしながら、たつぷり時間をかけて階段を一步降りた。長いこと話すつもりらしい。

「さて、ぼくらはエレノアのことならなんでも知っている。年齢から身長、体重、スリーサイズまで」

スネジャナがいきなり飛び跳ねて半回転した。ソファの背もたれをつかんで、噛みつきそうな顔でミーカを見上げる。

「いや、知ってるつもりだった。これまでいろんな番組を試したんだけど、どれもしつくり来ない。アクションもダメ、学園ものもダメ、SFもダメ。だからみんなで復習したんだ。エレノアのすべてを頭に叩き込み、いちばん活かせる番組はなにかを考えた。で、結論は――」

ようやく次の一步を踏み出した。

「シットコムだ。考えてみれば当然だな。どうしてもつとはやく気づかなかつたんだろうね？　ここは見覚えがあるだろう、エレノア。ここはリンの家だ」

懐かしさを感じたのはそのせいだったのか。間取りや電話の場所、テーブルクロスの模様に暖炉の上の家族写真と、ある意味わが家よりもよく把握していた。いまにもリンやカーティーン、リュック（ちびのほう）がキッチンから姿を見せそうだ。

もしかして、リンに会えるのかも。

「ちがう！　みんなの家だよ！」スネジャナが怒鳴った。

「そうそう。その子を入れて三人で、ドタバタ家族を演じてくれ。そしてぼくを楽しませてくれ。言っておくがきみたちとちがつて、ぼくらはいい視聴者だ。つまらないからといってテレビを消したり、チャンネルを替えたりはしない。決して飽きることなく、きみを裏切ったりもしない」

また一步降りる。

「やる？」リュックが聞いてきた。

「やるわけないでしょ」エレノアは即答した。

「いいじゃん。やろうよ！」スネジャナが突然、お医者さんごっこにでも誘っているかのように勢い込んで言った。「みんなに住むんだよ、ここで！」

「でも」

「いいんじゃない？ ほかに住むところもないしさ。テレビの連中が住まわしてくれるっていうんなら、三人で」

リュックはそう言って、残りは目で訴えかけてきた。よくわからなかったが、スネジャナに関係することだということは理解できた。

「わかった」

「この人、あんたの彼女？」スネジャナはリュックに体を預け、たずねた。

「そうだよ」

「ふうん」

スネジャナはリュックにもたれながらエレノアを見て、にんまり笑った。十二歳の女の子がとたんに悪女めいて見えた。

「あたしの保護者になってみる？」

「というわけです承も得たことだし、そろそろ撮影をはじめようか。出てきていいよ」

ミーカの号令を合図に、いろんな連中がぞろぞろと姿をあらわした。車輪のついたスタジオカメラが両わきからすべるように登場し、キッチンでカメラをかついでこそそしていた男も、扉の隙間から堂々とレンズをのぞかせている。お揃いのジャンパーを着たスタッフが忙しそうに駆けまわる。ひとりがオレンジジュースを運んできて、テーブルに置いた。

スネジャナはグラスを持ち上げ、むっつりした顔でおいを嗅いだりグラスの底をのぞいたりしている。

客席と出口のあいだにある薄暗い空間に円卓が設置され、十人くらいが腰掛けた。少し離れたところに赤いシャツを着た男がイスにすわっていて、ハゲ散らかした頭を向けて台本をチェックしている。リュックが指差した。「あいつ、知ってるよ。ジョンとかいうやつだ」

「みんなお知り合いよ」

「イヤなやつだ」

「みんなそうよ」

「全員、注目！」舞台で鍛えたように聞こえる張りのある声でミーカが呼ばわった。「はじめる前に再確認だ。お客さんもね」

静まるのを待ち、咳払いしてつづける。

「それではこれから、シットコム『みんなの家族』の公開生放送をはじめめる。ちなみにタイトルはぼくが考えたんだけど、ほかにいいのがあれば、だれでもいいから教えてくれ。認めるよ、ぼくにはネーミングのセンスがない！」

やらせに等しい絶妙のタイミングで観客が笑った。

「さて、この番組はシットコムであり、同時にリアリティ・ショーでもある。リアリティ・ショーって、知ってるね？ 出演者はほんとうにここで一日じゅう生活してもらい、その様子を観客のみんなやテレビの前の視聴者がリアルタイムで見るわけだ。放送は二十四時間。しかも生だ。チャンネルをまるまる独占。前代未聞だろ？ っていうか、そんなことが可能なのかな？ いいや可能だ。なんとつてぼくは――」

マイクを客席に向ける。観客は申し合わせたように一斉に言った。

「『テレビの神さま』だから！」

ミーカは余裕をかましていたが、満面の笑みは恍惚としていた。「でも、待てよ？ 家族の生活を垂れ流しにしてなにがおもしろいんだ？ そんなことはない。おもしろくなければテレビじゃないからね。円卓に注目！」

ひとり残らず注目した。

「そこにいるチームが、次の展開をリアルタイムで考える。監督のジヨンに脚本家三名が、波乱万丈の生活を演出するよ。スポンサー代表もいるな。劇中で出演者が何回アイスを食べるかチェックに来たんだ。ロゴがちゃんとカメラを向いているか、とかね」
おつと口が過ぎたと大げさに驚いた顔をし、おどけて口チャックをする。

「観客のみんな、座席にモニターがあるだろう？ じつはきみたちも、演出に加わることができるんだ。そのタッチパネルを操作すると、現在のシチュエーションがおもしろいかどうかという感想から、具体的に次の展開のアイデアを書いて、そこにいる脚本家に送ることができる。要望が多いアイデア、うならされるようなアイデアは即採用され、のちの脚本に反映される。どう？ おもしろいだろうか？」

「あんたの話がいちばん退屈よ」スネジャナがぼそつと言った。エレノアは思わず吹き出した。
「ぼくの話はもういいよね。じゃあはじめよう。『みんなの家族』、スタート！」

スタートと同時に静まり返った。あれをしるこれをしるという指示はどこからも出てこない。スタッフも観客も関係者っぽい人物も、ただただ黙ってセットの中央に注目している。

三人はしばらくぼけつとソファにすわっていた。

エレノアは横から強烈な視線を感じた。案の定スネジャナが強烈ににらみつけていた。

「なにもしないの？」

「なにかしたほうがいいのかな」リュックも言い、ひざをさすった。
「とんでもなく落ち着かない」

なにかやれ、と客席から罵声が飛んだ。

「家族にはいつも言われてた」エレノアはなんとなくつぶやいた。「テレビばかり見るな、なにかやれ。そんなことじゃ将来たい

へんだぞ、って」

「ふうん。はじめて聞いたよ」

「家族はこうなるのを予測してたのかな？」

「まさか。ぼくも言われてただけで、親がしょっちゅうそう言うのは、実際ひどい目に合ったときに『それ見たことか』って言いからなんだと思うよ」

「おなかすいた！」スネジヤナが足をばたつかせた。

「食事でもしようか？」リュックがのんびり言う。

「こんなところで？」

「しばらく暮らすんだから、いずれ食べることになるだろ」

「暮らす、って」

スネジヤナは急にわけのわからない叫び声を上げ、弾かれたように立ち上がった。テーブルを飛び越えてずんずんキッチンへ向かい扉を蹴飛ばした。向こうにいたカメラマンが仰天してあとじさった。「アイスしか入ってない！」冷蔵庫の収納を力任せに閉める音がした。「ピザが食べたい！」

「出前でも取る？」リュックは立ち上がりかけて、固まった。「考えたんだけど、連中はぼくらを路頭に迷わせるようなことはないはずだよね？」

エレノアは客席に目をさまよわせた。「おもしろいならなんでもありなんじゃない？」

「つくりたがっているのは家族もののコメディだ。きみが若奥さんで、いろんなドジをやりながら最後はちよつと感動、ってやつを望んでるんだよ。生活苦の家族じゃ、ドキュメンタリーになってしまう」

「なにが言いたいのか？」

するとリュックは円卓のほうに向かって声を上げた。「ピザの代金はあんたらが払うんだろ？」

数人が振り向き、ちよつと待てと手で合図してきた。それから全員で顔をくつつけるようにして話し合いをはじめた。ひとりだけ強

行に反対している人物がいて、残りが身振り手振りを交えて説得にかかっている。反対派のスーツ男は静かにイスを引いて立ち上がり、携帯電話を取り出した。「待て待て」とひとりが大声を上げた。スーツ男はきわめて冷静にすわり直した。しばらく協議がつづいたあと、離れてすわっているジョンにおうかがいを立てた。ジョンはわずかに顔を上げ、ぞんざいに手をひらひらさせた。

協議が終わり、それぞれ自分の仕事に戻った。

スタッフのエレノアたちにカンペを向けた。マジックで「アイスを食べ」と書いてあった。

「ピザを注文してもいいだろ？」

スタッフは画用紙を一枚めくり、せわしない様子でマジックを走らせた。ふたたびカンペを向ける。「ピザを食ったあと、アイスを食べ」と書いてあった。

カンペを確認し、リュックは満足げにうなずいた。片方の眉が高々と上がっている。

「なにかたくらんでいるんでしょう」

エレノアに笑顔を向けたあと、キッチンをのぞきこんだ。「ピザ、頼んでいいよ！」

「あたしが選ぶ！」スネジヤナはスニーカーをこつこつ鳴らして駆け込んできた。「あたしが電話していい？」

「いいよ。スタッフと観客にもごちそうしなきゃ。三百人分くらいお願いできる？」

カンペのスタッフがかぶりを振りながら腕でバツテンをつくり、首を切るしぐさを何度も繰り返した。

スネジヤナはコードレスの受話器をむしりとして番号を押し、耳に押し当てた。エレノアとリュックは、ナゲットを六百個とうれしそうに叫ぶそのさまをぼんやりと見やった。

リュックは立ち上がってリビングをぐるりと見まわした。景気づけのように手を叩く。

「とりあえずさ、ほかの部屋を紹介してくれる？」

眉をひそめながら、エレノアも腰を上げた。「冗談を言っているかと思った。」

「観客がいるところですか？」

「いやいや。言葉どおりの意味」

「わたしの家じゃないよ」

「でも、よく知ってるだろ？ ピザが届くまでやることがないから、二階に上がって、リンの寝室でも見ようよ。いつも言ってたじゃないか、『あのベッドで寝てみたい。あの家に住みたい』って」

観客は静かだった。見入っているのか、たんに退屈しているだけののか。離ればなれになってどのくらい日が経ったのかわからなかったが、リュックはちよつとまじめになったような気がする。なんであれ、ひとりでないのはありがたいことだった。

「ペパロニのしを百枚！」

スネジャナは心から楽しそうに目を輝かせ、受話器を怒鳴りつけていた。

「あ？ トッピング？ なにがあんの？」

エレノアはリュックにつづいて階段を登った。キャットウォークを過ぎると両側が壁にはさまれ、観客が見えなくなった。ほつとする。左手の扉を開ける。トイレだった。芳香剤に、カレンダーに、山積み雑誌の『31』の最終回で、リンがゲストの山から非難し、テレビ越しにアイスクリームを食べた場所だ。よく見ると、足拭きマットに茶色いしみがついていた。なんのしみかは確認するまでもない。もし確認する必要があるとしてもだ。

「リンのトイレ」「エレノアはつぶやいた。「ここでリンが」

次の部屋は、ベッドがふたつあった。カーティーンとちびリュックの部屋だ。いっぽうは色紙をぶちまけたような柄のカバーで、アニメの異星人がべたべたと描かれていた。ホテル顔負けのベッドメイクで、眠った痕跡も見当たらないほどだった。もういっぽうはセレブな薄いピンク色で、眠った痕跡だらけだった。掛け布団は起き抜けの状態で固まっていて、脱ぎ散らかしたパジャマや下着がひっ

かかっている。ふたりはここで、しょっちゅう口ゲンカしていた。カーティーンは自分の領土を主張し、ちびリュックは「子供だね」と言いたげに肩をすくめる。エレノアは思わず笑みを浮かべた。

「めっちゃめっちゃびしさをを感じるな」

「終わったんだもの。みんな出ていったのよ。番組に人気がなかったから」

外に出て、ドアを閉めた。カメラマンとケーブル持ちが、薄暗い廊下に亡霊みたいにつっ立っていた。リュックは肩をすくめ、エレノアはにらみつけた。

次のドアを開けた。なんの部屋かは入る前からわかっていて、エレノアとしてはどれほど圧倒されるか、または感激のあまり泣きくずれるか、予想がつかなかった。ノブに手をかけてゆっくり開け、中をのぞきこむ。

リンの部屋も、エレノアが知っているものはすべてそろっていた。ドラマ時間で三週間前に張り替えたばかりの壁紙に、ダブルサイズのベッドが幅を利かせていた。申し訳程度に本が並んだ机。小型のテレビに、衣装ダンスに、ナイトテーブルの上には目覚まし時計と電話、寝る前に水を飲むときに使うガラスのコップが置いてあった。

「ここで寝るといいよ」リュックが腕に触れた。「だいじょうぶ?」

ぼうつとしていたらしい。「だいじょうぶ。あなたは?」

「ぼくは屋根裏で寝るよ」

「いつしよに寝ないの?」

「連中にネタを提供するようなもんだからね。そのことなんだけど」

リュックは突然カメラマンに向かい、スウェットを勢いよく脱ぎ下ろした。

「出ていってくれ。出ていかないともう一枚脱ぐぞ」パンツのゴムに手をかけ、脅しをかける。「この下にはなにがあると思う?」

カメラマンとケーブル持ちは顔を見合わせ、廊下へすこすこことあ

とじさった。リュックはペンギンみたいに歩きながらドアを閉め、鍵をかける。

「そのことって？」エレノアがたずねる。

「スネジャナのこと」

「あなたは気に入られてるみたいね。わたしはまともに話もできない」

「はじめはぼくもそうだったよ。とにかく、ぼくらはあの子の親になってあげるべきだと思うんだ」

「実際の？ ドラマ上の？」

「ここにいるかぎり、両方」ドアを見る。「ここから出たら、そのとき考える。実際となると、いろいろあるだろうから。学校にもかよわせなきゃ」

「わあ、現実的だ」エレノアは笑おうとしたが、リアルすぎる話に笑うことはできなかった。「ミーカが差し向けたんじゃないの？」
「あの子にここへ連れてこられたのはたしかんだけど、だまされたとは思えないんだ。『おまえはぼくらをしっちゃんかめっちゃんにしよう』とテレビから出てきたキャラクターなんだ！』なんて、言うる？」

「それはそうだけど」エレノアはうつむき、相方のスネ毛まる出しの脚を見た。「子供なら無下にはできないと思ってるのかも」
「できないよ。だから、しばらくはここであの子の面倒を見ようと思っで。ここに住みたいってわめきまくってたしね。身寄りもないみたいだし」

「父親に目覚めたってわけね。突然」

「だって、お互い甥っ子も姪っ子もないし。それ以外で子供に接する機会、ある？ 犯罪行為はべつとしてさ」

「ずっとときとうに暮らすと思っでた。ふたりで」

「ぼくもそうだった。でも連中に引っかきまわされて、気づいたら子供ができちゃった。たぶん実際も、そんな感じなんだろうね」

エレノアは二回三回とうなずいた。「わかった」

「親になるとは思わなかったね」

「わたしも」

「ちよつと屋根裏を見てくるよ。いっしょに来る？」

「ここにいる」

リュックはスウェットをはき直し、ドアの鍵を開けた。カメラマンが戸口のまん前に立っていた。リュックはそこをどけと身振りで示し、カメラマンは言うとおりにした。リュックは廊下を歩きかけたところで戻ってきて、パンツを脱ぐしぐさを繰り返して、中に入ったらこうだぞと脅しつけた。カメラマンはしょんぼりとレンズをうつむかせ、いなくなった。

エレノアは鍵を閉めたあと、ベッドにおそるおそるすわった。清潔だが使い古されている感じ。リンがうつぶせになってしょっちゅう泣きまくっていたベッドだ。こうやっていると、リンの代わりになったような気がしてきた。ずっと前から表情なんかはすっかりリンの真似っこになっていたし、人生の五年間を犠牲にしてもあんなふうになりたいと思ったことも何度となくあった。

ベッドの上にリモコンがあった。いつのまにか小型のテレビに向け、電源を入れていた。映像が出る前に消した。頭の形にへこんだ枕を見た。胸に抱いて、鼻を押し当てる。リンは母親として、どんなことをしてたっけ？ ぼんやり思い出しながら、もう一度テレビをつけた。母親らしいことはあまりしていなかったような気がする。

18話 現場の思惑

ジョンは円卓から離れたところにすわり、ベーコン&チーズにかぶりつきながらチームの仕事ぶりを観察していた。

「勝手なことしやがって」脚本担当Aがいまいましげにピザの箱を開け、ソーセージとブラックペッパーとオニオンのピザにガーリックオイルをかけまくった。ちりちり頭の百貫デブで、こいつは心臓病で早死にするだろうとジョンは思った。

「代金はどうします？」脚本担当Bが振り返って、ジョンに聞いた。「ピザは庶民の食べ物」というセリフを十四回も繰り返したわりには、もう四切れ目のツナに取り掛かっている。ケツのでかさは庶民的とはいかないようだ。

「ミーカに請求しろ」ジョンは答えた。「おまえは予算のことなんか気にしなくていい」

「ミーカはどこです？」とたずねたのはお笑い芸人ヘルマンだった。「おれはおまえがきらいだ」むつつりと返す。「ミーカが勝手におまえを選んだんだ」

「任せてくださいよ。お笑い担当、ユーモア担当ってことでしょ？」一度でもネタをすべらせてみる。教育テレビに出演させてやる「ヘルマンはまったく悪びれずに、ヘラヘラ笑いを浮かべながらペパロニのピザを食い出した。拝むような奇妙な格好で、しかも尻のほうから食っていやる。ジョンはますますこいつがきらいになった。

三十分間でかなりのピザが消費された。大量の空き箱がテーブルや床に積み重なっている。テーブル周辺はどこを嗅いでも油とチーズとトマトソースとニンニクとあつためたダンボールのにおいがした。

ジョンはメガネをはずして顎を上げ、セットを見やった。エレノアたちはキッチン側でテーブルに着き、比較のおとなしくピザを食

っている。おとなしくないのがあのスネジャナとかいう子供で、ピザの耳をちぎっては「こつち見るな！」と怒鳴り、客席に投げつけている。イラついているのはジョンも同様だった。ミーカがないのも原因のひとつだ。記念すべき第一回は自宅のテレビで見たいということ、はじまると同時にいそいそと帰宅したのだった。バカ社長そのものだ。

「このままだまって食わせつづけるつもりか？」ジョンは脚本家チームに発破をかけた。「口だけじゃなく頭も動かせ」

「できません」と女脚本家。「つまり、今日のところは。アイスを食べさせないと。それまでイベントは起こすなと注意を受けていて」

「あのアイス屋か？ いまどこにいる？」

「本社から呼び出しがあつたみたいです」脚本担当Aが指差した。

「向こうで電話してますよ」

ジョンは通路口を見やった。どんな話をしているかはだいたい想像がつく。

「なら、明日の展開を考えろ」向き直つて言った。「観客からアイデアは届いているか？」

「アイスを売らせれば？」

ヘルマンが提案したが、全員に無視された。

「ロクなのがないな」

脚本担当Aはピザにかぶりつきながら片手でノートパソコンをいじっていたが、しばらくするとあきらめて巨体を背もたれにもたせかけた。窮屈そうに首をひねってジョンを見る。「使えるネタなんて、来るわけがない」

「そりゃそうだ。役に立たないのははじめからわかっていたさ。ミーカの思いつきだ」

「お客が満足していないのは、たしかね」とケツのでかい脚本担当B。「三十代、女性。『家族の絆みたいなテーマが見たいです』だつて」

「二十代、男性。『笑えるやつ』」

「四十代の独身男性から。『スネジャナちゃんの』あ、これは読めない」

「『いつも楽しく拝見させていただいてます。ところで、はじめのシーンは三人がソファですわっているというものでしたが、素人のぼくが言うのもなんなんです、おもしろみに欠けるものでした。もつと興味を引くような状況からはじめないと、見る側は興味を失ってしまいます。それから』なんだこれ？ おまえなんぞに言われたくないね」

脚本家チームは口を動かすのをやめ、しばし押し黙った。

「状況を確認しよう」脚本担当Aが切り出した。「母子はすでにギクシャクしてる。そこをうまく利用するんだ。スネジャナがエレノアをきらう理由は？」

「きらってない。暴力的で引つ込み思案なのはあの子のデフォルトなの」

「リュックにはベツタリだよ？」

「わたしが途中からそう設定したの」脚本担当Bは得意げに眉を動かした。「関係が複雑になって、おもしろいでしょ？」

「スネジャナを動かし、エレノアの反応を引き出す」

「たとえば？」

「子供を病気にでもするか」

「急すぎてわざとらしい」脚本担当Bはスタッフから濡れタオルを受け取った。「スネジャナは学校にかよってないの？」

「もちろん、かよってるだろ。というか、かわせるつもりだよ」

「明日の午後、担任に電話させるのはどう？ 『おたくのお子さんが起こした問題について』って」

「どんな問題？」

「あの性格だもの、なんでもありでしょ」

「いじめに合うのもいいな」

「どう見てもいじめっ子タイプじゃない？」

「いや、暴れてるだけだよ。なんでかっていうと　愛してほしいけど方法がわからない、だからむちゃくちゃやってるんだ。そして急に落ち込んで殻に閉じこもる。ああ、やっぱりだれも理解してくれない、自分はいらぬ子なんだ、とね」

「暗くなりすぎないようにしなきゃね」

脚本女はノートパソコンに向かい、ちゃちゃっとキーボードを叩いた。仕上げてエンターを押して、セットを見やった。スネジャナは急にピザを投げるのをやめ、電池が切れたようにうつむいて動かなくなった。リュックとエレノアが身を乗り出し、心配そうに話しかけている。

「抑鬱状態もセットした。これであの子にも深みが出るかな」

「よし、とりあえずは学校ネタでいこう。ガラスを割ったりして、クラスメイトや担任に煙たがれる。だけどとてもやさしい子なんだ。愛情を人一倍欲してる。エレノアがそこを引き出したように見せないとね。うまくいけば感動ものだよ」

「セットアップと解決は？　思いつきでもいいんだけど」

「ランチかな」身を乗り出して、言葉をひっぱり出すように指を何度も鳴らした。「お弁当デーがあるんだ　週一回。なんでかというと　学校側はよくやるだろ、こういうくだらないことをさ。親子の交流がどうたらって。　で、エレノアは料理ができないから、娘はクラスで恥をかく」

「どう解決させる？」

「エレノアが料理を覚える」

「くだらん」ジョンが口をはさんだ。「そんなことくらいで解決するか。『あたしのために料理を覚えてくれたのね、ありがとうおかあさん』ってか？　道德の教科書だな」

「クラスメイトをいじめる。エレノアは叱るが、じつは向こうが悪かった」と脚本担当A。

「大陸史のテストで落第。カウンセリングの先生との友情」と脚本担当B。

「掃除をサボったらウンコが振ってくる」とヘルマン。

ジョンは数ある冷たい視線の中でもとびきりのヘルマンに向けた。「おまえがウンコを用意するのか？」

「いいですよ。一度やったことがあるんです、ぼくの消防車で煮詰まったというように、脚本担当Aは伸びをした。」「難しく考える必要はないんだよな。いい小道具があれば」「イスをきしませて振り向く。」「なんかいい小道具、ありませんか？」

たずねた先にはフームの社員がいた。かなりお疲れのようで、イスの背もたれを下げられるだけ下げて頭を乗せ、阿呆のように口を開けている。

半開きの目を脚本家連中に向けた。

「トランポリン」

「はい？」

「うちの新製品だ」まぶたを震わせる。「トランポリン自体が跳ねまわるんだ 人間をほったらかしにして」

おもしろアンテナにひっかかったのか、ヘルマンがうれしそうに身を乗り出した。「それって」

脚本女はまわりを無視してパソコンに向かっていた。ひとりごとをつぶやく。「ディスプレイで手を怪我するとか」

「あ、あ、あ。血はダメ。暴力描写もダメ」

と、ここにきて法律担当の女が割り込んできた。電柱に頭をぶつけてはじめて魅力が出るようなタイプで、キヤリスタ・フロックハートに似てなくもない。ジョンはぼんやりとそんなことを考えていたが、口に出すのはやめておいた。いまは連中を混乱させたくない。脚本家のふたりは、おまえが口を出す問題じゃないと言いたげな表情を露骨に浮かべた。法律女はそれを敏感に察知し、先まわりした。

「血のように赤いアイスクリームが食べなくなる？ だって、あとあと面倒なのよ。それにあたし、書類のチェックだけするつもりはないから」

「とにかくキャラクターを動かそう。そっちが先決、解決はあとまわし」脚本担当Aは気持ちを切り替えるようにイスにすわり直した。「どのみち即興なんだからさ。スネジャナは明日から学校へ行く。セツトはいいとして 生徒も、向こうからすぐに持ってこれるよね？」

脚本担当Aはエージェントにたずねた。エージェントはテーブルに背を向けてイスをゆらゆらさせ、舞台を見ていた。びっくりしたように振り向く。

「明日までに？ えーと 一クラス分ならすぐに用意できるよ。条件も問題ない。先生は？」

「おばさん。太っててメガネをかけてて、ヒステリックな感じの」エージェントは電話を手に席を立ち、小走りに出ていった。

法律女がメンバーを見まわして言った。「ねえ、今日じゅうに全員の契約書をチェックしろってこと？」

「テンプレどおりだろ。できるさ」

「今夜は徹夜ね」女が言った。お気に入りのセリフのようで、一日三回は言う。

「夫のリユックについては？」

「そっちは簡単よ」脚本担当Bが言った。

「なにかいいアイデアがあるのか？」

おもむろにエイミルが携帯電話を取り出し、耳に当てた。「

ああ、明日は出社するはずだから。うまくやってくれ。 あんまり急ぐな。じゃ」電話を切って、大あくびをかました。「リユックに電話が来るよ」

「なにをしたんです？」文句がありそうな顔で脚本担当Bがたずねる。

「考えていることはきみと同じだ」不気味な笑みを浮かべた。「うちの女性社員と契約してくれ。見た目もいいし、かなりリユックに惚れてる。役に立つよ」

「なるほど」脚本担当Aはおでこをかいた。「まさにリアリティ・

「ショーだ」

「書類ができたらオフィスへ送ってくれ」

「やーれやれ」法律女はぐりと目玉をまわした。これもお気に入りのしぐさなのだが、しょっちゅうまわしているせいでまっすぐ歩けないようだった。「あたしも電話してくる」と言っ、あちこちつまづきぶつかりながら通路口の向こうへ消えた。

ジョンは通路口をなにげなく見やり、アイス屋の社員が消えているのに気づいた。なにがあったか知らないが、いなくなるのは大歓迎だ。

「ぼくのアイデア、聞きたくありません？」

ヘルマンが仲間を見まわしながら言った。他のメンバーはひと段落ついたところで、空き箱の片づけに入っている。

「家族でクイズ番組に出演させるんですよ。シットコムじゃ、よくあるじゃないですか」

「で？ おまえがその司会を担当するのか」

「できれば」

ジョンはしばらく口を押さえてうつむいたあと、言った。「すばらしい」

「ほんとですか？」

「いや、嘘だ」顔を上げる。「おまえはウンコ担当なんだろう？ ほかのことは気にするな。ウンコにだけ集中していればいいんだ」

19話 「あたしの保護者になつてみる？」

目覚まし時計ががたがた揺れ、神経に障る電子音を鳴らしはじめる。エレノアは耳をふさぎ、頭から布団をかぶった。どこのどいつが目覚まし時計などセットしたのだろうと腹が立つたが、違和感のあるシーツやマットレスの感触に、ここがリンの寝室だったことを思い出した。たぶん、セットされっぱなしだったのだろう。主人が出ていったことも知らず、毎朝同じ時刻に鳴りつづけている。

昨晩は寝つきが悪かった。リンのベッドにそろそろとすべり込んだときは、一種の変態になったような気がした。リンのことを考えながら安らかに眠ろうと思ったのだが、目を閉じると胃がむかむかしてきた。大量のピザとアイスクリームを食べたせいだろうと思つた。寝入ったと思うとすぐに目が覚め、トイレへ行き、げっそりして戻ってくる。おなかカラッポになると、今度は胸がざわついた。理由はわからない。深夜番組を見る気力もなく、おなかといっしょに変態気分もすっかりしぼんでしまった。

なにかがベッドに乗っかり、マットレスがかしいだ。布団越しの手が遠慮なくエレノアの脚のあたりをまさぐり、ぴしゃぴしゃと叩いている。手はだんだん頭のほうに上がってくる。エレノアはベッドの端っこに逃げた。

ベッドがトランポリンのように波打った。「起きろ！」

布団から顔をのぞかせる。パジャマ姿のスネジャナがベッドに膝立ちし、わーわー叫びながら飛び跳ねていた。

「いま何時？」

「もう七時だよ！」

「もう何時？」

「ひどい顔。お化けみたい」

壁の向こうからかすかに笑い声が聞こえてきた。エレノアは苦勞して目覚ましをとめた。起き抜けで体は思うように動かないし、目

の前に火花が散っている。

スネジャナのうしろにカメラマンが立っていた。無表情にレンズを向けている。

「あたし、今日から学校」

「それで？」

「出かける準備だよ！」顔を近づけて怒鳴った。「母親らしいことして！」

「母親って、わたしは」と、昨日リュックに言われたことを思い出した。「そうか。いいよ。どうすればいい？」

「『顔を洗って着替えなさい』って言って！」

エレノアはおそろおそろ言った。「顔を洗って 着替えなさい？」

「やだ！」うれしそうに叫ぶ。

「そう。なら、洗わなくても」

「ちがう！ やだって言われたら、『いいからはやくしなさい、学校に遅刻するじゃないの！』って怒鳴るの！」

エレノアはかぶりを振った。「怒鳴るなんてできない」

「それから、『朝ごはん、ちゃんと食べていきなさい。卵はどうする？』って」

「朝ごはん？ だれがつくってくれたの？」

「おかあさんがつくるの！」ベッドから飛び降りる。「ひどい！なんにも知らないんだ！ このバカ！」

「母親になったことないもん」エレノアはむっとして言い返した。

「それにこれからだって」

スネジャナは金切り声でさえぎった。エレノアの手をつかんで乱暴にひっぱり、洗面所へ連れていった。ただでさえ朝が弱いエレノアは、ふらふらになりながらスネジャナの指示に従った。顔を洗いたくない自分に怒れと言い、しぶしぶ怒ると満足げになっことりして顔を洗った。ほかにも歯を磨けと怒鳴れとか、フロスを自分に向けて投げつけると言われ、嫌がって逃げるから追いかけて捕まえて髪

の毛を解かせと命令されたりした。子供部屋に行くとクローゼットから洋服をすべてひっぱり出し、娘にいちばん着てほしくない服を選べと言われ、選ぶとこれを着ると駄々をこねはじめ、駄々をこねるなと怒鳴れと駄々をこねた。

わけがわからなかった。

キッチンでは母親の心得を教えてもらった。コツはとにかく子供を急がせること、いつもイライラしていること、食器を投げることでそしてPTAの役員になることだという。午後は基本的に憂鬱な気分を保ち、夫へはたまに離婚をちらつかせるべきだと付け加えた。隙を突いて高い買い物をしたり、生き甲斐がほしいとわがままを言ったり、ヘルパーを雇ったりするのも悪くないと言い添えた。朝食を食べたくないのではやくつくれと言われたのだが、こちらに関しては本気で料理ができなかったので明日以降に持ち越しとなった。

「学校なんて行きたくない」

カウンターで頬杖をつき、急に力なくつぶやいた。

「それはつまり、行きたいってことね」

「ほんとに行きたくないの」

口をとがらせ、足をぶらぶらさせる。エレノアを上目づかいで見やり、どう反応するかを待ち構えていた。

これで正しいのだろうかと思いつながらエレノアは口を開いた。「ええと、学校には行かなきゃダメよ。落ちこぼれたら将来」

「ちがう！」ぱつと顔を上げ、こぶしでカウンターを叩いた。「あたしをぶつの！」

「どうして」

「いうことかかないからだよ！」

「学校に行きたくないってだけで？」

「PTAの役員だからだよ！」

エレノアはだんだん我慢が効かなくなってきた。ほんとうに怒ってしまいそうだ。「やさしいおかあさんだって、いるじゃない。母親はみんな口うるさい鬼ババだっていうの？」

「はあ？ あんたがやさしい母親？ あんたはどっちでもない！

やる気がないだけじゃん！」

「そんな口の利きかたしないで」

「あたしなんかどうでもいいんだ！」

口に出かかったセリフを必死で飲み込んだ。表情で伝わるのが怖かったので、スネジャナから顔を背けた。観客は緊迫した場面に入っている。スネジャナを置いて小走りにリビングへ向かった。リュックが玄関口で鏡に向かって身なりをチェックしていた。

「これから仕事に行くよ」

スーツ姿にネクタイもびしつと決まっている。こんなにまともな格好を見るのは、あの日以来だった。

「仕事？」

「そう。一家を養うためにね」ボストンバッグを持ち上げてみせる。

「服も返さなきゃ」

「話したいことがあるんだけど」

リュックはエレノアの頬に顔を触れさせ、耳打ちした。「しばらくのあいだだよ。妻と母親をつづけて」

行ってきますのキスとかんちがいしたのか、観客からちらほらと冷やかしの声が上がった。

ふたりを見送ったあと、エレノアはそろそろとソファに近寄り、端っこに腰掛けた。リュックまで演技をはじめた。なにを考えているんだろ。テーブルの上には、テレビなしのリモコンとテレビガイドが広がってあった。ほかにはなにもない。

「わたし、なにをすればいいんだろう」「エレノアはしょんぼりと言った。「母親って、どうすればいいの？」」

観客が同情するようにため息をついた。

しづしづながら新しい生活がはじまった。といっても、しづしづしているのはエレノアだけだった。リュックは毎日仕事に出かけ、夜遅くに帰ってくる。だんだんと顔に疲れが溜まっていきまぶたが

垂れ下がりはじめたが、それ以上に充実しているようだった。社会人になるとみんなこういう顔になるのだとリュックは説明した。夕飯の席では楽しそうに同僚のネタを話した。たとえばカラスというあだ名の男はいつも全身黒づくめに白塗りメイクという出で立ちで、隙をうかがっては他人の文房具を勝手に盗み、家に持ち帰るのだという。ほかにも、プレゼンでは老けているほうが説得力があるからと前髪を抜きはじめる男や、劇やせと劇太りを週単位で繰り返す経理係の女の話をした。

「いまの世の中、个性的でないと生きていけないんだってさ」宅配の海老チリをつまみながら言った。「みんな必死で努力してるよ。レギュラー番組の一本も持つてないと、この先厳しいしね」

エレノアはぼけつとすわって聞いていた。

スネジャナも毎日学校へかよった。だがかなり行きたくない様子で、朝のスネジャナ全体で学校へ行きたがっているのはバッグだけだった。バスのクラクションが聞こえるとエレノアをのぞきこみながら大きなため息をつき、バッグにひっぱられながらイヤがる足をひきずって出かけた。そして夕方になるとイヤがるバッグをひきずって帰ってきた。学校に限らず、外へ出るのが好きではないようだった。逆に家の中では相変わらず元気いっぱい、観客にものを投げつけてはかかってこいと挑発し、門限を午後三時にしるとか、テストで落第したから自分を二週間の謹慎にしろなどとエレノアに詰め寄った。

エレノアはぽかんと立ち尽くしていた。

こうして毎朝ふたりを送り出し（ぼんやりと眺め）、その後は夕方までひとりになる。そのあいだ、エレノアはリンの寝室でテレビを見た。三日目からはランチもベッドに運んで食べた。はじめのうちはなにかしなければいけないような気がしていたが、一週間も経つとなにも気にならなくなってきた。カメラも観客も、テレビを見るあいだは気にならない。

昼間もイベントは起きているらしかった。電話はしょっちゅうか

かつてきたし、来客も頻繁にあったのだが、どれも無視した。どうせ円卓にいる脚本家だが、シーンをでっ上げようとしているだけなのだ。ご苦労さんと思いながら、テレビを見た。テレビを見ていれば、ほとんど気にならない。

気になるといえば、日増しにテレビがおもしろくなってきた。ミーカーにとっ捕まってからここに来るまで、テレビを見ることはなかった。ひさかたぶりのテレビにわくわくしながらじりつき、ひさかたぶりなのではじめは大いに楽しんでいた。だが日が経つにつれ、テレビ画面から目をそらす機会が増えた。観客やカメラの存在がテレビに集中できないほど気になるときもあった。メロドラマはメロメロせず、クイズ番組は答えを聞いてもぜんぜん腑に落ちない。お笑いステージもひどかった。ヘルマンのほうがまだマシだった。「次はだれそのモノマネ」と言ってモノマネをするのだが、そのだれそれを知らないといったようなことがしょっちゅう起きた。エレノアにとって芸人や俳優を「知らない」など、あつてはいけないことだった。

それでも我慢して見つづけた。

テレビ番組ほどではなかったが、もうひとつ気になることがあった。いつからかはつきりしないのだが、スネジャナの様子に変化が起きた。狂ったような活発さが弱まり、朝もエレノアを起こしに来なくなった。母親失格だとなじられることもなくなった。しまいには会話がいつさいなくなった。なんとなく気にはなったが、テレビを見ているあいだは忘れることができた。それに、もともと得体の知れない子なのだ。ドラマを操りやすくするために連中が送り込んだキャラクターにちがいない。考えてみれば、いうことをきく必要はまったくないのだ。ただのキャラクターなのだから。

ある日の午後、電話が鳴った。もちろんエレノアは出ないつもりだった。

テレビの前で膝を抱えていると、カメラマンが音もなくそばに寄ってきた。アップの映像を撮るためだ。たまにあることなので、い

つものように無視した。

カメラマンはテレビとエレノアのあいだにしゃがみ、レンズを向ける代わりにメモを差し出した。エレノアはメモを見、カメラマンに向けてこれはなんだと眉を上げた。

相手も無言で、しかも無表情だった。受け取れと何度も差し出す。しょうがなく受け取った。読んだとたん、頭に血がのぼった。

「電話に出る。このクズ女」

太いマジックで殴り書きしており、「クズ女」に下線が引かれている。呼吸がつかえ、顎が震え出した。どうして他人にこんなことを言われなければいけないのだろう。

エレノアはリビングに下りた。久々の登場に観客が沸いた。同時に、いままで聞いたことのないブーイングが混じっていることに気づいた。もうたくさんだ。もう番組はおしまい。リュックが帰ってきたら、このことを話し、なにはなくとも出て行こう。あのこととは知らない。路頭に迷ってもここで暮らすよりはよっぽどマシだ。リビングに立ち尽くす。カンペが向けられた。「電話に出て」

観客のひとりが叫んだ。「電話が鳴ったら出るもんだぞ！」

「そんなの勝手でしょ！」怒鳴り返す。

「ドラマがはじまらないだろうが！」

「なにがドラマよ！こんなドラマなんか」

一斉にブーイングが起こる。円卓からマイクを持った男が客席に入ろうと駆け出し、警備員に取り押さえられた。ヘルマンだ。ジョーンが立ち上がり、ニヤニヤするヘルマンを叱りつけている。「勝手な真似はするな。ジェリー・スプリンガーにでもなるつもりか？」

そしてエレノアを見上げて、大声で言った。

「おまえはクズだ。自分がなにをしたのか、わかっているのか？」

「そんなふうに言わないで！ 関係ないでしょ」

「自分さえよければいいんだな。だからクズだと言われるんだ」

エレノアは黙っていらなくなり、ソファのまわりをずかずか歩きまわった。四週したところで、望みどおり出てやろうと思った。

そして引つかきまわしてやる。いままでされたのと同じことをやり返してやるのだ。コードレスの受話器をひったくり、通話ボタンを押した。

「おかあさんですか？」

年配の女性の声だった。

「はじめまして。スネジャナちゃんの担任をしているオル二といいます。ようやく出られましたね」いら立ちを隠そうとしている。「おたくのお子さんについて」

エレノアはさえぎった。「知りません。かけまちがえよ」

女性は不意をつかれたように黙ったが、落ち着いた様子でつづけた。「そんなはずはないでしょう」

「どうしてわかるの。わたし、子供なんていないもん」

「あなたはそのつもりでも、子供はだれよりも親を頼りにしているのよ」

「そういう意味じゃなくて」

「とにかく、あなたには責任があるの。お子さんのやらかしたことについて」

「やらかした？」

「おつと失礼」なぜかくすくす笑い出した。「お子さんの問題について、お話ししたいことがあります。大至急来ていただけますか？」

校長室へ踏み入れると、耳慣れた拍手が聞こえてきた。自宅と同じく片側の壁がすっぱり切り取られていて、観客が階段状にすわっている。姿を見せただけで笑われるのも、同じだった。壁はおしゃれな黄緑色で違和感があつたが、観葉植物に肖像画に地球儀、役人っぽいどっしりとしたこげ茶色の机など、らしさを感じさせるものはひととおりそろっていた。かなり暖房が効いている。

電話のあと学校へ行こうと外に出た。住所どころか学校の名前すら知らなかったのだが、どうせ玄関を出たとたん校長室のセットにたどり着くんだらうと余裕をかましていた。玄関から外に出ると住

宅街の景色が当たり前のように広がっていた。引き返してノブをがちゃがちゃしたが、鍵がかけられていた。しかたなく通りに出て、あっちこっちさまよった。すれちがう人に漠然と場所をたずね、漠然としているのでやはりだれもわからず、しまいには追っかけてきた例のカメラマンといっしょに地図を広げて近隣の学校を洗い出し、ようやくスネジャナがかよっているらしい学校を探し当てた。

エレノアはコートを脱ぎ、腕にかけた。クズ呼ばわりされたときの怒りはだいぶ収まっていた。とにかくさっさと終わらせて、おさらばしたい。あの家からも、テレビの連中からも、スネジャナからもだ。

「あのう」机にすわる男性がおずおずと話しかけてきた。「おねえさんですか？」

イスが一脚、校長の机と向き合うように置いてあった。黒い髪の女の子が小さくなつて、背もたれから華奢な肩をのぞかせている。

「いいえ。その」

エレノアが言いかけると、スネジャナはぱつと振り向いて、すぐに向き直った。表情が見えたのは一瞬だったが、どきりとさせられた。スネジャナは泣いていた。

「あの」嘘だとバレたらどうしようと思しながら、調子を合わせた。「母親です」

「ほんとに？」なぜか校長先生も泣きそうな顔をしていたが、よく見ると地の顔だった。「申し訳ない。だいぶお若く見たので、ついで」

「あなた、歳はいくつなの？」

机のそばに立つおばさんがずけずけと聞いてきた。パンパンに膨れた手を前に組み、趣味の悪い指輪が太い指を締め上げている。まちがいなく、こつちがオルニとかいう担任だ。大嫌いだった親戚のおばさんにそっくりだった。

「二十四です たぶん」

「この子、養子なの？」ぞんざいに指を差す。

「ちがいます」

「おかしいんじゃない？」疑わしげに目を向け、ペンで一回なぞっただけみたいな眉を上げたり下げたりする。「計算が合わないでしょう。」
ねえ、校長先生」

話を振られた校長は、びくりとしてイスを引いた。いったいどっちがえらいんだかわからない。

「おかしいかな。いや、わからないな」と言う校長先生は吹けば飛ぶような体格で、ずいぶんスーツの生地を節約していた。「家庭の事情はいろいろあるし、われわれが口を出すことじゃ」

「そういえば、似たようなドラマがありましたっけ」芝居がかったしぐさで顎に手をやり、ふんふんと鼻息を吹き出しながら考える。

「校長先生は知ってます？　なんでしたっけねえ」

「ドラマ？　さあ、どうだろう。わたしはあまりテレビを見ないんだ」

「あつたんですよ。頭の悪そうな三十女が主人公で、夫に死なれたシングルマザーって設定なんです。十六歳で産んだ子供がいて」

おばさんが顔を上げ、メガネの奥からエレノアをにらんだ。

「あなたもシングルマザー？」

「いいえ」

「ドラマに出てるの？」

「いいえ」

おばさんが言うドラマがなにか、エレノアにはすぐにわかった。

この人も『31』が好きなのかと思うと、とてつもなくイヤな気分になった。

「本題に入ってもらえますか？」エレノアはうながした。

校長が相変わらず申し訳なさそうな顔で身を乗り出し、手を組んだ。「今回呼びしたのは、あなたのお子さんの問題行動について
で　あの、なにをしたかと言いますと　」

「暴れまわったのよ」おばさんは忌まわしそうにスネジャナを見下ろした。「まるでキ×××みたいに」

校長が細い手を向けて制した。「わたしが説明するから」

おばさん先生はむっとした顔を向けた。そのまま校長にかぶりつくんじゃないかと思ったが、おとなしく引き下がった。

猛獣が落ち着いた頃合を見て、校長が言った。

「あなたのお子さんが、クラスメイトのランチをぶんどったのです」

「なんのために？」

「まるごと食べるためです」

「理由は？」

「それは、その」

言いにくそうに咳払いする。助けを求めるようにおばさんを見上げるが、おばさんはあつちを向いてシカトした。

「その　あなたがランチのお金を渡してくれないから、と」

眉毛がひとりで動いた。「ランチ？」

「はい。お金がないとランチは買えませんので」

「そうなの？」

「ちよつと考えればわかることじゃない」おばさんが口をはさんだ。

「あなたも学校かよったことあるんでしょ？」

「あの、それは」

エレノアは弁解しようとした。つまりこれはお芝居で、ただのテレビ番組で、無理やり知らない子供の母親役をやらされているだけだ。実際説明しようとして、これでは弁解にならないと思った。

芝居だろつが番組だろつがなんだろうが、生きていればおなかが減るのだ。自分もそう、リュックもそう、そしてスネジャナもそうだ。

少しのあいだ、怒りが湧いてきた。どうしていままで黙っていたのか、言ってくればお金でもなんでも渡したのに、と問いただしそうになった。だがどれだけ子供を責めても、状況がよくなるわけではない。なにかが変わるわけでもなかった。悪いのは自分だった。

「ええと、それにずっと、朝食も食べていなかったよう。お子さんによると、おなかが空いたのでしかたなくやった、と」

スネジャナが振り向いたので、エレノアは目を伏せ、髪の毛で顔

を隠した。客席からは失望のつぶやきが聞こえる。相手の顔を見るのが怖かった。ほかにどうしていいかわからない。頭を抱えることもできず、舌をぺろりと出して「ママ、うっかりしてたの。ごめんちゃん」とも言えず、自分を責めて泣きくずれることも、抱きしめて許しを請うこともできなかった。

血の気が引いた。犯罪者になったような気がした。

「あなた、いったいどういう母親なの？ 子供を虐待中なの？」おばさんが攻勢に出る。

「そうじゃなくて、ただ」

「子供をほったらかしにして、テレビばかり見てるんでしょ」

「見てません」そう言うってから、自分自身にかぶりを振った。

「じゃあ、なにをしてるの？ まったく、あなたみたいな親に会ったのははじめてよ」

もちろん言うてやるつもりで口を開いたが、言うべきことが見つからずに唇を噛んだ。涙がにじんでくる。校長とおばさんがグッジョブと言わんばかりにこぶしを合わせたような気がしたが、かすみ目のせいでよく見えない。いったいだれに怒りをぶつけなければならないだろう？ こんなシナリオを書いた脚本家が、それとも母親失格の自分か。

肩を落として校長室を出た。スネジャナがとなりでとぼとぼと歩いている。バカとかカスとか怒鳴ってくればいいのと思ったが、エレノアを見ることができず、口も開かなかった。肩に触れようと、おずおずと手を伸ばした。スネジャナはいやがるように手を振り払い、距離を置いた。

玄関口から外へ出ると、おなじみのカメラマンとケーブル持ちが駆けてきた。上空にはヘリコプターが旋回し、スタッフが身を乗り出してカメラを構えていた。

ふたりは家へ帰った。帰り道は長く感じられた。また道に迷ったからだ。

20話 失われた人生

リュックは自分のデスクにすわり、仕事するふりをしながらオフィス内を見まわした。各々の机は仕切り板で区切られているので頭の先しか見えないのだが、とにかく忙しいということだけははっきりとわかった。みんな山盛りの仕事を抱えたふりをし、休む暇もないように忙しがっていた。

フームで学んだことのひとつに、「いかに他人に忙しいと思わせるか」というのがあった。数ある中でもとくに重要なビジネススキルで、年四回の給与査定でも評価のかなりの割合を占めている。たとえばキーボードを叩くときは、オフィスの隅まで聞こえるように大きな音を立てるべきで、なにを叩いているかは問題とされない。リュックは『ビジネスマンのお助けグッズ』シリーズからキーボードの音を購入し、スピーカーをつないでループ再生した。金槌でキーを叩き壊すような耳障りな音だったが、おかげで早々に上司の信頼を勝ち取ることができた。たまにリュックのデスクにやってきては肩を揉み、「期待しているよ」と声をかける。ちなみに上司の仕事は部下の肩を揉んで「期待しているよ」と声をかけ、机に栄養ドリンクの空き瓶を並べることだった。

マニュアル本にはほかにいろいろな書いてあって、さすがに一度では覚えきれない。「トラブルを愛する」など、生きかた全般について教えるもあった。同僚からこんな逸話を聞かされた。シヨップサイトのシステムがダウンした際、技術担当はその教えに従い、三日三晩かけてひたすらトラブルを愛した。するとトラブルも技術担当に愛のお返しをし、サーバー全台を物理的に吹き飛ばした。発見されたときには技術担当は素っ裸でサーバーを抱きしめながら横たわり、パツクリ開いた箱の穴からマザーボードに一物をこすりつけていたという。たしかな技術と仕事への愛情によって、その男は担当部長に昇格した。

そんなこんなでまじめに会社勤めをこなすリュックだったが、じつはべつの目的があった。周囲にだれもいないことを確認すると、バッグからよれの紙束を取り出した。自分たちの脚本だ。退屈大賞の受賞作。キーボードの音量を上げてから、めくってシーンを見る。「リュック、フームに本社する」とあり、やあとかおはようとか、無駄なセリフが延々つづいている。始業前にいちおう脚本どおり実践してみたのだが、あいさつは社員の士気にかかわるのでやめるようにと注意を受けてしまった。なのでいまはひとこともしやべっていない。

退屈で中身のないセリフがつづいたのち、手書きで修正が加えられている箇所差し掛かった。「リュック、倉庫で怪しいものを見つける」とあり、「怪しいもの」に下線が引かれていた。わきに電話番号が書いてあった。

怪しいものを見つけ、連絡してこいということだろうか。リュックは不謹慎だと思いつつもわくわくした。スパイ映画『視力の悪い鷹』のフランス・リードのようだ。リュックはあの目つきを真似しながら、いま一度オフィスを見まわした。いや、連絡したのはアル・コービンだった気がする。 فرانキーは潜入したけどとっ捕まっていた。それともアーネスト・ヴァン・ダー・ラッセルだったか。よく覚えていない。

ヴァラが目の前を横切ったので、リュックは目つきをもとに戻した。パーカーのお礼を言っただけ、ひとも口を利いていない。ヴァラは書類を手にリュックを無視してとおりすぎ、同僚を捕まえて資料を見せながら忙しそうに昼飯の話をしている。

そろそろランチタイムだ。リュックは焦った。ランチを取らないわけにはいかない。昼食抜きは重大な就業規則違反だった。「ランチミーティング」なんて専門用語もあるくらいだ。ランチタイムがはじまる前に、ことを済ませる必要がある。終わってからでは日付が変わってしまう。

リュックは携帯電話と脚本を持ち、キーボードを鳴らしたまま席

を立った。となりにすわる同僚が声をかけてきた。「もうすぐランチだぞ。どこへ行く気だ？」

マニユアルを思い出し、応用を利かせて返答した。「ランチ前にランチに行こうかと思って」

「あんまりまじめぶるなよ」同僚は売上報告用の資料を作成していたが、上司が後ろをとおりがかったのであわててインターネット占いをするふりをした。小声でつけ加える。「それなりにやっつけ。よく思わないやつだっているんだから。『あいつは上司の飼い犬だ』ってな」

上司が席にすわり、腕時計を見ながらそわそわし出した。もうあまり時間がない。

「冗談だよ。二度もランチに行つて点数を稼ごうなんて、思つてないさ」こいつが会社の鼻つまみだということを忘れていた。「倉庫を見たいんだ」

「どうして？」

「あー」リュックは考え、社内で口にするにはふさわしくないセリフを言った。「すべてはお客さまの満足のため」

「言うね」同僚はニヤリとした。「いまのセリフ、社長に聞かせてやりたいな」

「場所はわかる？」

「このビルの地下だ。非常階段からしか入れない。入り口はそこしかないから」

「じゃあどうやって商品を搬入するんだ？」

「はんにゆう？ なんのために？」

リュックは会話を終わらせようとお礼を言い、とおりがま同僚の肩をたたいた。同僚が振り向いて声をかけてきた。「一生懸命やれ。必死でやれ」

「なんだって？」

「ガッツを出せよ。全力でぶつかっていけ」

オフィスのセキュリティドアを開け、廊下に出た。そして社員証

を首からぶらぶらさせ、自分もぶらぶらした。ほかの社員を出し抜くのは簡単だった。気をつけなければいいのだ。ぶらぶらするのは仕事としては申しぶんないので、そもそも出し抜く必要がないのだった。

廊下をつきあたりまで歩き、防火扉を開けて非常階段に出た。一気に薄暗くなり、不気味さが増す。暖房も及ばないので肌寒い。革靴の底を鳴らして小走りに階段を駆け下りた。

踊り場に地下一階の表示が見えた。最後は三段飛ばしで着地し、白い防火扉を眺めた。扉自体はなんの変哲もあって、ドアノブがなかった。

ノックをした。

小さい窓があったので、中をのぞきこんだ。

倉庫はビルの幅いっぱいに広がっているようだった。駐車場のような打ちっぱなしのコンクリートで、太い柱が等間隔に並び、あいだに無骨な鉄製の保管棚がきとうな間隔で設置されていた。「B十一」と印刷された看板がかかっている。棚には家具やら小物が並んでいる。

従業員が、バカでかいショッピングカートを押して棚から棚へ駆けまわっている。

ヘルメットをかぶった口ひげの顔が、小窓にぬっとあらわれた。リュックは舌を喉に落としかけ、ヒィと叫んだ。叫んでから、われながらヘンな声だと思った。

「だれだ」

リュックは小窓に社員証を押しつけた。「開けてもらえます?」

「なにをしに来た?」

「ええと あなたを冷やかに」

口ひげはめんどくさそうに言った。「もうすぐランチだ。明日にしてくれ」

同僚と同じ、ふまじめタイプか。職場ではいつも、なにを言うべきか一瞬考え込んでしまう。面倒なことだ。「お客さまの満足を

言い終える前に、金属音を立ててロックが外れた。フランシスのようにスマートとはいかなかったが、潜入は成功だ。防火扉が開き、中に招き入れられる。それからふたりして棚を見上げながら歩いた。主任っぽい口ひげの男は棚を指差しながら、ふまじめにも真剣に商品管理の仕組みをリュックに説明した。「うちの管理はロケーションフリーなんだ。フリー、つまりてきとうってことさ。最先端のシステムなんだ。すげえだろ。おれから教わったなんて言うなよ」

リュックは目を細めて倉庫を見まわした。いや、潜入したのは相棒のアントン・デリンジャーだったような気がする。フランキーは潜入しようとしたところを柱の陰から飛び出してきた敵に襲われて気絶したんだっただけ。せめてメガネをかければいいのに。

「ランチまであとどのくらい？」

男は腕時計をのぞいた。「十五分つてとこかな」

あまり時間がない。リュックは口ひげの主任に礼を言っただけで別れ、本格的にスパイ活動を開始した。目を細め、スパイらしく腰をかかめてにじった。実際は途中で何度となく見つかったのだが、あまり精を出すな、気楽にやれと声をかけられただけだった。棚のあいだの薄暗いところをにじっていると、従業員が背中を向けてぼんやり立っているのが見えた。リュックはなぜかデジャヴを覚え、めまいがした。気づくと従業員ににじり寄り、羽交い絞めになっていた。

従業員は落ち着き払って、リュックに目を向けた。「なんにも話さなぞ」

リュックは失敗したと顔をしかめたが、もう後には引けない。テレビ化が進んでいるので向こうもその気だ。無意味だと知りつつもスパイを演じてつじつまを合わせることにした。

それほど太くない腕を首に巻きつけ、耳もとで鋭くささやいた。

「おまえの知ってるテレビ番組のことを話せ」

「話すもんか　うつ！」従業員は首を絞められたように苦しげにうめいた。「わかった、話すよ」

「あんたは役者か」

「そうだ」かすれ声で言う。「倉庫で働く低賃金労働者の役でああっ！」

「絞めてないのに苦しむな」

「ここには怪しいものなんてなにもないぞ。 以外は」

気絶した。

不本意な尋問でなにもなくことをつきとめたリュックは、ふたたび腰をかがめてうろちよろした。商品の異常さは面接のときエミルに聞かされていたので、手に取って見るまでもなかった。怪しいものを探せというが、フームの倉庫は怪しいものだらけだった。ふとひらめいた。怪しいものの中にあって怪しいものとは、怪しくないものなのだ。今日は頭が冴えている。リュックは棚を順に眺めていき、怪しくないものを探しにかかった。

倉庫はかなり広い。それに、ランチまで時間がない。従業員たちのそわそわだけで大地震が起きそうなほどだった。切羽詰まってきたのがみ歩きも鋭い目つきもやめ、ふつうに走りまわることにした。

いくつか棚を巡ったあと、リュックは立ち止まった。あの老人が見つきたいものなのだから、テレビの連中にとっては見つけてほしくないものにちがいない。であれば、いちばん目につくところに隠してあるはずだ。

リュックは棚のあいだから出て、倉庫中央の広大なスペースを見た。フォークリフトや木製のパレット、梱包用のビニールがスペースのまさにど真ん中に、ダンボールが山になっていた。札がかかっていて、遠目でもはっきり読み取れる明快な文字で「社外秘」と書いてあった。

リュックは「社外秘」に走って近づき、ダンボールの山を見上げながらぐるりを一周した。どれもよれよれで、梱包もおざなりだった。仕入れたばかりの商品ではなさそうだ。ダンボールのひとつひとつに、マジックでなにかが書かれていた。「マルF。フィンボガ。

七百十四年七月十三日。ケルナーゲル通り二百十三。パターンー」
リュックは箱を下ろし、開けてみた。ごくふつうの黒いビデオテープがぎつしり詰まっていた。ラベルにも、ダンボールと同じ内容が書かれている。

ラベルの内容は人の名前とおそらく生年月日、それから住所だろう。中身は売り物でないことはたしかだ。

人の名前が並んだダンボールを、端から順に眺めた。なにが記録されているんだろう。と考えた瞬間、リュックはこの騒動が起こってからずっとカメラで監視されていたことを思い出した。ふたつの考えが重なり合う。カメラで撮れば、当然録画もするだろう。

「ビデオで録画するかな」

リュックはひとりごとを言った。ともかく、脚本どおり「怪しいもの」をつきとめたようだ。携帯電話を取り出し、脚本に書かれた番号を押した。耳に当てながら、あらためて山のようなダンボール群を見渡した。

「もしもし」老人が出た。電波が悪いのか、声がざらついている。
「だれだ」

「リュックです。『怪しいもの』の件で」

「あったか？ シナリオどおりか？」

「そのつもりですけど。ただ、しゃべるのを忘れたセリフがい
くつかあって」

「なにを見つけた？」老人は興奮している。

「ビデオです。人の名前のラベルつきで」

「いいぞ。再生してみたか？」

倉庫全体にブザーが響き渡り、従業員がいつせいに関の声を上げた。ついに来た。ランチタイムだ。

「つづきは夕方で。ランチに行かないと」

「飯を食ってる場合か」

「重要なことなんですよ、この会社では」

「運び出せそうか？」

「一度にぜんぶは無理です。従業員用の入り口しかないし」

「では、どうやって商品を搬入して」

突然、関の声がやんだ。リュックは周囲を見まわした。人っ子ひとりいない。倉庫は恐ろしいほどに静まり返っている。「消えた」

「なんだって？」

「忽然とランチに行ったんです 従業員全員が」リュックはその場で回転した。「テレビ化すると、ワープもできるようになるのかな」

「そうか、わかったぞ」老人は勢い込んで言った。「ただし、わかっていないかもしれない」

「どっちなんです」

「どこへ消えたかは、知らないほうがいい。世界がいかに創造されたかに関わってくる」

「いかに創造されたんですか？」

「それは 言いかけたが踏みとどまった。知らないほうが身のためだ」

リュックはかぶりを振った。「こっちへ来て手伝ってくださいよ」

「いや、ダメだ。やる必要がある。きみもやるべきことをやれ」

「なにをやればいいんです」

「よく聞け。そのビデオには、ラベルに書かれた人物の人生が記録されている。もちろん、ミーカと手下が撮影したものだ」

「それで？」

「連中は撮影した部分を当人の人生からそっくり抜き取り、代わりにおもしろおかしいテレビ番組を人生そのものにダビングしたのだ。いままさに現実世界で再生されているのが、それなのだ」

「それで？」

「当人の前で再生しろ。そうすればテレビ化を食い止め、もとの現実世界に戻すことができる。そいつは失われた人生のビデオテープなのだ」

「それで」リュックはイラついて言い直した。「どうしてそれ

を先に言わないんです」

「わたしもテレビの人間だからな」

「テープを再生するには？」

「ビデオデッキを探せ」

それだけ言つと、ぷつりと電話が切れた。

倉庫ならば、ビデオデッキくらいはあるはずだ。リュックはフィンボガという女性のテープを手に取り、海苔巻きのように脚本を巻きつけた。事務所を見つけ、中に入る。中はゴミだらけ、廃品だらけ、裸のCDだらけだった。

すすけた銀色のビデオデッキがラックに積んであった。息を吹きかけるとほこりが舞い散らり、リュックは何度もくしゃみをするはめになった。くしゃみをするともたほこりが舞い散らかり、くしゃみのうえにくしゃみを重ねてわけのわからない状態になった。鼻と口を押さえ、なんとか落ち着かせる。

呼吸をとめたまま、すきまに頭を差し入れて裏側をのぞく。線をとどつていくと、ラックのうえのテレビとすっかりつながっていた。後頭部をラックにこすらせながら頭を引き抜き、ビデオの電源を入れた。テープを挿入しようとし、ふと手をとめた。デッキの入り口とテープの幅が合わない。テープをまじまじと見て、あつと声を上げた。

人生のビデオテープはベータマックスだった。

リュックは急に怖気が立った。急いで脚本を開いた。例の手書きの箇所からさらに進むと、「リュック、みな失われた人生を取り戻す」と、漠然とした状況説明が書かれていた。手抜きだ。それとも、執筆者（老人）も方法がわからないのだろうか。

失われた人生。リュックは苦い確信を得た。ベータマックスのビデオデッキを見つけてテープを再生することで、テレビ化する以前の失われた人生を取り戻すことができるのだ。しかし、どうやってデッキを探せばいいのだろうか。ベータマックスはこの世に存在し

ないのだ。ここところが確信の主な苦い部分だった。

リュックは事務所を飛び出し、ダンボールの山に戻った。それから「E」のダンボール群のマジック書きをかたっぱしからチェックし、ついにエレノアのビデオテープが入った箱を見つけた。かなりの数で、とても持ち帰れそうにない。

つづけて「L」の塊から自分の箱を見つける。エレノアほどではないが、それでもかなりの箱数だった。

鍵は見つかったが、鍵穴がない。脚本も手抜きだ。リュックは自分のダンボールに腰掛け、携帯を取り出した。老人に電話をしようと番号を押していると、目の前にだれかが立った。

リュックは顔を上げた。

「すみません。注文の品を届けに来たんですが」

白い帽子に白いうわっぱりの男で、学校食堂の調理師に見えなくもない。

「注文？　ばくが？」

「ええ。寿司を二百人前と」となり山積みになっている紙箱に目をやった。伝票を確認する。「お客さんの名前はリュック」

「ぼくです。　　だけど、注文してませんよ」

「おかしいな。たしかに電話してきたのは小さい女の子だったけど

」

リュックは納得がいった。スネジャナが注文したのだろう。寿司とは渋いチョイスだ。

「それより、どこから入ってきたんです？」

「どこからって、あっち側から」

配達人は答えた。あっちと言いながらどこも指差さない。リュックは防火扉を指した。

「入り口はノブがないんですよ。入れないはずじゃ」

「ああ、そういうことか。　　入り口と言っても、トランポリンのほうですよ」

「はい？」

「注文しておきながら、どうして家にいないんですか？」配達人はちよつと怒っていた。「届けようがないでしょ、そんなんじゃ。イタズラなんですか？」

「ふつう、家に届けるべきなんじゃないかな」

「ふつうは注文者に届けるべきなんです」と言い切った。

このまま言い合いをしていてもしかたがないので、リュックはよくわからないまま謝った。そして住所を教えるから、そっちに配達し直してくれないかとお願いした。

「そのためには、まずあなたが帰らないと。いまから帰りますか？」

「ぼくがいなくても届けられるだろ」

リュックは声を荒げそうになるのを押さえた。仕事のストレスで気が立っているのだと詫び、疑問についてたずねた。

「トランポリンから来たって言ってたけど」

「ええ。こつちです」

配達人についていく。壁際の一角に、おしやれな黄緑色のトランポリンがいくつも並んで置いてあった。家庭用で、幅は人の身長くらいだった。

「ええと　こいつだったかな？」

トランポリンを選び、飛び跳ね面を手のひらでバンバン叩いた。すると急に飛び跳ね面が消え、代わりに赤や青や黄色の目くるめくカラーパターンがあらわれた。テレビ放送終了後のピーという音も聞こえてきた。

自宅にあったコートハンガーと同じ、ワープ空間だ。

「どこから来たのか、聞いてもかまいませんか？」リュックは丁寧にかがった。

「あっち側です」

「具体的に言っと？」

「テレビ界です」

「それはつまり？」

「これは、テレビ界と現実をつなぐ空間なんです」

「具体的には？」

「あなたはわたしに具体的になつてほしいのですか」配達人は体のパーツの欠点を指摘されたみたいにむつとした。「わたしは寿司屋の配達人です。それ以上でも以下でもない。どうしても名前やルックスの特徴が必要だとおっしゃるなら、わたしじゃなく脚本家に文句を言うべきでしょう」

「ぼくも脇役なんですよ。だから、あなたの気持ちはよくわかります」リュックは半分本気で言った。「どうやってテレビ界へ行けるのかな。その方法を教えてもらえませんか？」

丁寧な物言いに、配達人は眉間のしわを解いた。「キャラクターの設定を思い浮かべるんです。名前、容姿、生年月日、結婚の有無、性格的特徴など。それからトランプリンに飛び込むですよ」

「テレビのキャラクター？」

「もちろん。お知り合いはいますか？」

質問をつづけるうちに、なにをすべきかがじよじよに明確になつていった。もちろん、テレビ界にお知り合いはいる。正確に言うとエレノアにはテレビ界のお知り合いがたくさんいる。そしてテレビ界なら、ベータマックスのビデオデッキが見つかるはずだ。

自分がワープしたときにフームへたどり着いたのはなぜだろう。リュックは考えたが、腹も減ってきたのであとにすることにした。でも、ランチを取っている暇はない。家へ帰らなければ。

「すぐに帰るので、寿司を持っていったん戻ってもらえますか？」

「そついうのは迷惑なんですよね」

「一時間したら、ぼくのところに来てください。必ず家にいますから」

名なしの配達人はまだ二言三言文句を言いたそうだったが、しぶしぶ寿司を持ってトランプリンの中に消えた。消えると同時に、あきたりなトランプリンに戻る。

リュックはあらためて脚本を見直した。すると「リュック、失わ

れた人生を取り戻す」の説明に、いつのまにか手書きで修正が加えられていた。「リュック、エレノアとともにテレビ界へ向かい、失われた人生を取り戻す」

おそるおそる飛び跳ね面を叩いた。期待を裏切ることなくカラーパターンとピー音があらわれた。酔っ払っていれば勢いで飛び込むところだが、しらふではとてもそんな気になれない。それにいまは、昔の自分とはちがっていた。まずしらふだし、仕事もしているし、子供もできたし、副業でスパイもやっている。つまり社会的に責任のある大人になったのだ。大人は理由なくトランポリンで飛び跳ねたりしない。それに、使命めいたものまで抱えている。まさに現実世界全体の命運を握っているのだ。これで脇役とはどういうことだ。棚に並んでいるマグカップを取った。自分の代わりにこいつを放り込んでやろうと思っていた。ミーカの脳天を直撃するさまを思い浮かべながら、投げ入れた。マグカップは跳ね返ることもなく、カラーパターンの中に消えた。次はジョン。それから円卓の脚本家ども。

夢中でマグを投げ入れていたので、エレノアのことが頭に浮かんだときにはもう遅かった。「ごめん！」聞こえるかどうか知らないが、とにかく穴に向かって謝った。

細い手がぬつとあらわれ、リュックの襟首をつかんだ。女性の手だ。ものすごい力でカラーパターンの中にひっぱられる。トランポリンのへりをつかんで抵抗したが、じりじりと押し切られる。

リュックはトランポリンの足を力二ばさみし、急いで携帯電話を取り出した。老人ヘリダイヤルし、留守番電話のメッセージを聞いた。そしてついに引きずり込まれた。

21話 母親

家に帰ったらとにかく話し合おうとエレノアは心に決めていた。どうすればいいかは、ちゃんとわかっている。母親の経験はないが、『31』なら一話につき最低二十回は見ているのだ。リンも子供たちといろんなことですれちがい、毎週のようにギクシャクしていたが、残り五分くらいのところでうまいこと解決させていた。いまが残り五分の場面だ。エレノアはやるべきことを頭の中で何度も確認した。まずはスネジャナとふたりきりになって、素直に謝り、今後は二度とランチのお金を忘れないと誓う。いい母親になると約束し、そのためにたまに協力してくれとお願いする。罵声を浴びせられ、非難されても、大きな心で受け止めよう。そして仲直りしたら、思い切り抱きしめてあげるのだ。そのあとは考えていない。アドリブでなんとかなるだろう。

結論から言うと、なんとかならなかった。ちっともなんとかならなかった。計画どおり進んだのは、家についてコートにハンガーをかけたことと、「あのね」と言ったことだけだった。まず「あのね」から入ろうと決めていたのだ。

中に入るなりスネジャナはくるりと振り返り、エレノアの腕をパンチした。エレノアは「痛い」と言った。そんなセリフは計画になり。スネジャナは食いしばった歯のすきまから荒い息を漏らしながら、もう何発か殴ったり蹴ったりした。そのあと金切り声でエレノアを責めはじめた。

なにを叫んでいるのか聞き取れない。バカとか死ねとか大嫌いとか、わかったのはかろうじてその程度だった。噛みつかんばかりの勢いだっただが、やらかしたことを考えるとほんとうに噛みつかれるかもしれない。エレノアはあとじさった。スネジャナは肩をいからせながら詰め寄った。せめて謝ろうと思ったのだが、それすらできなかった。

キッチンへつづくドアに追い詰められた。背中にドアをぶつけ、そのままキッチンに後退する。

「なにもしなかった！ なにもしなかったじゃん！ ずっと！」
スネジャナは手近のシリアルの箱を投げつけた。「あんたなんかいない！ 家から出てけ！ ここはみんなの家なんだよ！ あんたはいちやいけないんだ！」

「ごめんなさい」

「うるさい！」

エレノアの背後で窓ガラスが割れる音がした。驚いて振り返ると、ガラスの破片に混じって飲みづらそうな形のマグカップが床に転がっていた。そんな演出などしなくてもいいのに。

「話を聞いて、ね」急いでつづける。「これからは、わたし」
「いない！ あんた終わってるもん。これからは自分で面倒見る！」

長い髪を振り乱しながら、ほかに投げるものを探す。だがキッチンにはほとんどなにもなかった。洗剤すら置いていない。スネジャナは喉の奥でうなった。

エレノアはマグカップを拾った。奪われたら厄介な目に合いそうだったからだ。それを見るやスネジャナはさらに大きな声で叫んだ。
「もうおかあさんなんていない！ リュックとふたりで暮らしていくんだ！ 片親なんて珍しくないもん！」

ここにきて、エレノアはいよいよ制御が利かなくなってきた。自分がみつつかよつちに分裂して、ひとつしかない体をひっぱり合った。『自分勝手なエレノア』が架空の袖をひっぱって耳打ちする。

「わたしたち、この子の親でもなんでもないじゃない。スネジャナなんてほっぴり出して、もとの生活を取り戻そうよ」すると反対側から『慈悲深いエレノア』が言った。「子供を見捨てるなんて、最低の人間よ」ふたつの人格を静かに押しのけ、『軽重バランスの取れたエレノア』が進み出て言った。

「まあまあ、落ち着いて」

もつといい意見を持った人格があらわれないかと待ってみたが、ろくな人格がなかったのであきらめた。怒りのエレノアはうなるだけだったし、悲しみのエレノアは涙を流すだけだった。犬の犬格が狂ったようにわんわんと吠えたので、エレノアは気味が悪くなつてこれ以上内面を探るのをやめ、背中を向けて逃げ出した。キッチン階段を駆け上がって、足をもつれさせながらリンの部屋に飛び込んだ。飛び込んだはいいがなにをすべきかわからず、腕を抱きながらじゅうたんの上を歩きまわった。歩きまわるのにも疲れ、いつものようにベッドへ倒れこもうと思ったが、なぜかそんな気になれなかった。

申し訳程度の本が置いてある机が目に留まった。エレノアは歩きまわるのをやめ、こめかみを押さえた。ぎゃあぎゃあ怒鳴るスネジヤナの声がここまで聞こえてくる。エレノアは耳をふさぎたくなつた。

イスをひいてそつと腰掛けた。ここへ来てから一度も使ったことがない。番組を見るかぎり、リンもほとんど同じだった。机の表面にうつすらとほこりが浮いている。

ほこりを払って、本に顔を近づけた。育児関係の本、地図、販売関係の資格取得の本などの背表紙が並んでいる。育児本のタイトルは『なるべくがんばらない子育て』だった。リンはたしかに、がんばっていなかった。だけど子供はふたりともいい子で、少なくとも喉がちぎれそうな叫び声を上げたりしない。

本を取ろうと手を伸ばしたが、やめた。あれはテレビで、現実とはちがうのだ。うまくいつているのは、そういうキャラクターの設定だからだ。

スネジヤナもドラマ用に演出されているのかもしれない。エレノアを困らせ、ミーカをおもしろがらせるために。だがいまは、キャラクターがどうの演出がどうのと考えたくはなかった。食事を与えなかったのは自分自身の「演出」だったからだ。

ドアが静かに開いた。目の端に、例のカメラマンがこっそり入っ

てくるのが見えた。リュックは近づかれるたびにパンツの中身をちらつかせていたが、いまのエレノアには追いつく気力もなかった。エレノアは振り向いた。カメラマンは近づき、レンズをまん前につきつける。カメラマンと同じ表情のない顔がうつすらと反射して見えた。好きに撮ればいい。そしてみんなでそれを見て、あれやこれや言いながら楽しめばいい。

カメラマンはしばらくドアップ映像を撮っていたが、ふとカメラを下ろした。ズボンのポケットを探り、なにかを差し出した。ポケットティッシュだった。

エレノアは手の甲で顔をぬぐい、泣いていることに気づいた。カメラマンを見上げる。カメラマンは固い表情のまま、受け取るようにうながした。エレノアは受け取った。そして鼻をかんだ。

話しかけようとしたが、思いとどまった。いっしょに学校を探しまわった仲とはいえ、ミーカの手下に打ち明け話をする気にはなれなかった。ただうなずいて、ありがとうを伝えた。

すると今度は、まるめた雑誌を差し出してきた。

今週号のテレビガイドだ。エレノアはぱらぱらとめくりながら、なんのために渡したのかと不思議に思った。それからふいに笑いが込み上げた。やることがないならテレビでも見ろということなのだろう。

「どうもありがとう」

エレノアはハッキリとした口調でお礼を言い、あらためてガイドに目をとおした。表紙にはふつつのおじさんがなんともいえない表情を浮かべて映っていた。目次を見たが、エレノアでさえ見たいと思える番組がなかった。「それなりに注目！ 春のドラマ紹介」に目をとおし、巻頭特集「徹底解剖！ 『会社勤め』」をそれなりに読んだ。一週間の番組表を見る。『R.I.V』は『数学』とか『大陸史』などの番組名が高校の時間割みたいに並んでいた。ケーブルテレビ『家族チャンネル』の欄は、番組表というより祝電一覧だった。ぜんぶがぜんぶ、その調子だった。テレビ界もここまできたか。

『鬱TV』よりはマシだと思い、『家族チャンネル』を見ようとテレビをつけた。ちょうど『アンダーウッド家』がはじまるころだ。ベッドにすわり、枕を抱いてテレビをのぞきこむ。知らずにため息が漏れ出た。スネジヤナの声が聞こえてくる。テレビの音量を上げた。

テレビに集中する。『アンダーウッド家』は予想どおりの内容で、ただひたすら家族の生活を流しつづけた。番組表によると、三時間もつづくらしい。若い夫婦と小さい娘の三人家族で、わが家と同じだ、とエレノアは思った。冗談ぽい。奥さんはどこかで見たような気がしたが、思い出せなかった。

奥さんは朝いちばんに起き、朝食の準備をした。娘や夫におはようと声をかけ、ベークルと卵料理をテーブルに運び、コップに牛乳を注いだ。三人とも会話らしい会話もなく、十分もしないうちに夫、娘と席を立ち、奥さんひとりになった。後片づけをし、食器を洗う。それが終わると今度は洗濯。セリフもなく、テレビ用の気の利いたずっこけもなく、てきぱきと働いている。腕まくりをして白い腕をのぞかせ、小走りに駆けるたびに後ろにまとめた髪がぼんぼんと跳ねる。すっぴんだったが肌がきれいで、女優といってもいいくらいかわいらしかった。テレビだから、すっぴんではないのかもしれない。

他人の家庭をのぞき見しているような気がした。おもしろいかといえど決してそうでもなく、ただ思ったほど退屈しなかったし、奥さんがだれかも気になった。残りの二時間四十分はそれを楽しみにしようと決めた。

昼になると、奥さんはようやく休憩した。コーヒーを入れ、キッチンで読書をした。エレノアは奥さんの顔を三十分も眺めつづけ、ようやく思い出した。イグノラだ。料理バラエティ『ほんとうのころの料理』で、お料理おばさんのヨンナにいびられ毎週のように泣いていたアシスタントだった。ただ、エレノアの知るかぎり結婚はしていなかったはずだし、娘もだいたい大きかったので、ほんとう

の家族ではないんじゃないかと思った。番組のためにつくられた家族だろうか。わが家のように？　やはり冗談ぽい。

イグノラは掃除に取り掛かった。それが終わるとすぐさま出かけ、娘といっしょに買い物袋を抱えて戻ってきた。娘の話を聞きながら、休むことなく夕飯の準備。なにをつくっているのかは、さっぱりわからない。

いつのまにかエレノアは、働き者のイグノラに自分を重ねて没頭していた。

「テレビは役に立つだろ」

急に話しかけられ、どきりとして振り返った。カメラマンだ。すっかりいるのを忘れていた。

「主婦は、こういうことをしてるんだ」

エレノアは答えるべきか迷った。慎重にたずねた。「頼まれたんでしょ、あの監督がだれかに」

「いや」

「今度はなにをたくらんでるの」

カメラマンがしゃべろうとすると、後ろにいたケーブル持ちが腰をかがめたまま顔をのぞかせ、ものすごい速さでしゃべりはじめた。ビデオテープを巻き戻しているような声で、なにを言っているのかまったくわからなかった。

「こいつは早送り気味なんだ。だから社会になじめない」

「そう」

「あんたは、やる気がないんじゃない。やりかたを知らないだけだ」ケーブル持ちの肩に手を置き、つぶけた。「だから、覚えればいい。テレビで」

「助けようとしているの？」

ケーブル持ちがぬつと顔を出し、きゅるつとしゃべった。

「そうだよな。そのとおり」カメラマンがうなずいた。「だれでも、いい親になれるよ。才能なんていらない。練習すればいいだけ」

エレノアはそれを聞き、体の力が抜けた。たまっていた息を吐き出す。気分が少し楽になった。こんなまともなアドバイスは親にももらったことがない。

「まあ、洗濯機のスイッチくらいは押せそうだけど」景気づけに無理やり笑いかけた。「あと、掃除機をひきずって歩いたりとか。奥さんはみんなやるんでしょう？」

カメラマンはわずかに肩をすくめた。

テレビに目を戻す。娘の友達が遊びに来ていた。土曜日は泊まりに行っていていかとせがんでいる。イグノラは夕飯の準備をつづけながら、どんなパーティなのか、だれが来るのか、などを淡々と質問している。怒るわけもなく、てきとうに流すわけでもなく、テレビ向けに娘を抱きしめたりもしない。

なんの料理をつくっているんだろう。エレノアはふと思い、テレビガイドをめくってみた。料理チャンネルがあつたので、さっそく切り替えた。

キッチンを模したスタジオが映る。だれもいない。抑揚のないナレーションがかぶさる。

「今日は、料理などいままで一度もしたことのないぐうたら奥さんでも簡単にできるレシピを紹介します」

「それ、わたしよ」うれしくなってテレビに話しかける。「ぐうたらなの」

「最高の料理は、冷凍食品をレンジでチンすること。トースターも満足に使えない。そんなあなたはきつと、家族や友人からやる気ゼロのダメ主婦の生活無能力者と思われることでしょう。しかし、それはちがいます。あなたは時代を先取りしすぎてしまったただけなのです」

「そうよ！ そうなの」

「時代に合わせましょう。いくつかの簡単な料理を覚えるだけで、あなたは夫に愛され、子供に信頼され、銀行はより多くのお金を貸してくれるようになるでしょう」

「それこそが必要なの！」

「では、準備はいいですか。エレノア」

「わたし？」

「はい、そうです。あなたはエレノア。そしてこれはあなたのための特別番組です。少ない予算を工面してこしらえました」

「ほんと」

「ほんとうですよ、エレノア」

さっきのカメラマンといい、味方されるのは心に沁みるものだ。

「ありがとうございます」

「お礼を言うのはわれわれのほうです。こんな状況においても、あなたはテレビを見つづけてくれる」

「どんな状況？」

ナレーターは口ごもった。「われわれは、テレビ界の生き残りです。テレビ界はどんどん『テレビ現実』化し、取り返しのつかないほど広がっています」

「退屈なのね？」

「そうです。退屈は伝染病のように広がる。おとなりが退屈ならこつちも退屈になるものです」

「こつちもたいへんなの。申し訳ないんだけど、お料理を教えてください？」

「テレビは最高。テレビはおもしろい。テレビは役に立つ」スローガンのように言った。「あなたにお願いがあります。料理や家事を教える代わりに、今後もテレビを見つづけてください。われわれのために」

「わかった。見る」エレノアは請け負った。「どんなにつまらないスポーツ中継でも」

「ありがとうございます。それでは最初の料理。間食大好きなあなたにピッタリ、五分でできるポテチサラダから」

そんなわけで、エレノアは奥さん修行を開始した。翌朝の料理は

大失敗で、サラダは葉っぱがドレッシングの海を泳いでいるようなしろものだった。妻の変貌ぶりについては、リュックはとくになにも言わなかったし、スネジャナはフォークで葉っぱを泳がせて遊んでいるだけだったが、少なくとも笑いは取れた。リンも料理が下手で、とんでもない失敗をするたびにエレノアもげらげら笑ったものだ。いまは笑われる側にいる。リンと同じ。だから、気分はよかった。練習すればいい。

スネジャナにランチのお金を渡すのも忘れなかった。スネジャナはひとことも言わず、むしり取るように受け取った。これも練習すればいい。

料理はべつとして、主婦の仕事はやってみればどれも意外と簡単だった。洗濯も簡単。汚れ物をいっばいになるまでつつこんで、指示どおり洗剤を入れてスイッチを押すだけ。洗濯の恐ろしさは昨夜の番組『全自動ドラム式における無難な洗濯』でさんさん叩き込まれたのだが、これでは拍子抜けだ。

掃除も同じだった。楽チンで安全で、掃除機のホースが首に巻きついて窒息するなんて、めったにないのではと思えるほどだった。一度だけ危うい場面があったが、すんでのところで逃れた。コツをつかめばどうってことない。

暇ができるとテレビを見た。テレビ界の生き残りと約束したとおり、どんなに退屈な番組でも消さずに見た。生き残りはなんとか楽しませようとがんばってはいたのだが、悲しいほどつまらなかった。週末を迎えるころには、単調な家事にウンザリできるまでになっていた。

「このサンドイッチは？」

金曜日の朝、リュックはテーブルに並ぶ料理を見てたずねた。

「ハムキュウ」エレノアはカウンターに立ち、エプロン姿でポテチの袋をゴリゴリつぶしながら答えた。

「ハムキュウ？」

「ハムとキュウリ」一息ついて顔を上げる。「おいしい？」

「とても」一切れ平らげ、トマトジュースを飲んだ。「信じられないな。料理研究家の才能があるのかも」

「どうなんだろう。テレビで教わったとおりによっただけ」

「その髪型もいいよ。ぼんぽんしてる」

「ありがとう」

エレノアはスネジヤナの様子を盗み見た。学校に行く時間になると元気がなくなるのはいつものことだが、今日はよりいっそう落ち込んでいるように見えた。ハムキュウにはいっさい手をつけていない。

「食べないの？」リュックが声をかける。「朝食は大事らしいよ。テレビも言ってる」

「食べたくないなら、無理に食べることはないのよ」

エレノアは罵倒覚悟で話しかけた。スネジヤナは口をぎゅっと結んでかぶりを振った。

「ぼくがもらってもいい？」

スネジヤナはリュックの手をはたいた。

「だって、もったいないだろ？」

「きらいなの」ぼそりと言う。「だれにも食べてほしくない」同情するように観客がため息をついた。エレノアは肩を落とした。やっぱりダメか。今日は朝から一度も目を合わせてくれなかったし、料理をいくつか覚えたくらいで仲直りできるはずがないのだ。リュックが心配そうな視線を送ってきた。

「なら、置いて」エレノアは無理やり笑って言った。「あとで片づけるから」

スネジヤナが顔を上げたので、エレノアはどきつとした。が、いつものガン飛ばしではなかった。ペットを飼っちゃダメと言われた六歳の女の子みたいな顔だった。

「片づけないで」お願いするように弱々しくつぶやいた。

「どうして？」

「食べたくないわけじゃないの。あのね、キ、キュウリがきら

いだけなの」

たどたどしく言い終えると、エレノアに向けて笑う練習をするようにほつぺたを持ち上げてみせた。

エレノアは打ちのめされた。息が詰まり、動悸がし、思わず胸に手を置く。

「ごめんなさい」笑顔がぼろぼろとくずれ、顔を伏せた。

「そう？」なにか言わなくてはと、思いつくかぎりのことを陽気にしゃべった。「謝らなくていいのよ。その好きなサンドイッチがあれば、言ってくれる？ 明日つくるから。サンドイッチじゃない料理だったら、勉強しなきゃいけないけど」

「キュウリとトマトがきらい」スネジャナは恥ずかしげに首をかしげ、困った顔をした。「それからね、ジャムはブルーベリーがきらいなの」

「トマトはピザにも入ってるんだぞ」リュックがツツコミを入れた。「ピザはいいの！」スネジャナは元気よく叫んだ。「今晚もピザにしてー」

円卓のほうからウンザリするような声が上がった。

エレノアはめまいがした。一か月分溜め込んだ感情が一気に押し寄せてきたみたいだった。

チャイムが鳴った。離れがたかったがそうもいかない。奥さんらしくいそいそと、エプロンで手をぬぐいながらリビングに向かった。途中、例のカメラマンがいたので、すれちがいざまこっそりと親指を立てた。

「いいぞ。一気にドラマらしくなってきた」脚本担当Aがぱちんと手を叩いた。

「キュウリぎらいの設定が役に立った」脚本担当Bが得意げに言う。ジョンは立ち上がって、脚本女の背中にまわった。ノートパソコンの画面に脚本エディターが表示されている。

「いま設定したのか」

「そう。サンドイッチのネタがわかってからすぐに」

脚本家チームは乗りに乗っていた。勢い込んでノートパソコンに向かい、キーを叩きながらこれまでのあらすじとエレノアの成長ポイントを交互に挙げていき、今後の展開のアイデアを出し合っている。

ジョンはその様子を黙って見下ろしていた。「その調子でいけ」玄関のチャイムが鳴った。エレノアが奥さんらしくいそいそと玄関に駆け寄る。

「ゲストを呼んだのか？」ジョンがメンバーを見まわして聞いた。

「いいえ。あなたは？」

脚本担当Aはちっこい目を上げて、おれも知らんとかぶりを振った。

「わたしが呼んだのだ」

聞きなれない声がして、ジョンは振り返った。浅黒い肌の老人が、いつのまにか後ろに立っていた。「エレノアにだいじな届け物があつてな」ジョンをじっと見つめる。

「だれだ、あんた」脚本担当Aが割り込んで、牽制した。「観客は白いラインを越えるなと説明したはずだぞ」

老人は悪びれもせず、よっこらしょつと手近な席に腰を下ろした。「なにが白いラインだ。子供みたいなことを言うな」と、スタッフにコーヒーを持ってきてくれと頼んだ。

ジョンは腕を組み、老人を見下ろした。よりによってこんなときに、こんなところで会おうとは。ジョンにとってはこんなときにこんなところで会いたくない人物といえばこの老人をおいてほかにいなかった。「ひさしぶりだな」

「ひさしぶり？」声をひっくり返して答える。「まるで終生のライバルみたいな物言いだな。わたしはそんなつもりはないぞ」

「知り合いですか？」

ジョンは片眉を上げて脚本担当Aに答えた。これでは答えたこと

になっっていないのではないかと思い、もう片方の眉も上げた。どうやら伝わっていないようだったので、結局口に出して言うはめになった。「そうだ」

「知らんのも無理はない。　ああ、ありがとう」スタッフからコピーを受け取る。「若者が往年の映画スターを知らんのと同じ」「スターなんですか？」ヘイミルが口をはさんだ。

「ただのたとえ話だ。このバカ芸人」

ジョンは老人に向き直った。「いろいろと邪魔をしてくれたようだ。隠居のくせに。ケアハウスはそんなに退屈だったのか」

「これからも邪魔するぞ。エレノアから身を引かないかぎりな」コピーをすすする。「わたしは原作者として、このドラマに手を加えるにやってきたんだ」

「原作者だと？」

「ああ、繰り返すな。一度言えばわかる」

「でたらめ言うな。書いたのはぼくらだ」と脚本担当A。

老人は具体的にだれかはわからないが悪意のこもった口真似をした。「『そっちがパクツた』『こっちのほう出版は先だぞ』『こっちは二十年前に思いついた』などなどなど。『訴えてやる』か？その前におまえの作品はどれだけの価値があるのかと言いたい」「なにが言いたいんだ」

「最後はおもしろいほうが勝つ、ということだ。どれだけ後から書こうが、キャラクターがほとんど同じと違っていいくらい似かよっていいようが」

ジョンは老人の言わんとしていることを頭の中でまとめ、ひとことと言った。「パクリに来たのか？」

「このドラマを書いたのはわたしだ」老人は必要以上に大きな声でおつかぶせた。「まだ書き終わっていないのだが、いずれそうなる。

あんたらが先に発表しただけのことだ。悪運が重なっただけで」「パクリに来たんだろ？」

「盗作かどうかは、他人が決めることではない。自分が正しいと信

じていれば、それでいいのだ」

「やれやれ」ジョンは目玉をまわした。それから妙な胸騒ぎを覚えた。生まれてこのかた、やれやれと言って目玉をまわしたことなどなかったからだ。老人のペースに巻き込まれているのではないだろうか。

脚本担当Aが体を乗り出し、老人に指を突きつけた。「いいか。あんたにそんな権限はないぞ」

「それが大いにあるのだ。このジャンパーが見えるか？」

紺色のジャンパーには『ベン&ジェリー』のロゴが印刷されていた。

チーム全員が、互いに目を見合わせた。

「そういうことだ」

「あんた、この前までは『バスキン・ロビンス』だっただろう」

「転職したのだ」有無を言わせない口調で言った。「さっそくだが提案がある」

「なんだ、アイス屋」

老人は答えず、穏やかな表情でセットに目を向けた。ジョンも見る。エレノアが玄関で荷物を受け取り、配達員の指示に従ってサインをしている。

「さぞ、あつと驚く小道具が入っているんだろうな」

「明日はあの子の誕生日だ」

「生年月日はもう設定済みなのよ？」脚本担当Bがイライラを隠そうともせずと言った。

「こっそり通販で買って、驚かそうというわけだな」

「中身はなんだ」

「双眼鏡だ。スネジャナは星を見るのが好きなのだ。屋根に登って」

「そんなバカな」脚本担当Aが噛みついた。「どう考えても、スネジャナが星好きなわけではないだろ」

「最低ね」

「そうか。イヤなら撤退する。どこから制作費を工面するつもりだね？」

脚本チームは（ヘルマンを除いて）不満げな目をジョンに向け、できることなら追い出してほしいと訴えかけてきた。

「言われたとおりにしろ」ジョンが言った。「生年月日もいまなら変更できるだろう。異論は？」

もちろん大ありだろうが、だれも口を開かなかった。

「あんたは？」

エイミルはいつもと変わらない様子でまぶたを痙攣させながらジョンを見た。青い目は完璧に死んでいるように見えたが、ほんの一瞬间老人に向けたまなざしはじつに鋭かった。

「かまわないよ。わたしも星は好きだ」

「これで満足か」自分のイスに腰掛ける。「そういえば、あんたは物書きを目指していたな。ひとつ言わせてもらうと、あんたには才能がない。やめておけ。苦勞するだけだ」

「客観的な評価など信じないぞ」

老人は足もとからかばんをひっぱり出し、大量の紙とペンを取り出してテーブルに広げた。

「さあ、準備は整った。あとは執筆に専念するのみ」

「ぼくも異論はありませんよ」

ヘルマンが老人をつついて言った。

「はじめまして。いいネタがあるんですけど、聞きたくないですか？ 一家そろってクイズ番組に出場させてですね」

22話 撤収！

小包はサラダ油二点セットくらいの大きさだった。エレノアはソファの肘かけにすわり、小包をひっくり返しては眺めた。これが次の展開のきっかけになるものだということは、すぐにわかった。口くなものでないのはたしかだ。耳を当ててみたが、時限爆弾がカチカチ音を立てていたりはしなかった。がさがさと振った。それなりの重さがある。

差出人を確認する。テレビを買ったあのモールからだった。

スネジヤナがバッグを持って、キッチンから駆け込んできた。「それなに？」

「わからない」振り返ると時計が目に入った。「もうすぐバスが来るよ」

「それ、誕生日プレゼントでしょ？」

バッグをソファに放って、エレノアのとなりにすわった。背中に頭をもたせかけ、顔を上げて目を輝かせる。胸がいつぱいになり、三日はなにも食べなくてよさそうなほどだった。バッグがひとりで学校へ行こうとソファからずり落ちた。ごろごろ転がって玄関に向かったが、この調子ではバスに間に合いそうにない。

ぼんやりしていたところをスネジヤナにつつかれ、エレノアはわれにかえた。

「誕生日？」エレノアはピンと来た。「あなたの誕生日のこと？」

「そう！」

「ええと、あなたの誕生日は」カンペを盗み見る。「明日ね」

「頼んでおいたものでしょ？ ずっとほしかったの！ 三ヶ月前からヒントを出しつづけてたじゃない！」

「そうね。ああ、そうだった」

めまぐるしい展開に、エレノアは置いていかれそうになる。次々にめくられるカンペに目をやり、棒読みにならないよう気をつけな

がらつづけた。

「明日までおあずけよ」こんなセリフをしゃべる日が来るとは思わなかった。カンペがめくられる。「双眼鏡?」

スタッフはもう一枚めくって殴り書きし、エレノアに向けた。「せりふじゃない。なかみのこと」

「そうなんだ」

エレノアはひとりごとをつぶやいた。そして真っ先に頭に浮かんだのは、プレゼントをネタにふたたび対立させるつもりなんじゃないかということだった。十二歳の女の子の誕生日に双眼鏡をプレゼントして、無事に済むはずがない。

「教えてくれたっていいじゃん！ 中身は『そう』からはじまるもの?」

ほんとうにそうらしい。

バスのクラクションが聞こえた。「そうよ」エレノアは立ち上がって、バッグを拾った。「次のキーワードは、学校から戻ってきたら教えてあげる。最後のは、土曜の朝の枕もとでね」

スネジャナは興奮してほっぺたを赤くしていた。いつもこんな気の利いたセリフがしゃべればいいのにとエレノアは思った。

リュックとふたりで出かけるのを見送り、エレノアはふたたび小包を手にとった。とりあえず茶色の包装紙をやぶいてみる。中身はきれいにラッピングされていた。いかにもおもちゃ屋っぽい真っ赤な包み紙で、スネジャナが胸をときめかせながらちぎり飛ばすさまが目に見えた。

エレノアはキッチンから果物ナイフを持ってきて、金ぴかのテープを剥がしにかかった。これで中身が「そうめん」だったらお慰みだ。セロハンテープを爪でひっかいてはつまみを繰り返し、やがて白い箱がのぞいた。包装紙の片側が開けたので、慎重に箱を取り出した。大きさは、やっぱりサラダ油二点セットくらいだった。頼むから驚かせないでくれと祈りながらふたを開け、中をのぞき込み、やっぱり驚かされた。

「やあ、ひさしぶり。またまた会えたね」

中身は双眼鏡だった。珍しく白い色でおもちゃっぽかったが、持ち上げてみるとずっしり手ごたえがあり、チャチさは微塵もない。

「偶然だっと思ってる？ それはちがうね。こうやって再会できるのは、互いに潜在意識下で求め合っていたからなんだ」

「マリーエ？」

「そのとおり。ぼくはぼくであり、ぼく以外の何者でも」「しゃべりきれずにひと息ついた。「息苦しくて気を失うかと思ったよ！」

「双眼鏡に変身してるの？」

「ぼくがあの子の誕生日プレゼント。ずっといつしよにいるんだ。

いまから楽しみだよ、いつしよに星を見たり、いつしよにベッドに寝たり。最初の週くらいは持つかな」マリーエはため息の効果

音を出した。「それとも、彼氏ができるまでかな。でも、いいんだ。

役に立てるなら、喜んであの子の人生のページになるよ。だって人生そういうものだからね」

双眼鏡としゃべっていてヘンに思われないだろうかと客席を見まわしてみたが、だれも不審がってはいなかった。それに、シットコムにはたまにこういうトチ狂った回があるものなのだ。

「人生ね。わたしも人生を学んでるとこ」

「それはなにより！」

「テレビに変身できる？」

「まだ悪い習慣は断ち切れてないみたい」

「そうじゃないの。おじいさんと話ができるかと思って。リン

にも」驚きだった。しばらくリンのことを忘れていた。「いつまでもこんなこと、つづけていられないでしょ？ 助けてくれるかと

「

「きみのしていることは立派だよ。いい母親だ。宇宙で二番目にすてきなことだよ。一番目はなんだと思う？」

「観客に見られながら、言われたとおりのセリフを言って」眉を寄せて言葉をひねり出す。「それに 勝手に母親役をさせられて。」

『これが娘です。あとはよろしく』って。こんな状況、ふつうじゃないでしょ？ どう思う？」

マリーエはしばらく黙っていた。ぶるぶる震えながらつぶやく。
「ほんとにやめたい？」

エレノアは答えなかった。

「ぼくはおじいさんをお願いされたんだ。箱詰めされて、ここに送られるようにって」

「ほんと？」

「ほんとさ。速達で送られたよ」うれしそうに言う。「自分で送料も払ったんだ」

「すごい偶然ね。それで、おじいさんが助けてくれるの？」

「求めよ、さらば与えられん」大仰な調子で言った。「おじいさんはそう言ってたよ。たぶんだれかのパクリだろうけど。でもそんなことはどうでもいいんだ。偶然が起こるのは、きみが望めばこそさ。それが宇宙の法則なんだ」

「あなたをよこしたのは、なにかの伝言？ それとも」

「夜になったら、屋根の上に登って。星を見ながら話そうよ」

「いま話せないの？」

「計画っていうのは、敵がいなくてここで話すもんだよ！ だよね？」

円卓を見下ろす。ふだんは忙しそうにばたばたしている脚本家が、腕を組んでじつとこちらを見やっている。なぜかおじいさんがいた。机に向かつてせっせと書きものをしている。エレノアは声をかけた。おじいさんは顔を上げた。無言でうなずき、書きものに戻った。思わせぶりなだけでなにもわかりはしない。

エレノアはマリーエを箱に戻し、半分口を開けた包装紙をつぶさないよう慎重につまんで、リンの部屋に持っていった。机に置く。テレビに変形させておじいさんと話をしようと思ったが、やっぱりやめた。洗い物の残りがあるし、洗濯物も溜まっている。エレノアはいそいそとキッチンへ向かった。

おしゃべりな小包が届いた以外、ほかに変わったことはなかった。午後はいつもどおりコーヒーを飲みながらテレビを見て鬱々とした気分になった。子供の誕生日の前日というのは、すばらしいものだ。明日になるのが待ち遠しい。

夕方、スネジャナが妙に晴れやかな顔をして帰ってきた。

電話が鳴った。

「お子さんのことについて、お話が」

校長先生だ。またかとエレノアはため息をつきかけたが、そんなことじゃダメだと自分に言い聞かせた。「わかりました。これから向かいます」

「いえ、いらっしゃらなくてもけっこうです。いらっしゃるところがなくなってしまうので」

「どうのことですか？」

「お子さんが破壊してしまいましたので」

「なにを？」

「なにもかも」

意味がよくわからない。「つまり、校長室をめちゃくちゃにしたということですか」

「めちゃくちゃという表現はてきとうではないかもしれませんが、この様子だと。たとえるなら」苦しうに二、三度うめいた。

「いま、瓦礫の下敷きになりながら電話をかけているんです」

「だいじょうぶなんですか？」

「脚の感覚がなくなってきました。でも、いいんです。校長室だけならかまわないのです。わたしもそれほど登場するわけじゃないし」

「ほかにもなにか、そのめちゃくちゃにしたんですか？」

「教室です。完全破壊ですね、わたしはちらつと見ただけです。もう授業参観には来れませんよ。お気の毒です」

「クラスメイトは」

「避難しました。クラスメイトも、担任も。みんなわが家へ帰るために、バス停でバスを待っているところです。クラスがなければ生徒もいない、担任もいない、というわけでして。そしてこのわたしも」

事切れたのではないかと思い、エレノアは呼びかけた。「もしもし?」

「あの　ひとことよろしいでしょうか」

「なんででしょう」

「きついお仕置きを期待してますよ」苦しそうに咳き込む。「意識が遠のきかけておりますので、これで失礼して」

電話が切れた。

エレノアは眉をひそめて受話器を見つめた。耳のほうは油でテカテカし、話すほうは穴にほこりが詰まっていた。ほこりとテカテカでエレノアはあることをひらめいたはずもなく、それならなぜ受話器を見つめているのかというと、たんにカンペで指示されたからだった。

円卓のほうを見やった。受話器を指差しながら呼びかける。「どういうこと?」

何人かがエレノアを見上げたが、ひとりも反応しなかった。

「あなたたちの脚本でしょ?」

やはり無視された。

エレノアはスネジャナを探した。子供部屋に行くと、スネジャナはやはり晴れやかな顔で、カーティーン側のベッドに足を伸ばしてすわっていた。カメラマンに事情を説明し、退出してもらったところすっかり気が合っていて、暇な時間にはいっしょにテレビを見ることもあったし、相棒のケーブル持ちのしゃべりも聞き取れるようになっていた。

スネジャナは雑誌から顔を上げ、にっこりした。まるで別人だった。エレノアは胸がざわついた。

「学校から電話があったの」

「うん」スネジャナは二回まばたきした。「あたしのことでしょ」
エレノアは迷ってなんかないというふりをしながら、必死で言葉を探した。しかしいくら言葉を探しても、言うべきことはひとつしかなかった。

「今日、校長室を破壊したの？」

「うん」

「教室も？」

「うん」

スネジャナはうんしか言わない。そしてにつこりする。エレノアは本気で心配になってきた。ベッドのわきにしゃがんで、相手の顔をのぞきこむ。

「具合が悪いの？」

「ううん」

「どうして破壊したのか、教えてくれる？」

スネジャナは答えず、またしてもにつこりした。とおりにっぺんの笑顔。こんなものを向けられてもぜんぜんうれしくない。エレノアはマツトレスのへりを握った。

「教えて」やや強い口調で言う。

すると二回まばたきして、につこりして、言った。

「助けてあげたの」草原でお花でも摘んでいそくなやわらかい声で言った。「みんな困ってたから」

「クラスメイトのこと？」

「先生もね」

「みんなにケガは」

「無事よ。わが家に帰っていった」

わずかに上を向き、夢見るような表情を浮かべた。それから目の焦点を合わせてエレノアを見た。

「あなたもそろそろ帰る？」

口調は親しげだったが、バスで偶然となりになった相手にするようによそよそしかった。

「帰る？　ここが家でしょ？」動揺を隠そうと笑いかけた。それから、会ってまもないころスネジャナがよく言っていたセリフを思い出した。「みんなの家よ」

「ちがう」静かにかぶりを振る。「ただのセットよ」

まばたきして、次のセリフを待つようにエレノアを見つめた。

エレノアは混乱した。なにをしにきたんだっけ？　そう、お仕置きた。子供が悪いことをしたときには、お仕置きをしなければ。テレビで見た『お仕置き入門』の内容を思い出そうとした。番組では子供がしでかす悪さを五段階にわけ、それぞれに最適なお仕置きの方法を細かく説明していた。教室を破壊したときの謹慎期間が思い出せない。脳みその中でたために手を伸ばす。

「とりあえず、週末は謹慎よ」できるだけきっぱりと言い放った。「リユックが帰ってきたら、期間を決める。それからプレゼントはおあずけ。わかった？」

「うん」

「ごめんなさいは？」

思わず声を荒げる。するとスネジャナはにっこりと笑い、言った。「もう母親役を演じなくてもいいのよ」

雑誌に目を落とす。

しばらくのあいだ、呼吸がとまってしまった。苦勞してつばを飲み込んだ。しゃがんだまま二、三步あとじさって、立ち上がった。目の前が暗くなってきた。いったいどうしたというのだろう。脳みその反対側から声が聞こえる。いや、スネジャナの言うことは正しい。どういうわけか知らないが、正気に戻ったのだ。もうお互い赤の他人で、演技をつづけなくてもいいということ？　おじいさんが開放してくれたのだろうか？

エレノアはおぼつかない足もとで部屋を出て、自室に戻った。机にある白い箱に手を伸ばし、イスの背もたれに膝をぶつけた。

マリーエを取り出し、かくかく揺さぶった。「起きて」

「起きてるよ。返事しなかっただけ」

「携帯電話に変わって。おじいさんと話がしたいの」

「その顔、えらく人相が」「マリーエは途中で黙り込んだ。それ以上はなにも言わず、身もだえするようにパーツを入れたり出した。りし、電話に変形した。

耳に当てる。留守番電話の自動音声に切り替わった。アドレス帳からメールアドレスをひっぱり出し、両の親指をせわしく動かした。

「年寄りにはメールができないんだよ」マリーエが忠告した。

「読むだけならできるでしょ」

送信するとすぐに携帯電話が震えた。「着信したよ」とマリーエが言った。

「最終回だ」

言葉足らずでよくわからない。エレノアはイライラしながら返信した。「最終回になるの？ 最終回にするの？」

「するの」改行。「現実を取り戻す最後のチャンス」

「その方法は？」

「メールは面倒。電話する。屋根に登って。星を見ながら」

どいつもこいつも星を見ようと言い出す。なにかの暗号だろうか？ だとしたら大失敗だ。

「スネジャナの様子がおかしい。なにか知ってる？」

「わたしが変えさせた。設定を」改行。「いい子になっただろ」

「着信したよ」とマリーエがふたたび言った。

「だれから？」

「アドレスにはないね。迷惑メールかな」

メールを開く。たしかにおじいさんからはなかった。

「じいさんは拘束した。最終回になどさせるか。ジョンより」

玄関の呼び鈴が、えらい勢いで連打された。エレノアは階段を下りて玄関を開けた。

「郵便です」

と言って、配達人はいったん奥にひっこんだ。山盛りの封筒が入った籠を抱えて戻ってきて、玄関マットの上にどさっと置いた。

「それでは」

「ちよつと待つて。うちのはどれなの？」

「ぜんぶです」配達人は言った。「それでは」

電話が鳴った。エレノアは籠を持ち上げようとしたが重すぎて持てず、足拭きマットごとひきずって中へ入れた。玄関を閉めて電話に出る。

「おたく、エレノア？」

返事をしたとたん、電話の相手はまくし立てた。

「おめでとうございます！ わたし、テレビ局の者です。応募ありがとうございます。それで」

「応募？」

「出場が決定いたしました！」

「出場？」

「クイズ番組『幸せ家族／絶望家族』に、一家そろって」

「クイズ番組？」エレノアはまたしてもおうむ返した。「応募してない」

「そうですか？ ならきつとお子さんが応募したんでしょう」

「子供がいるってどうしてわかるの」

「知ってますよ、なんでもね。テレビの人間ですから」

「あなたの声、聞いたことあるんだけど」

「気のせいですよ！ よくある声なんです」ヘルマンが言った。「

出場について」

急に電話が切れた。

舞台の外が騒がしくなった。円卓のほうを見ると、携帯電話を持ったヘルマンが警備員に取り押さえられていた。どうしてこんなところにいるんだろう。ジョンに向かってなにごとかを怒鳴っている。ジョンは完全無視の体勢で、イスにすわって脚本を見ていた。

ヘルマンはしばらくじたばた抵抗していたが、やがて退場させら

れた。

仲間割れが起きているのだろうか。エレノアは受話器を置いた。置いたとたんにまた鳴り出した。

「あなたはエレノアでしょうか？」

返事をする、相手は事務的につづけた。

「スネジャナちゃんのおかあさん？」

「はい」

「わたし、警察の者ですが、お子さんがやらかした件で」

「ちよつと待って」エレノアはさえぎった。「あなたの名前は？」

警察の者とやは黙りこくった。電話の向こうでかすかにがさがさという音が聞こえる。

「ああ、あった。わたしの名前はニック・ノルティです。デカです。スゴ腕の」

「外国の人？」

「移民の子なんです」

「所属はどこ？」

またがさががはじまった。小声でだれかと話をしている。

「もしもし？」ようやく電話口に戻った。「ちよつと待ってもらえますか？」

エレノアは電話を切った。

と思つたらまたまた鳴り出す。エレノアは天井を向いてうめいた。電話のコードを抜いた。

「そうだ！ それでいいのだ！」

おじいさんの声がした。エレノアは振り向き、舞台の前に進み出た。

「もうなにもするな！ なにが起きても無視するのだ」

円卓の近くでイスにすわり、必死な様子で呼びかける。おじいさんは手を後ろにまわされ、体を縄で縛りつけられていた。近くに巨大な男が仁王立ちしていた。角刈りで上半身裸に迷彩柄のズボンをはいている。

角刈りの男はエレノアに気づくと、目を光らせながら気ちがいじみた笑みを浮かべた。腰に吊るしたナイフを抜き、熱い風呂に浸かったみたいな恍惚とした表情で自分の胸板にナイフの先を当て、斜めに動かした。もちろん傷口から血が出てきた。

ジョンがエレノアに言った。

「この男が次になにをする気なのか、わかるか？」

エレノアはとぼけて答えた。「もう一回、胸に傷をつけるとか」

角刈りはそれを聞いてうれしそうに胸にナイフを当てたが、ジョンに制されてしぶしぶ腕を下ろした。

「おまえの仲間の老人に、ひどいことをしようと思っているんだ。口では言えないようなことをな」

エレノアは引かなかった。「ただの脅しでしょ。ホームコメディだもん。暴力描写は禁止されているはずでしょ」

ジョンは大きな顎を動かして大笑した。テレビ界の人間ならではの笑いかただ。

「それで賢くなったつもりか。こっちはセットの外だ。暴力描写の規制は対象外でね」

ジョンは角刈りにうなずいた。角刈りはうなずき返した。とくになにもしないので、ジョンはもう一度うなずいた。角刈りはもう一度うなずき返した。ジョンは仰向いた。「拷問をはじめるという意味だ」ようやく理解した角刈りが、おじいさんの前に立ちはだかった。分厚い手のひらを上げ、おじいさんの顔を平手打ちした。

おじいさんは毅然と正面に向き直り、大男をにらみつけた。はやくも口から血が流れている。ジョンをにらみつけ、怒鳴りつける。

「スポンサーにこんな真似をして、ただで済むと」
もう一発殴られた。今度は鼻血が出てきた。

「おまえとじいさんとで、番組を終わらせるつもりだったんだろ？
そうはいくか」

血が出るのがはやすぎるような気がしたが、殴られるのを黙って見ているわけにはいかなかった。「やめて。なにが望みな」

「簡単なことだ。これまでどおり、番組をつづける」

「いつまでこんなことを」

「さあな。ミーカが飽きるまでだ。メールが来てるぞ。おれの雇い主はそこそこ満足しているようだ。だが、まだまだだな。なにせはじまったばかりだし、印象的なシーンもつくれていない」

背後でスリッパがばたばたという音が聞こえた。エレノアは振り返った。スネジャナが肩をいからせ、大またで階段を駆け下りてくる。「このバカ！」

円卓に向かって怒鳴った。そのままダイビングしそうな勢いだっただが、セットの切れ目で急ブレーキをかけた。

「もうほつといて！ あんたたちなんかきらい！」

「いいぞ。もとに戻ったようだ」

ジョンが言い、尻の大きい女の耳もとでなにごとかさやいた。女はうなずき、キーボードをかちやかちや叩きはじめた。

すると、家の外からばよーんというアニメ的な効果音が聞こえてきた。玄関が騒がしくなった。だれかが必要以上に大きな声で話をしている。酔っ払いかなにかのようだ。

玄関の呼び鈴が鳴った。

「出ないのか？」とジョンがたずねる。

「出ない」

エレノアは女のノートパソコンをじつと見た。ああやって脚本や登場人物を操作しているのか。そしてたぶん、スネジャナの感情もボタンひとつでいい子にしたり、暴れさせたりしているのだ。

おじいさんがなにか言いかけた。角刈りがみたび殴りつける。血を流せるところがなくなっただので、動かなくなった。

「さあ、出るんだ」ジョンが低い声で威嚇するように言った。

キツチンの扉が開いて、カメラマンが姿をのぞかせた。肩で扉を押しやってリビングへ踏み入れ、エレノアにレンズを向けた。ほかのカメラに目をやって、映らないように力二歩きで移動する。

エレノアはピンと来た。

「こつち来て！」

「カメラに話しかけるな」ジョンが言った。「『こちらブルームーン探偵社』じゃないんだぞ」

エレノアは無視した。「いいから来て！」

カメラマンはケール持ちと顔を見合わせた。するとスネジャナがだつと駆け出して、カメラマンのすねに蹴りを入れた。大げさに痛がってぴよんぴよん飛び跳ね、観客はメタ的展開に首をひねりながらも笑っていた。スネジャナは後ろにまわりこみ、ふくらはぎを蹴り、背中を押した。カメラマンはしぶしぶといった様子でエレノアに近づく。

「ありがとう」

「どういたしまして！」エレノアを見上げ、息を弾ませた。「プレゼントくれるなら、なんでもやっちゃう！」

エレノアはカメラマンを捕まえ、円卓を指差した。「おじいさんを撮って！」

カメラマンは困ったように眉をひそめた。

「お願い。カメラを向けられれば、暴力はできなくなるから」

「いうことをきいたらクビにするぞ」ジョンがすごんだ。「わが家に送り返してやる」

「一度助けてくれたでしょ？ 家事ができないわたしに、テレビガイドを渡してくれて」どんなセリフが感情に訴え、どの順番で言えばより効果的かを考えた。だがカンペで示してくれるような気の利いたセリフは思い浮かばなかった。「あなたはとってもいい人よ。ケール持ちも。この前の晩、将来の夢について語ってくれたじゃない、映画監督になるって夢。わたしたち、友達になったと思ってた。友達だから話してくれたんでしょ？ わたし、友達ってよくわからないんだけど、きつと」

「とも だち」

カメラマンはフランケンシュタインみたいなセリフを言った。それからゆっくりとカメラを振り返らせ、円卓のほうにレンズを向け

た。

「殴るなよ」ジョンは角刈りの男に言い、カメラマンをにらみつけた。「おれにメタフィクションをやらせる気か？ おまえの将来はもうないだろうな。おまえの人生の可能性はおれがぜんぶつぶしてやる」

「とも だち だいじ」

「すごい展開ね」スネジヤナがぼそりと言った。「こんなのはじめて」

「あなた、だいじょうぶ？」

「なにが？」

「さつきはすごく 落ち込んでたみたいだったから」

「おちこみ？」きょんとする。「なんの話？」

チャイムが連打される。スネジヤナはエレノアの手をつかんだ。

「たぶん、出前の人だよ！ 寿司を頼んだの！」

「寿司？」

玄関にひっぱられる。エレノアの制止も聞かず、スネジヤナは勝手に玄関を開けた。

スーツ姿の人間ロケット弾が飛び込んできた。うつ伏せで着地し、勢いあまって何度か跳ねながら床をすべりつつけ、じゅうたんをひっぺがしつつ核弾頭部分をテーブルの足にぶつけてようやくとまった。

観客が爆笑する中、エレノアは小走りに駆け寄り、不発弾のように動かないリュックの体を反転させた。膝についてのぞきこむ。

リュックが目を開けた。「ただいま！」エレノアに顔を向けるが、焦点が合っていない。

「酔っ払ってるの？」

「どうしてわかった？」

「くさいから」

「そうだ。そうだ。酔っ払ってるぞ。こうしちゃいられない」
リュックは弾かれるように立ち上がって、左右に揺れながら玄関

を指差した。「はやく玄関を閉めて」「と言いつわらないうちに体が横にがくんと傾き、足どうしをケンカさせながら体勢を立て直そうとしてカメラマンにぶつかつた。驚いて振り向くカメラマンに危なっかしい笑みを向け、「カメラだ!」と言った。それから比較的真剣な表情で自分の背中を探り、ベルトにはさんであつた長方形の黒い箱を取り出し、カメラマンにしがみついて箱を顔の前で振つた。「それ、ベータ?」カメラをべたべた触つては眺め、肩を落とした。「なんでもかんでもデジタルだ。アナログの良さはどこにいったんだよ」「突然暴力的にカメラをひったくり、床にたたきつけた。壊れたカメラの前にうずくまって泣き出したが、三秒で立ち上がった。親しげに肩に手をまわす。「ごめん。酔つ払うと昔が懐かしくなるんだ。わかるだろ?」CDよりもレコードのほうが音がいいんだ。きみのせいじゃない。きみが悪いわけじゃないんだ」あたりはしんと静まり返つていた。スネジャナでさえ呆氣にとられていた。

「あいつには氣をつける」ジョンがスタッフに言った。「なにを仕出かすかわからんぞ」

「ここにいたのね、リュック」

玄関口にメガネの女性が立つていた。今度はゲストだ。エレノアはめまいがした。これはスピーディーな展開というべきなのだろうか。完全に狂つてゐる。

「玄関を閉めると言つたのに」

リュックがあとじさつた。メガネの女性はにっこり微笑みながら、モデル歩きでリュックへ向かつた。正面に立ち、細っこい腕をリュックの首に巻きつける。観客はブリーングを浴びせ、スネジャナは番犬のようになつた。

「今夜は楽しかった」

女性の頭越しにエレノアをのぞきこんで言った。「無理やり楽しませられただけなんだ!」

「そう」

「信じてくれ」ヴァラが頭で視界をふさぐ。逆方向に顔を見せて言った。「これ、同僚のヴァラで」

「そう？」

「なんでもないんだ、なんでも！ ただの 飲みニケーション！」

「そう！」

「エレノア！」いつのまにか回復したおじいさんが怒鳴った。「頭の湯気を引っ込めろ！」

知らずに湯気が出ていたらしい。言われたとおり引っ込めた。

「忘れてはいかん。なにも感じるな。なにも演技するな。役者がうまそうにビールを飲むCMがあるだろう？」

エレノアはうなずいた。

「ほんとうは飲むふりをしているだけなのだ！」

まったくアドバイスになっていない。

エレノアは雑音を打ち消そうと、テレビを見るようにリュックを見た。すると観客も、カメラも、スタッフも、リュックに抱きついてる女性も、ほとんど気にならなくなった。

静かに語りかける。

「話ができる？ ふたりだけで」

「いいよ」リュックが言った。女性が抱きつきながら振り向いて、蛇のような笑みをエレノアに向けた。そしてリュックにキスした。

リュックは無理やりひつpegした。「おじいさんの言うとおり、この女性は無視して。なんでも話せるよ 口がふさがってないときは」

「気にしない。あなたをテレビだと思って見てるから」

「それ、最高の褒め言葉だな。ありがとう」

「どういたしまして」

「こっちも話があるんだ。終わりにできるよ！ 現実を取り戻すことが出来るんだ！ ぼくらだけじゃない、みんなの人生を」

「ほんとに？」

「ああ。このテープで　「残りのセリフはヴァラに吸い取られた。逃れようと暴れまわるが、ヴァラはびくともしない。」「こんなの、狂ってるよ」

「わたしも同感」

「いい？　すぐに屋根に登るんだ。裏庭のトランポリンを飛んで」

「なに？」

「トランポリン！　リンとは知り合いだろ？　ベータマックスのビデオデッキを手に入れるんだ！」

「はあ？」

なにを言っているのかさっぱりわからない。ついにリュックは押し倒された。観客のブーイングも激しさを増し、半分以上が立ち上がって親指を下に向けている。ヴァラの体勢はそれほど卑猥ではなく、ただ寝っ転がっているだけですよといつでも言い訳できるよう、番組に気を使っているみたいだった。

「おかあさんがかわいそう！」

だしぬけにスネジャナが泣き出した。それも転んで膝をすりむいた四歳児のような大泣きだった。わつと声を上げて抱きついてくる。エレノアも思わず抱きしめようと手を伸ばすと、急に突き飛ばされた。「あっち行け！　新しいおかあさんと暮らすんだ！」そしてふらふらと離れていき、くるりと振り向くにつこりと笑った。「プレゼント、まだ？」

見ていられない。エレノアは円卓を見やった。でぶっちょの脚本家が頭を抱えながらノートパソコンに向かい、ヒステリックにキーボードを叩いている。「言わんこっちゃない！　スポンサーが口をはさむと、こうなるんだよ！」もうひとりの女性と激しく口論している。「それじゃダメだ！　ぜんぜん感情に訴えかけてこないだろ」

「あれでスネジャナを操作しているのよ！」エレノアはリュックに

呼びかけた。「あのパソコンをなんとかして！」

リュックは顎を上げて円卓のほうを見、うなずいた。ぎりぎりセーフな格好で絡みついてくるヴァラにビンタをかました。驚いている隙に相手を押しのけ、ふらつきながら立ち上がった。なにをやるかと思ったら、円卓に駆け出してセットからダイビングした。腹からテーブルに着地し、書類や食いかけの中華料理のパックや携帯電話を跳ね飛ばした。脚本家は驚いてイスを引き、その場から離れる。しばらく度を失った昆虫みたいにテーブルの上でわさわさやっていたが、パソコンが目に残り、またわさわさやって立ち上がった。モニター部分をいっばいまで開いて、液晶画面にかかとを叩きつけた。めきつという音がし、なぜか火花を散らして爆発した。リュックはひるまず、すべてのパソコンを破壊してまわった。

「なんとかしたぞ！」

両手を上げてバンザイした。後ろでおいさんが怒鳴った。「はやく助けてくれ！」

ヴァラはのろのろと立ち上がり、ゾンビのように体を揺らしていた。なにかやらかしそうだったのでエレノアは身構えたが、急にぱつちりと目を開け、きよろきよろした。「ここはどこ？」

元に戻ったのだ。これでスネジャナも、本来の姿に戻ってくれる。脚本を操作されることもなく、自分たちでシナリオをつくり、セリフを考え、いっしょに暮らすことができるのだ。

エレノアはスネジャナに声をかけた。スネジャナは電池切れでぼうつとしていたが、声をかけられると顔をひきつらせて笑顔のようなものを浮かべた。後遺症かなにかが残っているのだろう。またしてもエレノアは怒りを覚え、そしてこの子のためならなんでもしてあげたいと思った。

「そんなヒマはないぞ」

いつのまにかおじいさんがとなりに立っていた。けわしい表情に鼻血を垂らし、鏡のような瞳で見つめてくる。そしていままででいちばん芝居がかった口調で言った。

「さあ、出発のときだ」

リュックもセットに飛び乗った。床に落ちていたビデオテープを拾う。「すぐに行こう。寿司屋には悪いけど」

「どこに行くの？　なんの話？　スネジャナはどうするの？　置いていけない」

「その子はほつとけ」おじいさんは冷たく言い放った。「ただのキヤラクターだ」

「バカ言わないで。ほつとけない。わたしの子だもん、当然でしょ」
「すっかり演技にのめりこんでいるようだな。母親役を楽しんでいる」

口を開いたが、さえぎられた。

「いいか。あんたは母親ではないし、この子もあんたの子供じゃない。少し考えればわかるだろう。目を覚ませ。そして現実を取り戻すのだ」

「現実ってなんだかわからない」

「十八歳未満ならみんなそう思っているよ。あんたはちょっとテレビを見すぎたせいで人よりごっちゃになっているが、取り戻すのに遅いということはない」

おじいさんが腕をつかむ。振りほどいてスネジャナのもとに走った。そつと肩を抱いてソファに連れていき、端っこにすわらせる。
「ちよつと待っててね」

階段を駆け上がってリンに部屋に向かった。机の上に、箱に入ったマールイエと半分開いた赤い包装紙がそのまま残っていた。そつと包装紙をつまんで箱を差し入れようとしたが、うまくいかない。むき出しの箱を抱えてリビングに戻った。

となりですわって笑いかける。

「プレゼントがあるの」

「なんの？」

「誕生日のプレゼントよ。覚えてない？」

スネジャナは目を閉じてまぶたを震わせた。「　あんまり」

「ほんと明日になってから渡す予定だったんだけど」

「そうなんだ」

「これを」

箱を渡そうとすると、おじいさんが立ちはだかった。世界でいちばんきらいなおじいさんだ。顔も見たくない。「時間がないのだ。いいからこつちへ来い！」

「イヤ！」腕をぶんぶん振りまわす。

「これはあんなだけの問題じゃ」

「待て！ とめるな！」

まるで神さまみたいに、思い切りエコーのかかった声が天井から降りかかってきた。雷の効果音もあとからついてくる。まるでとうか、そのものだった。実在する人間とテレビのキャラクターすべてをひっくり返すめていちばん嫌いな男だ。

「じいさん、手を出すなよ」ミーカーが脅しをかける。「いい場面、最高の場面だ。トイレに立つ暇もない。さあ、つづけてくれ、エレノア。感動的なシーンにしてくれよ。総集編でもう一度見るから」

声と雷の効果音だけにもかかわらず、おじいさんはいうことをきいて引き下がった。エレノアは思わずお礼を言った。「なんのなんの」とミーカーが答える。困ったような顔で見まわすスネジヤナをついて振り向かせ、プレゼントを渡した。

スネジヤナは箱を開けた。「これなに？」

「双眼鏡よ」

「テレビみたいに見える」

「そう、テレビよ。いまはね。でも、双眼鏡になったり携帯電話になったりトースターになったり だけのテレビじゃないの。話しかけると返事もするのよ」

「ほんと？」スネジヤナはマイイエを振って、かわいらしく話しかけた。「もしもし？」

「はいはい！」マイイエは芸人みたいに答えた。「きみがスネジ

ヤナか。はじめまして！　きみの人生これからだよ！　やりたいことはなんだってできる。どんな人生が待っているんだろうね？　わくわくするよ！」

「はじめまして」

エレノアは完全に泣きそうになっていた。これは演技ではなさそうだった。声を震わせてつつける。

「でも、気をつけてね。食事をさせないと、機嫌をそこねて話さなくなるから」

スネジャナは慣れない様子でタッチパネルを操作していた。「あたしと同じなのね」

エレノアは口を押さえた。「そうね。わたしたちと同じかも」

「ここでお別れね」とスネジャナが言う。

「どうして」

「カットがかかるから」

ジョンが叫んだ。「カット！　撤収だ！」

スネジャナは消えた。

23話 最終回

エレノアは半ば引きずられながら屋根裏部屋へ入った。途中までは半ばだったが、キャットウォークのあたりからは完全に引きずられた。エレノアは行きたくないことを示すために、脚をだらりと投げ出したり、手すりの柱を力二ばさんでみたり、スネジャナのようにじたばたしたりした。抵抗するたびに口でも「行きたくない」と付け加えた。大人の口調や子供の口調、脅してみたり哀れんできたり、思いつくかぎりいろんなしゃべりかたを試した。

どれもまったく効果がなかった。

「あんたは扉を閉じるための鍵だ。置いていくわけにはいかん」おじいさんが右のわきを抱えながら言った。

「番組は終わったんだよ」リュックが左のわきを抱えながら言った。

「今度は、みんなの番組を終わらせなきゃ」

「行きたくない！」エレノアはダメ押しで言ったつもりだったが、そもそもはじめから相手にされていないのでダメを押そうにも押せなかった。ネタ切れになったのでエレノアはしょんぼりした。「スネジャナが消えちゃった」

「いつまでこだわっている？ あの子は脚本家の連中がこしらえた架空のキャラクターで、実際には存在しないのだ」

「存在するもん」

「しないんだって」

「仲良くなったのに！」ありったけの声で叫ぶ。「やっと気持ちがつうじたのに。あんなかわいい子、会ったことない。そう思うでしょ？ あんなにっこりされたこともないし、あんなに頼られたことも」

「いまは、ぼくらがきみを頼りにしてるんだよ」リュックが言った。「架空のキャラを愛するのはかまわん。イラストを描いたり、同人誌をこしらえたり 人それぞれだ、好きにすればいい。楽しいこ

とばかりつづきたい気持ちもわかる。だがいまは、現実の問題を解決するのが先だ」

なにが現実だ、とエレノアは思った。思っただけではイライラが収まらなかったのも、やっぱり口に出して言った。「なにが現実よ」セツトは自分たち以外だれもない。ジョンの号令とともにスネジャナは消え、スタッフも撤収した。観客も終わったのだと気づくと、めいめい席を立ててセツトをあとにした。最後に残ったジョンは、がらんとした円卓から見上げ、エレノアに最後のセリフを吐いた。「おれにすべて任せれば、いい人生を送れたのにな」

男ふたりは屋根裏部屋へエレノアをひっぱり上げた。せーのと掛け声をかけて勢いをつけ、エレノアをマットレスに放り投げた。

マットレスの上ではねつかえりながらどうにか体勢を立て直す。髪の毛をかき上げ、あぐらをかいて腰を落ち着ける。にらみつけるのも忘れない。

「それで？」自分でもとげとげしい声だと思ったが、構うことなくつづけた。「現実を救うんでしょ？ わたしはなにをするの？ チアリーダーになって殺人鬼に襲われる？」

おじいさんは冷たい視線を向け、それから窓を指差した。「そこから屋根に登る。トランポリンに飛び乗って、テレビ界に行く。ベータマックスを奪って」

「トランポリン？」

「トランポリンが扉だ。自宅にあったコートハンガーを覚えているだろう」

「どうしてわざわざ屋根から飛ぶの？」

「楽しいからだ」おじいさんは真顔で言った。「スリルがある」

「テレビだから、でしょ？」

「そのとおり」

「楽しいことをする気分じゃない」

リュックが手を差し伸べてきた。エレノアはかぶりを振った。

「ぼくも悲しいよ。そう見えないとしたら、たぶん酔っ払ってるか

らだろうね」

「あなたにわたしの気持ちはわからないよ」

「いや、わかる。きみはよく、好きな番組が最終回になるとガツクリ落ち込んだよね。ぼくはずっと『たかがテレビ番組で』って思ってた。『存在しないキャラクターなのに』ってね。でも、なんとなくその気持ちがあった。いまはね」

鼻をすすって、手を握る。ひっぱられながら立ち上がった。

木枠の窓をきしませながら持ち上げ、ひとりずつ屋根へ這い出た。ななめった足場でまともに立つことができず、エレノアは中腰で手をつきながら、もう一方の手で髪の毛を押さえた。ちよつと風が駆け抜けるだけで転げ落ちそうになる。

「ベータマックスってなに？」エレノアはつま先を見ながら叫んだ。「ビデオデッキ！」リュックが答える。「人生のビデオテープは、ベータでないと再生できないんだ。ベータは現実世界には存在しなくて」

「どこにあるか、見当はついてるの？」

「さあね」

リュックは大工職人のように軽々とバランスを取っている。酔っ払っているからかもしれない。へりの近くまで駆け下り、裏庭をのぞきこむ。エレノアはその様子を見ているだけでくらくらした。

「ここから飛び降りよう」リュックは振り向いて、いたずらっぽい笑顔を見せた。

「ケガでもしたらどうするの」

「そのときはいちばんいい医者を紹介してやる」おじいさんは肩を叩き、しゃがみ歩きで屋根を下った。

しびしびエレノアも追いかける。

風の音に混じって、ピーという音が聞こえてきた。顔をゆがめながらへりからのぞきこむ。中庭の芝生の真ん中へんに、家庭用のトランポリンが見えた。飛び跳ね面があるべきところに、見覚えのあるカラーパターンが揺らめいていた。

男ふたりはエレノアの両側に立ち、腕をつかんで引き起こした。

エレノアは悲鳴を上げた。

「跳ね返ってとなりの芝生に頭からつつこむかも！」

「その調子だ！」突風に顔をなぶられ、おじいさんは目を細めながら声を張り上げた。「コメディ番組だな。テレビ界へ行くための下準備としては申しぶんない」

「好きなキャラクターを思い浮かべて！」

「どうして？」

「そこへ行くため！」

エレノアは自動的にリン・タウンゼンドを思い浮かべた。ほんとうに会うことができるのだろうか？ もしほんとうならば、テレビ越しでなく、実際に触れたり、握手したり、抱きしめたりできる。ずっとそうしたいと思っていた。長年の夢が叶うのだ。

もつとウキウキしていいはずなのに、リンのことを考えれば考えるほど気分が落ち込んだ。

「準備はいいか？」

答える前に、男ふたりが二、三步助走をつけて屋根から飛び出した。エレノアはひっぱられながら悲鳴を上げ、トランポリンへ落下した。

エレノアは地面に着地し、驚いた。これまではミールカに落とされるたびに頭を地面に打ちつけたり首を折りそうになっていたのだが、はじめてまともに着地できたのだ。あたりを見まわすと、さらに驚かされた。

一面白黒だった。エレノアは自分の手を見た。やっぱり白黒だった。

「侵入は成功だ」白黒のおじいさんが言った。頭をさすりながら顔をしかめている。ちょうど落ちたところに大きめの石が置いてあって、しかも上下逆さまに着地したからだった。天罰だ。「テレビ界へようこそ」

「どうして白黒なんです？」リュックがたずねる。

「衰退の証だな」

色のない世界を見まわすのはけっこう難しい。エレノアは一步一歩地面をたしかめるように歩きながらあたりを見まわした。小さな村のご真ん中に出現したようだ。道路は砂利道で舗装されておらず、古びて見えるポーチ付きの家がぽつりぽつりと建っている。道端の雑草が風に揺れ、建物のすきまから丘や谷がうねり、遠すぎてはつきりしないが森のようなものが見えた。遠近感がつかみづらい。

民家から離れたところに、聖堂の三角屋根がそびえていた。それもなんだかチャチくて、コントで使う鉄骨にベニヤ板を貼った大道具みたいだった。なにかの拍子でぶったり倒れてきそうだ。

エレノアは目を細めてひととおり眺めたあと、目をこすった。妙に疲れる。

「頭が冴えてきたような気がする」リュックも目をしばたたかせている。

「白黒映像は脳を刺激するからな」おじいさんが言った。「さあ、行こう。ビデオデッキを探さなければ」

「どうやって探すんですか」

建物の陰から人があらわれた。足をとめてこちらを見ている。村人だろうか。明らかによそ者を監視する目だ。一行はゆっくりと近づいていった。頬がこけたおっちゃん、薄いくしゃくしゃの頭に無精ひげを生やしている。何色かわからないネルシャツの袖をまくり、ほこりまみれのよれよれジーンズをはいていた。

エレノアたちは礼儀正しく用件を伝えようとした。だが不幸なことに、一行の中に礼儀正しい人間はひとりもいなかった。

「現実から来たって？ 昼間から酔っ払ってるのか？」

「酔ってなんかいないぞ」ほんとうは酔っているリュックが言った。村人はひとりひとりに疑わしげな目を向け、たぶんそう答えるだろうというセリフを言った。「よそもん話すことはなにもねえよ」

おじいさんが威厳を見せつけるように言う。「われわれはある重

要な使命を負って」

「あんたはさつきからそれしか言わねえな」

「うちが明かない。だいたい、てきとうに出現した村で都合よく見つかるはずがないのだ。エレノアは話題を変えようと割って入った。」

「リンはどこにいるの？ 会いたいんだけど」

「リンゼイちゃんの知り合いか？」

「親友なの」

村人の表情がわずかに和らいだ。「ついてきな」

まるで用件を伝えられなかった一行だったが、とりあえずリンに会ってみようかと村人の案内に付いていった。道を下って小川を越え、五分もしないうちにたどり着いた。

「ここだよ」

山道沿いの平屋建てで、ほかの民家より大きい。屋根には何色かわからないがペンキのはげた看板がかかっていた。『お食事処リンゼイ』と書いてある。そのまんまだ。

リュックは窓から中をのぞきこんだ。「こんなところにビデオデツキが置いてあるわけないよね」

それを聞いた村人が、険しい表情でリュックに詰め寄る。リュックは窓から離れてあとじさった。

「いいか。ここはよそ者が来るところじゃねえ」ほとんどくつつきそうになるまで顔を近づけ、目をむいて瘦せた顎を動かした。「だれも歓迎しねえし、ビデオの話をするつもりもねえよ。昼飯を食ったらさっさと出ていきな。それがあんたらの身のためだ」

食堂に入ると、ほかの客がいつせいに振り向いた。さっきの村人が言ったとおり、友好的な顔はひとつもなかった。中に進んでテーブルを探すあいだも、無遠慮な視線を送ってくる。エレノアは髪で顔を隠すようにうつむいた。監視カメラよりずっと不愉快だった。

「田舎は好きではない」おじいさんがむつつりと言った。

「なら、つくらなきゃよかったんですよ」

「そうはいかない。田舎が舞台の名作もあるだろう。『かなり待ち

わびて』とか」

テーブルに着いた。リュックとおじいさんは、モノクロの傑作『かなり待ちわびて』のハンサムな郵便局員について話している。エレノアはリンを探そうと顔を上げたが、すぐにやめた。村人は相変わらずこつちを見ながら小声で話し込んだり、食事の手をとめて本格的に見つめていたりしている。「あれ、エレノアじゃない？」とささやく声が聞こえた。

「なんでフィネラは六十年も手紙を待ちつづけたのかな。直接行つて話を聞けば済むことなのに」

「女性の奥ゆかしさというやつだな。だから人気があるのだ」

エレノアは男どもを交互に見て言った。「ねえ、重要な使命はどこにいったの？」

と、いつのまにかエプロン姿の給仕が立っていた。

「どうも。注文は決まった？」

声を聞いて、エレノアは顔を上げた。白黒のリン・タウンゼンドが伝票を持ち、エレノアに笑顔を向けていた。

エレノアはふらふらと立ち上がった。リンが手を差し伸べたので、おそろおそろ握った。やわらかくて華奢で、ひんやりしていた。リンはおひさしぶりと言い、エレノアも言った。白黒だったし、髪もだいぶ伸びていて後ろで束ねているのでちょっと印象がちがって見える。それでは抱き合いましょうかと両手を広げると、リンが手を上げて制した。

そこまでの仲じゃないか。エレノアは肩を落とした。

「ははは。そうじゃないの」リンは笑いながら背中の手をまわし、エプロンを脱いだ。「これ、かなり汚れてるのよ。白黒だとわかりづらいけど」

そして思う存分抱き合った。

つづいてリュックにあいさつする。おじいさんを見ると、にこやかな表情が急に険しくなった。「こんにちは、おじいさん」

「行くぞ」

おじいさんがリュックの肩を叩き、席を立つた。

「来たばかりなのに。食べないんですか？」

「そんな暇はない。それに、ビデオデッキのありかを思いついた」

「思いついた？」リュックは声を裏返した。「思いつきで行動するんですか」

「そう。常にな」

リュックはかぶりを振り、尻をすべらせて立ち上がった。おじいさんはとおりざまリンをちらっと見やり、弁解するように言った。

「連れてくるしか方法がなくて」

「それはそれは」リンは大げさに驚いた顔をして、うなつた。「これ以外に方法はないのだ、絶体絶命のピンチ！　ってわけね」

「ぼくは行くよ。きみはどうする？」リュックは腰をかがめてエレノアをのぞきこんだ。

「あなた、いつしよに行こうって言わないの？」リンがエレノアの代わりにたずねた。「恋人でしょ」

「互いの意見を尊重する仲なんです」

「なるほど」リンは妙な顔をして言った。「年寄りになった気分」

「あんた、白黒だと往年の名女優みたいに見えるな」

リンににらみつけられ、おじいさんは下を向いた。

「なら、はやく行ったら？　探しものなら男ふたりでじゅうぶんでしょ」

「　　そうだな。そうするか」

「わたしはエレノアに話があるから」

エレノアは顔を上げた。「話？　なんの話？」

「奥さまふたりでする話」

「もう行く」

おじいさんは軽くうなずいて背中を向けた。頭をかき、首をひねりながらリュックもつづいた。

「ふたりとも、でっちあげるのよ」リンは眉を上げ、手をひらひら

と振って見送った。「女どもはここで待つてるから」

ほかの客の注文をとおしたあと、リンは厨房のほうに友人が来たから十分だけはずすと声をかけた。でぶっちょの主人はしょうがないというふうにならずき、ストップウォッチを取り出して時間を計りはじめた。

リンはレモネードをふたりぶん運んできて、テーブルに置いた。

「さて」と言い、エレノアの向かいにすわった。「よく来てくれました」と言いたいとこだけど。なにしに来たの?」おなじみの目を細めるしぐさ。「ほんととは許されないのよ」

「わたしもよくわかってないの」エレノアはグラスを手のひらで包み込んで、うつむいた。窓から差し込んだ白い光がグラスに反射した。「ベータのビデオデッキを探しに、って言ってたけど、なんのことだかさっぱり。ここにあるの?」

「わからない。でも、おじいさんなら見つけられるでしょ。コツを知ってるから」

たずねようとすると、リンが先まわりして言った。

「テレビ界で人や物を探すコツは、物事を都合よく考えることなの。勝手な思いつきとか、でっちあげとか。それなりに納得できる理由があれば、なんでもいいの」

「ふうん」

「暗いね。なにかあった? それともスターになったから、わたしにはもう興味がなくなっちゃったとか」

「そんなことない」いつそなにもかもぶちまけてしまおうかと思っただが、迷惑だろうとやめておいた。てきとうに濁して話題を変えた。

「あなたはここでなにをしてるの?」

「働いてるの。お給仕よ。はじめは料理もしてたけど、なぜかやらせてくれなくなっ」

リンは大きな口を開けておどけてみせた。共通のネタに、高校生の女の子みたいに顔を見合わせてくすくす笑った。少し気分がよくなる。

「仕事がなくなっちゃったから、しかたなくね」

「カーティーンとリュックは？」

「別れた。あの番組が終わったから」

「でも、ほんとうの子供なんですよ」

「うんにや。番組がつづいているあいだだけ」目をぱちぱちさせ、平然と言う。「終了すれば、赤の他人」

「現実にはちがうの。自分の子供は、ずっと自分の子供で　あたりまえすぎて説明しづらいけど、そうなの」

「現実ね。いまはだいぶテレビ化してるみたいだけど？」

話を聞くあいだも、スネジヤナのことを考えていた。あれからずつと考えつづけている。脳みそにはつきり焼きついているのは、無邪気な笑顔でも、すねを蹴り上げるときの怒り狂った表情でもなかった。消える瞬間に浮かべた、奇妙な表情だった。あきらめのようにも見えたし、失望しているようにも見えたし、肩の荷が下りてほつとしているようにも見えた。

「テレビ界では、あれがふつうなのね」エレノアはつぶやいた。

リンは身を乗り出した。「わたしもあなたの番組を見てた」

「ほんと？」

「再放送でだけ。おもしろかったと思う。退屈で」

「退屈　ってことは」

「退屈。よかったって意味」リンはまじめくさってうなずいた。「はじめはノリが悪かったけど、あなたが家事を覚えたあたりからどんどんつまらなくなった」

「一生懸命、退屈になろうとしたの。それでね」

「だけどラストは最悪ね。まるでテレビみたいな感動のシーンだったじゃない。ミーカは大喜びよ。現実であんなことしちゃダメ」

「最悪」

言葉を詰まらせた。リンに悪気がないのはわかる。つまり、テレビ番組的にはおもしろかったということなのだ。ファンが選ぶ感動の場面。もう一度見たいあのシーン。エレノアとしては、べつに観

客を泣かせようとして演技をしたわけではなかった。演技ですらなかった。だけどリンやおじいさんは認めようとしなない。現実是最初から最後まで退屈でなければならぬのだ。

主人がストップウォッチをちらつかせた。「あと五分だ」

「レモネード、飲まないの？」リンは場を盛り上げようと、冗談めかして言った。「わたしが用意した小道具よ。ちゃんと使ってくれなきゃ」

エレノアも笑おうとしたが、うまくいかなかった。言われたとおりにグラスを持ち上げ、口をつけた。レモネードは好きじゃない。モヤモヤは晴れなかった。

「スネジャナに会いたい」思わずこぼれる。

「あの子はキャラクター。現実には存在しないの」

「もうウンザリ」気づくと大きな声でおつかぶせていた。気持ちが治まらないので、さっそく小道具を使った。音を立ててグラスを置く。「テレビも、テレビ番組も、キャラクターがどうのこうのももうウンザリよ。わたしはあの子に会いたいだけ！」

布巾で目をぬぐおうとしたが、汚いかもしれないのでやめた。

「テレビはもう見ないってこと？」

「見ない。ロクなことにならないから」

「もう話しかけてくれないんだ」

「そんなだから、ミーカに目をつけられたのよ」落ち着こうと息を吸った。「それで、こんなふうになって。つらい目に合って」

リンが目をそらしたので、口ごもった。と、急に体を乗り出して言った。

「母親役は楽しかった？」

エレノアはうなずいた。

「わたしもそうだった」座席にすわり直す。「ほんとの子供はいないんだけど、番組のあいだはすごく楽しかった。ヘンテコ家族だったけど、充実してたし、ほんとの子供がほしくなった」

「なら、気持ちわかるでしょ？ ずつとつづけたかった」

「わたしね、再婚しようと思ってるの」

「ほんと？」

リンはうなずいた。「そうすれば、ほんとの子供が持てる。あなたもそうしたら？」

「でも」

「お互いに、べつべつの世界で」大きな声ではっきりと言った。「実際に住む世界で。スネジャナは、ちがう世界の子なの。意地悪で言ってるわけじゃない。わかる？」

母親が娘に言うような強い調子だった。エレノアは言わんとしていることを考えてみた。だが、すぐに納得できるものじゃない。視線を避けたかったので返事をした。

「わかった」

「やりたいことがあるなら、やればいいのよ」表情が和んだ。「奥さんになりたいなら、なればいい。すてきな彼氏もいるじゃない。ちやらんぼらんみたいだけどね」

思わず吹き出す。

「テレビもそう。わたしがキャラクターだから言ってるんじゃない。ミーカやあなたの親戚がなんと言おうと、見ると決めたら見るんですよ。好きなんでしょ？」

慎重にうなずく。

「まあ、テレビを見るのはたしかによくは思われなないけどね」

「じゃあ、どうすればいいの？」

「テレビを見るのはいい。だけど」

リンはエレノアの手を握り、言った。

「あなたは少し、度が過ぎているの」

主人がいきなり叫んだ。「食い逃げだ！」ストップウォッチを投げつける。飛んだ先を振り返ると、ちょうど男が入り口のドアを肩でどついて逃げるところだった。「リンゼイ、追っかけてくれ」

「こんなときに」エレノアはボヤいた。

「ちがう。新展開よ。なにかあったんだ」リンはエレノアの手を離

して、勢いよく立ち上がった。「いつしよに来て！」

コメディっぽくばたたと客のあいだをとおり抜け、ドアを押していなくなった。これが「都合よく考える」ということか。客全員の視線を受けながらあとを追った。

だいぶ小さくなったリンを見つける。走るのはしんどい。すぐに息が上がリ、何度も砂利で足をすべらせ、ひざがくずれそうになる。リンの姿がどんどん小さくなり、白黒の背景のしみみたいになっていく。

リンが建物に入っていくのが見えた。背の高い、張りぼての大道具のような安っぽい聖堂だった。エレノアは顎を上げてぜいぜいいながらたどり着き、玄関にしがみつくようにしてとまった。しゃがみこんで息を整える。

たぶん、犯人を追ってたどり着いた聖堂に偶然ビデオデッキがありましたという展開なのだろう。しゃがみながら何度かノックした。扉がわずかに開いた。すきまを見上げると、老人の顔が半分あらわれた。のぞき見るように外をきよるきよるしている。

エレノアは無理やり笑顔をつくった。「牧師さまですか」

「なんだ」驚いた様子で下を見る。「フエイントかね」

老人は牧師だと言った。名前はなく、ただの脇役だとも言った。

エレノアは、ここに女性ともうひとりが飛び込んで来なかったかたずねてみた。

「飛び込んできたよ」脇役の牧師がうなずく。「たくさん飛び込んできた。あんたはエレノアだな」

うなずくと、牧師は体の幅まで扉を開いて、胸の前に手を組んだ。「ベータマックスのお導きだな。ありがたいかどうかは、またべつの話」

中におおされた。典型的な聖堂だった。背の高い窓から白い光が射し込み、たぶんバニラ色の壁に陰影をこしらえている。両端にはたぶんこげ茶色でつやつやしているベンチが整列していた。牧師につづいて（たぶん）赤いじゅうたんを歩き、正面を見て、思わず声

を上げた。

典礼用の段の中央が金色に輝いていた。

牧師はいつのまにか右手にある説教壇に上がっていた。ひとつ咳払いする。

「かつて、世界はカラーであった」唐突に説法をはじめた。「かつてはいくつもの人生があつた。役づくりに失敗したとき、セリフをトチったとき、整形しすぎて顔がぐちゃぐちゃになったとき、共演者と交際したがうまくいかなかったとき　人生はいつでも巻き戻せた。めんどくさくなったら早送りすることもできた」

エレノアは目を細めて金色のものを見た。ようやく目が慣れ、なんなのがわかった。黄金のビデオデッキだった。

「われわれの生きる時代はモノクロで、人生は一度きり。やり直しは利かない」

牧師を無視してデッキに近づく。おじいさんとリュックも来ているはずだ。だが牧師とふたりきりで、ベンチにもだれも腰掛けていない。

「嘆き悲しむことなかれ。汝、ベータを信じよ。さすれば人生巻き戻されん。　試練は幾度となくおとずれる。ときには途中でテープが絡まったり、兄弟が勝手にアニメを重ね撮りしていたりするかもしれない」

長引きそうなので、エレノアは失礼を承知で口をはさんだ。「もうけっこうです」

「けっこうとは？　あなたはベータを信じないと、そう言われるつもりか」

「そうじゃなくて」

「ベータ信者は数少ない」穏やかに微笑む。「しかし、ベータのほうが画質がいいのだ。EDベータは水平解像度が五百本以上だって知ってた？」

「知らない。DVDしか持ってないから」

牧師は顔を曇らせた。「あなたはどこから来られたのかな」

「現実」

「なるほど、現実から。それはたいへん高画質なことだ。さしずめ天からの使者といったところだね」

エレノアは牧師をのぞきこんだ。うさんくさが鼻につくようになつてきた。

「天使がいれば悪魔もいる。それではご登場願おう」

意味不明な説法が終わり、奥の扉が開いた。同時に開けっ放しだった入り口からも、村人たちが二十人ばかり入ってきた。

牧師の顔が、笑みを張りつかせたまま不自然なCGみたいに固まった。それからなめらかに継ぎ目なく、顔から顔へ次々と変化した。牧師から山羊になり、スピルバーグ監督になった。それから親戚のおばさんになり、スネジヤナの学校の校長先生になり、ミー力になった。それからスタンガンを食らったようにびくりと全身を硬直させ、ようやくふつうに動き出した。

ミー力は「じゃじゃーん」と手を広げ、げらげら笑った。「驚いた？」

「べつに」

「でも、おもしろいだろ？ さあ、クライマックスだ」

黒服のすそをたくし上げ、壇からひよいと飛び降りた。ビデオデッキの前を行ったり来たりしながら、べらべらとしゃべりまくる。

「ぼくの考えるクライマックスは、いろいろある。たとえば、ぼくは怒り狂つてきみを襲う。きみは抵抗するが、非力な女性だ。もうダメ、助からない。そこへ間一髪、きみの彼氏が助けにやってきてぼくをぶっ飛ばす。ふたりは再会、そしてキス。どう？」

「ぶっ飛ばされたいの？」

「おもしろいなら体も張るよ。だけどそんなにおもしろくないかな。ありきたりだしね」奥の扉をのぞきこむ。「おーい、はやく出てこいよ」

いかめしい顔の看守が警棒を手にあらわれた。つづいて囚人服を着た集団が列になり、足をひきずりながら出てきた。おじいさんに、

リュックに、リンだ。いちばん後ろにもうひとりいたが、たぶん食
い逃げ犯だろう。要領の悪いことだ。

「考えたんだけど、いちばんおもしろいのはきみがスネジャナ
を取り戻すことだ。そのときのきみの笑顔。これこそ視聴者がいち
ばん望むことだ。どう？」

エレノアは思わずたずねた。「できるの？」

「もちろん。その代わり、ビデオデッキはあきらめるんだ。そうす
れば感動の再会をさせてやる。ハンカチも大量に用意するよ」

エレノアは眉間にしわを寄せたまま、いつもどおりのニヤニヤ顔
を見つめ、ミーカの頭の中を探ろうとした。探れば探るほどただの
アホに見えた。だが楽しければなんでもオーケーのテレビの神さま
ならそれもおかしくないかも、と思った。

「スネジャナを返してやる。またあの家で、家族として暮らすんだ。
これぞハッピーエンド。そう思わない？」

「畏だ」囚人のおじいさんが言った。看守が黙れと警棒でこづいた。
「畏なもんか。利害の一致だよ」ミーカは振り向いて大げさに手を
広げた。「ぼくはテレビを見つづける。エレノアは愛する娘を取り
戻す。お互い幸せ。なにがいけない？」

「みんなの人生を取り戻さなければ」「とリュック。やはり看守
にこづかれる。

「ほかの連中なんて知ったことか。それにテレビを見るかぎりじゃ、
現実の人間はだいぶ演技を楽しんでいるみたいだったよ。与えられ
た人生だなんてだれも気にしていないし、そんなことはどうでもい
いんだ。楽しければね。平凡な人生に戻してやるなんて、それこそ
ひどい話じゃないか。だろ？」エレノアを向く。「きっとみんな、
きみを恨むよ。だれも感謝なんてしない」

「ほんとうに、スネジャナを返してくれるの？」

「壇上に立って、聴衆の前で宣言するんだ。それだけでいい。その
瞬間から、きみの番組は再スタートする。シーズン二がはじまるっ
てわけ」

「ダメだ」今度はおじいさんが言ったので、看守は急いでこづきに引き返した。

エレノアはつま先を見つめ、かぶりを振った。「あの子がほんとうに、わたしと暮らすことを望んでいるなら」

「そいつはきみの自由だ。きみがあの子にそう望んでほしければ、心から望むようにする。なんでもぼくに言ってくれ。どんなスネジヤナがいいか、いまのうちから考えるといいよ。着てほしい衣装、きみが好きなヘアスタイル、いい子が悪い子が、ふつうの子か。なんでもきみの思いどおりだ」

「そのままでもいいの。わたしの都合で変えなくても」

「それは無理だな。あの子はキャラクターだから。想像上の産物なんだ。脚本がなければ中身がカラッポの器にすぎない。与えなければ人形と同じなんだよ」

「そのとおりだぞ。いいかげん目を覚ませ！」おじいさんは言った。次はリュックだと思って戻りかけた看守が裏をかくられてイライラしながらこづきに來たが、振り払ってつづけた。「あれはただのキャラクターなのだ！」

「ただのキャラクターじゃない！」

エレノアは怒鳴った。どいつもこいつもキャラクター、キャラクター。あれは實在しないのよ、つくりもののなのよ、いいかげん現実を見たらどうなの、などなどなど。生きていなければどう扱ってもいいというのか。こんなことで怒るのは自分だけで、それもテレビを見すぎて頭がおかしくなったせいだと思っていたのだが、ふいにそうではないと気づいた。ふざけてるのはそっちのほうだ。

「お願いだからそんなふうに言わないで。わたしにとっては大切な。わたしにとっては、よ。存在しないかもしれないし、あなたにとってはそのキャラクター、どうでもいい存在でしょうけど」

おじいさんはもと神さまの肩書きをちらつかせながら、冷たいまなざしで見つめ返してくる。今度ばかりはエレノアも引かなかった。看守がどっちをこづけばいいのかと困り果てるほど長いあいだにら

み合い、ついにおじいさんが目をそらし、うつむいた。

神さまに勝つとは。よつぽど恐ろしい顔をしているにちがいないか
った。

「わたしもあなたのキャラクターだった」そのまま怖い顔をミ
ーカに向ける。「好き勝手にいじられるのは、とてもイヤな気持ち
になるものよ。他人の都合で人生を決められたり、着たくない服を
着させられたり。中身がカラッポだって言われるのも」

ミーカはまったくひるまず、ニヤニヤしながらエレノアを見てい
る。いつのまにか聴衆全員がエレノアに注目していた。

「じゃあなにがしたいの、って聞かれると、すぐには答えられない
そうは見えないかもしれないけど、これでもずっと考えつつける
のよ」

聴衆のひとりが立ち上がった。「おれには人生の目標がある。オ
リンピックに出場して」

ミーカがその聴衆にリモコンを向けた。なんの競技でメダルを目
指しているのかを言う前に、ポンという音と煙を残して消えてしま
った。

「ひどい」

「いいところを邪魔するからだ。エキストラのくせに」リモコンを
囚人たちへ向ける。「はやく最後の宣言をするんだ。でないと、大
事な人間がまた消えることになるぞ。ひとことでいい。『スネジャ
ナと一生暮らしたい』と」

「あなたは嫌い」まるで告白するみたいに、真剣に言った。「だ
けど、やっぱりテレビは嫌いになれない。いろんなキャラクター。
みんな大好きよ。できるだけ長く、番組をつづけてほしい。視聴
者なんか気にせずにな」

エレノアは段上に上がり、宣言した。

「だから、テレビはほどほどに見ることにする」
静まり返った。

「なんだって？」ミーカが言った。ニヤニヤが顔からすっと抜

け落ち、啞然とした表情にすり替わる。

「それから、テレビに話しかけるのもやめる」

「自分がなにを言っているのかわかってるのか？」

「それから　テレビを見ているときに電話が鳴ったら、ちゃんと対応する。話しかけられたら、ちゃんと返事をする」ちらっとリュックを見、息を吸ってつづける。「テレビガイドもぜんぶ買わないで一冊だけにする　番組表は同じだもん。ドラマは一話からずつと見ているという理由だけで見つづけない。つまらないなと思ったら、見るのをやめる。見たい映画はなるべく映画館で。たぶん、そういうものだから」

「やめろ、やめろ　」ミーカは悪霊払いの最中みたいな声で言い、何度にもかぶりを振った。「そんな、心にもないことを　」

「あ、あともうひとつ。好きな女優に必要以上に入れ込んだりしません。表情をまねたり、同じものを無理して好きになるのはやめます。赤の他人で、しかもテレビの人だから」

リンはずっと、まぶしそうに目を細めながらエレノアの宣言を聞いていた。目が合い、きらわれるかもしれないと頭をよぎったが、思い切って言った。

「アイスクリームって、じつはそんなに好きじゃないの。嫌いでもないけど。あなたが好きだったから、好きなふりをして食べてたのよ」

エレノアの言葉を脳みそに染み渡らせるように目を動かし、しばらくしてうなずいた。リンは列から離れ、おじいさんの腕に触れた。顎で外のほうを指し、エレノアの前をとおる。最後のひとことも、お別れの抱擁もなかった。一度もこちらを見ることはなかった。

「やるべきことはわかってるな」おじいさんはうなずき、いそいそとリンの後を追いかけた。

エレノアは鼻をすすった。涙で声をゆらゆらさせながら締めくくった。

「以上、そういうことです。意味はわからないかもしれないけど

」

観衆を見まわす。たしかに全員、意味がわからなそうな顔をしていた。するとひとりが手を鳴らしながら立ち上がった。後を追うように次々と拍手がふくれ上がり、気づけば全員が立ち上がり、笑顔で手を叩いていた。エレノアのスピーチが聴衆の心を動かしたはずもなく、たんに聴衆の役を演じているからやっているだけのことだった。

ミーカは腕を振り、拍手をさえぎった。エレノアに振り返る。

「それじゃ、まるで　まるで　」赤の他人を見るような目つきで言った。「ふつつの視聴者だ」

「そうかもね」

「なんて　ふつうな女だ　」ミーカはあとじさり、すそを踏んづけてよろめいた。「そこらへんにいるただの女　その他大勢のエキストラだ。わざわざエキストラの道を選ぶなんて」

「ふつうでけっこう」ぼんやりしているリュックに聞いた。「今日の夕飯はなににする？」

ミーカは頭を抱えて金切り声を上げた。

「ああ、ふつうだふつうだ　」

黒服を脱ぎ捨てる。カツラを脱ぎ、コンタクトをはずし、運動靴に履き替えてから大またで出口に向かった。

「まったく、こんな女に惚れていたなんて　人生やり直そうかな

」

「現実世界にエキストラはいないんだぞ！」リュックが背中に向かって叫んだ。「みなそれぞれの人生においては主役を演じているんだ！」

「なにそれ。マイイエみたい」

「言ってみただけ」

段に上がり、ゆっくりとエレノアのそばに寄った。背中に触れる。「マイイエって？」

「おしゃべりテレビ。宇宙の法則のことばかりしゃべるの」

「テレビの言うことか。信用できないな」

「そうね」

「でも、まちがいじゃないかも」

「どっちでもいい」エレノアはあくびをした。「眠い。しゃべりつかれちゃった。今日はもう、なにもしたくない」

「けっこうだね。『今日はなにもしない』って、いちばんわくわくする決断だ。そう思わない？」

エレノアとリュックは現実世界に戻り、がらんとしたセットの家のんびんだらりと過ごした。翌日になって、黄金のベータマックスをテレビにつなぎ、失われた人生のビデオテープを再生してみた。なにかしなければいけないような気がしたが、それどころではなかった。テレビでは決して見せられない大人のお楽しみのあと、ふたりはこれからのことを話し合った。

それからテレビを見た。それなりに、ぼちぼちと。番組はものおもしろおかしい内容に戻っていた。自殺率が急増しているというニュースが頻繁に流れ、どうやらその原因は退屈な現実へ戻った反動にあるようだった。ここにきてふたりはようやくやるべきことを思い出し、またほかにやることもなかったので、ビデオテープに収録されている人物を探し出して自宅に呼び、目の前で再生してみせた。テープの人生はいろいろなパターンがあつて、どれもたいして代わり映えがしなかったが、その人が好きなものを選んだとたん、悩ましかった顔が一気に晴れやかになった。そしてそのとおりの人生がはじまった。

リュックはフームへ勤めた。戻ってから『買い物』技がいっさいできなくなっていたので、お金が必要になったのだ。なぜ『買い物』ができなくなつたのかは、なんとなくわかつたような気がした。ほんとうにまじめに仕事をこなしながら、倉庫からビデオテープを少しずつ持ち出した。フームはまともな会社に戻っていた。エイミル

も元気ハツラツだった。ビデオテープをすべて運び出すころ、リュックはクビになった。

エレノアはかたっぱしから自宅へ人を呼んだ。簡単な料理でもてなしながら、人生のビデオテープを再生する。ある資産家を呼んでテープを見せた際、これでほんとうの人生を取り戻せましたとけっこうな額の謝礼をもらった。いつのまにか、呼んでもいないのに人が集まってくるようになった。ある場所に行くとはんとうの人生を取り戻せるという評判を聞きつけ、やってきたのだった。ふたりはテープを見せる代わりにけっこうな額の料金を取ることにした。

がらんとしていた客席では、順番待ちの人がおおぜい腰掛け、思い思いにしゃべりながらセットを眺めている。このころエレノアはちよつとした有名人になっていて、たびたび雑誌やテレビの取材を申し込まれた。喜んで申し出を受け、法外な出演料を請求した。

仕事を終えたある夜、自分たちがインタビューで出演した番組『徹底検証！ 現実のテレビの神さま』を見ながら、すべてが終わったときのことを話した。じつは自分たちのお気に入りビデオテープを見つけていて、最後のひとりが片づいたらいっしょに見ようかと考えていたのだ。見終わったそのときから、そのとおりの人生がスタートする。再生するべきかどうかは、いまのところわからない。

23話 最終回（後書き）

お疲れさまでした。いかがでしたでしょうか？ 感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4514m/>

エレノアTV！

2010年10月8日12時22分発行